

The Nishikata Hyakuta Site

西片 百田遺跡

The Nishikata Sonoda Site

西片 園田遺跡

—西片停車場線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

---

2006

熊本県教育委員会



## 序

本報告は、九州新幹線建設事業に伴い熊本県が県道336号線（通称、八代臨港線）から新八代駅前へのアクセス道路（西片停車場線）として計画・整備を実施した工事に先立ち、発掘調査を行った『西片百田遺跡』、『西片園田遺跡』の調査報告書です。

本遺跡の立地する八代市は、熊本県南部にあたり波穏やかな不知火海に面し温暖な気候のもと、球磨川から運ばれてきた肥沃な三角州上に広がり、市北部域から宇土半島基部にかけては、不知火海の広大な干潟を利用した干拓が、一面に広がる広大な八代平野を形成しています。本地域は文化財も多く残されており、中世から近世にかけて城と町の広がりを追える、古麓城跡、麦島城、八代城など重要な文化財が多く残されています。また、熊本県指定無形民俗文化財「妙見祭」を始め数多くの祭りが残されている地域でもあります。

本報告は、このような歴史的背景を有する八代地域のなかで、文化財が希薄と言わってきた、平野上における埋蔵文化財の調査報告書です。本遺跡からは弥生時代の集落跡や自然の流路をはじめ、古墳時代の集落、畠遺構と思われる畦などが確認されています。

最後に、調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂いた、地元の方々をはじめ、県・市の関係機関の方々に対して厚くお礼申しあげます。

平成18年3月31日

熊本県教育長 柿塚純男

# 西片百田遺跡・西片園田遺跡発掘調査報告 —西片停車場線改良工事—

I 調査の概要 .....	1
I-1 発掘調査研究略史	
I-2 調査に至る経緯	
(西片百田遺跡)	
(西片園田遺跡)	
I-3 調査・整理組織	
II 調査 .....	3
II-1 遺跡の位置	
II-2 測量	
II-3 歴史的背景	
III 西片百田遺跡（弥生時代後期から古墳時代初頭の集落址） .....	15
第1章 調査	
第2章 遺構・遺物	
第3章 まとめ	
図版（カラー・モノクロ）	
IV 西片園田遺跡（弥生時代後期の低湿地遺跡） .....	175
第1章 調査の概要	
第2章 遺跡の調査	
第3章 まとめ	
第4章 分析	
図版（カラー・モノクロ）	
報告書抄録（西片百田遺跡・西片園田遺跡）	

# 西片百田遺跡・西片園田遺跡調査報告

—西片新八代停車場線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

## I 調査の概要

### I-1 発掘調査研究略史

西片百田遺跡が所在する八代市西片町周辺は、昭和40年代に行われた圃場整備事業により八代基幹水路北側の周辺地域で大規模な水田造成工事が行われ、幾筋も伸びていた低丘陵が削平され、現在見ることのできる肥沃な八代平野と化している。

当該地域は古くから「八代平野条里跡」という周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていたが、これまでの周辺遺跡の調査の結果から、条里に関する遺構は検出されていない。遺跡の周囲には「八坪」「口の坪」等の条里地の名残を示す地名が数多く残されている。(Fig.5)

条里よりも古い時代の遺跡は、昭和30年代頃までは平野上では確認されておらず、圃場整備等の開発の増加とともに球磨川河口付近の三角州地形上や氷川河口付近の扇状地上地形のなかで遺跡の存在が知られ始め、八代市教育委員会や県教育委員会による大規模開発に伴う調査で八代平野上で遺跡の様子が明らかになってきた。

### I-2 調査に至る経緯

本事業は、平成3年に着工された九州新幹線建設事業に伴う八代駅へのアクセス道路として整備する事業であり、平成14年の新八代～鹿児島中央間の部分開業に伴い建設された道路である。

当該予定地は、県文化課及び八代市教育委員会により周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていた「西片町遺跡」の範囲内にあたり、本工事に先立ち八代地域振興局土木部より県文化課へ事前協議が行われた。それを受け県文化課は、路線変更等の協議を申し入れたが本事業路線が九州新幹線「新八代駅」へのアクセス道路であること、用地買収の大半が終了したこと等の関係から他にルート変更ができない理由を受け、課内で検討した結果、記録保存やむなしと判断し発掘調査を実施し記録保存として対応することとなった。

(西片百田遺跡)

当該予定地は、平成12年度から新幹線本線工事に伴い県文化課で発掘調査を実施しており、道路工事の一部が調査区（4区）の隣接地にあたるため、遺物・遺構とも高い密度で出土することが予想された。

発掘調査を実施するに伴い遺跡の範囲、調査期間等の試算のための予備調査（確認調査）を県土木部道路建設課長より依頼を受け、平成13年度に県文化課文化財保護主事 村崎孝弘、主任学芸員 長谷部善一が2回に分けて行った。その結果、Fig.5に示す範囲について弥生時代後期から古墳時代初頭、近世の遺物・遺構を確認した。遺跡の広がり及び遺構の深度が分かった事から県文化課と八代市教育委員会の協議のうえ遺跡範囲の変更を行うと共に、「予備調査の依頼があった範囲のうち埋蔵文化財が確認された範囲について発掘調査が必要」とし、県土木部道路建設課長あて回答した。

その後、設計変更等により遺跡の現地保存を検討したが、遺跡が立地する地域が軟弱地盤で地下を転圧する必要があり、現状での遺跡の保存が不可能であると判断されたため本調査について双方

で協議を実施し、調査について協議・調整が終了したのを受けて、県文化課により記録保存を目的とする発掘調査を実施した。

調査は隣接地で行っていた新幹線本線部<sup>3</sup>の調査と接するため、調査区番号をそのまま連番で割り振り、北側から区画ごとに8区、9区、10区と設定した。

調査の結果、本書中で報告するが、それまで知られていた古墳整備が終了した地域の地下に、良好な状態で古墳時代以前の遺跡が残されていた事が判明した。

#### (西片園田遺跡)

現在までに、当該調査区隣接地において熊本県八代地域振興局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として「西片町遺跡」<sup>4</sup>（以下、「西片町遺跡1996」と言う。）、八代市教育委員会により送電鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として「西片町遺跡（園田地区）」<sup>5</sup>（以下、「西片町遺跡2002」と言う。）が行われている。

西片町遺跡1996では球磨川下流域で2例目となる低湿地遺跡であり、弥生時代後期に位置付けられる重弧文土器を含む土器や木器、古墳時代前期及び中期の斧柄未成品、鋤、杭、板材等木製品が出土している。<sup>6</sup>また西片町2002の調査では、弥生時代後期及び古墳時代初頭の遺物が出土し水田遺構及び土杭が検出されている。<sup>6</sup>

---

本地域では、本調査後に、新八代駅周辺の開発に伴い八代市教委による新八代駅前広場周辺整備に伴う調査、新八代駅南側広場建設に伴う調査が相次いで実施されている。<sup>7</sup>

今後、更に新八代駅を中心とした都市計画が進むに従い、沖積地が広がる八代平野上に点在する埋蔵文化財が確認されよう。

そのためにも、本地域の埋蔵文化財を理解するうえで遺跡の評価となる報告書刊行が急がれる。

### I-3 調査・整理組織

発掘調査	2002年（平成14年）	整 理 報 告	2005年（平成17年）
調査主体	熊本県教育委員会	整 理 主 体	熊本県教育委員会
調査責任者	文化課長 成瀬烈大	整理責任者 文化課長 梶尾英二	
調査総括	教育審議員 島津義昭	整 理 総 括 課長補佐 倉岡 博	
	主幹 文化財調査第1係長 高木正文		主幹兼資料室長 野田拓治
調査総務	教育審議員 小田信也	整理担当者	
	主幹総務係長 中村幸宏	（西片町遺跡）主任学芸員 長谷部善一	
	主任主事 天野寿久		村中智恵
	主事 杉村輝彦	（西片町遺跡）文化財保護主事 高山直也	
（西片町遺跡）		嘱託職員 内田成香	
調査担当	主任学芸員 長谷部善一	嘱託職員 増田直人	
	文化財保護主事 高田英樹	整 理 総 括 課長補佐 吉田 恵	
	嘱託職員 松尾 茂		四元正明
	嘱託職員 村中智恵	主幹 総務係長 参事 塚原健一	

(西片園田遺跡)

整 理 総 務 主事

小谷仁志

調査担当 文化財保護主事 野田英二  
文化財保護主事 高山直也  
嘱託職員 内田成香  
嘱託職員 本田麻紀

#### 助言及び調査協力者

田口 保（西片町第一町内区長）、吉永 明、澤田宗順、米崎寿一、西山由美子（八代市教育委員会）、松山丈三（八代史談会）、坂井義哉（大牟田市教育委員会）、坂田和弘、出田久斉、青木勝士、上高原 聰、宇田貞将、和田敏郎、角田賢治（熊本県教育委員会）、横田 愛、福葉貴子、唐木ひとみ、北原美和子、坂井美香、猿渡式子

- 
- 1 熊本県教育委員会「熊本県の条里」熊本県文化財調査報告第25集1977
  - 2 現在、県教育委員会で整理中、平成18年報告書刊行を予定。
  - 3 熊本県教育委員会「西片町遺跡」熊本県文化財調査報告第153集1996
  - 4 八代市教育委員会「西片町遺跡（園田地区）」八代市文化財調査報告書第18集
  - 5 西片町遺跡1996の調査では、住居跡等の明確な遺構は検出されておらず、出土遺物はすべて自然流路内からの出土である。
  - 6 掘出された水田遺構埋土内から弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が出土している。一边が7m前後で平行四辺形を呈している。
  - 7 現在、八代市教育委員会で整理中。

## II 調査

### 調査地域

#### II-1 遺跡の位置

【地形】遺跡の立地する八代平野は、主に砂川、氷川、球磨川から流入する大量の土砂が河口に堆積し、複合三角州により形成された平野で県内第二の規模の平野である。干潟の広がる有明海は、九州山地に源を発する大小の河川から運ばれた大量の堆積物の影響で比較的水深が浅く、干潟が形成され易い環境である。

平野東側、九州山地と接するライン上には、阿蘇郡南阿蘇村（旧長陽村）から芦北郡芦北町（旧田浦町）まで、ほぼ北東—南西方向に延びる崖断層帯を見ることができる。いわゆる、「布田川・日奈久断層」である<sup>1</sup>。九州山地はこの断層を境に急峻な地形を呈しながら、ほぼ垂直に落ち平野部に至っている。

平野上には、山地から流されてきた土砂が幾筋もの幅の狭い微高地を形成し、平野に向かって広がっている。微高地と谷部の比高差は約1~2mと低い。この地形は西片園田遺跡から北西側では、昭和40年代の圃場整備により旧地形は失われ、水田と化している。西片園田遺跡の南東側、八代臨港線南側は現在多くの住宅地が広がるが、筋状の微高地地形が良く残っている。

【遺跡の位置】遺跡は熊本県の南部、宇土半島基部から球磨川沿いにまで広がる、南北25kmに渡る八代平野中にあり、八代海（不知火海）東岸に形成された沖積平野上に位置する。

八代地域の古くからの信仰の対象である「妙見宮」からは北西方向へ約3kmの距離にあたる。また、古墳時代の主長クラスの墓域と思われる大規模な前方後円墳群からなる「八代大塚古墳群」

からは北東方向へ約1kmの距離にある。

古代、八代郡域は「夜豆志呂<sup>2</sup>」と表記され、「木行・高田・小河・肥伊・豊福」の5郷が記されている。そのなかで本地域は「高田郷」に含まれ、その範囲は、旧宮地村・龍峰村の南半分、太田郷一帯までを示している。また、本地域付近には律令制に伴い駅路が設置され、太田郷内に馬駆推定地となる「片野駅」の存在が想定されている<sup>3</sup>。詳細な地点は不明であるが、片野（現在の上片町付近）では、川田京坪遺跡<sup>4</sup>から「川大」とヘラ書きされた土師器が出土しており、地名を示す資料として注目される。本遺跡の周辺に駅路及び関連施設の存在が窺われる。

また、本地域は広く条里地形が残されている地域であり、条里地名が随所に残されている<sup>5</sup>。

同市、清水町の洗切遺跡からは、「大成古」と墨書きされた須恵器、「宣」「旦仲」「高人」「四郎」「五月」「六寺」とヘラ書きされた土師器が出土し、当郡における都衙推定地の候補と考えられる。

本遺跡の西約1kmに位置する竹原神社（井上町）周辺に、天武九年妙見神が八代郡土北郷八千把村竹原ノ津に伝来<sup>6</sup>したと言われる、竹原津（港）の存在が想定されている。

## II-2 測量

両遺跡の調査を開始するにあたっては、事前に基準点測量と水準点測量を実施した。基準点測量は建設鉄道支援機構が九州新幹線建設工事に伴い設置していた1級基準点を基点とし国土座標II系に基づき、日本測地系により調査区内に基準杭を打設した<sup>7</sup>。

西片百田遺跡では、平成12年度調査以降、X=-53900、Y=-34060を基点として東西にアルファベット、南北に算用数字を用い表記した。Gridの一辺は10mを最小単位として設置した。調査区ごとの呼称は定めず、すべてGridにより管理している。

西片園田遺跡も西片百田遺跡と同様にGridを設置した。各調査区の呼称は、調査区毎に1～4工区とし、Gridの最小単位は一辺10mである。(Fig.3)

Fig.3の図中に示しているA工区からC工区は、以前の調査（西片町遺跡1996）時から呼称による。

点名	日本測地系		世界測地系	
	X座標(X 1)	Y座標(Y 1)	X座標(X 2)	Y座標(Y 2)
No.1	-53980	-33910	-53608.343	-34130.734
No.2	-54050	-33960	-53678.347	-34180.739
No.3	-54130	-34010	-53758.352	-34230.745

Tab.1 西片百田遺跡の4級基準点測量成果

## II-3 歴史的背景

### 旧石器時代

今まで、当該地域では旧石器時代を示す明確な資料は確認されていない。しかし、八代平野周辺の山地縁辺部からは、立神ドトク遺跡<sup>8</sup>（旧宮原町立神・現氷川町）で後期旧石器の遺跡が確認されている。

### 縄文時代

八代平野において縄文期を示す資料が多い。確認された資料の多くは地元研究者によるもので、

工事中等不時発見による遺物採集が多い。

平野内周辺部には、縄文後期の海進により形成された多くの貝塚が残されており、明治期に E.D モースも訪れ調査を行った大野貝塚を始め、西平式土器（後期後半）を標識土器として設定されている吉野西平貝塚（いずれも旧、竜北町、現、氷川町）、有佐貝塚（旧、鏡町、現、八代市）など多くの貝塚が存在している。近年、産島（八代市都築町）や高島（昭和同仁町）<sup>9</sup>から押型文土器や、曾畠式土器が採集され、早い時期から干潟を始め海への進出があったことが窺える。

#### 弥生時代

昭和25年に宮地町においてボーリングが行われた際に、地表下1 m付近から弥生、若しくは古墳時代の土器が出土し、当時、宮地町在住であった盛高靖博氏により採集されている。

その後、同じく宮地町在住の江上利勝氏により平野内から出土する土器が注目され、弥生から古墳時代の資料の蓄積へと繋がっている。また、江上は「熊本史学」第27号（昭和39年11月発行）に「八代地方の弥生遺跡と出土遺物について」として資料紹介を行い、八代地域における弥生時代研究に先鞭をつけている。近年、市教委による調査や周辺での新幹線関連調査等により宮地町で出土した資料は大部分が、土師器であることが判明しているが、八代市域の弥生時代に最初に目を向けた事象であろう。

昭和40年代には平野上の圃場整備が進むなかで、氷川流域にあたる、八代郡鏡町有佐（現、八代市）の有佐貝塚付近でも宮木慈郎が弥生土器を採集し、近接する鏡町平島で縄文晩期から弥生前期にかけても資料が採集されている。

昭和52年には同じく圃場整備事業により藤坂正人により東法道遺跡<sup>10</sup>が確認されている。

昭和61年、八代市豊原下町字下堀切で「下堀切遺跡」が調査され<sup>11</sup>弥生後期の集落を巡る溝が確認されている。その後、市教委により、昭和62・63年度事業により<sup>12</sup>弥生後期土器、石器、木器等が出土し、標高約2.4m の球磨川南岸における沖積平野上にも弥生時代に人々の生活痕があったことが調査の上で証明された。

西片百田・園田遺跡周辺においても、鐘樓堂貝塚が大田郷小学校北側で確認され、また熊本労災病院建設時にも弥生時代の土器が出土している。

西片園田遺跡は、隣接地にあたる熊本県八代地域振興局の建設に伴う事前調査において県文化課で発掘調査を行い<sup>13</sup>、弥生後期の自然流路の一部が確認され、多くの土器とともに木器等の遺物が多数出土している。

西片百田遺跡は平成12年度から始まった九州新幹線建設工事に伴う発掘調査が本事業に先立って行われており<sup>14</sup>、調査範囲は一部が接している。本調査区において弥生後期から古墳時代前期の集落の広がりが当初から想定された。

#### 古墳時代

八代平野周辺における古墳群は多くが、九州山地が平野へ張り出している縁辺部、いわゆる平野を見下ろす高台に多く築造されている。

多くの古墳が築造されている代表的な地域として、中の城古墳、端の城古墳、姫の城古墳からなる前方後円墳を主体とする野津古墳群（旧竜北町西部）や、竪穴式石室に舟形石棺を有する大王山古墳（三号墳）を始めとする小円墳群を構成している古墳群（旧宮原町西部）、八代市北部、龍峰山山麓に位置する小円墳群、球磨川北岸に位置し沖積平野へと範囲を広げている八代大塚古墳群、球磨川南岸の数は少ないが、小円墳を主体とする古墳群、八代平野南限に位置する日奈久地域の円墳群、現在は干拓によって陸続きとなっている八代海に浮かぶ島嶼にあたる大鼠藏島、小鼠藏島の

古墳群がある。なかでも大鼠藏島の最高部に位置する楠木山古墳は竪穴式石室を持ち、碧玉製紡錘車が出土するなど前期（4世紀）頃の古墳と推定されている。

西片百田・園田遺跡周辺はこの中では、球磨川北岸地域にあたり、遺跡から東に約1kmの位置に前方後円墳を主体とする八代大塚古墳群<sup>15</sup>が所在している。本古墳群は、大塚古墳<sup>16</sup>（前方後円墳）を中心に長塚古墳（円墳）、茶臼山古墳<sup>17</sup>（円墳）、高取上の山古墳（前方後円墳）からなる群を形成し、6世紀前半<sup>18</sup>とされる大塚古墳を中心として、この地域では比較的大きな墳丘築造が継続的に認められる首長墓の存在である。

対照的に周辺には、「鬼の岩屋」<sup>19</sup>と呼ばれる、安山岩の巨石を利用し小塙丘で横穴式石室を有する円墳により構成されている上片町鬼の岩屋古墳群、龍峯地区的谷川・行西古墳群、9基からなる乙丸古墳群（宮地町）、12基からなる皆下古墳群（竹原町）がある。これら、小規模な古墳群の調査事例は無いが、表探されている遺物や開口している横穴式石室の構造等から築造年代は6世紀後半から7世紀初頭頃と想定される。また、八代大塚古墳群のやや北に位置する平野上には規模の大きな墳丘を持つ、東片町古墳群（御経塚古墳・岡の上古墳・むかいやぼ古墳・天神古墳）、西川田古墳群（第一～第三古墳、岡塚第1号墳・岡塚第2号墳（前方後円墳））がある。築造年代は、八代大塚古墳群に続く時期のものと思われる。

また、球磨川左岸の平野部から球磨川河口、八代海の島嶼に至る広い範囲には、県内で多く見ることのできる装飾古墳が点在している。八代市鼠藏町に所在する鼠藏古墳群にある、大鼠藏石棺群出土の石棺側壁に線刻<sup>20</sup>で施されている石棺装飾や、同市敷川内町に所在する五反田古墳、同市日奈久新田町の田川内古墳などが知られている。

#### 古代

八代市域の古代は、平成14年度に刊行された『能寺遺跡・古麓城下遺跡調査報告書<sup>21</sup>』中に調査担当者により詳細な報告がなされているため、古代以降の概要是そちらを参照していただきたい。

ここでは、古麓能寺遺跡・古麓城下遺跡調査報告書刊行後の資料の紹介に留めたい。

平成15年に九州新幹線開業後、新幹線建設により切り替えの必要な道路建設に伴い発掘調査を実施した「宮地小畠遺跡」「宮地觀行寺遺跡」がある。

宮地小畠遺跡には宇城地域で生産された須恵器が多く搬入されており、その土器に伴い八代在地系土師器と共に伴した資料が多数出土している。県内の須恵器編年は近年の研究の進展の成果、宇城産の須恵器編年<sup>22</sup>がほぼ確立されており本遺跡では、八代に持ち込まれた須恵器資料の多くが、8世紀前半から9世紀中頃と指摘される。その中で8世紀後半から9世紀初頭にかけての宇城産須恵器と、八代地域限定と思われる在地系土師器が構造内一括資料として出土し注目されている。また、別の土坑内からは同時期の須恵器と共に伴した綠釉陶器も出土しており、こちらも良好な一括資料である。

宮地觀行寺遺跡（側道部）1区では、遺物包含層中から7世紀代の遺物と思われる中空円面鏡<sup>23</sup>が、また、水無川近くの調査3区で古代の製鉄遺構（小鋸冶）が検出している<sup>24</sup>。

1 地震調査研究推進本部 地震調査委員会「布田川・日奈久断層帯の評価」平成17年5月8日 Web上に掲載されている評価報告書を参考とした。

2 「和妙類聚抄」に記載あり。（熊本県の地名 日本歴史地名体系44より）

3 古代の駅路は、八代平野周辺では宇土郡（勾）曲野を南下し、豊向駅（現、宇城市松橋町）を経由し東に向かい小野庄（現、宇城市小川町）に出る。その後、山麓部を南下して小河郷を通り、砂川を渡り大野窟古墳（現、永川町竜北）東側を通り、野津古墳群横

- を経て高屋駅（現、水川町野津）に至る。ここで氷川を渡河し竜峰山麓を南下し興善寺を経て片野駅に至る。その後南下し、球磨川を渡り芦北郡に入り、朽網駅（現、八代市二見）に至る。
- 4 熊本県教育委員会「川田京坪道跡」熊本県文化財調査報告第46集1989
  - 5 熊本県教育委員会「熊本県の条里」熊本県文化財調査報告第25集1977
  - 6 「国誌」に記載あり。（熊本県の地名 日本歴史地名体系44より）
  - 7 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原地域における地区設定基準の改定」「飛鳥・藤原宮発掘調査概報24」1994
  - 8 熊本県教育委員会「立神ドトク道路」熊本県文化財調査報告第35集1979
  - 9 八代市史 第1巻 平成4年3月
  - 10 「夜豆志呂」第49号
  - 11 八代市教育委員会「下堀切道跡！」八代市文化財調査第3集1988
  - 12 八代市教育委員会「下堀切道跡II」八代市文化財調査第4集1989
  - 13 熊本県教育委員会「西片町道跡」熊本県文化財調査報告第153集1996
  - 14 現在、県文化課で整理中
  - 15 「八代大塚古墳」大塚古墳発掘調査団・八代市教育委員会 昭和60年3月
  - 16 熊本県教育委員会「八代大塚古墳」熊本県文化財調査報告第136集1993
  - 17 現在は円墳だが、本来は前方後円墳であった可能性も指摘されている。  
(八代大塚古墳1993)
  - 18 墳丘くびれ部から出土している須恵器群の中に、6世紀前半に位置づけられるものが出土しているためその時期に比定されている。  
(八代大塚古墳1993)
  - 19 八代市教委。澤田が八代大塚古墳（八代大塚古墳1993）調査報告書中第II章の古墳の位置と環境のなかで、「鬼の岩屋タイプについて、『水俣石』と呼ばれる巨大な安山岩の自然石を用い、石室内に両袖石を持った複室墳が鬼の岩屋古墳の基本的なタイプと考えることができる。」としている。
  - 20 手や紺、紐で吊るしたような表現の錦（円文）、三角板縫短甲、錦（円文）を提げた鞘入りの太刀を配列している。
  - 21 熊本県教育委員会「古麓能寺道跡 古麓城下道跡」熊本県文化財調査報告第216集2003
  - 22 綱田龍生「古代荒尾平須恵器と宇城産須恵器」「先史学・考古学論究N」考古学研究室創設30周年記念論文集龍田考古会2003
  - 23 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所「古代の官衙」II遺物・遺跡編2004
  - 24 熊本県教育委員会にて現在、整理中。

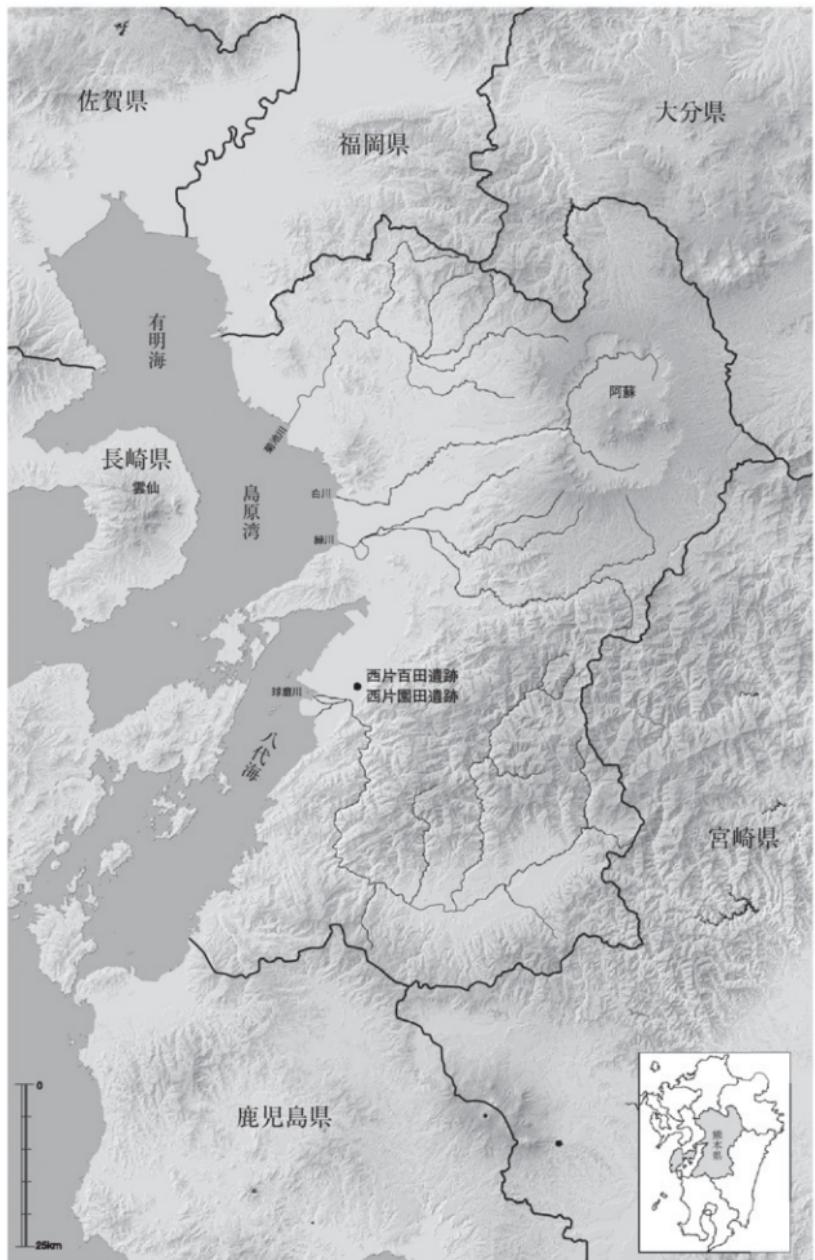


Fig.1 西片百田・園田遺跡位置図

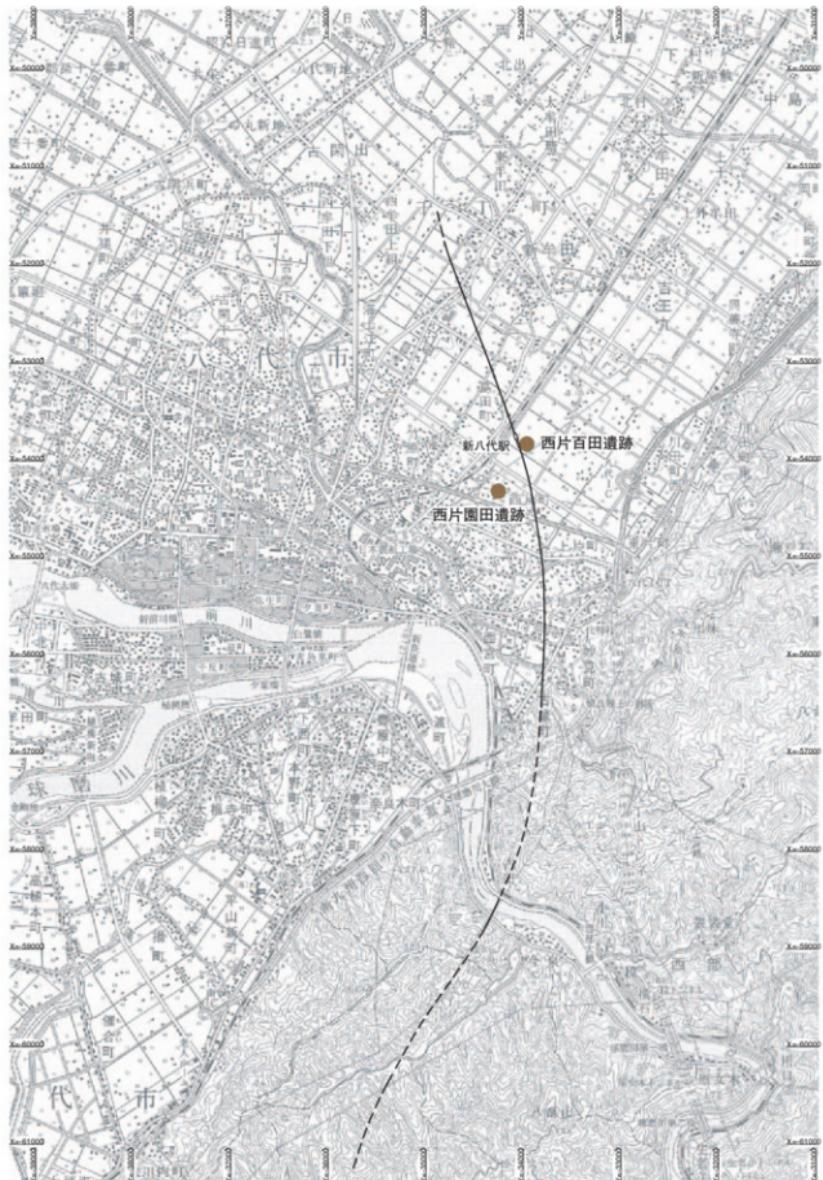


Fig.2 西片百田・園田遺跡周辺地形図

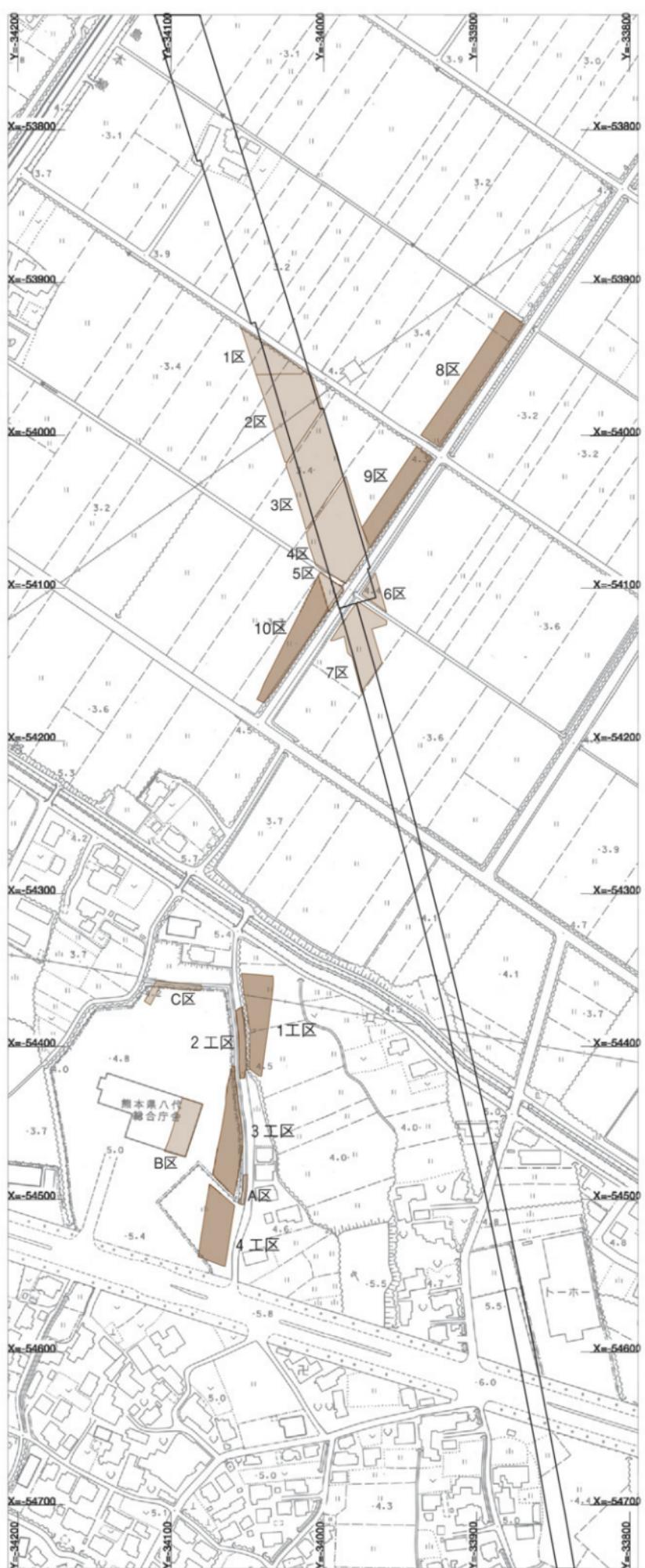


Fig.3 西片百田・園田遺跡調査区配置図

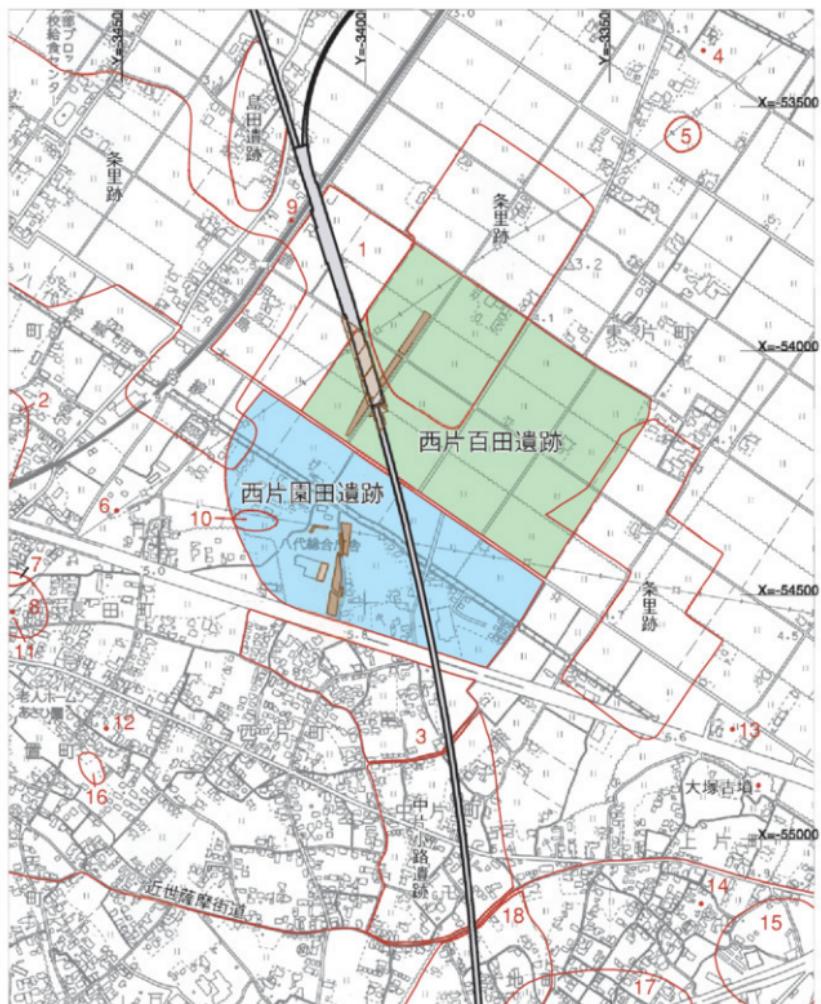


Fig.4 西片百田・園田遺跡周辺遺跡分布図

- |                   |                  |                   |
|-------------------|------------------|-------------------|
| 1. 上日置女木遺跡(弥生～中世) | 7. 鐘樓堂貝塚(弥生～古墳)  | 13. 長塚古墳(古墳)      |
| 2. 竹原町古墳群(古墳)     | 8. 鐘樓堂遺跡(縄文～古墳)  | 14. 高取上ノ山古墳(古墳)   |
| 3. 西片園田遺跡(弥生～近世)  | 9. 用七遺跡(古墳)      | 15. 鬼の岩屋古墳群(古墳)   |
| 4. 橋ノ上貝塚(古墳)      | 10. 長田町遺跡(縄文～古墳) | 16. 白石貝塚(弥生～古墳)   |
| 5. 沖片遺跡(弥生)       | 11. 長田町古墳群(古墳)   | 17. 乙丸古墳群(古墳)     |
| 6. いら塚古墳(古墳)      | 12. 虚空蔵古墳(古墳)    | 18. 宮地年神遺跡(弥生～古代) |



Fig.5 西片百田・園田遺跡周辺字図（太田郷町土地寶典より）

The Nishikata Hyakuta Site

西片 百田遺跡

## 例 言

1. 本書は熊本県八代市西片町字百田に所在する『西片百田遺跡』調査報告である。
2. 本調査は平成14年度に熊本県教育委員会が八代地域振興局 土木部から依頼を受け実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
3. 本書で使用した水準高は、すべて国土地理院「平面直角座標系II」によった。
4. 本書で使用した水準点は、東京湾平均海面を基準としている海拔高で表記している。(日本水準原点 : H = 24,4140m)
5. 本書で使用している地図は、八代市都市計画課の承認を得て、同市発行の都市計画基本図を校正し、調整したものである。
6. 遺構表示記号は独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所の用例に従った。  
例 : SA (柵)・SB (建物)・SC (回廊)・SD (溝)・SE (井戸)・SF (道路)  
SK (土坑)・SX (不明遺構)・SI (住居)・SP (柱穴)
7. 本書で使用した土壤色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準じている。
8. 本文中に使用している実測図は稲葉貴子・唐木ひとみ・山崎秀子がを行い、製図(トレース)及び編集を横田 愛が担当した。
9. 調査時の写真撮影は村中智恵、松尾 茂、長谷部善一が行った。また遺物の写真撮影は奈良文化財研究所 牛嶋 茂の指導のもと、西大寺フォト 杉本和樹が行った。
10. 本書中で表記している遺物の器種を表わす用語として「杯」については、木偏で統一している。
11. 本書の実務・編集は県文化財資料室長 野田拓治指導のもとに長谷部が行った。

本調査に伴う業務委託一覧

【本調査】

4級基準点測量及びメッシュ杭設置 (有)和樹コンサルタント

【整理作業】

デジタルトレース業務 (株)埋蔵文化財サポートシステム 熊本支店

遺物写真撮影 西大寺フォト

---

印刷仕様

判型／A4判

頁数／294頁

組版／写真写植(13級 ゴシック基本)

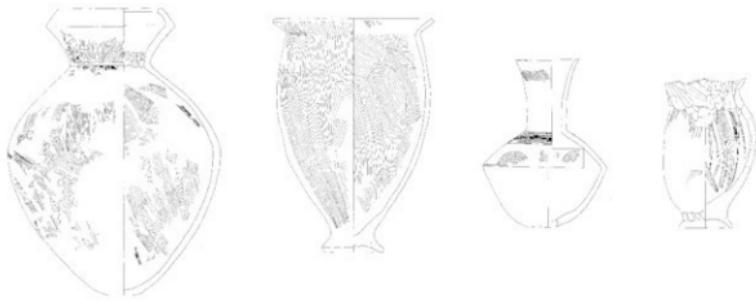
印刷／オフセット印刷

製版／スクリーン線数200線で製版

用紙／表紙(アートボスト4／6判220kg)

本文(上質紙90kg・マットアート紙110kg)

製本／左無線綴じ



複合口縁壺

外器面 ハケメ調整  
内器面 ハケメ調整  
ナデ

脚付甕

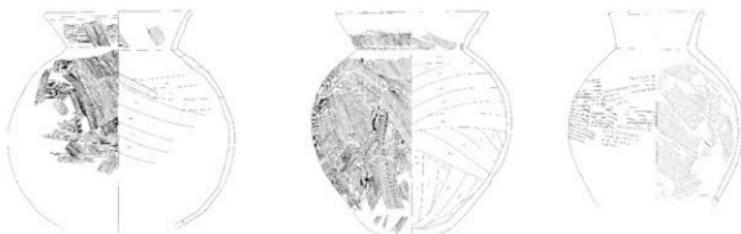
外器面 タテ方向のハケメ  
内器面 ハケメ  
底部内外面に指頭圧痕

長頸重弧文土器

器面  
ハケメ  
重弧文施文

脚付甕

外器面 ハケメ後指ナデ  
指押え  
内器面 ヘラ状工具  
指ナデ  
粘土つみあげ痕



壺

外器面 ハケメ後ナデ  
内器面 ヘラケズリ後ナデ  
(矢印は方向)  
粘土つみあげ痕有り

甕

外器面 ハケメ後ナデ  
内器面 ヘラケズリ  
(矢印は方向)  
粘土つみあげ痕有り

壺

外器面 タタキ痕  
内器面 ハケメ後ヨコナデ



高杯

外器面 ハケメ後ナデ  
内器面 ナデ  
脚内器面 ヘラケズリ  
杯部に粘土つみ痕



鉢

外器面 ハケメ  
口縁部に指頭痕  
内器面 ヘラケズリ  
(矢印は方向)



小型丸底壺

外器面 ハケメ後ナデ  
内器面 ヘラケズリ  
(矢印は方向)  
頸部にハケメ

Fig.6 出土遺物調整凡例

### III 西片百田遺跡発掘調査報告

#### 目 次

##### 第1章 調 査

1 調査日誌抄 ..... 25

##### 第2章 遺構・遺物

###### 調査の概要

1) 8区の遺構・遺物各説 ..... 30 3) 10区の遺構・遺物各説 ..... 80

2) 9区の遺構・遺物各説 ..... 54

第3章 まとめ ..... 119

#### 挿図目次

Fig. 1	西片百田・園田遺跡位置図	8
Fig. 2	西片百田・園田遺跡周辺地形図	9
Fig. 3	西片百田・園田遺跡調査区配置図	11・12
Fig. 4	西片百田・園田遺跡周辺遺跡分布図	13
Fig. 5	西片百田・園田遺跡周辺字図（太田郷町土地寶典より）	14
Fig. 6	出土遺物調整凡例	18
Fig. 7	西片百田遺跡全調査区配置図	23・24
Fig. 8	8区 遺構配置図及び土層断面図	34
Fig. 9	8区 土坑 SK001・002・003・004・005・006・007遺構実測図	35
Fig.10	8区 住居 SI001・002遺構実測図	36
Fig.11	8区 住居 SI003・004遺構実測図	37
Fig.12	8区 住居 SI005・006遺構実測図	38
Fig.13	8区 住居 SI007遺構実測図	39
Fig.14	8区 不明 SX001遺構実測図	40
Fig.15	8区 住居 SI001出土遺物実測図－1－	41
Fig.16	8区 住居 SI001出土遺物実測図－2－	42
Fig.17	8区 住居 SI001出土遺物実測図－3－	43
Fig.18	8区 住居 SI001出土遺物実測図－4－	44
Fig.19	8区 住居 SI001出土遺物実測図－5－	45
Fig.20	8区 住居 SI002出土遺物実測図	46
Fig.21	8区 住居 SI003・004・005出土遺物実測図	47
Fig.22	8区 住居 SI007出土遺物実測図	48
Fig.23	溝 SD016出土遺物実測図	49
Fig.24	8区 出土遺物実測図	50
Fig.25	8区 出土遺物実測図	51
Fig.26	8区 住居 SI004・001出土遺物実測図	52

Fig.27	9区	南北土層断面図・土坑 SK017、SK039、溝 SD021土層断面図	57・58
Fig.28	9区	遺構配置図及び土層断面図	59
Fig.29	9区	住居 SI008遺構実測図	60
Fig.30	9区	住居 SI009遺構実測図	61
Fig.31	9区	住居 SI010遺構実測図	62
Fig.32	9区	住居 SI011、土坑 SK015遺構実測図	63
Fig.33	9区	土坑 SK016遺構実測図	64
Fig.34	9区	土坑 SK018・020・027・038・042遺構実測図	65
Fig.35	9区	土坑 SK021・040、ピット SP016遺構実測図	66
Fig.36	9区	住居 SI008出土遺物実測図	67
Fig.37	9区	住居 SI009出土遺物実測図－1－	68
Fig.38	9区	住居 SI009出土遺物実測図－2－	69
Fig.39	9区	住居 SI009出土遺物実測図－3－	70
Fig.40	9区	住居 SI010出土遺物実測図	71
Fig.41	9区	住居 SI011出土遺物実測図－1－	72
Fig.42	9区	住居 SI011出土遺物実測図－2－	73
Fig.43	9区	住居 SI011出土遺物実測図－3－	74
Fig.44	9区	住居 SI011出土遺物実測図－4－	75
Fig.45	9区	土坑 SK016・017出土遺物実測図	76
Fig.46	9区	出土遺物実測図	77
Fig.47	10区	遺構配置図	82
Fig.48	10区	住居 SI012遺構実測図	83
Fig.49	10区	住居 SI013遺構実測図	84
Fig.50	10区	住居 SI014遺構実測図	85
Fig.51	10区	住居 SI015遺構実測図	87・88
Fig.52	10区	土坑 SK045遺構実測図	89
Fig.53	10区	土坑 SK052遺構実測図	90
Fig.54	10区	住居 SI012、SI013出土遺物実測図－1－	91
Fig.55	10区	住居 SI013出土遺物実測図－2－	92
Fig.56	10区	住居 SI013出土遺物実測図－3－	93
Fig.57	10区	住居 SI013－4－、溝 SD027出土遺物実測図	94
Fig.58	10区	住居 SI014出土遺物実測図	95
Fig.59	10区	住居 SI015出土遺物実測図－1－	96
Fig.60	10区	住居 SI015出土遺物実測図－2－	97
Fig.61	10区	住居 SI015出土遺物実測図－3－	98
Fig.62	10区	住居 SI015出土遺物実測図－4－	99
Fig.63	10区	住居 SI015出土遺物実測図－5－	100
Fig.64	10区	住居 SI015出土遺物実測図－6－	101
Fig.65	10区	住居 SI015出土遺物実測図－7－	102
Fig.66	10区	住居 SI015出土遺物実測図－8－	103

Fig.67	10区 住居 SI015出土遺物実測図－9－	104
Fig.68	10区 住居 SI015出土遺物実測図－10－	105
Fig.69	10区 住居 SI015出土遺物実測図－11－	106
Fig.70	10区 住居 SI015出土遺物実測図－12－	107
Fig.71	10区 住居 SI015出土遺物実測図－13－	108
Fig.72	10区 住居 SI015出土遺物実測図－14－	109
Fig.73	10区 土坑 SK045、溝 SD028出土遺物実測図	110
Fig.74	10区 出土遺物実測図	111
Fig.75	10区 住居 SI015出土遺物実測図	112
Fig.76	10区 住居 SI015出土遺物実測図	113

## 表目次

Tab. 1	西片百田遺跡の4級基準点測量成果	4
Tab. 2	西片百田遺跡8区出土土器観察表	53
Tab. 3	西片百田遺跡9区出土土器観察表	78
Tab. 4	西片百田遺跡10区出土土器観察表－1－	116
Tab. 5	西片百田遺跡10区出土土器観察表－2－	117
Tab. 6	西片百田遺跡10区出土遺物観察表－3－	118
Tab. 7	西片百田遺跡出土遺物観察表	118

## 図版目次

卷頭カラー	PL.15 8区 出土遺物
PL. 1 8区 近世流路 SK001	PL.16 8区 出土遺物
PL. 2 8区 近世流路 弥生土坑、ピット SK003 005 006	PL.17 9区 SI008 PL.18 9区 SI009
PL. 3 8区 近世流路 SK007 SI001 SD009 010 011	PL.19 9区 SI009 PL.20 9区 SI010
PL. 4 8区 SI001 002	PL.21 9区 SI010 011
PL. 5 8区 SI001	PL.22 9区 SI011
PL. 6 8区 SI001	PL.23 9区 SK016
PL. 7 8区 SI001	PL.24 9区 SK018 019 020 027 SD018 近世流路
PL. 8 8区 SI007	PL.25 9区 SK042
PL. 9 8区 SI005 006	PL.26 9区 SK032 033 040
PL.10 8区 SI004	PL.27 9区 SK017 039 041 SD017 020
PL.11 8区 SD016	PL.28 9区 SD023 024 025
PL.12 8区 SX001 SK013	PL.29 9区 弥生後期
PL.13 8区 SK013 SD016	PL.30 9区 出土遺物
PL.14 8区 弥生後期	

PL.31 9区 出土遺物  
PL.32 9区 出土遺物  
PL.33 10区 SI012  
PL.34 10区 SI012  
PL.35 10区 SI012  
PL.36 10区 SI013 SD027 SK052  
PL.37 10区 SI013  
PL.38 10区 SI014  
PL.39 10区 SI014 015  
PL.40 10区 SI015  
PL.41 10区 SI015  
PL.42 10区 近世～弥生後期  
PL.43 10区 出土遺物  
PL.44 10区 出土遺物  
PL.45 10区 出土遺物  
PL.46 10区 出土遺物  
PL.47 10区 出土遺物  
PL.48 10区 出土遺物  
PL.49 10区 出土遺物  
PL.50 10区 出土遺物



Fig.7 西片百田遺跡全調査区配置図

# 第1章 調査

## 1 調査日誌抄

### 西片百田遺跡【8区】

発掘調査は2002年（平成14年）5月2日から9月3日まで実施した。調査に携わった調査員は以下の通りである。長谷部、青柳（7月末迄）、上高原聰、松尾、村中そして8月19日より高田が参加した。

#### 5.2 表土剥ぎ開始。

5.7 表土剥ぎ継続中。作業員を入れて清掃を開始。

5.8 表土剥ぎ継続中。清掃を続け、現時点で水田に伴う用水路等が幾筋か確認。石包丁が表土一括で出土。

5.9 表土剥ぎ最終日。西側土層断面清掃開始。明日から西側土層下にトレチを入れる準備も開始。

#### 5.10 雨のため作業中止。

#### 5.13 雨水抜き取り。西側土層側にトレチ掘削。

5.14 調査区内清掃で近世の土取り穴（調査では擾乱扱い）を検出。

#### 5.15 雨のため作業中止。

5.16 雨水抜き取り。土取り穴の切りあい確認後、掘削開始。

5.17 西側土層断面分層開始。一部に遺構（溝・住居跡）を確認。

5.20 4級基準点測量、メッシュ杭設置作業開始。調査区は清掃、遺構検出作業継続。

5.21 メッシュ杭打ち業務委託終了。溝状遺構の検出作業を開始。

#### 5.22 遺構検出作業を継続。

5.23 赤褐色の埋土を持つ遺構の検出を行い、SD001（溝状遺構）とSK001（土坑）を確認。

5.24 M-10, 11遺構検出及び掘削。SK001（土坑）調査。SK001～SP001検出状況写真撮影。

5.27 N.O-10Grid 遺構検出。多量の土器片が混入しているため、広範囲にわたる遺構の可能性あり。M-10Gridで再度遺構検出。柱穴多数検出。

5.28 N-9, N.O-10Grid 遺構検出作業。上層ではローリングを受けている遺物が多い。SK001（土坑）土層断面を実測しながら調査。

5.29 M-10, 11Gridで検出した柱穴について断面観察後、完掘。SD003, SD004検出。N-9Grid 摂乱中埋土よりガラス玉出土。

5.30 SK001（土坑）完掘後写真撮影。SD001, SD003断面切り合い調査中にSD004を検出し完掘する。N-10Gridで竪穴住居跡を検出。午後から雨のため作業中止。

5.31 SI003, S016検出。SD003掘削。M-10, 11Grid 平面図実測。

6.3 SI003, SD003掘削。N, O-9Grid 掘り下げ。N-11Grid 平面図実測。

6.4 N, O-9Grid で溝状遺構ほか多数の遺構を検出。明日も検出作業を継続。

6.5 N-10Grid 遺構検出。N-10, O-9Grid 掘削。SD007, SD008土層断面実測。

6.6 N, O-10Grid 掘削。SI003遺構検出。SK011 土層断面実測。

6.7 雨のため作業中止。

6.10～11 雨のため作業中止。

6.12 SD009・010調査。N, O-9Grid 遺構検出。SD009・010土層断面実測。SD009・010（溝状遺構）検出状況写真撮影。

6.13 SD011・012調査。SD009・010完掘。N, O-9Grid 掘削。SD011・012検出状況写真撮影。

6.14 N, O-9, O-8Grid, 摂乱掘削。SD011土層断面実測。

6.17 O-9Grid 遺構検出。午後、雨のため作業中止。その片付けの際に作業員に労災発生。

6.18 昨日の雨のため雨水の汲み出しに時間がかかる。午後、O-8Grid 掘削、遺構検出。

6.19 SD014, SK007検出、掘り下げ。N, M-11Grid 平面図実測。SD014, SK007検出状況写真撮影。

6.20 雨のため作業中止。

6.21 P-8掘下げ作業。SK003～SK005平面、土層断面実測。M, N, O-10Grid 平面図実測。

6.24～25 雨のため作業中止。

6.26 P-7, 8Grid 掘り下げ作業。O-8Grid 遺構検出作業。N, O-9Grid 平面図実測。

6.27 SD013完掘。O, P-8Grid 遺構検出。O-7Grid 掘り下げ作業。SD013平面、土層断面実測。

- 6.28 SI001・002・007検出。S049完掘。P-7, 8Grid  
掘り下げ。SI001・002・007検出状況写真撮影。
- 7.1 雨のため作業中止。
- 7.2 M, N, O-8, 9, 10Grid 完掘状況写真撮影。
- 7.3～7.7 現場休み
- 7.8 SI001柱穴確認調査。
- 7.10 SI001・007調査。P, Q-7Grid 掘り下げ。SI001・007平面実測。
- 7.11 SI001・007調査。P-7Grid 掘り下げ。SI007  
土層断面実測。
- 7.12 SI001・007調査。SI001土層断面実測後、撮  
影。
- 7.15 SI001調査。事務所、現場の台風対策を行う。
- 7.16 SI005・006検出作業。SI001調査。SI007実測  
作業、遺物出土状況撮影。
- 7.17 SI001・005掘り下げ、実測。SI005・006検出  
状況撮影。
- 7.18 SI007調査。SK012完掘。SI007実測。
- 7.19 午前一度雨が上がるも、午後から作業を始  
めるとまた降りだしたため作業は中止。
- 7.22 SI001・006・007調査。SI007, SK012平面実  
測図。SD009・010, SI007完掘状況撮影。
- 7.23 SI005・006掘り下げ。SI001実測図作成及び  
遺物出土状況写真撮影。
- 7.24 P, Q-7Grid 遺構検出作業。SI001・005平面  
実測。SI005遺物出土状況撮影。
- 7.25 SI007柱穴調査。Q, R-5Grid, P, Q-7Grid  
調査。SI001・005・007実測。SI007柱痕土層断面撮影。  
夕刻、台風対策作業。
- 7.26 台風の影響のため作業中止。
- 7.29 台風後の復旧作業。
- 7.30 調査区内清掃作業。
- 7.31 月末で作業員が少ないため、実測作業のみ  
を行う。
- 8.1 R, S-3Grid 挖削。SI001・005平面実測図。  
SI007炉検出状況撮影。
- 8.2 R, S-3Grid 挖削。
- 8.5 Q-5, 6Grid 検出作業。
- 8.6 P, Q-6Grid 検出作業。SI001平面図実測。
- 8.7 SI004, SD016検出作業。
- 8.8 SD016, SI001掘り下げ。SD016, SI004検出  
状況撮影。
- 8.9 SD016掘り下げ調査。SI006平面実測図作成。
- 8.10 SI001, SD016調査。SI001検出状況撮影。
- 8.11～18 お盆休み。
- 8.19 SD016, SI002, SX001調査。高田英樹調査  
に合流。
- 8.20 SD016, SI001・002調査。SI001, SD016平  
面実測。SX001撮影。
- 8.21 SI001, SX001調査。SI001土層断面実測図作  
成。柱穴断面撮影。
- 8.23 SI001・004・006調査。SI004・006平面実  
測。SI001・004・006撮影。
- 8.26 SD016, SI002・004調査。SI002・004平面実  
測。
- 8.27 SI004, SD016調査。SI002・004平面実測。  
SI004, SD016土層断面撮影。
- 8.28 SD016調査。SI004, SD016平面、断面実測。
- 8.29 ローリングタワーにより全景写真撮影。午  
後は台風対策。
- 8.30 台風のため作業中止。
- 9.2 SD016, SI004調査（完掘）。SD016, SI004  
平面、土層断面。8区遺構図作成  
(当初、本日が調査区引渡しであったが、先日の台  
風で実測が終わらずに明日まで延期)
- 9.3 図面の最終チェック及び遺物の整理。  
8区終了。現場引渡し。

#### 西片百田遺跡〔9区〕

- 発掘調査は、2002年（平成14年）8月23日から10  
月31日まで実施した。調査に携わった調査員は長谷  
部、高田、松尾、村中で一部を宇田員将、和田敏郎、  
内田成香が手伝った。
- 
- 8.23 表土剥ぎ開始。
- 8.26 表土剥ぎ最終日。調査区東・北側に重機に  
よる擾乱確認。
- 9.2 作業員を入れて清掃開始。遺物の集中する  
住居跡を数軒確認。調査区西側土層にトレンチを入  
れる。
- 9.3 引き続き調査区西側土層トレンチ掘削。
- 9.4 調査区西側土層トレンチ掘削を行いながら、

- 分層開始。
9. 5 雨のため作業中止。
9. 9～9. 10 雨のため作業中止。
9. 11 M・L-12・13Grid 遺構検出作業。SD017（溝状遺構）S002・S003（土坑）を確認し、掘削。S002は土壤洗浄中に、ガラス玉5つ出土。
9. 12 雨のため作業中止。
9. 13 L・K-14・15Grid 遺構検出及び掘削。SI008・S005（住居跡）を確認中。調査区中心部とこれより南側に、東西に伸びるトレンチを入れて掘削。SD017～S003土層断面・平面図実測。
9. 16～17 雨のため作業中止。
9. 18 雨水抜き取り。L・K-14Grid 掘削。SD017土層断面写真撮影。S002・S003完掘状況写真撮影。
9. 19 SI008、SD018・019、SK018・019検出状況写真撮影後、掘削。調査区西側土層断面、SI008土層断面・平面図実測。
9. 20 M・L-12・13Grid 清掃後、SD020・021、SK021を検出。SD020検出状況写真撮影。
9. 24 4級基準点測量、メッシュ杭設置作業開始。M-12、J-15・16Grid 挖り下げ、清掃後 SK028・029、SD023・024検出。SD023・024検出状況写真撮影。
9. 25 L-12、J・I-15・16Grid 挖り下げ、遺構検出。SK020・027掘削。SI008、SK018土層断面・平面図実測。
9. 26 K-15、J-17・18Grid 挖り下げ。SK032～037検出。SK032・033検出状況写真撮影。SI008、SK018・020・027完掘状況写真撮影。
9. 27 SD023・024、S037掘削。S037検出状況写真撮影。M・L-12Grid 平面図実測のため、メッシュ張り開始。午後より雨のため作業中止。
9. 30 月末で作業員が少ないため、実測・図面整理作業のみを行う。
10. 1 S037掘削。K-14・15Grid 挖り下げ。SD023・024は南へラインが拡張するため再度検出。N・M-12・13Grid 平面図実測。
10. 2 S037掘削、黒曜石と石璧出土。SP016、SI010（住居跡）を検出。I-17・18、J-17・18Grid は、本杭に沿ってトレンチを設定し掘削。J-15Grid 挖り下げ。
10. 3 SD023 掘削。J・K-14・15、L-15、I-17Grid 挖り下げ後、検出。L-11・12Grid 平面図実測。S037遺物出土状況写真撮影。
10. 4 SK017・021、SD023、SI010掘削。SK021土層断面、S037平面図実測。SI010検出状況写真撮影。
10. 7 SD024、SK016掘削。SD024内より高杯等の遺物の集中する箇所が出土。別遺構があると思われるため、再度検出。J-16・17、I-17・18、K-15Grid 挖り下げ。SK016検出状況写真撮影。
10. 8 SD024、SK015・017、SI010 挖削。K-15・16Grid 挖り下げ。K-14・15Grid 平面図実測。SD025、SK038検出状況写真撮影。
10. 9 SK017、SD025掘削。L-15、K-15・16Grid 挖り下げ。SK039土層断面。J-15Grid 平面図実測。SD023・024完掘状況写真撮影。
10. 10 SD025、SK016・038掘削。SD025、SK016土層断面。J-15・16Grid 平面図実測。
10. 15 SK016、SD025掘削。SK017・039土層断面。SI010平面図、K-14・15Grid 平面図実測。SI008炉完掘状況、SK040検出状況、SD025完掘状況写真撮影。
10. 16 SK040・041掘削。J-15・16、I-17Grid 挖り下げ。SK040土層断面。SI010、SK016平面図。J-16・17・18Grid 平面図実測。
10. 17 SI011、S050（住居跡）検出。SI010、SK039掘削。J-16・17・18Grid 平面図実測。S038検出状況写真撮影。
10. 18 SD024、SI010、S039掘削。SK028（溝状遺構）検出後、掘削。SI008、SK040平面図。SI010柱穴土層断面実測。S038遺物出土状況写真撮影。
10. 21 SD026、S052掘削。SK042（土坑）検出後、掘削。SI010、SD026、S052平面図実測。SK042検出状況写真撮影。
10. 22 SI011、SK042、SD026掘削。SI011の北側にもう一軒住居跡があり、再検出中。J-15・16、I-17Grid 挖り下げ。SK042完掘状況写真撮影。
10. 23 SI011掘削。SK015（土坑）、S056（土坑）検出後、掘削。I-17、J-15・16・17Grid 挖り下げ。SK038平面図実測。SI010柱穴完掘状況写真撮影。
10. 24 SI009・011、SK043・044（土坑）掘削。SI009の炉上には、大きな遺物が集中していた。SI009・011、SD026、SK015平面図実測。SI010炉検

- 出状況・炉土層断面、SI016完掘状況、SI011検出状況・炉検出状況、SI009検出状況写真撮影。
- 10.25 SI009掘削。SI010炉土層断面。SI011・009平面図実測。SI010・009炉土層断面写真撮影。
- 10.28 雨のため作業中止。
- 10.29 SI011・009掘削。SI011は柱穴2基と貯蔵穴を検出後、掘削。SI011・009炉土層断面実測。SI011・009炉土層断面写真撮影。ローリングタワーにより9区全景写真撮影。
- 10.30 SI011・009柱穴掘削。SI011・009柱穴平面図、9区平面図実測。SI011・009完掘状況写真撮影。
- 10.31 9区平面図実測最終チェック。9区終了。現場引渡し。

#### 西片百田遺跡 [10区]

- 発掘調査は、2002年（平成14年）5月13日から9月10日まで実施した。調査に携わった調査員は長谷部、高田、松尾、村中で一部を宇田員将が手伝った。
- 5.13 表土剥ぎ開始、終了。出土遺物は8区と比較して少量。
- 5.14～6.4 8区調査へ
- 6.5 調査区西・東側土層断面清掃開始。この土層下にトレンチを入れて掘削。
- 6.6 調査区清掃後、南北に伸びるSD028（溝状遺構）・S002（土坑）・S003（土坑）を検出し、検出状況写真撮影。SD028北側から掘り下げ中、釘・下駄出土。
- 6.7 SD028掘り下げ。煙管・木楔・陶器出土。
- 6.10 SD028掘り下げ。午後から雨のため作業中止。
- 6.11 雨のため作業中止。
- 6.12 SD028掘り下げ。5区へ続く圃場整備時の擾乱を検出し、S004として掘り下げ。東側トレンチ掘削。
- 6.13 SD028の南側を検出し、検出状況写真撮影。東側トレンチ掘削。
- 6.14 SD028、SD028と繋がっているSD029・SD030・SD031、重機による擾乱をS008として検出し、掘り下げ。
- 6.17 SD028、SD029、SD031掘り下げ。SD028より小型丸底壺出土。午後より雨のため作業中止。
- 6.18 SD028、SD029、SD030、SD031掘り下げ。SD028は、溝と道の境で大きな岩石を出土。
- 6.19 SD028掘り下げ。
- 6.20 雨のため作業中止。
- 6.21 SD028、S008掘り下げ。
- 6.24～6.25 雨のため作業中止。
- 6.26 SD028、S008、S010掘り下げ。
- 6.27 4級基準点測量、メッシュ杭設置作業開始。S010掘り下げ。東・西トレーンチ掘削。
- 6.28 調査区清掃後、SD028完掘状況写真撮影。SD028、S004、S010平面図実測。
- 7.1 雨水抜き取りを行ったが、午後から雨のため作業中止。
- 7.2 10区平面図実測。作業員は8区へ。
- 7.3～7.7 現場休み。
- 7.8 B・C-27・28Grid掘削。SI014（住居跡）、SK045（土坑）、S028（溝状遺構）を検出し、掘り下げ。SI014、SK045検出状況写真撮影。午後から雨のため作業中止。
- 7.10 E-23・24Grid掘削し検出作業。S029、S030（住居跡）検出。S029、S030検出状況写真撮影。
- 7.11 SI014、SK045掘り下げ。D・E・F-23Gridトレンチ掘削後、検出作業。
- 7.12 SK050・051掘り下げ。E-23、F-22Grid掘削。SI014土層断面、SK050平面図実測。
- 7.15 F-21・22・23Grid掘削。SI014遺物出土状況・炉跡、SK050遺物出土状況、SK051完掘状況写真撮影。事務所・現場の台風対策を行う。
- 7.16 E-22、F-21・22Grid掘削。SI014平面図、S029土層断面実測。SI014周溝・柱穴・炉跡検出状況写真撮影。
- 7.17 E-22、E・F-23Grid掘削、検出作業。SI014、S029平面図実測。
- 7.18 D-25、E-22、F-20・21Grid掘削、検出作業。S029掘り下げ。
- 7.19 D-25Grid掘削。E・F-22・23Grid清掃、検出作業。午前一度雨が上がるも、午後から作業を始めるとまた雨が降り出したため作業中止。
- 7.22 D-25・26Grid掘削。S029、SK045平面図実測。

- 7.23 C-27・28、F-21・22Grid 挖削。C-27、28Grid からは遺物集中部があるが、検出できず。SK045、S029平面図実測。
- 7.24 B-29、C-28、F-20・21Grid 挖削。S029は下層よりさらに遺物出土し再検出。
- 7.25 E-24、F-21Grid 挖削し検出作業。F-21Grid は5区から伸びる溝を検出し、掘り下げ。夕刻、台風対策作業。
- 7.26 台風の影響のため作業中止。
- 7.29～7.31 月末で作業員が少ないとため8区へ。
- 8.1 E-23・24Grid 清掃後、検出作業。S029周囲検出後、掘り下げ。
- 8.2 8区へ
- 8.5 S029掘り下げ。E-24Grid 検出作業。
- 8.6 E-22・23Grid 挖削、検出。SI015、S037検出状況、SI014完掘状況写真撮影。
- 8.7 E-23・F-23Grid 挖削。SK052掘り下げ。SI015平面図実測。
- 8.8 SK052掘り下げ。SI015、SK045平面図実測。S038（住居跡）検出状況写真撮影後、掘り下げ。同心円状に焼土が広がっている。
- 8.9 SK052掘り下げ。E-23Grid 挖削。SK045平面図実測。
- 8.13～8.18 お盆休み。
- 8.19 F-22Grid 検出。SI015平面図、SK052土層断面実測。
- 8.20 E・F-22Grid 清掃後、S039（溝状遺構）、SI012（住居跡）検出。SK052掘り下げ。前日の遺構を引き続き実測。
- 8.21 B-28・29、C-27・28Grid トレンチ 挖削。SK052掘り下げ。SI015平面図実測。SI012検出状況写真撮影。
- 8.22 B-28・29、C-27・28Grid トレンチ 挖削後、検出作業。E・F-22Grid 挖削。SI012掘り下げ。SK052、SI015平面図、SK052完掘状況写真撮影。
- 8.23 SI015、SI012掘り下げ。SI015平面図実測。SI013検出状況写真撮影後、掘り下げ。
- 8.26 SI015、SI012掘り下げ。SI012、SI013平面図実測。SI012完掘状況、SI013遺物出土状況写真撮影。SI013からは兔田式土器出土。

(村中)

## 第2章 遺構・遺物

### 調査の概要

#### 1) 8区の概要

8区は、本事業及び新幹線建設事業に伴い発掘調査を実施したなかで、遺跡の北東の端に位置する調査区である。調査面積は1,460.3m<sup>2</sup>である。本道路改良工事に伴う予備調査の結果、調査区最北端における遺跡の切れ目であろう谷部と思われる落ち込みを検出し、そこから先では青灰粘土の厚い堆積を検出し遺構の広がりは確認できなかった。調査区横には用水路が通っており水の浸水が防げないため、用水路側にシートバイル（止水矢板）を設置し調査を行った。

（長谷部・村中）

#### 8区の遺構

【調査概要】本調査区からは、竪穴式住居跡7軒・溝状遺構17条・土坑14基・柱穴群が検出されている。竪穴式住居跡は長頸壺や台付壺を含む弥生時代後期の土器が出土するものと、古墳時代初頭の土師器が出土する2時期の住居跡を検出している。柱穴群は一部調査区に集中して検出したが、掘削された年代を推定できるまでは至っていない。

土坑 SK001【遺構 Fig. 9 PL. 1】長径1.50m×短径1.24m×深さ19.0cmを測る方形の遺構。南側に一段ステップを持ち下端に至る。下端も隅丸方形を呈する。

土坑 SK002【遺構 Fig. 9】長径20.0cm×短径18.0cm×深さ13.0cmを測る。遺構の大きさから柱穴かと思われるが、上部を大きく削平され本来の遺構の性格が分からなくなっているためここでは土坑と報告する。

土坑 SK003【遺構 Fig. 9 PL. 2】長径46.0cm×短径40.0cm×深さ5.0cmを測る。SK002に切られていの円形の遺構である。浅く擂鉢状の断面形を呈する。

土坑 SK004【遺構 Fig. 9】長径約58.0cm×短径43.0cm×深さ5 cmを測る。SK003に切られている。断面形態は浅い擂鉢状を呈する。

土坑 SK005【遺構 Fig. 9 PL. 2】長径約40.0cm×短径33.0cm×深さ4 cmを測る。SK002に切られている。断面形態は浅い擂鉢状を呈する。

#### 竪穴式住居跡 SI001【遺構 Fig. 10 PL. 3～7・遺物 Fig. 15～19・26 PL. 16】

遺構	時 期	弥生時代後期	出土遺物	土 器	甕21、壺8、高杯2、鉢1 (すべて床面出土遺物)
	切り合い関係	SI002を切る		石 器	無
	規模・深度	5.40m×5.68m・0.173m		鉄 器	無
	面 構	30. 67m <sup>2</sup>		玉 類	無
	主軸方向	W-62°-N		その他	Pit 2より柱材出土 Fig.10 PL. 7 出土遺物はすべて在地系土器
	炉	中央部1.06m×1.14m			
	土 坑	北隅1.2m×1.36m			
	柱 穴	2本			

備考：西側にL字型にベッド状遺構あり。住居の一部に硬化面を確認。

SI002と3分の2ほど切り合う状態で検出できた方形プランを呈する遺構。遺構内には床面より一段高くなっている施設が確認できベッド状遺構を検出している。また、住居内中央部よりやや東に寄った位置から柱穴が2箇所（P1、P2）と炉が検出できた。

Pit 2からは柱穴掘り方の最下層にて柱材の木材が検出されている。床面中央部付近では硬化した部分が僅かに確認できたが、床面近くの土壤の砂質が強く、硬化した面としての広がりは確認できなかった。炉は柱穴に挟まれた位置に楕円形の掘り込みと円形の浅い掘り込みとして確認できた。炉の中心は楕円形の掘り込み中央部に見られるが、焼土は薄く炭化層と混土した状態で検出した。

竪穴式住居跡 SI002【遺構 Fig.10 PL. 4・遺物 Fig. 20 PL. 16】

遺構	時期	弥生時代後期	出土遺物	土器	甕7、壺2、鉢1 (遺物はすべて床面出土)
	切り合い関係	SI001に切られる		石器	無
	規模・深度	6.06m × 5.20m × 0.126m		鉄器	無
	面積	31.5m <sup>2</sup>		玉類	ガラス小玉1点出土 (Fig. 25 PL. 49)
	主軸方向	A-A' N-28.5'-E		その他	無
	炉	未検出			
	土坑	未検出			
	柱穴	未検出			

備考： SI002と軸を同じくして切り合い検出。硬化面は未検出。

住居跡の南東側3分の1がSI001に切られ検出された遺構である。そのため、炉はSI001により削平を受け残されていない。柱穴及び炉は、床面相当の層より掘り下げて確認したが検出できなかった。遺構は削平を受けていない部分が住居跡周辺部（東南）のみであったため硬化面等の住居内遺構は確認できていない。

竪穴式住居跡 SI003【遺構 Fig.11・遺物 Fig. 21 PL. 15】

遺構	時期	弥生時代後期	出土遺物	土器	甕1（床面頂上出土）
	切り合い関係			石器	無
	規模・深度	2.96m × 3.92m × 0.12m		鉄器	無
	面積	11.60m <sup>2</sup>		玉類	無
	主軸方向	A-A' N-53'-E		その他	土器類は埋土中より小片が多数出土しているが図示していない。
	炉	未検出			
	土坑	無			
	柱穴	2本			

備考： 硬化面は未検出

方形プランを呈する住居跡で、一部は調査区の外に伸び未調査である。住居に伴う炉及び硬化面は検出できなかった。柱穴を2箇所検出したが、東側に偏っているため本住居跡に伴うものかどうか不明である。

竪穴式住居跡 SI004【遺構 Fig. 11 PL. 10・遺物 Fig. 21、26 PL. 15】

遺構	時期	弥生時代後期	出土遺物	土器	甕1、壺、鉢1
	切り合い関係			石器	無
	規模・深度	3.46m × 4.36m × 0.106m		鉄器	無
	面積	15.08m <sup>2</sup>		玉類	無
	主軸方向	A-A' N-77°-E		その他	無
	炉	中心部の土坑が可能性有			
	土坑	未検出			
	柱穴	柱材出土			

備考： 中心部土坑周囲に炭化物の散布が見られる。硬化面は未検出。

遺構形態は楕円形を呈する。遺構内からは柱穴を1箇所、炉（土坑）を住居中心部で1基確認。炉（土坑）内からは焼土、炭化物とも未検出であった。柱穴より出土した柱材（Fig. 26）は復元直径13cmで長さが23.5cmである。腐食が激しく、木材の硬い部分しか残されておらず柱としての全容は分からず。

竪穴式住居跡 SI005【遺構 Fig. 12 PL. 9・遺物 Fig. 21】

遺構	時期	弥生時代後期	出土遺物	土器	甕1、高杯1（床面出土）
	切り合い関係	SI006を切る		石器	無
	規模・深度	3.54m × 3.12m		鉄器	無
	面積	11.04m <sup>2</sup>		玉類	無
	主軸方向	A-A' N-14°-E		その他	無
	炉	未検出			
	土坑	未検出			
	柱穴	未検出			

備考： 西北側隅は調査区外にあり未調査である。

SI006を切り検出された隅丸方形を呈する住居跡である。SI006とほぼ主軸を同じくする遺構である。遺構内の付属施設としての柱穴・土坑・硬化面は確認できなかった。床面のレベルが、粘質土と砂質土の境に当たり遺構埋土が砂で覆われてしまっていることが検出できない一因と思われる。

竪穴式住居跡 SI006【遺構 Fig.12 PL. 9】

遺構	時期	弥生時代後期	出土遺物	土器	無
	切り合い関係	SI005に切られる		石器	無
	規模・深度	4.02m × 4.82m × 0.76m		鉄器	無
	面積	19.38m <sup>2</sup>		玉類	無
	主軸方向	A-A' N-9°-E		その他	土器類は小片が数点出土しているが、小片であり図示していない。
	炉	未検出			
	土坑	未検出			
	柱穴	未検出			

備考： 遺構の西側が調査区の外に出て未検出。床面においては貼床等は検出できなかった。

竪穴式住居跡 SI007【遺構 Fig.13 PL. 8・遺物 Fig.22 PL. 15】

遺構	時期	弥生時代後期	出土遺物	土器	壺1、壺2
	切り合い関係	—		石器	無
	規模・深度	4.5m × 5.48m × 0.49m		鉄器	無
	面積	24.66m <sup>2</sup>		玉類	無
	主軸方向	B-B' N-91°-E		その他	無
	炉	未検出			
	土坑	未検出			
	柱穴	2本			

備考： 柱穴周辺に炭化物が集中している。遺構の南東側5分の1は未調査（調査区外）。

遺構の一部が調査区外にあたり、全体の5分の4を完掘している。遺構は長方形をなし隅丸の住居跡である。床面には炭化物の集中範囲が2箇所に見られ、中心に位置する炭化物の広がりの下から炉を検出した。炉は浅く円形に広がる掘り込みにさらにもう一段の掘り込みを持つ（H-H'）。

また、もう一方の炭化物の広がりの直下からは柱穴が検出でき、途中からではあるが柱痕も確認している（D-D'）（F-F'）。硬化面は僅かに住居跡中心付近で検出したが、面としては確認できていない。他に、（C-C'）（E-E'）において浅い掘り込みを検出したが性格は分からなかった。

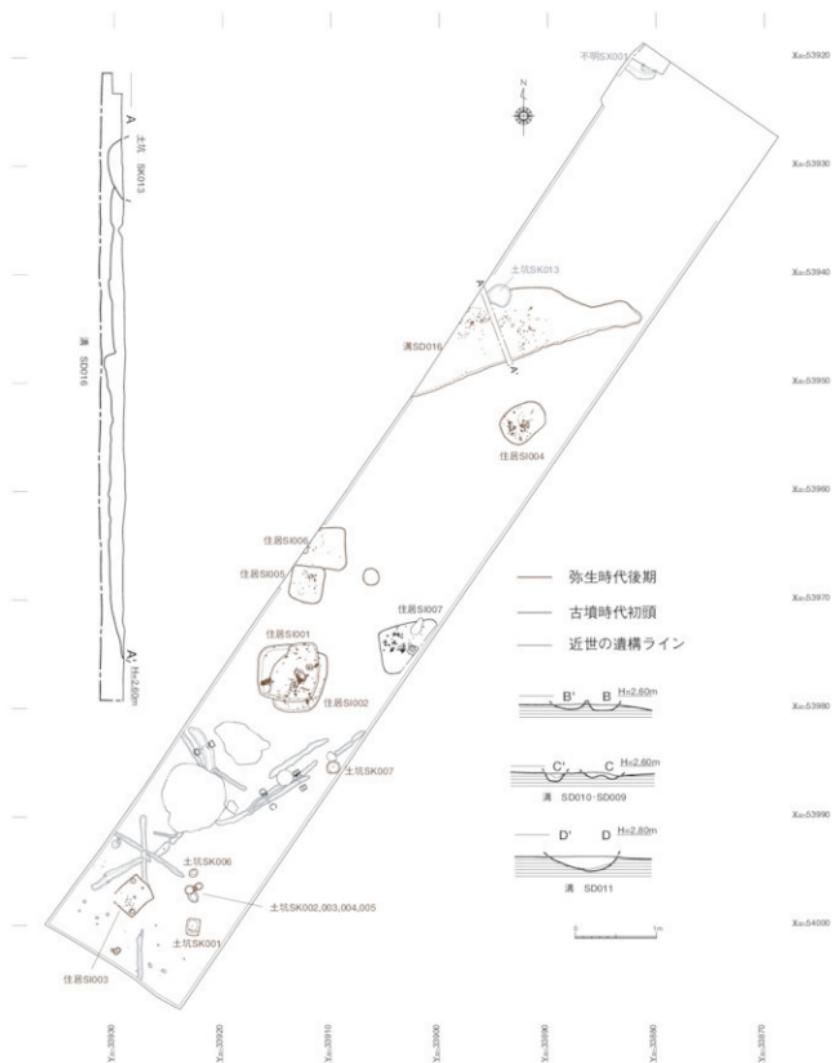


Fig.8 8区 遺構配置図及び土層断面図

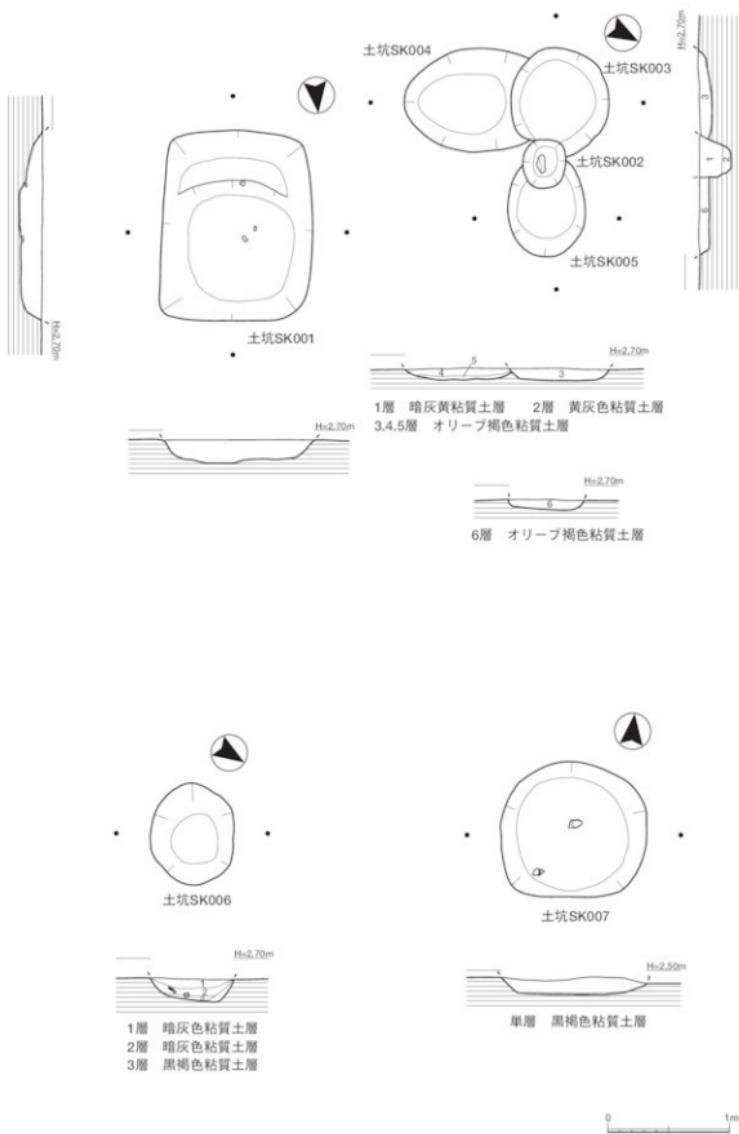


Fig.9 8区 土坑SK001・002・003・004・005・006・007遺構実測図

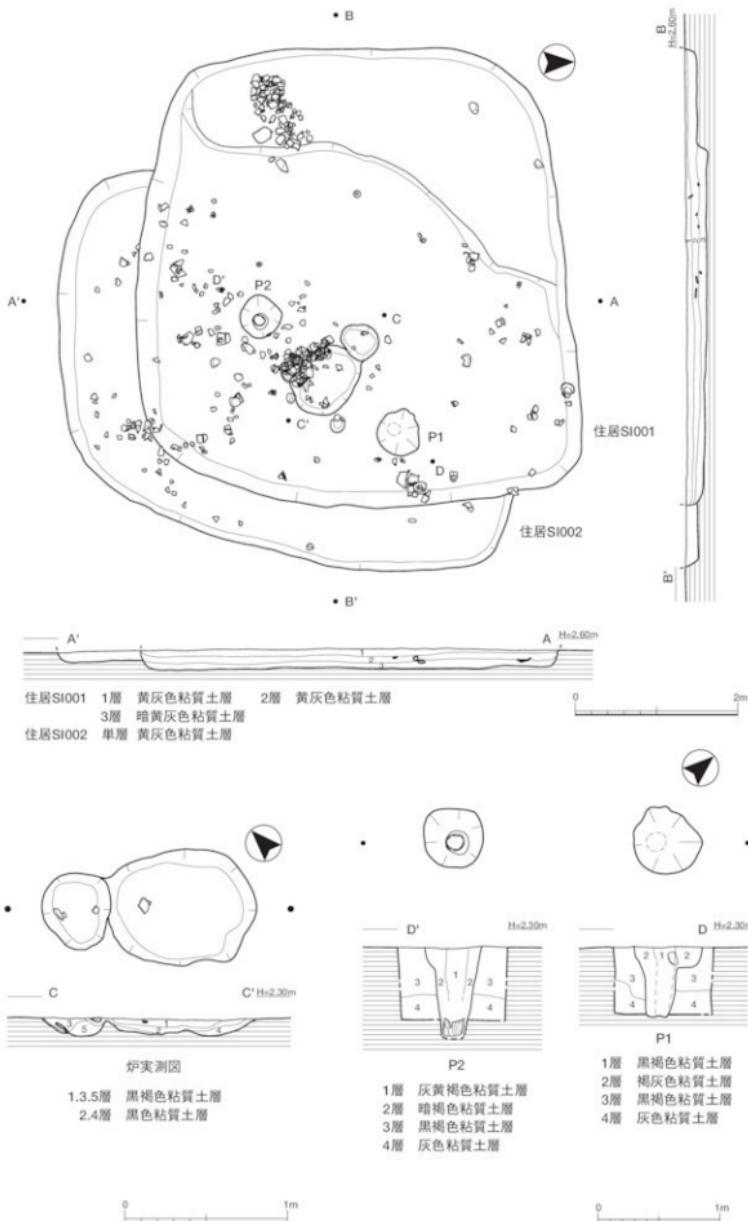


Fig.10 8区 住居 SI001・002遺構実測図

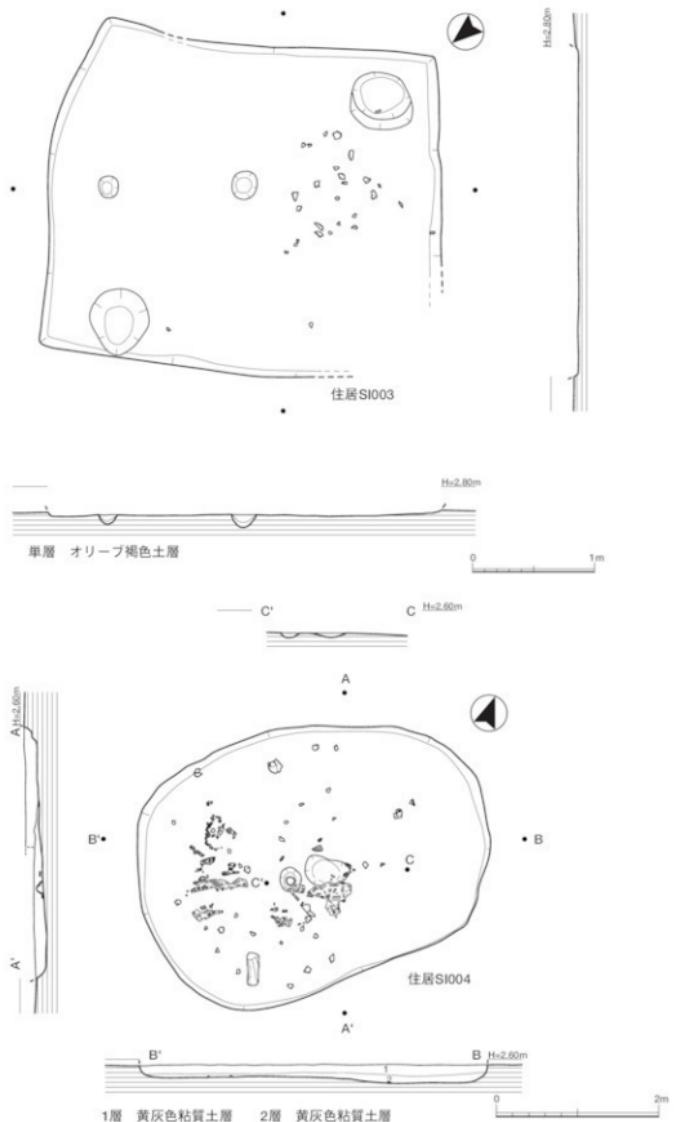
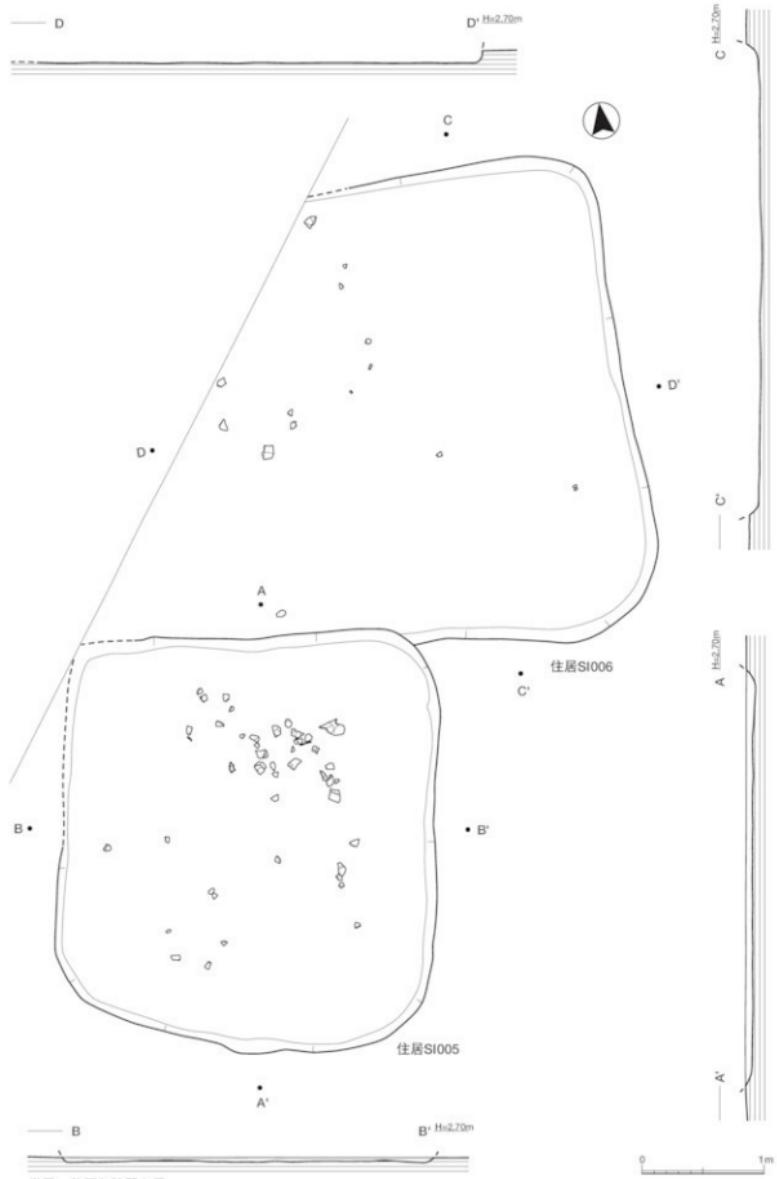


Fig.11 8区 住居 SI003・004遺構実測図



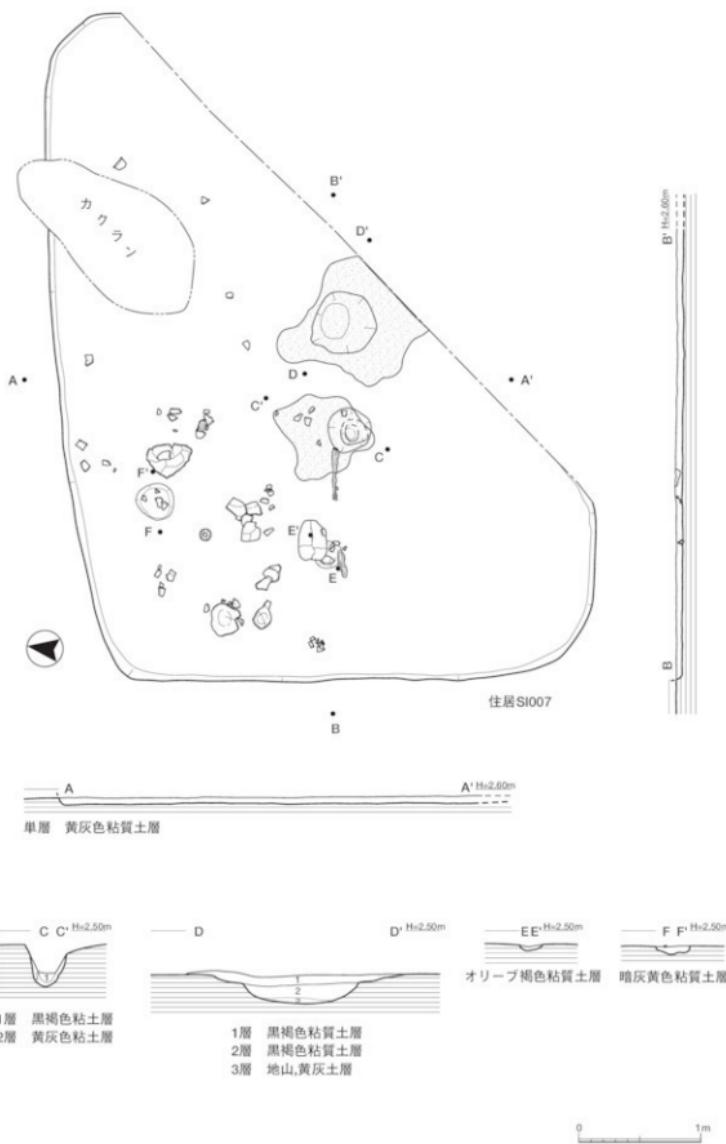


Fig.13 8区 住居 SI007遺構実測図

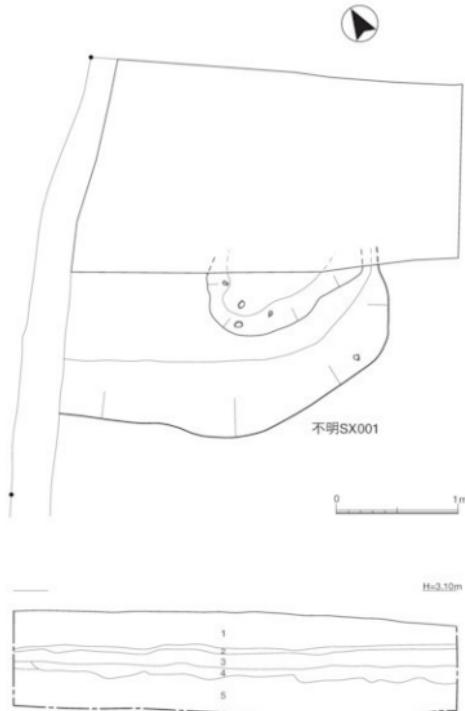


Fig.14 8 区 不明 SX001 遺構実測図

1 層 暗灰黄色粘質土層 (2.5Y 4/2)

粘性は低く、しまっている。下部 5cm 程度に 3 層と同質の粘質土を含む部分がある。上へいくにしたがって、シルトの比率が高くなり、最上部はシルトとなる。

2 層 暗オリーブ褐色粘質土層 (2.5Y 3/3)

粘性やや低く、しまっている。黒褐色粘質土 (2.5Y 3/1) をブロック状に含んでおり、上下の境界がうねっている。

3 層 オリーブ褐色粘質土層 (2.5Y 4/3)

粘性やや低く、しまっている。4 層との境界が明瞭で、3, 4 層間に不整合は見られない。

4 層 暗オリーブ褐色粘質土層 (2.5Y 3/3)

粘性は 2, 3 層と比べ高く、しまっている。この遺構の埋土と土器片及び小礫を含む。

5 層 暗灰黄色粘質土層 (2.5Y 4/2)

粘性高く、少しゆるい。上部 5 ~ 20cm には、植物等による搅乱により 4 層をブロック状に含む。上部は均一な粘土層である。1 層の下部から 5 層まで、ほぼ連続的に植物由来の酸化鉄のパイプ (1 ~ 4mm) が多く見られ、湿地の植物が考えられる。また、4, 5 層に比べ 2, 3 層はシルト分が多いものの 2, 3, 5 層にわたって砂や礫等をほとんど含まない。また 2, 4 層は比較的黒味を帯び、腐植を含んでいる。(高田)

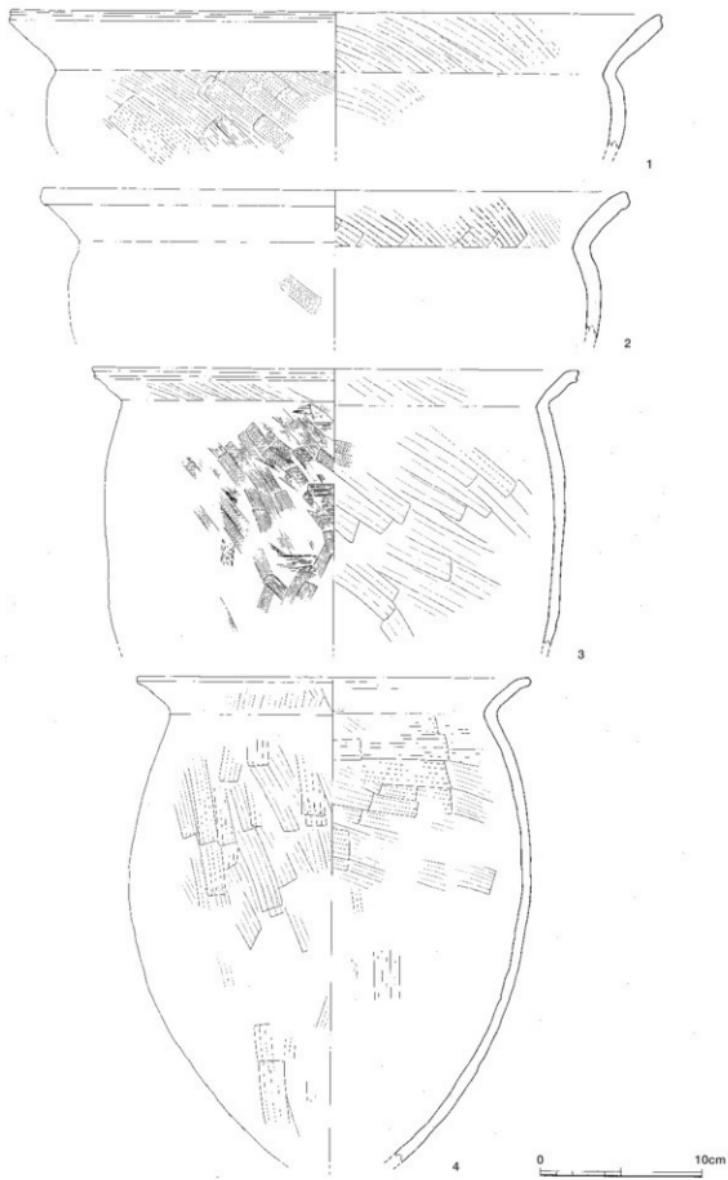


Fig.15 8区 住居 SI001出土遺物実測図—1—



Fig.16 8区 住居 SI001出土遺物実測図—2—

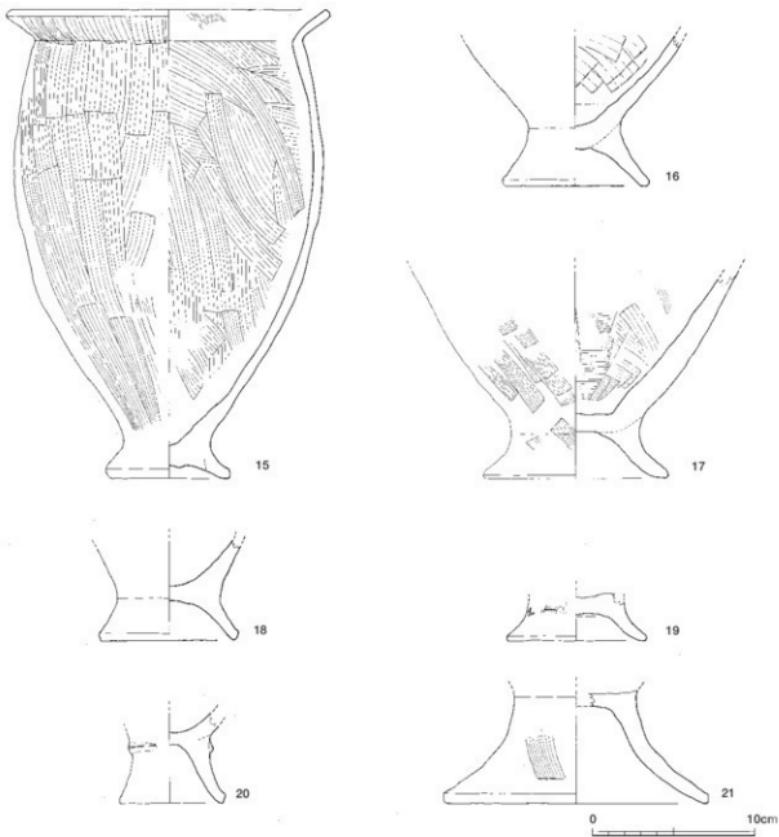
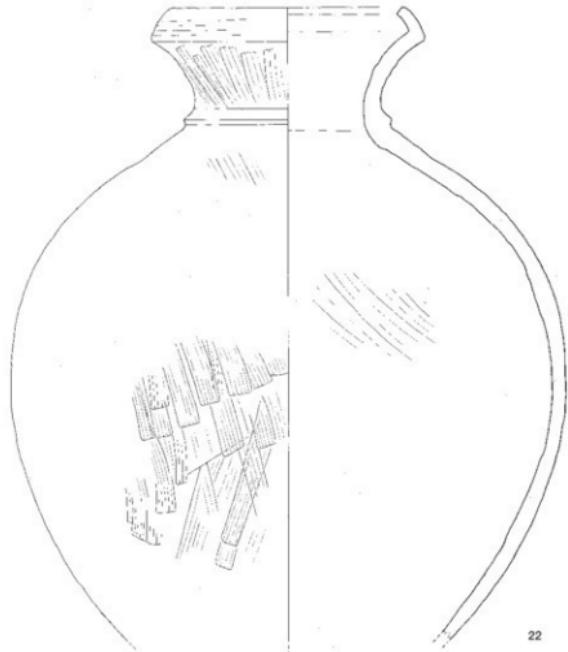


Fig.17 8区 住居 SI001出土遺物実測図—3—

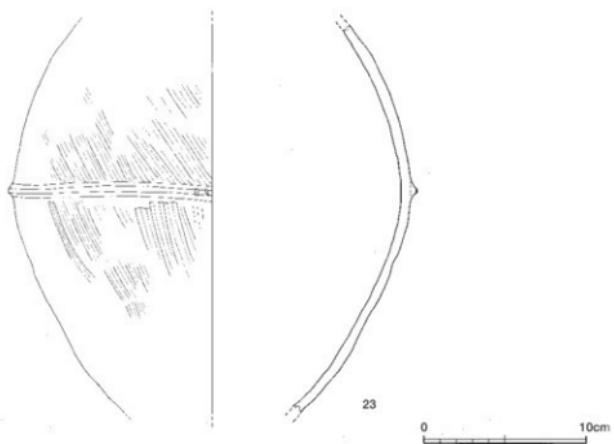
出土遺物 (Fig. 15~26 PL. 15, 16)

竪穴式住居跡 SI001出土遺物 (1~31) 集落の北辺近くに位置する方形プランを有する竪穴式住居跡出土の土器。甕型土器（台付甕、平底甕）、壺、高杯、鉢がある。遺物は主に炉とベッド状遺構周辺から出土している。出土している甕は胴部が球体をなし最大径が比較的上部に有する大型のタイプ (1, 2, 4) と、口縁下で丸みを帯びず、垂直に下方に伸びるタイプ (3) とに分けられる。また、そのなかで口縁直径が30cmを超えるものと口縁直径が20cm前後 (5~10, 12) の中型のものとに大別できる。器面の調整は、いずれのタイプも外器面に幅の狭い刷毛目が明瞭に引き上げられ、内器面にも刷毛目による粗い調整が残る。

壺も同様に復元器高が30cmから40cm近いものと、30cm以下のものと大別でき、さらに複合口縁



22



23

0 10cm

Fig.18 8区 住居 SI001出土遺物実測図—4—

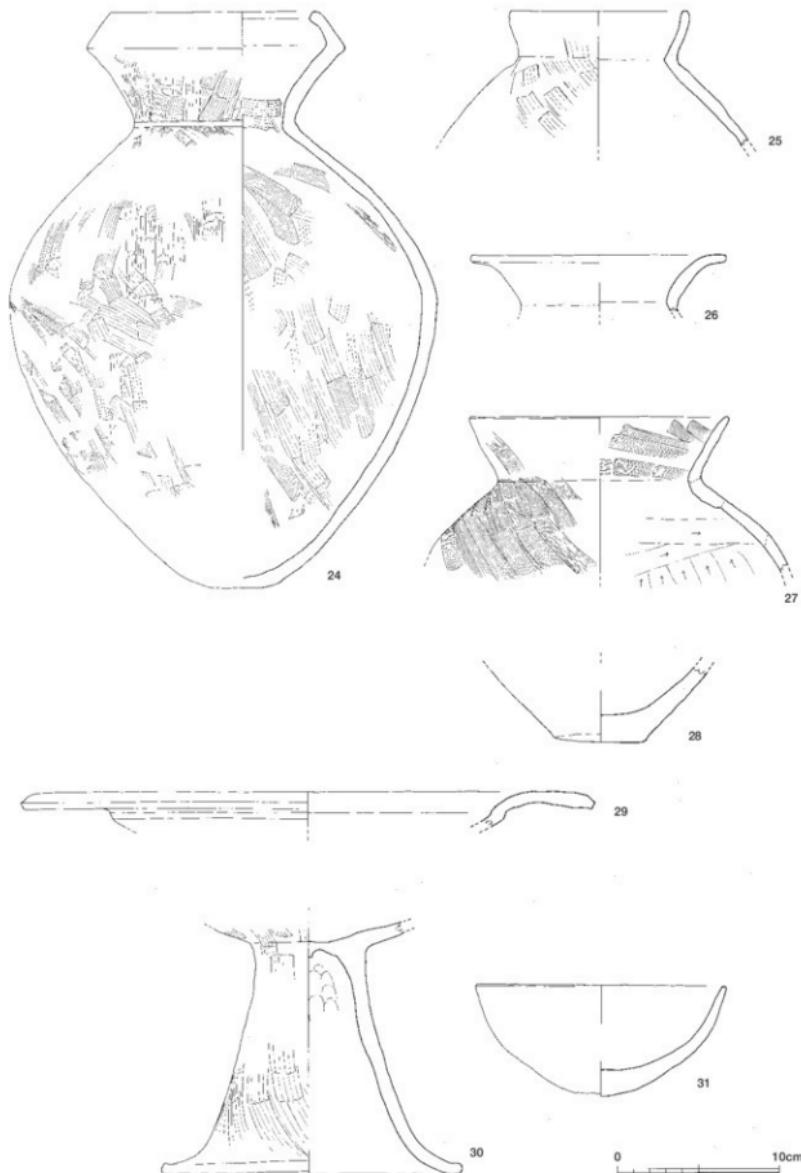


Fig.19 8区 住居SI001出土遺物実測図—5—

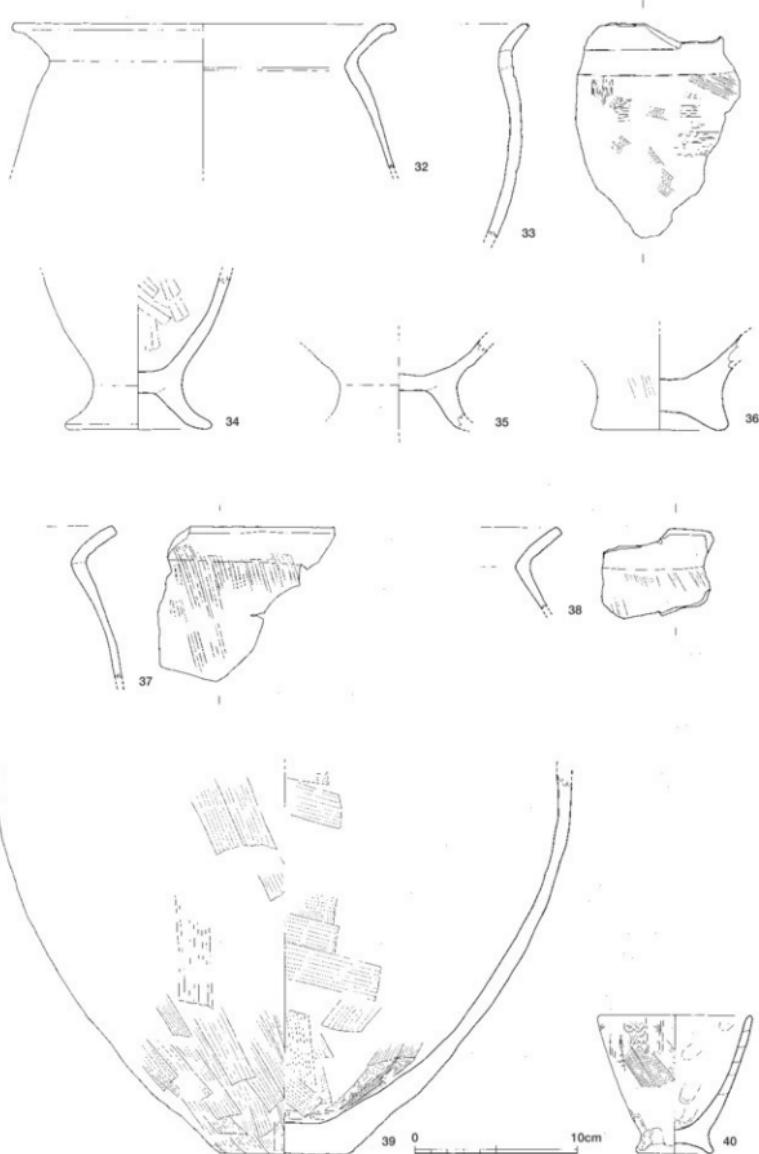


Fig.20 8区 住居 SI002出土遺物実測図

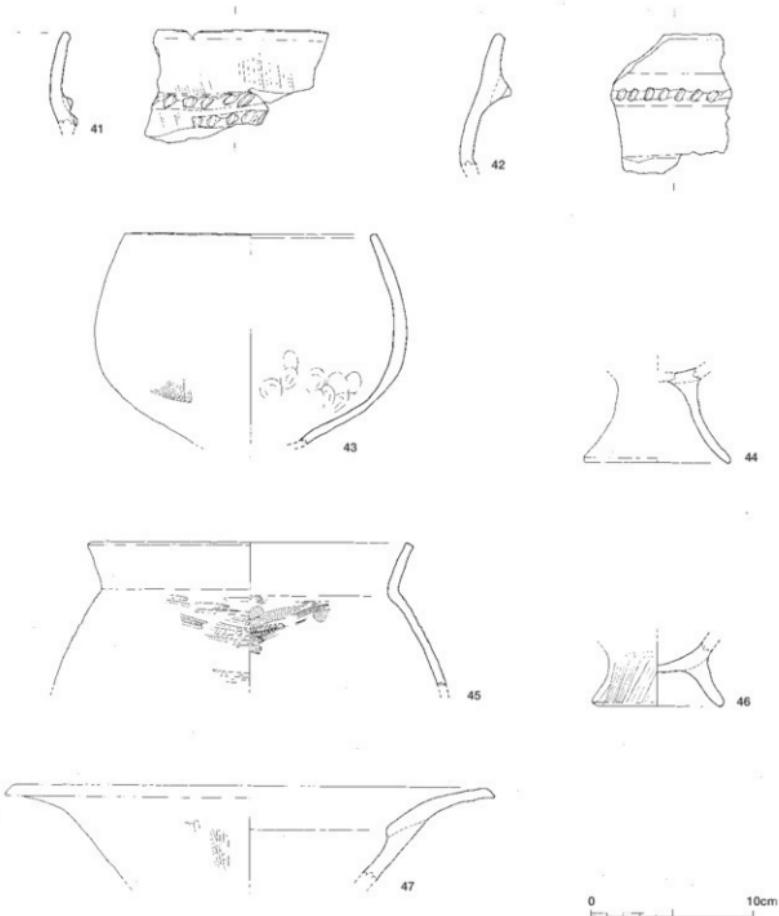
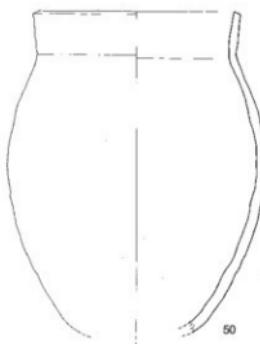
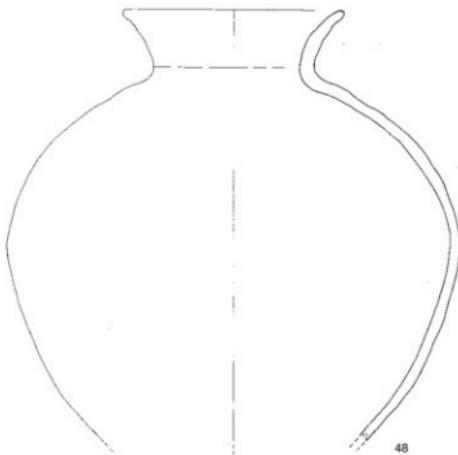


Fig.21 8区 住居SI003・004・005出土遺物実測図

(22, 24)と口縁と体部が「く」字状をなす口縁の壺とに分けることができる。また、壺のなかでも中型壺で口縁が外反するもの(26)、直線的に外に向かって伸びるもの(27)、直立するタイプに分けることができる(25)。壺の底部は大半が平底をなし一部に、完全に平底ではなく、やや丸みを帯びているものも見られる(28)。高杯は同時代の高杯としては大型のものである(29, 30)。鉢は小型で底部は丸味を帯びる(31)。竪穴式住居跡SI002出土遺物(32~40)SI001に先行し全体の住居平面のほぼ3分の2が切りあっている住居跡から出土した土器である。遺物は切り合っていない住居の東南側縁辺部のみで出土している。SI001と比べ小片が多い。壺、壺のバリエーションはSI001と同じである。40は小型の台付杯である。台部には指ナデに



0 10cm

Fig.22 8区 住居 SI007出土遺物実測図

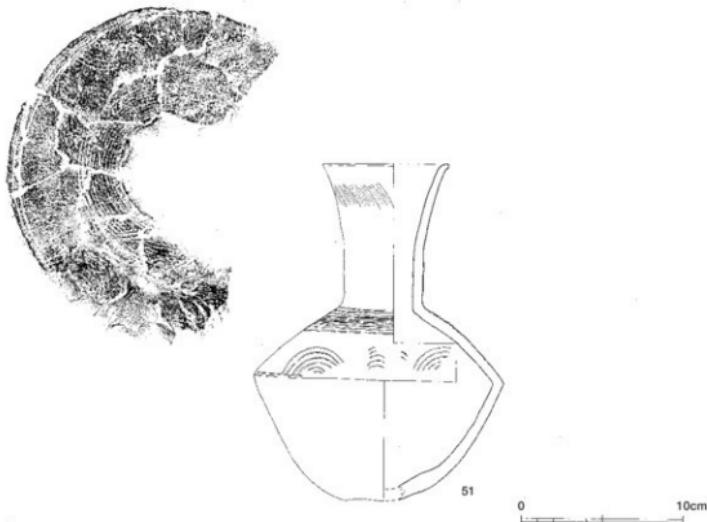


Fig.23 8区 溝 SD016出土遺物実測図

より接合痕が明瞭に残る。

竪穴式住居跡 SI003出土遺物（41）口縁直下に二重の粘土紐貼付けが施される土器で甕型土器の一部であろう。粘土紐は薄く山形に貼付けられ、浅い刻み目が施される。

竪穴式住居跡 SI004出土遺物（42～44）42は壺口縁部と思われ、頸部から緩く外反する外器面に刻み目を有する凸帯を貼り付けている。43は鉢状の形態を有している土器である。台部は欠損しており不明であるが、底部付近でやや外反するため台付の可能性もある。44は台付壺の台部である。他の台に比べ器壁が薄く台部は長い。

竪穴式住居跡 SI005出土遺物（45～47）45は頸部付近のくびれが少なく短く外反し端部が方形に整形されている壺である。46は短く立つ台を有する壺の台部である。47は杯部がやや深い、複合口縁の高杯の杯部である。杯部から外反し始める部分は比較的厚く、粘土の張り合わせは雑である。口縁端部は明確に稜を付け整形される。

竪穴式住居跡 SI007出土遺物（48～50）方形を呈する竪穴式住居跡炉周辺から出土した土器。胴部が丸みを帯び口縁部が頸部より強く外反する壺（48）、直行する口縁を有し、胴部中位に最大径部があり、板目叩き痕がある壺（49）、頸部のくびれが少なく、胴部から口縁端部にかけて垂直に延びる形態を有する壺がある（50）。他の遺構遺物とは違い、八代地域に見られる長石を含んだ胎土を有する土器であるが、調整の技法が刷毛目による調整ではなく叩きを用いる土師器である。

溝SD016出土遺物（51）溝理土中より出土した重弧文長頸壺。長く伸びる頸部は中位より僅かに外反し、端部は丸みを帯びる。胴部上半には9条からなる弦線と4箇所に配されている重弧文が確認される。しかし、文様帶は風化が激しく施文は見えにくくなっている。

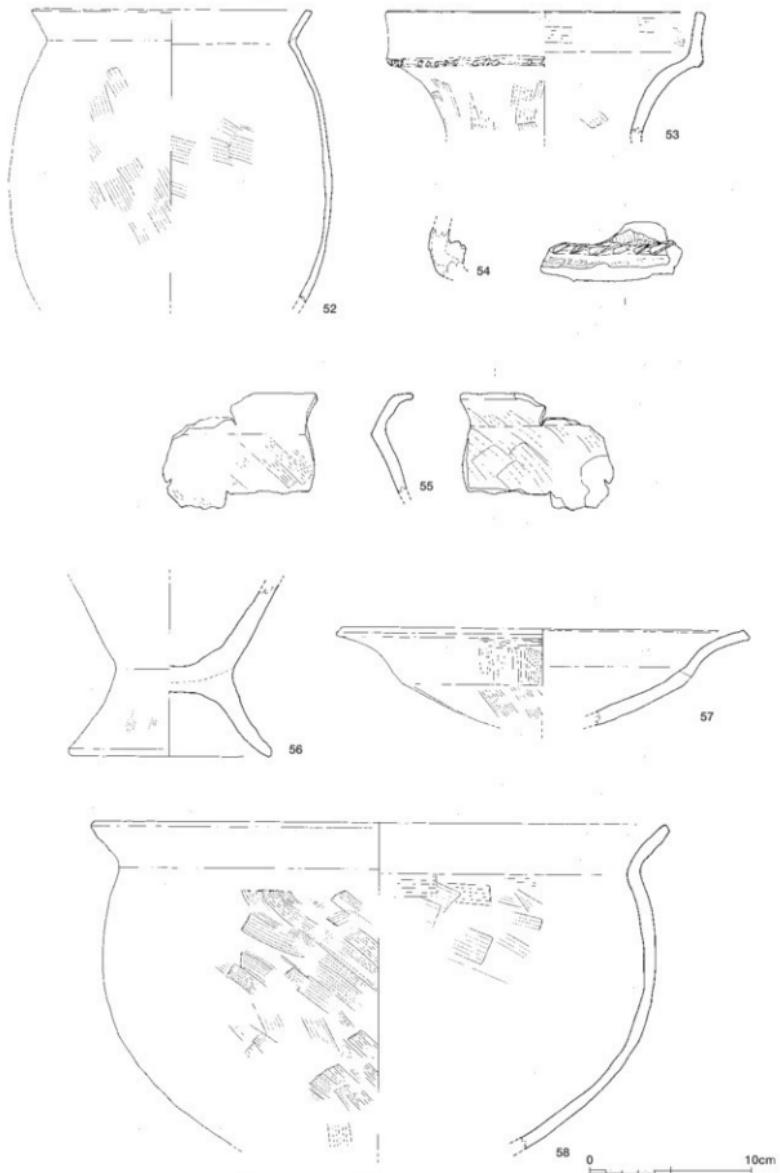


Fig.24 8区 出土遺物実測図

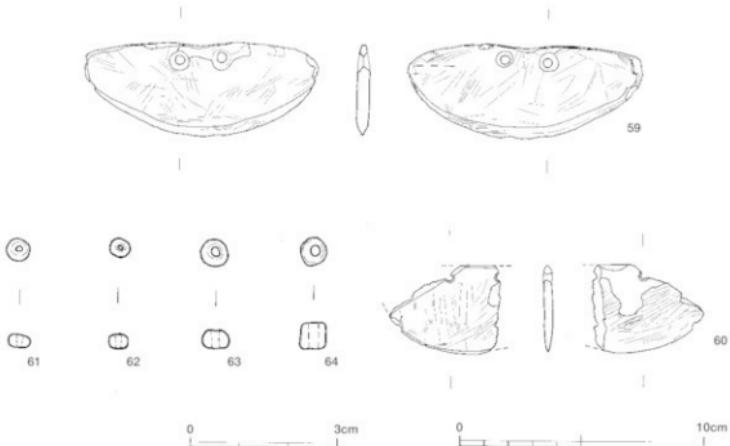


Fig.25 8区 出土遺物実測図

8区遺構以外の出土遺物（52～64）遺構外出土遺物は主にグリッド精査時に出土した遺物である。本来は遺構埋土中よりの出土遺物であろうが、出土位置は不明である。遺構内出土遺物と同様に多彩なバリエーションを呈している。

53は複合口縁壺の口縁部である。頸部から立ち上がり、直立する口縁部屈曲部にわずかに突帯が巡り、ヘラ状工具による刻み目が施される。口縁端部は四角に整形される。54はSI003出土の粘土紐貼付け土器同様に、口縁直下に粘土紐帶を有し斜め方向に大きく刻みが施される。55は甕口縁部である。口縁端部で強く外反し端部は丸い。56はおそらく55の甕台部になる部位と思われる。設置面にあたる端部は丸く整形される。57はSI004出土高杯同様に杯部が深く、緩い屈曲部を有する高杯である。屈曲部より外反する部分は強く外反し、端部は四角に整形される。58は鉢型土器である。丸く整形された胴部は頸部下でやや内傾する。底部は欠損して残っていない。

本区より出土した土器以外の出土遺物は、Fig.25に示す石庖丁2点・ガラス玉4点、Fig.26に示しているSI001、004出土の堅穴式住居跡柱穴出土柱材である。

59は粘板岩製石庖丁である。刃部は湾曲し両面から鋭く研がれる。背部は直線であるが、2箇所の穿孔部中心において明瞭な紐ずれが見られる。60も59同様のタイプの石庖丁であるが、両サイドが欠損している。穿孔部は2箇所に認められる。61～64はガラス製の玉。出土遺構が確認されるのは、61のみである。SI002埋土出土で他は、Grid出土として精査時に取り上げている。いずれの玉も濃淡の差はあるが、青を基色としている。

住居 SI004・001出土遺物（65・66）65は住居跡である SI004の中心部で検出したPit埋土から出土した柱材の一部である。外皮は残っておらず硬い木質部のみで、内部の軟らかい中心部分は残っていない。66は住居跡SI001のPit 2から出土した柱材の底部である。外皮は残らず木材面のみである。底部は直線的に切られている。

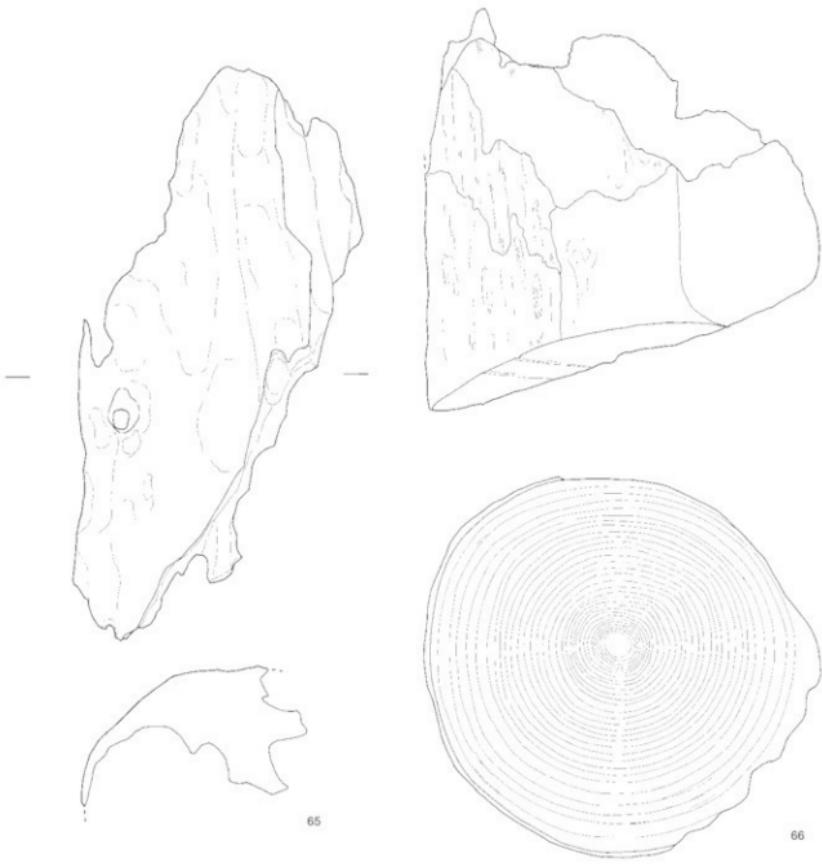


Fig.26 8区 住居 SI004・001出土遺物実測図

Tab. 2 西片田遺跡 8 区出土土器観察表

掲載番号	造構種別	出土地点	器種	残存部位	残存高	最大胴径	口径	底径	備考	Fig.	PL
1	竪穴式住居	SI001	甕	口縁・胴部	8.3	—	(40.2)	—			
2	ク	ク	甕	口縁・肩部	9.0	—	(36.4)	—		15	
3	ク	ク	甕	口縁・肩部	17.0	(28.40)	(30.0)	—			
4	ク	ク	甕	口縁・肩部	29.9	24.7	24.2	—		16	
5	ク	ク	甕	口縁・肩部	19.0	(25.8)	(22.8)	—			
6	ク	ク	甕	口縁・肩部	12.3	(19.4)	(21.6)	—			
7	ク	ク	甕	口縁・肩部	13.7	(23.60)	(23.0)	—			
8	ク	ク	甕	口縁・肩部	8.6	(17.50)	(19.4)	—			
9	ク	ク	甕	口縁・肩部	14.4	(23.6)	(22.0)	—			
10	ク	ク	甕	口縁・肩部	10.2	(16.00)	(16.0)	—		16	
11	ク	ク	甕	口縁・肩部	6.8	—	(22.4)	—			
12	ク	ク	甕	口縁・肩部	9.4	(16.70)	(17.0)	—			
13	ク	ク	甕	口縁	5.0	—	(19.8)	—			
14	ク	ク	壺	口縁・胴部	6.0	(14.8)	(16.0)	—			
15	ク	ク	甕	完形	28.7	(19.1)	(20.0)	7.7		16	
16	ク	ク	甕	台部	9.2	—	—	9.1			
17	ク	ク	甕	肩部・台部	12.9	—	—	—			
18	ク	ク	甕	台部	6.2	—	—	8.6		17	
19	ク	ク	甕	台部	2.9	—	—	(8.6)			
20	ク	ク	甕	台部	5.5	—	—	6.5			
21	ク	ク	甕	台部	6.9	—	—	(16.2)			
22	ク	ク	壺	ほぼ完形	38.9	34.2	14.2	—		18	16
23	ク	ク	壺	肩部	23.9	25.2	—	—			
24	ク	ク	壺	完形	35.4	26.4	12.7	3.6			
25	ク	ク	壺	口縁・胴部	8.3	—	11.0	—			
26	ク	ク	壺	口縁	3.5	—	(15.7)	—			
27	ク	ク	壺	口縁・肩部	9.7	—	16	—			
28	ク	ク	壺	底部	4.6	—	—	(5.7)		19	
29	ク	ク	高杯	口縁	2.2	24.2	35.4	—			
30	ク	ク	高杯	脚部	15.5	—	—	18.6		16	
31	ク	ク	鉢	完形	6.8	—	(15.6)	—			
32	竪穴式住居	SI002	甕	口縁・肩部	8.9	—	(23.2)	—			
33	ク	ク	甕	口縁・肩部	13.1	—	—	—			
34	ク	ク	甕	胴部・台部	9.3	—	—	(9.0)		16	
35	ク	ク	甕	台部	5.5	—	—	—			
36	ク	ク	甕	台部	5.8	—	—	8.4		20	
37	ク	ク	甕	口縁・肩部	9.4	—	—	—			
38	ク	ク	甕	口縁	5.0	—	—	—			
39	ク	ク	壺	肩部・底部	23.4	—	—	9.8		16	
40	ク	ク	鉢	完形	8.4	—	(9.2)	(4.6)			
41	竪穴式住居	SI003	甕	口縁	7.0	—	—	—		15	
42	竪穴式住居	SI004	壺	口縁	8.3	—	—	—			
43	ク	ク	鉢	口縁・肩部	12.9	19.2	(15.6)	—			
44	ク	ク	甕	台部	5.8	—	—	9		21	
45	竪穴式住居	SI005	甕	口縁・肩部	8.8	—	(20.0)	—			
46	ク	ク	甕	台部	4.0	—	—	8.1			
47	ク	ク	高杯	口縁・杯部	5.8	—	(30.0)	—			
48	竪穴式住居	SI007	壺	ほぼ完形	26.5	28.0	(13.6)	—			
49	ク	ク	壺	ほぼ完形	23.4	21.8	12.0	—		22	15
50	ク	ク	甕	ほぼ完形	19.7	16.0	12.8	19.7			
51	溝状造構	SD016	壺	ほぼ完形	20.6	15.4	7.8	—		23	
52	グリッド内出土	S-3	甕	ほぼ完形	17.95	—	(17.2)	—			
53	ク	P-6	壺	口縁	(7.6)	—	(19.6)	—			
54	ク	0-8	壺	頸部	3.0	—	—	—			
55	ク	Q-5	甕	口縁	7.1	—	—	—		24	
56	ク	—	甕	台部	10.6	—	—	12.5			
57	ク	Q-5	高杯	口縁・杯部	5.9	—	25.4	—			
58	ク	—	鉢	ほぼ完形	20.0	34.0	35.8	—			

## 2) 9区の概要

9区は調査区の南西部側に新幹線本線部調査4区が続く。調査面積は850.1m<sup>2</sup>である。本調査区は8区同様に東側に平野へ水を引く、用水路が通っており現状のままで表土剥ぎを行うと浸水が予想されたため、調査に先立ち振興局土木部によりシートパイル設置工事が行われた。

遺構の検出作業は、調査区北側8区よりから開始し、古墳時代初頭の溝・土坑、南北に伸びる畝状遺構、弥生時代後半の竪穴式住居跡等を確認した。調査を実施した面は1面である。

(村中)

### 9区の遺構

竪穴式住居跡 SI008【遺構 Fig. 29 PL. 17・遺物 Fig. 36 PL. 31】

遺構	時 期	弥生時代後期	出土遺物	土 器	甕3(うち台付1)、複合口縁壺2(すべて床面出土遺物)
	切り合い関係	南側はトレーニングにより切られている。		石 器	無
	規模・深度	4.16m × 2.86m × 0.108m		鉄 器	無
	面 構	11.86m <sup>2</sup>		玉 類	無
	主軸方向	N-42°-E		その他の	無
	炉	中央部0.8m × 0.7m × 0.83m			
	土 坑	床面北隅に浅い窪みあり。			
	柱 穴	2本			

備考：柱穴間際まで硬化面を検出。床面上に焼土と炭化物を含む土の広がりが見られる。中央部の炉付近では特に焼土、炭化物が厚く広がっている。住居跡中央部に残る炉は方形の深い掘りこみに更に上部から横円形の掘り込みがありその内部に焼土、炭化物が詰まっている。一番焼けた範囲は薄く横円掘り込みの中央部のみであり、あとは焼き出された焼土、灰である。炉の埋土は遺跡の立地する土壤成分に由来し、粘質土・粘土によるものである。住居跡の南端は基本土層確認用のトレーニングにより切られており、確認できなかった。しかし、トレーニング外出することはないと想定して示している。

竪穴式住居跡 SI009【遺構 Fig. 30 PL. 18、19・遺物 Fig. 37、38、39 PL. 32】

遺構	時 期	弥生時代後期	出土遺物	土 器	甕4、壺2(うち1点は重弧文土器)、台付鉢1、高杯1
	切り合い関係	溝 SD024・026に切られる。		石 器	無
	規模・深度	5.40m × 5.50 × 0.85cm		鉄 器	無
	面 構	29.7m <sup>2</sup>		玉 類	無
	主軸方向	N-35°-E		その他の	無
	炉	住居内中央部主軸上にあり			
	土 坑	未確認			
	柱 穴	1本確認			

備考：遺構の平面形は方形を呈するが北東側の隅は明確には確認できなかった。柱穴についても、1本は明確に確認したが、他は砂に埋もれてしまっていたか確認できなかった。

竪穴式住居跡 SI010【遺構 Fig. 31 PL. 20、21・遺物 Fig. 40 PL. 30】

遺構	時 期	弥生時代後期	出土遺物	土 器	壺1（炉内より出土）、台付壺1、重弧文壺1
	切り合い関係	SP016（古墳時代）		石 器	無
	規模・深度	4.6m × 4.32m × 0.66m		鉄 器	無
	面 積	19.87m <sup>2</sup>		玉 類	無
	主軸方向	N- 0° - S		その他	無
	炉	半径0.5m × 深度0.91cm			
	土 坑	炉の北側に検出			
	柱 穴	1本確認。もう1本は調査区外か？			
備考：住居の検出から床面まで浅かったため、北側のラインは一部削平のため確認できなかった。また東側は調査区外にある。炉は調査区ぎりぎりの所で確認できたが、主柱穴となるもう一方の柱穴は確認できなかった。出土遺物は床面上からの出土であったが、前述のとおり遺構が浅くしか確認できなかったため上部からの混入資料も含んでいた。					

竪穴式住居跡 SI011【遺構 Fig. 32 PL. 21、22・遺物 Fig. 41～44 PL. 31】

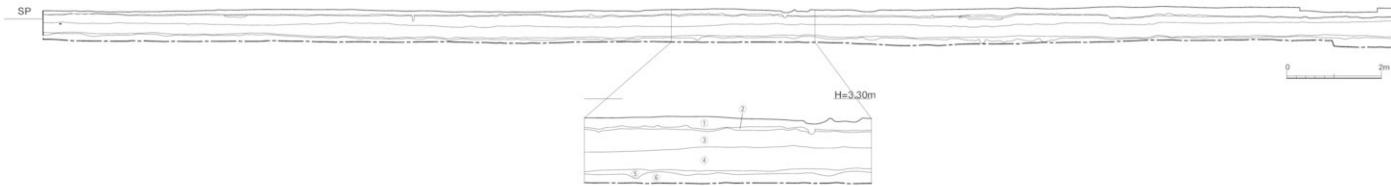
遺構	時 期	弥生時代後期	出土遺物	土 器	壺15、壺7、鉢3
	切り合い関係	溝 SD025、土坑 SK015		石 器	無
	規模・深度	4.24m × 4.04m × 0.119m		鉄 器	無
	面 積	17.13m <sup>2</sup>		玉 類	無
	主軸方向	N-45.5° - E		その他	無
	炉	有(1 m × 1.16m × 0.13m)			
	土 坑	有			
	柱 穴	2本柱			
備考：古墳時代初頭の溝と思われる遺構に切られ検出された遺構である。そのため遺構の南端は未確認である。住居跡中央部の炉周囲には焼土・灰が硬化面上に広がっている。柱穴は炉を挟むように2本確認したが、住居内の中心部に位置していないため主柱穴とは考えにくい。炉の断面は半裁した状態で確認したが、薄い粘質土からなり層中にわずかに焼土を含む。出土遺物は主に住居内床面上から出土している。					

土坑 SK015【遺構 Fig. 32・遺物 Fig. 46】

主軸を北に有する橢円形を呈する土坑である。竪穴式住居跡 SI011掘り込みを切る。土層は四層に分層でき、埋土は粘質土・粘土に由来する粘質土が自然堆積による埋没を示す土層が観察できる。

土坑 SK016【遺構 Fig. 33 PL. 23・遺物 Fig. 45】

主軸をほぼ北に有し、橢円形を呈する土坑である。平面形はややいびつであり、2つの遺構が切りあっていた可能性もある。土層はほぼ水平堆積であり自然堆積の土層を呈している。埋土は粘質土・粘土及び砂混じりの粘質土により構成される。遺物は土坑下端近くで多く出土している。

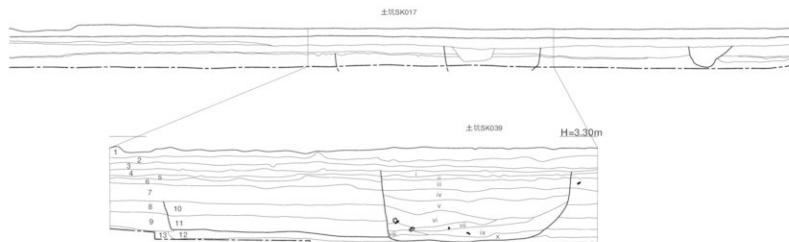


土坑SK039

- i 層 黒褐色粘質土層(Hue2.5Y3/1)
- ii 層 反黃褐色粘質土層(Hue2.5Y6/2)
- iii 層 反黃褐色粘質土層(Hue10YR4/2)
- iv 層 緩灰色粘質土層(Hue10YR4/1)
- v 層 黃灰色粘質土層(Hue4.5YRA4/1)
- vi 層 緩灰色粘質土層(Hue10YR4/1)
- vii 層 黑褐色粘質土層(Hue2.5Y3/1)
- viii 層 黃灰色粘質土層(Hue2.5Y4/1)
- ix 層 緩灰黃色粘質土層(Hue2.5Y4/2)
- x 層 黃灰色粘質土層(Hue2.5Y5/1)

土坑SK017

- 1層 褐灰色粘質土層(Hue10YR6/1)
- 2層 暗灰色粘質土層(Hue10YR5/2)
- 3層 にぶい黄粘質土層(Hue2.5Y6/4)
- 4層 單灰黃色粘質土層(Hue2.5Y4/2)
- 5層 黄褐色粘質土層(Hue2.5Y5/3)
- 6層 黄褐色粘質土層(Hue2.5Y5/4)
- 7層 單灰黃色粘質土層(Hue2.5Y4/2)
- 8層 單灰黃色粘質土層(Hue2.5Y5/2)
- 9層 單灰黃色粘質土層(Hue2.5Y4/2)
- 10層 單灰黃色粘質土層(Hue2.5Y5/2)
- 11層 單灰黃色粘質土層(Hue2.5Y4/2)
- 12層 黄灰色粘質土層(Hue2.5Y4/1)
- 13層 黄灰色粘質土層(Hue2.5Y5/1)



南北土層

- ①層 暗灰色粘質土層(Hue10YR6/1)
- ②層 にぶい黄粘質土層(Hue2.5Y6/4)
- ③層 單灰黃色粘質土層(Hue2.5Y4/2)
- ④層 黄褐色粘質土層(Hue2.5Y5/3)
- ⑤層 黄褐色粘質土層(Hue2.5Y5/4)
- ⑥層 單灰黃色粘質土層(Hue2.5Y4/2)
- ⑦層 單灰黃色粘質土層(Hue2.5Y5/2)

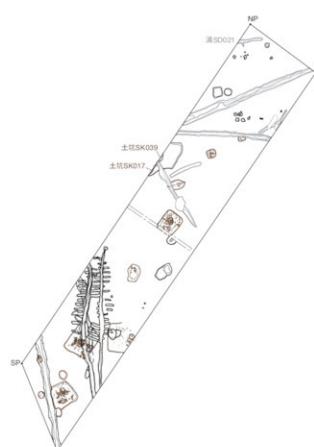
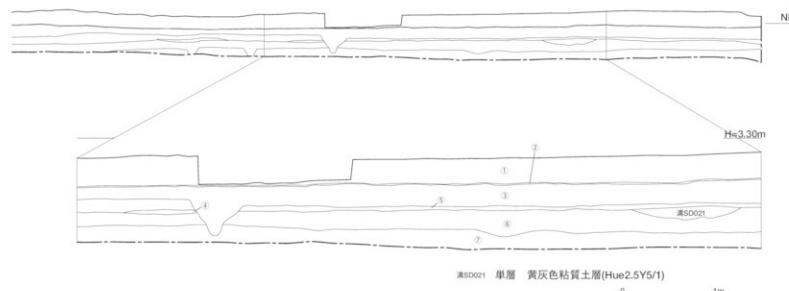


Fig.27 9区 南北土層断面図・土坑 SK017, SK039, 溝 SD021土層断面図

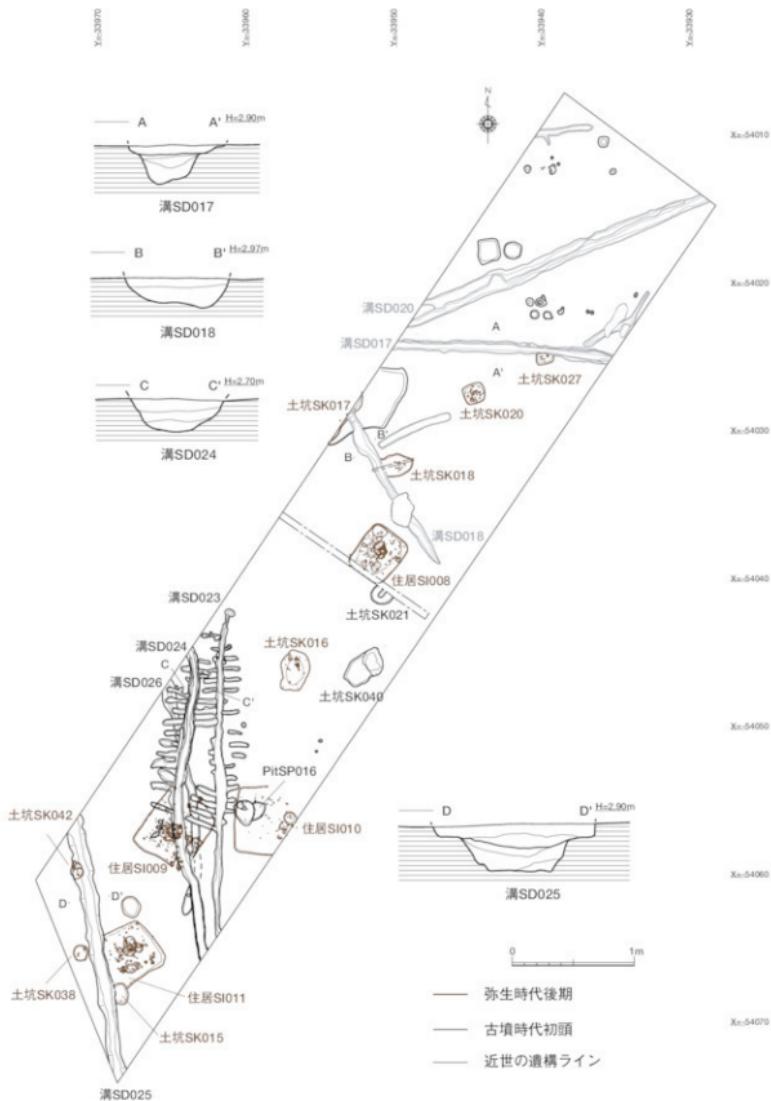


Fig.28 9区 遺構配置図及び土層断面図

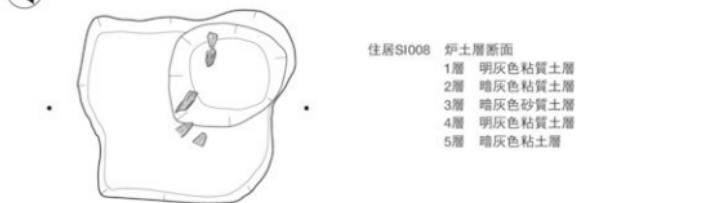
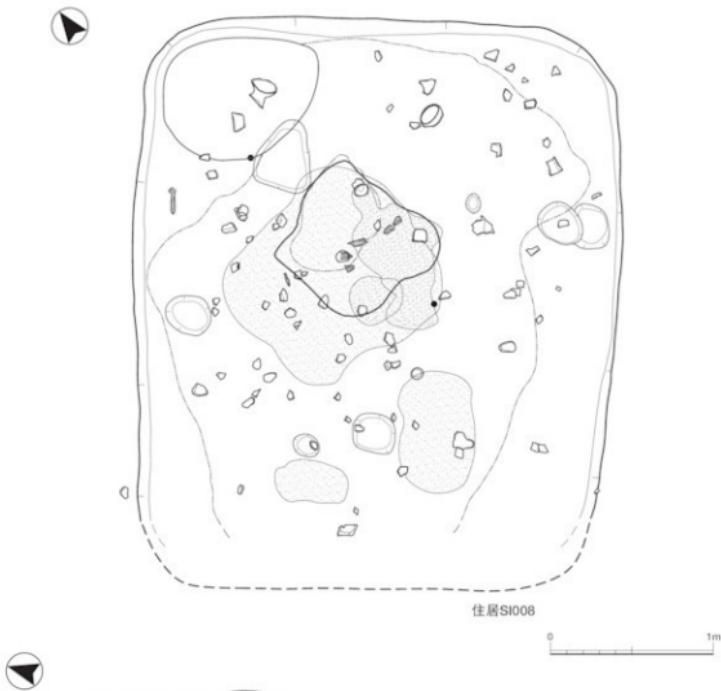


Fig.29 9区 住居 SI008遺構実測図

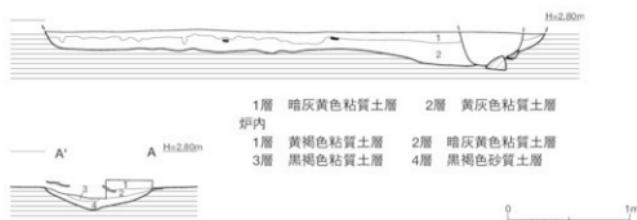
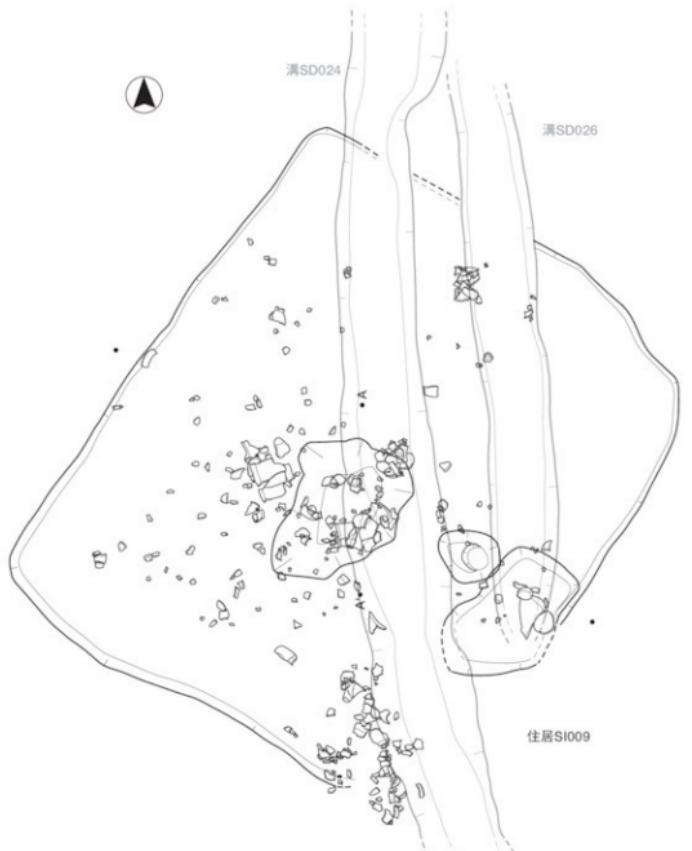


Fig.30 9区 住居 SI009遺構実測図

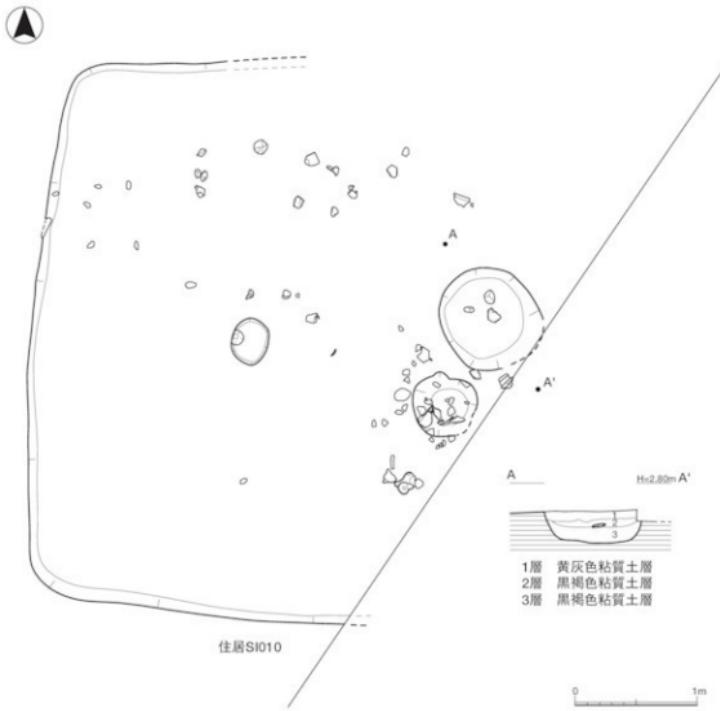


Fig.31 9区 住居 SI010遺構実測図

#### 土坑 SK18【遺構 Fig. 34 PL. 24】

溝 SD018に切られている遺構である。遺構の断面形態は浅い皿状を呈し、立ち上がりは緩やかに立ち上がる。平面形は楕円形であり、遺構中心部にはコブシ大の礫をわずかに含んでいるが共伴する出土遺物はない。土層は単層である。

#### 土坑 SK20【遺構 Fig. 34 PL. 24】

平面形が方形を呈する遺構である。埋土中にこぶし大の礫を多く含む。埋土は2層に分層され、砂混じりの粘質土及び粘土により構成される。掘り込みは約1.2m四方の掘り込みを有し下端形態はやや丸みを帯びる。礫の出土は土坑のほぼ中央部に寄った位置に多く集まっており流れ込みによる入り方とは思われない。土器の共伴はない。

#### 土坑 SK021【遺構 Fig. 35】

遺構の一部がトレンチにあたり平面形が確認できない遺構である。残る遺構は、浅い土坑の中に細長い楕円形の掘り込みがある。土層から見ると、2段目の掘り込みにまで緩やかな傾斜で埋土の流れ込みが見られ

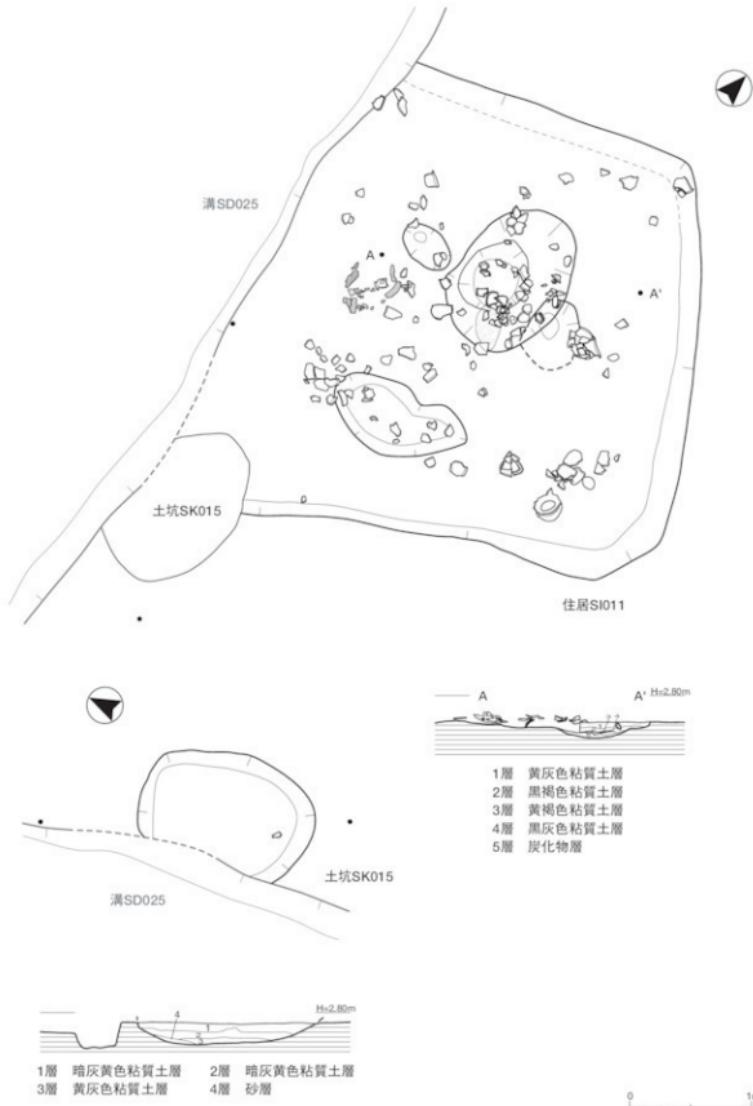


Fig.32 9区 住居 SI011、土坑 SK015遺構実測図

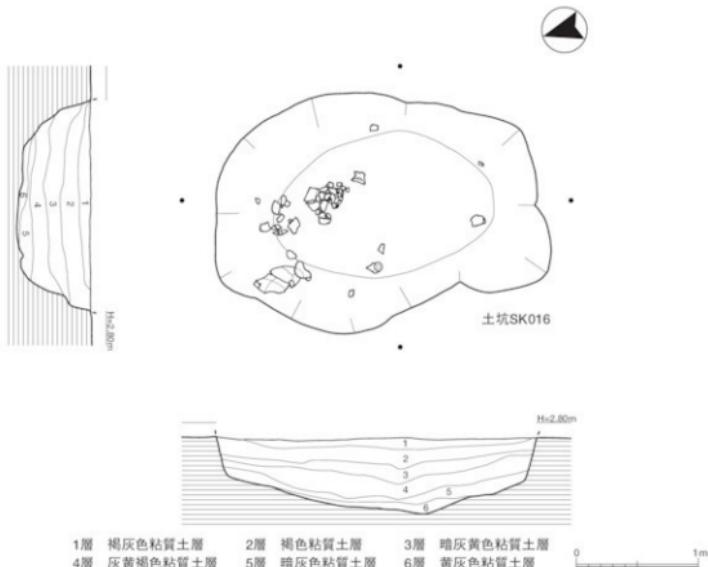


Fig.33 9区 土坑 SK016遺構実測図

るため同一遺構であることが確認できる。

#### 土坑 SK027【遺構 Fig. 34 PL. 24】

近世の溝に切られている方形を呈する土坑である。埋土は2層に分層され礫を含む。埋土は砂混じりの粘質土により構成される。遺構の平面形は一辺の長さが約1.2mの四角形でなしていたものと思われる。類似する遺構として土坑 SK020が挙げられる。

#### 土坑 SK038【遺構 Fig. 34】

平面形はほぼ円形を呈する土坑である。断面形はほぼ垂直に立ち上がり、北隅に更に一段の掘り込みを有する。土層は薄い粘土及び粘質土の堆積による土層が確認された。

#### 土坑 SK040【遺構 Fig. 35 PL. 26】

平面形が橢円形を呈する土坑である。埋土は3層に分層され、粘質土及び粘土による水平堆積を呈する。土層断面中の3層に相当する層が一段浅い掘りこみとなっている部分まで延びるため同一遺構として捉えている。

#### 土坑 SK042【遺構 Fig. 34 PL. 25】

古墳時代初頭の溝に切られている土坑。遺構自体は下端が僅かに残るのみであり、上部での遺構本来の平面形は確認できない。遺構は3つの不定形の土坑が重なっているとして捉えているが不明な点が残る。

#### 柱穴 SP016【遺構 Fig. 35】

平面形は土坑として見て取れるが、土坑内にて確認された柱穴状の円形掘り込みを調査段階で柱穴として判断したため、柱穴（SP）として報告する。

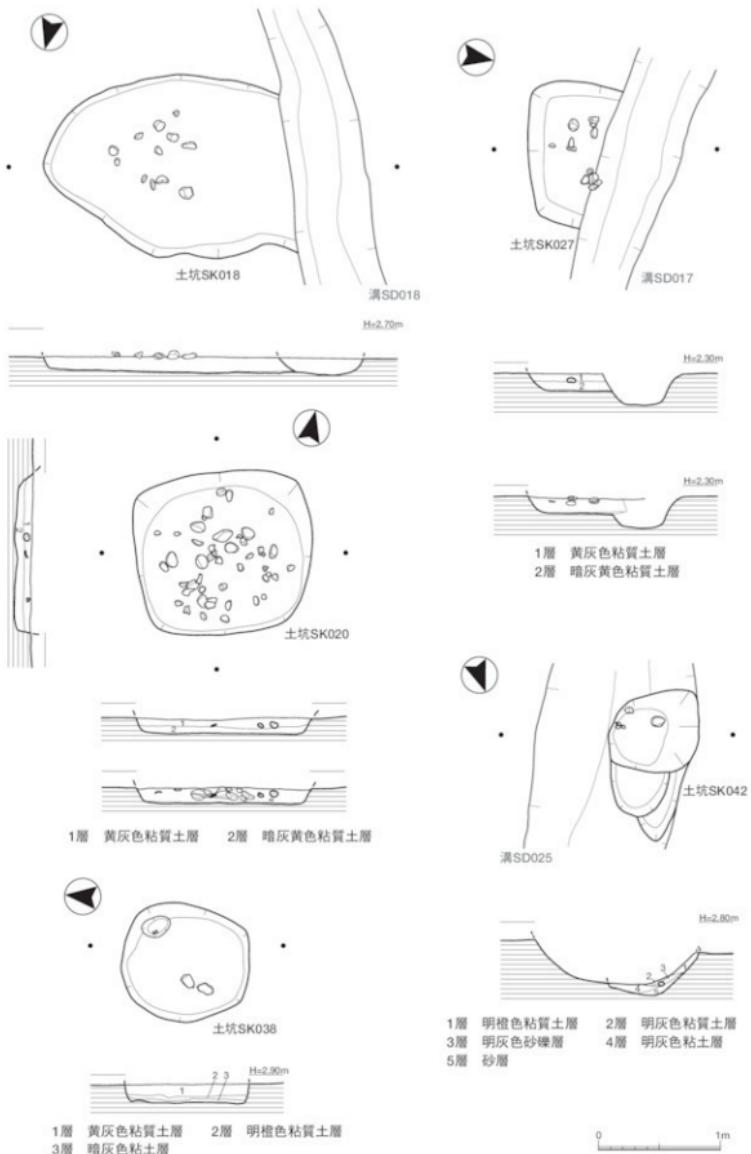
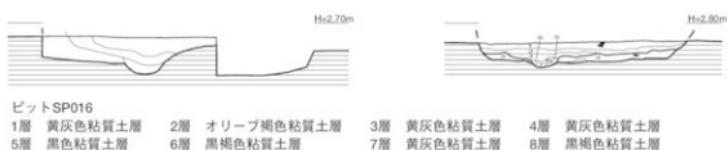
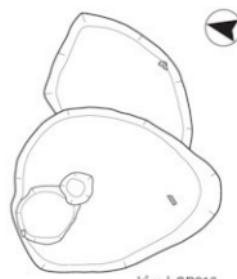
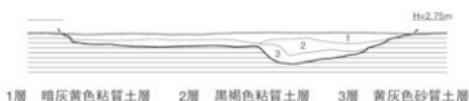
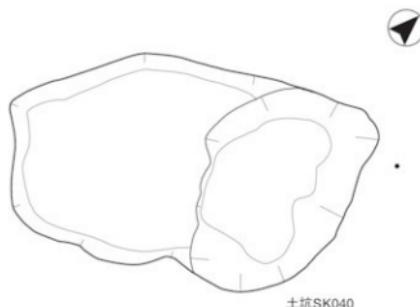


Fig.34 9区 土坑 SK018・020・027・038・042構造実測図



0 1m

Fig.35 9区 土坑 SK021・040、ピット SP016遺構実測図

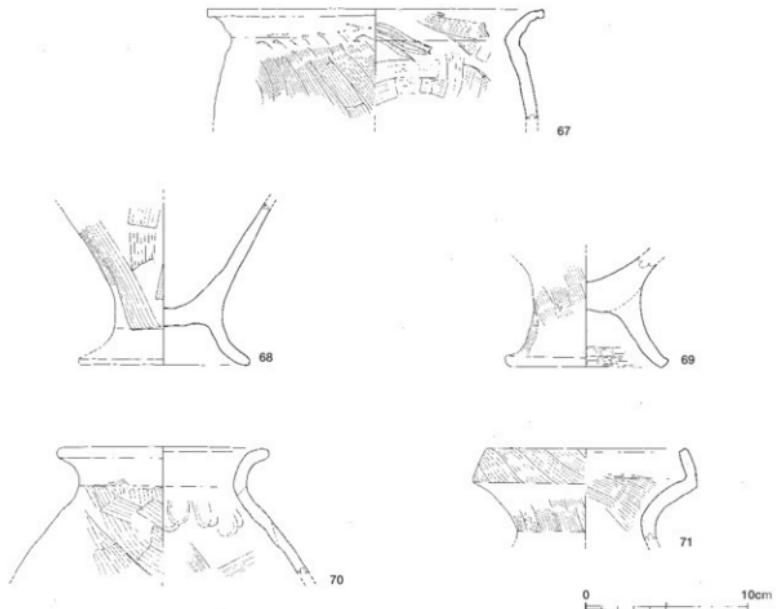


Fig.36 9区 住居 SI008出土遺物実測図

出土遺物 (Fig. 36~46 PL. 30~32)

竪穴式住居跡 SI008出土遺物 (67~71) 住居跡床面から出土した遺物である。いずれも、八代地域に多く見られる土器で胎土に長石を多く含みやや全体に厚い器壁を有する土器である。

67は甕の口縁部から最大胴部にかけての部位で、おそらく脚台部は短く立ち上がる脚台が付属するとと思われる。内器面は主に横位に刷毛目が見られ、外器面には縱方向に刷毛目が明瞭に残る。68の脚台はやや平底気味の底部に短く貼り付けられ、やや外反し端部に至っている。69も同じく脚台である。端部付近の外反はやや少ないが、68と同じ手法・技法により製作されている。端部は四角に整形される。台内面付近には横位による刷毛目が残る。70は壺の口縁から胴部上半に至る部位である。口縁端部付近は狭く窄まり立ち上がる胴部から、短く外反する形態を有している。口縁部と胴部の接合面（内器面）には接合時に生じた指ナデ痕が縱方向に明瞭に残る。71は複合口縁壺頸部片である。屈曲する部分に明確な棱が施されるため、袋状口縁とは區別して複合口縁壺として報告する。頸部は内湾しながら短く屈折し口縁端部は四角に整形される。内器面には横位による刷毛目が、外器面には縱位による刷毛目の調整が施される。土器の胎土は八代平野に見られる長石を多く含んだ赤褐色の地肌をしている。

竪穴式住居跡 SI009出土遺物 (72~79) 住居跡床面から出土した遺物である。ここでも、八代地域に多く見られる長石を多く含み、やや全体に厚い器壁を有する土器である。72は口縁部から脚台部まで残る台付甕で

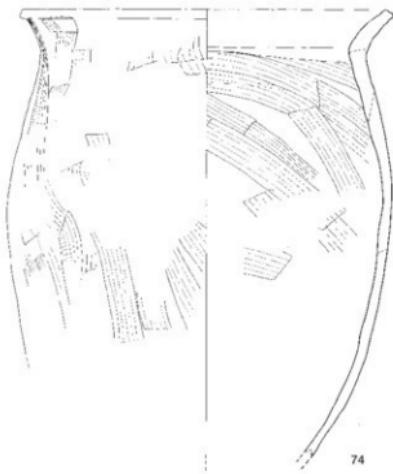
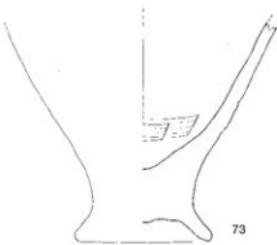
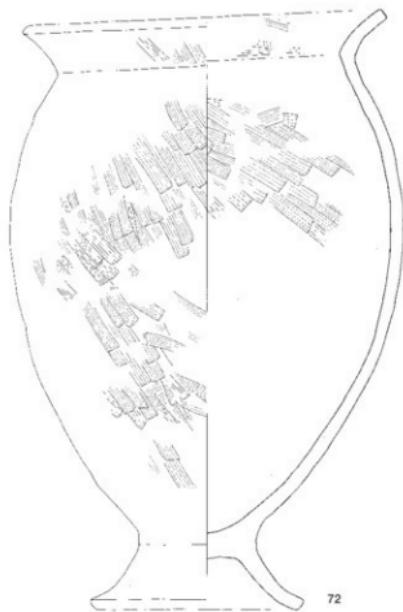


Fig.37 9区 住居 SI009出土遺物実測図—1—

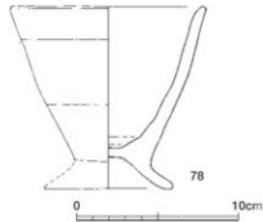
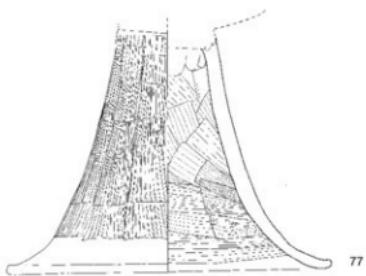
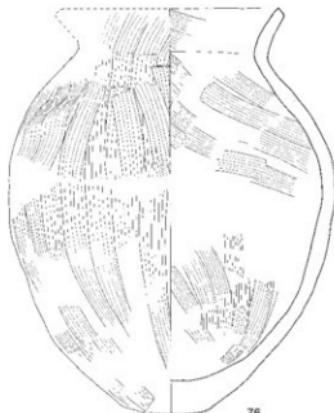
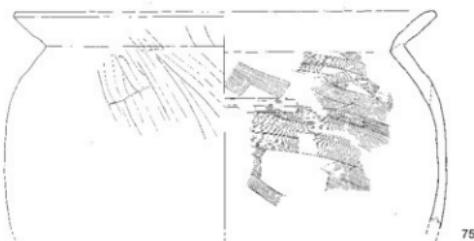


Fig.38 9区 住居 SI009出土遺物実測図—2—

ある。胸部はやや丸みを帯び、最大径が中位よりやや上部にある。口縁部は「く」字に整形され、端部は四角に仕上げられる。脚台部は長い台が貼り付けられ端部は口縁部と同じく、四角に整形される。端部付近で

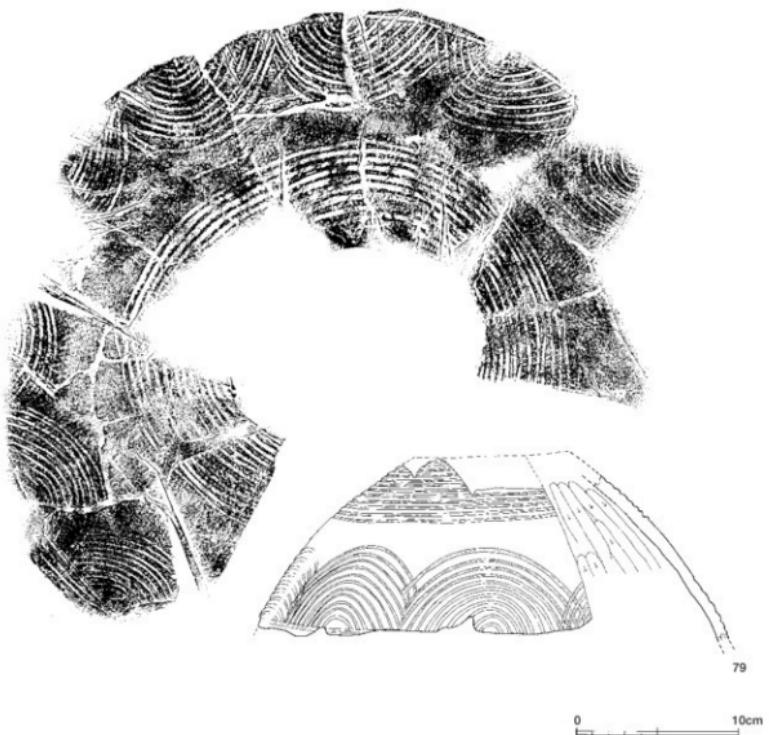


Fig.39 9区 住居 SI009出土遺物実測図—3—

反りがやや強くなる。内・外器面に明瞭に幅の狭い刷毛目が施される。73も72同様の器種で、台付甕の底部である。体部と脚台部との接合部は厚く短い脚台が付く。内器面にわずかに刷毛面が残る。外器面は器面が摩滅し調整は観察できない。74は甕の口縁から胴部にかけての部位である。72同様脚台が付属する甕であろう。胴部の張りはなく垂直に落ち底部に至る。口縁部の屈曲部で器壁は肥厚し、端部と胴部に行くに従いやや薄くなる。刷毛目による調整は内器面が斜め上方への引き上げから縦位へ、外器面は縦位方向へと観察される。75は口縁から胴部に至る。胴部は口縁直下で大きく外に膨らみ丸みを帯びる。口縁端部付近で器壁は肥厚している。胴部から頸部にかけて粘土継ぎ目が明瞭に観察できる。器形は胴部の張り具合から鉢、若しくは甕の可能性がある。76は完形で出土した甕である。脚台は付かず、丸みを帯びた平底をしている。他の土器より一段と器壁が厚ぼったい印象を受ける。底部は凸状底部であり、やや丸みを帯びている。内器面には縦位から横位への刷毛目、外器面には胴部最大径付近を境に上下2段に渡る縦位により刷毛目調整が明瞭に見られる。内・外器面ともに最大胴部付近での調整の違いが見られる事から、土器作成の段階を追える資料となりうる可能性がある。77は高杯の脚部である。杯部との接合面近くで剥離している。脚部は強く反り端部は丸く仕上げている。外器面上には上位から下位にかけて縦位六段からなる刷毛目が施され、内器面は杯

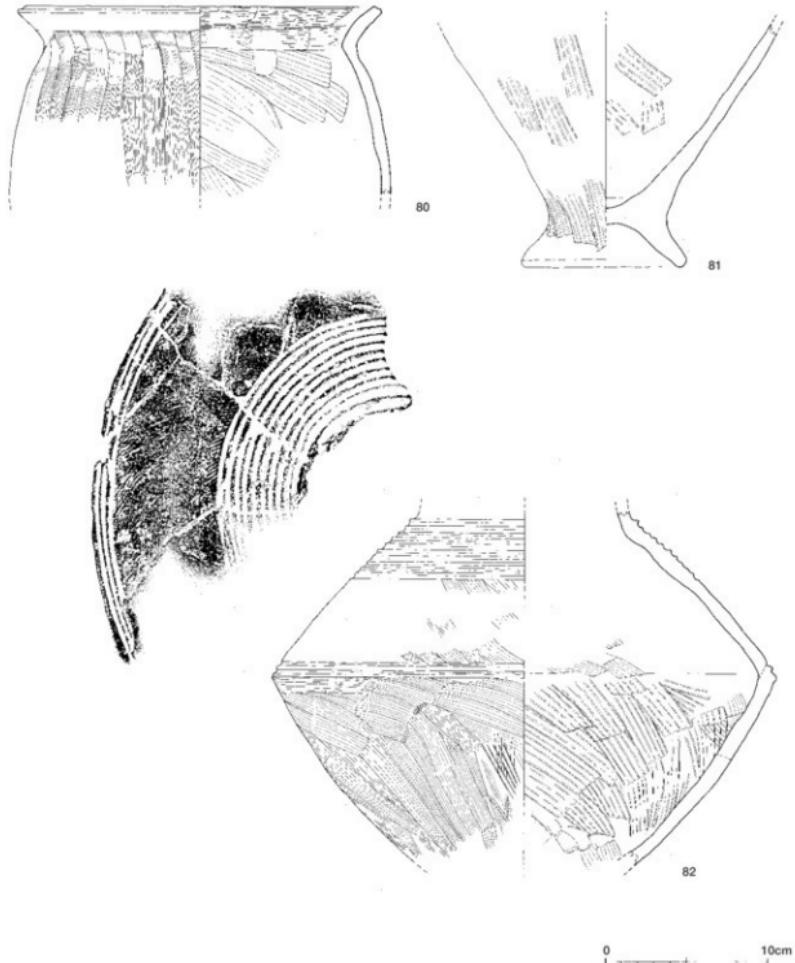


Fig.40 9区 住居SI010出土遺物実測図

部直下の狭い部位付近から刷毛目が斜め下方へ施され底部付近ではナデ重なるように横位へと向きを変える。端部近くはナデにより刷毛目が擦り消されている。78は小型台付のコップ型土器である。短い台を有し胴部は垂直に立ち上がる。全体に粗製である。79は重弧文長頸壺胴部の上半部である。外器面上部には横位に11条からなる弦線が巡らされ、半円をなし11条からなる重弧文が9箇所（推定）に残存している。内器面は下部との接合面付近で横ナデが見られ、上部に行くに従い上方向への指ナデが見られる。

竪穴式住居跡 SI010出土遺物 (80~82) 80は甕の口縁から胴部にかけての部位である。比較的長胴をなす器

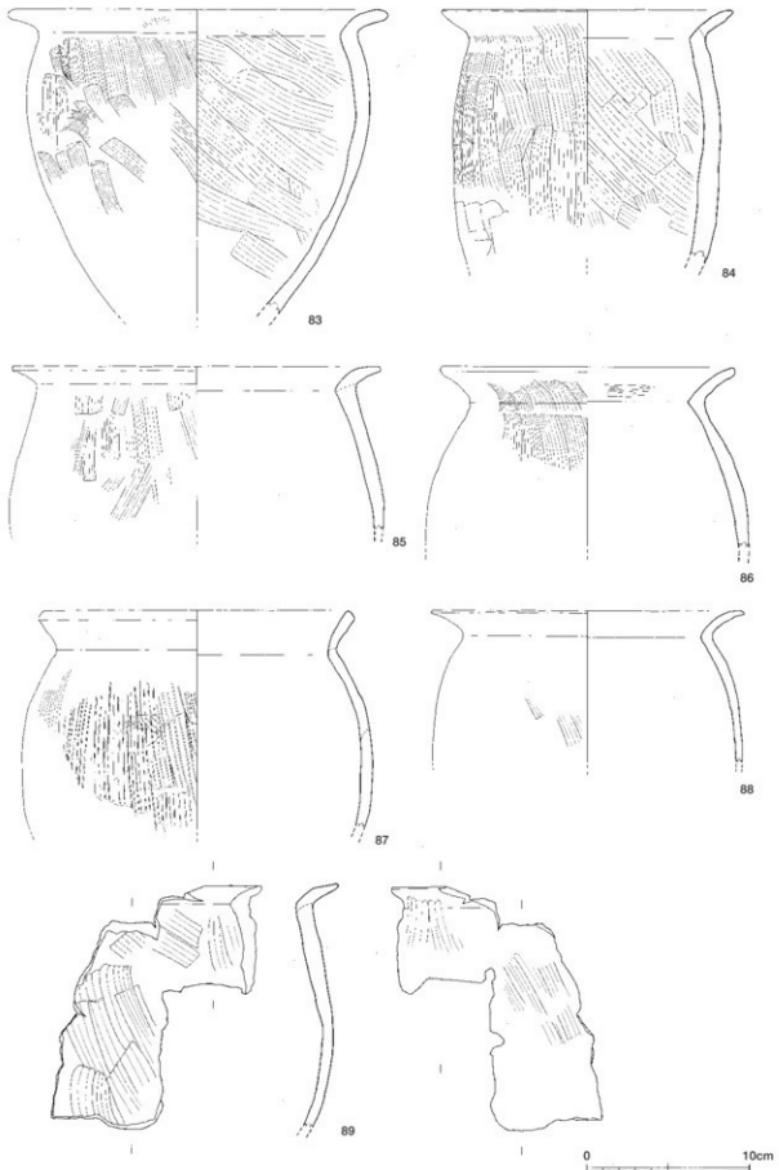


Fig.41 9区 住居SI011出土遺物実測図—1—

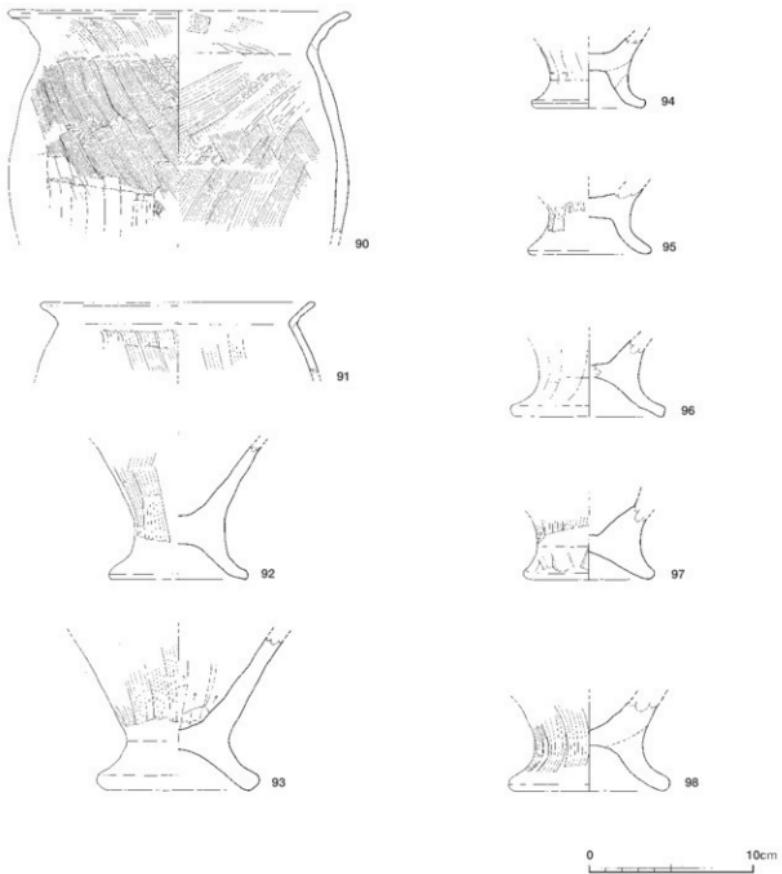
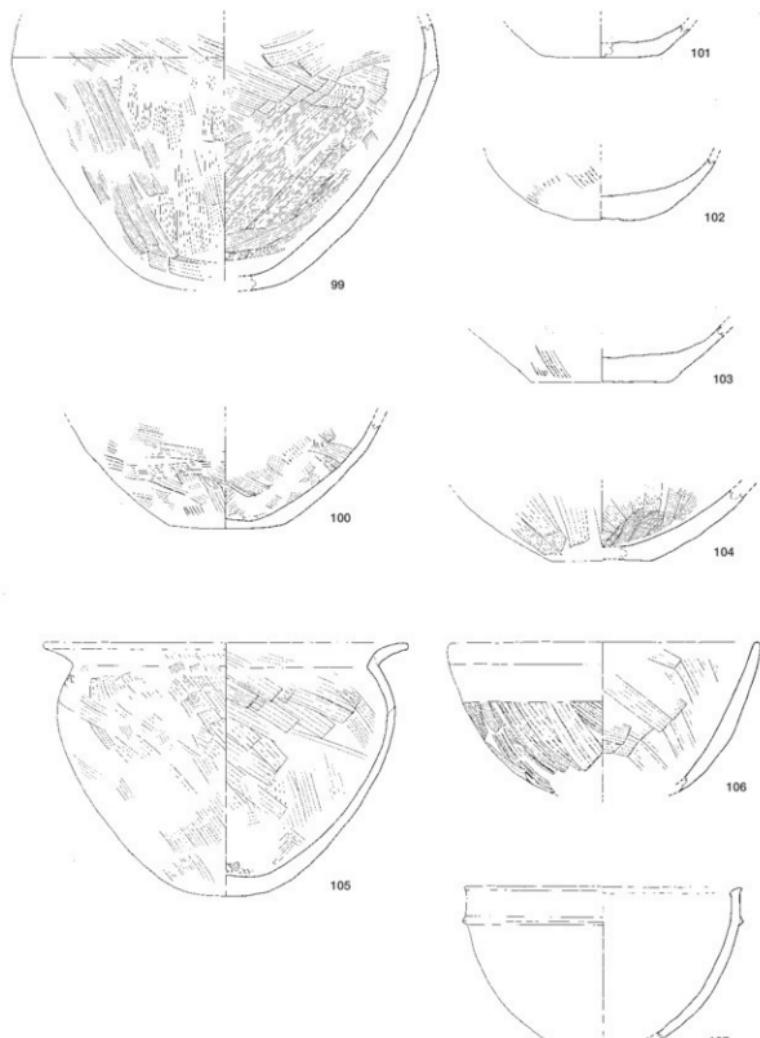


Fig.42 9区 住居 SI011出土遺物実測図—2—

形を呈し垂直に下方に伸びる。口縁部は屈曲部から端部にかけてやや肥厚し緩く外反する。内器面には口縁部から胴部にかけて上方から下方に、連続して刷毛目が施され、内器面には斜め上方に刷毛目による調整が残る。81は台付甕の脚台部である。直線的に伸びる胴部は丸みを帯びないため上部においても口縁より垂直に落ちる胴部と思われ、80の脚台部であることが考えられる。脚台は短くやや厚い。82は長頸壺胴部である。頸部直下に施される横位凹線が施され屈曲する最大部に2条の沈線が施される。胴部下部には内・外器面とともに幅1cm程度の幅の狭い刷毛目によるナデ、削りが施される。器形は重弧文長頸壺であるが、この土器では重弧文は施さず、その空間はわずかに刷毛目による調整が残るのみである。

竪穴式住居跡 SI011出土遺物 (83~112) 83~91までは甕の口縁から胴部にかけての部位である。83は丸み



0 10cm

Fig.43 9区 住居 SI011出土遺物実測図—3—

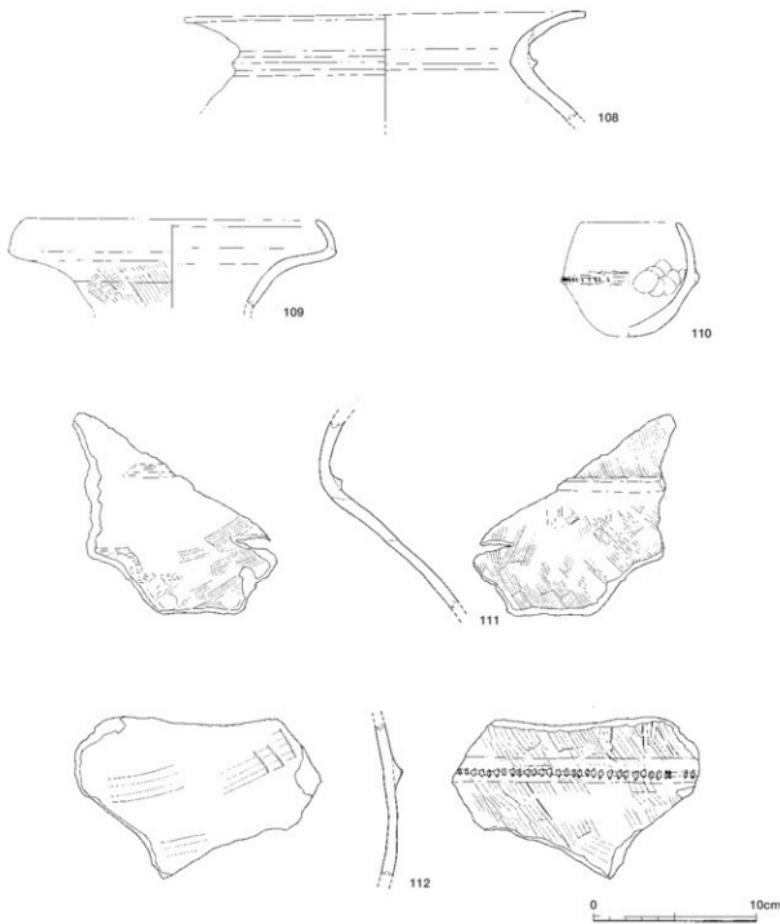


Fig.44 9区 住居 SI011出土遺物実測図—4—

を帯びる胴部を有し、脚台部にかけて急速にすぼまる器形を呈する。口縁部は頸部において強く外反し、肥厚した端部にいたる。内・外器面とも刷毛目による調整が施されている。84は胴部には丸みを帯びず、垂直に下方に伸びる長胴型の甕である。器壁は厚い。85は胴部にやや丸みを帯び最大径が中位に位置し、全体にやや厚ぼったさを感じる。口縁部は中心付近でやや肥厚し、短く外反する。口縁端部は尖り気味に仕上げている。86は85と違い、胴部にやや丸みを帯びる。口縁屈曲部は他と違い薄くシャープな稜を有し端部にかけて緩く外反する。87は外反せず、外に開き気味に直立する口縁部が特徴的である。胴部も、やや丸みを帯び、底部にかけて緩く弧を描く。粘土継ぎ目が明瞭に観察できる。88は強く外反する口縁を有し、端部にかけて

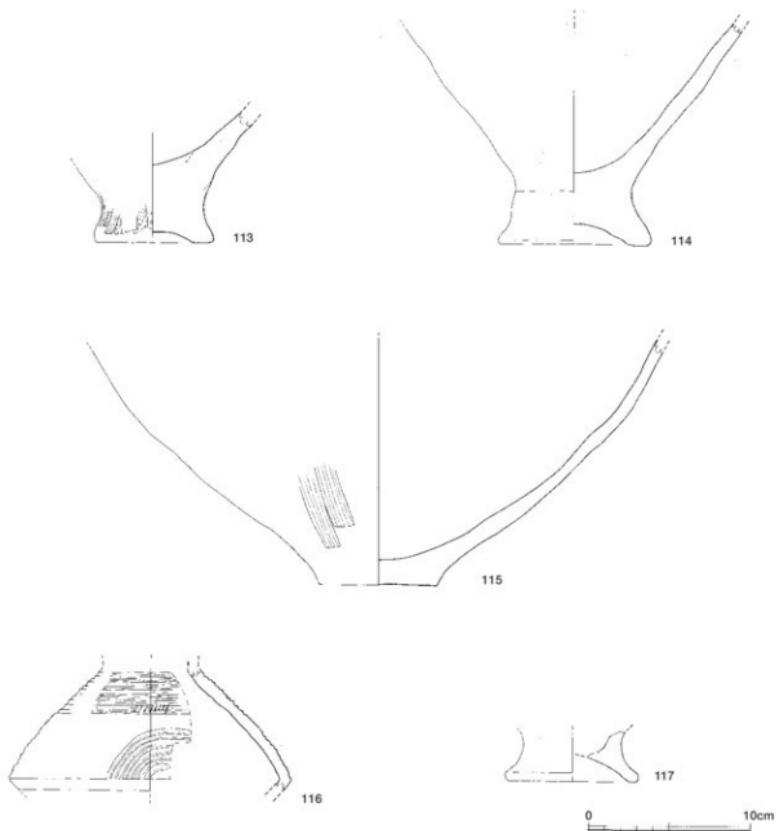


Fig.45 9区 土坑SK016・017出土遺物実測図

薄く先端ではやや尖り気味である。胴部は頸部付近から垂直に下がる。89は短い口縁が強く外反する。胴部はやや丸みを帯びながら底部へ向かう。内・外器面ともに明瞭に刷毛目が残る。おそらく85の土器に類似する塵である。90は胴部の最大径を中位に有し、薄く仕上げられた塵である。内・外器面とも刷毛目によるナデ・削りが丁寧に施され、作りの良さが感じられる。91は直線的に外反する短い口縁部が特徴的な塵である。胴部にはやや丸みがあり、胴部上部に最大径がくると思われる。92~98は83~91までの脚台部に付属するであろう部位である。いずれも、脚台は、①底部がやや厚くなり短い台が接合され、端部付近で屈曲しながら外反している(92・96)、②底部は薄く塵底部に脚台を付け、脚台はほぼ直線的に延びる(93)、③底部は薄く、塵底部に脚台を付けたものであるが、台は短く強く端部にかけて外反するもの(94・95・98)、④塵底部から台にかけての断面形が△をなす位に短く厚い脚台を有するもの(97)とに分類される。99~104は塵

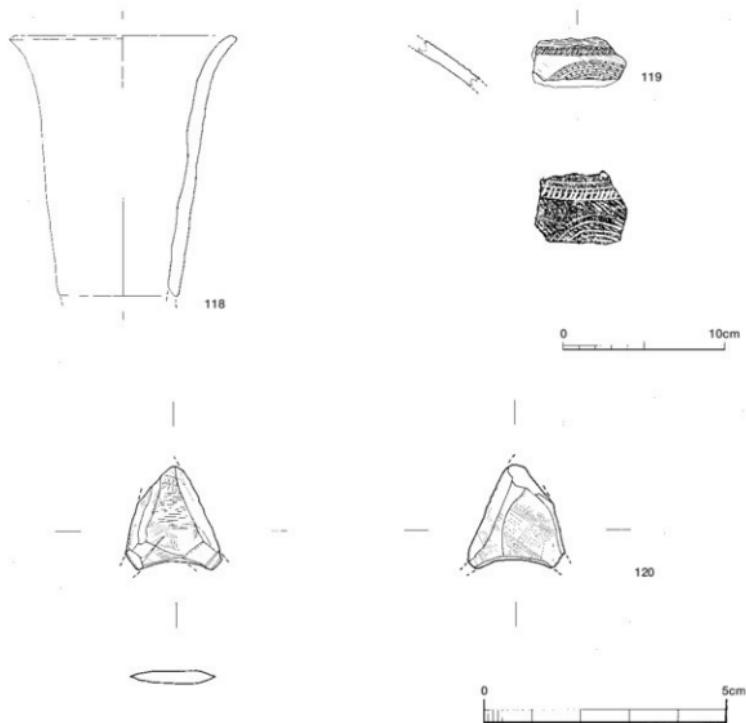


Fig.46 9区 出土遺物実測図

ないし壺の底部である。底部の形態により分類され①丸底を帯びながらも平底を意識しているもの（99・100・101・102）、②屈曲部に棱を持ち明確に平底を呈するものに分類される。なかでも、100の底部は凸レンズ状平底である。器壁の調整は内・外器面共に刷毛目による調整が施されている。105～107は鉢である。105は強く外反する口縁を有し最大胴部を上方にもつ。内・外器面ともに刷毛目による調整がある。106、107は口縁から胴部にかけての部位である。底部は丸底をなすと思われる。106は外器面の口縁下において横ナデによる調整が施され、刷毛目が擦り消されている。また107は口縁端部で、やや厚みを帯び端部で内と外にわずかに尖る。口縁直下の外器面には1条の突帯が巡る。108は広口壺の口縁部である。頸部に1条の突帯を有し口縁端部にかけて薄くなり最終的には、強く外反している。109は複合口縁壺の口縁である。わずかに袋状口縁の形態を残しているが、屈曲部において明確な棱が認められるため、複合口縁として報告する。外器面には頸部に刷毛目がわずかに残る。内器面は丁寧なナデ調整が施される。110は手づくね土器でコップ状土器である。胴部に1条の突帯を有し、頂部に細かい刻み目を施す。突帯貼付け面は内器面には指

Tab. 3 西片田遺跡9区出土土器観察表

掲載番号	遺構種別	出土地点	器種	残存部位	残存高	最大胴径	口径	底径	備考	Fig.	PL
67	竪穴式住居	SI008	壺	口縁・胴部	6.8	—	(20.8)	—			
68	φ	φ	壺	胴部・脚台部	10.0	—	—	10.6			
69	φ	φ	壺	脚台部	6.8	—	—	10.1		36	31
70	φ	φ	壺	口縁・胴部	7.7	—	13.2	—			
71	φ	φ	複合口縁壺	口縁	5.6	—	12.2	—			
72	φ	SI009	壺	完形	37.0	24.2	22.4	(13.1)			
73	φ	φ	壺	胴部・脚台部	13.6	—	—	8.4		37	32
74	φ	φ	壺	口縁・胴部	27.5	23.7	23.0	—			
75	φ	φ	壺	口縁・胴部	13.4	—	(26.0)	—			
76	φ	φ	壺	ほぼ完形	24.8	—	(14.2)	4.0		38	
77	φ	φ	高杯	脚部	15.2	—	—	20.0			32
78	φ	φ	鉢	完形	11.2	—	12.0	8.0			
79	φ	φ	長頸壺	肩部	11.2	—	—	—		39	
80	φ	SI010	壺	口縁・胴部	11.7	—	22.0	—			
81	φ	φ	壺	胴部・脚台部	15.0	—	—	10.1		40	30
82	φ	φ	長頸壺	胴部	21.8	(31.0)	—	—			
83	φ	SI011	壺	口縁・肩部	18.7	(21.0)	(23.4)	—			
84	φ	φ	壺	口縁・胴部	15.5	—	(17.8)	—			
85	φ	φ	壺	口縁・胴部	10.1	—	(22.6)	—			
86	φ	φ	壺	口縁・胴部	6.7	—	(18.1)	—		41	
87	φ	φ	壺	口縁・胴部	13.4	—	(19.4)	—			
88	φ	φ	壺	口縁・胴部	9.3	—	(19.2)	—			
89	φ	φ	壺	口縁・胴部	15.0	—	—	—			
90	φ	φ	壺	口縁・胴部	13.7	(20.7)	(20.8)	—			
91	φ	φ	壺	口縁・胴部	4.3	—	(16.8)	—			
92	φ	φ	壺	胴部・脚台部	8.3	—	—	8.6			
93	φ	φ	壺	胴部・脚台部	9.4	—	—	10.0			
94	φ	φ	壺	脚台部	4.2	—	—	6.9		42	
95	φ	φ	壺	脚台部	4.0	—	—	(7.6)			
96	φ	φ	壺	脚台部	4.7	—	—	(9.4)			
97	φ	φ	壺	脚台部	5.0	—	—	(8.0)			
98	φ	φ	壺	脚台部	5.3	—	—	(9.8)			
99	φ	φ	壺	胴部	16.4	26.0	—	—		31	
100	φ	φ	壺	底部	6.7	—	—	(6.7)			
101	φ	φ	壺	底部	1.9	—	—	7.2			
102	φ	φ	壺	底部	3.8	—	—	3.9			
103	φ	φ	壺	底部	3.5	—	—	(8.4)		43	
104	φ	φ	壺	底部	4.3	—	—	(6.2)			
105	φ	φ	鉢	完形	15.6	20.6	(22.2)	(2.0)		31	
106	φ	φ	鉢	口縁・胴部	9.2	—	19.0	—			
107	φ	φ	鉢	口縁・胴部	9.4	—	(16.9)	—			
108	φ	φ	壺	口縁・胴部	6.8	—	—	24.4			
109	φ	φ	複合口縁壺	口縁	5.5	—	(18.0)	—			
110	φ	φ	壺	完形	7.1	—	(6.0)	—		44	31
111	φ	φ	壺	頸部・胴部	11.7	—	—	—			
112	φ	φ	壺	胴部	9.4	—	—	—			
113	土坑	SK016	壺	脚台部	8.1	—	—	7.8			
114	φ	φ	壺	胴部・脚台部	13.7	—	—	9.5			
115	φ	φ	壺	胴部・底部	15.2	—	—	(7.3)		45	
116	φ	SK017	長頸壺	肩部	7.5	17.4	—	—			
117	φ	φ	壺	脚台部	3.1	—	—	(8.2)			
118	グリッド内出土	j-15	長頸壺	口縁	16.0	—	14.0	—		46	
119	土坑	SK015	長頸壺	肩部	2.9	—	—	—			

調整による押圧痕から幾重にも重なり残る。111は壺頸部から胴部にかけての部位である。頸部と胴部の粘土接合部に断面三角を成す突堤を巡らせる。外器面には幅の狭い刷毛目が緩方向にあり、内器面には刷毛目による調整が横位に施される。また、胴部の張りに当たる部分には指圧痕が一部に残る。112は壺胴部で

ある。胴部最大径部に突堤の粘土紐が貼り付けられ、細かいが、深い刻目を施す。外器面には縱方向に刷毛目が施され、内器面には横位に刷毛目が残る。

**土坑 SK016出土遺物** (113~115) 113、114は台付壺の脚台部である。壺本体に厚い粘土を貼付け、削りにより整形した脚台であり内底部はやや上げ底である。115は胴部が球体をなす壺の底部である。底部は平底を呈する。

**土坑 SK017出土遺物** (116・117) 116は小型の重弧文長頸壺胴部上半である。頸部直下に横位に凹線が巡る。条数は磨耗が激しいため確認できない。屈曲する部分に重弧文が施されるが、重弧文の溝が浅く薄い部分と、重弧文が施されていない部分とがあり、摩滅で施文が見えないのでなく、本来、施文していない部分があったようである。117は台付壺の脚台部である。短く外反する脚台部を呈する。端部は丸く整形されている。118はJ-15Gridから出土した長頸壺頸部である。やや外反しながら伸び口縁端部付近で強く聞く。

**土坑 SK015出土遺物** 119は重弧文長頸壺頸部である。そろばん型胴部との接合点で外れしており、接合がうまくかみ合っていない部分であろう。頸部直下に残る横位沈線と重弧文の一部がわずかに残る。横位沈線部には縱方向に小さく刻み目が入る。

**9区出土遺物** 120は遺構検出段階で表土中に含まれている状態で、出土していた磨製石鎌である。先端と基部が欠損している。石材は頁岩であり両面とも薄く擦られ、両端には刃部が施される。

### 3) 10区の概要

10区は新幹線本線部南側（5区）に隣接している。調査面積は960.6m<sup>2</sup>である。

本調査区では用水路からの浸水が少ないと判断されたためシートパイルによる設置工事は行っていない。表土剥ぎ後の遺構の検出では、調査区の中央部に圃場整備前の蛇行する小河川が検出されている。本流路は圃場整備前の地籍図とも符合したため、調査の対象とはしていない。検出された遺構は土師器を出土する古墳時代初頭の竪穴式住居と弥生時代後期の土坑、住居跡である。調査を実施した面は1層である。  
（村中）

#### 10区の遺構

竪穴式住居跡 SI012【遺構 Fig. 48 PL. 33、34、35・遺物 Fig. 54】

遺構	時 期	弥生時代後期	出土遺物	土 器	壺胴部
	切り合い関係	近世流路		石 器	無
	規模・深度	3.9m × 4.42m × 0.144m		鉄 器	無
	面 横	17.23m <sup>2</sup>		玉 類	無
	主軸方向	N-24°-W		その他	無
	炉	有 中央部			
	土 坑	無			
	柱 穴	有			

備考：溝 SD034により遺構の中央部を切られている。

竪穴式住居跡 SI013【遺構 Fig. 49 PL. 36、37・遺物 Fig. 54～57 PL. 43、44】

遺構	時 期	弥生時代後期	出土遺物	土 器	台付壺、壺、重弧文長頸壺 鉢、高杯
	切り合い関係	溝 SD027に切られる		石 器	無
	規模・深度	5.04m × 4.24m × 0.145m		鉄 器	無
	面 横	21.36m <sup>2</sup>		玉 類	無
	主軸方向	N-24°-W		その他	無
	炉	有 0.9m × 0.8m × 0.118m			
	土 坑	貯蔵穴有			
	柱 穴	有 2本			

備考：溝 SD027（古墳時代）により切られている。平面形は隅丸方形を呈する。

竪穴式住居跡 SI014【遺構 Fig. 50 PL. 38、39・遺物 Fig. 58 PL. 45】

遺構	時期	弥生時代後期	出土遺物	土器	小型丸底壺6、高杯6
	切り合い関係	無		石器	無
	規模・深度	3.06m × 3.72m × 0.02m		鉄器	無
	面積	6.78m <sup>2</sup> （約半分）		玉類	無
	主軸方向	N-30°-W		その他	Pit 5 か様位に置かれた状態で小型丸底壺が出土している。
	炉	有 0.78m × 0.4m × 0.039m			
	土坑	未検出			
	柱穴	2本			

備考：残りの良い住居跡跡下にて東西に長さ2m深さ平均7.1cmと南北に1.5m深さ平均8.5cmで周溝が巡る。羽目板を巡らせ周壁としていた遺構と思われる。

竪穴式住居跡 SI015【遺構 Fig. 51 PL. 39、40、41・遺物 Fig. 59～72、75、76 PL. 46～49】

遺構	時期	古墳時代初頭	出土遺物	土器	甕6、壺25、小型丸底壺22、高杯34、底部穿孔鉢2、鉢9、ミニチュア土器5
	切り合い関係	無		石器	磨石・砥石・石斧
	規模・深度	5.24m × 4.4m × 0.187m		鉄器	無
	面積	23.05m <sup>2</sup>		玉類	有
	主軸方向	N-90°-W		その他	無
	炉	有 0.76m × 0.76m × 0.128m			
	土坑	有			
	柱穴	有 4本			

備考：検出時点から多量の遺物があったため、掘下げながら図面を作成し取り上げる。その結果、下層に行くに従い遺物が住居全体に広がり、上層では中央部の狭い範囲に見られた。遺構の埋没過程で廃棄された遺物である可能性が高い。  
住居跡の平面形は隅丸方形を呈する。住居内遺構は炉を中心に四本柱により構成され、土坑（貯蔵穴）も検出している。硬化面は炉を含み西側へと広がっている。西側壁には羽目板を差し込んでいた跡と思われる溝も検出している。

土坑 SK045【遺構 Fig. 52・遺物 Fig. 73 PL. 45】

検出できた遺構は溝SD001（近世溝）に切られており、遺構の全容は把握できていない。残っている範囲が精円を呈するため、土坑と捉えている。検出した遺構は上部を削平されており、出土している遺物はすべて底面直上である。

土坑 SK052【遺構 Fig. 53 PL. 36】

竪穴式住居跡 SI013を切るように検出された土坑である。遺構は南側で一段ステップを有し底部に向かい狭まる。土層断面は水平堆積が観察され、廃棄後に自然堆積していたことが窺える。埋土は当該地域を構成している粘質土及び粘土で一部に砂を含む。



Fig.47 10区 遺構配置図

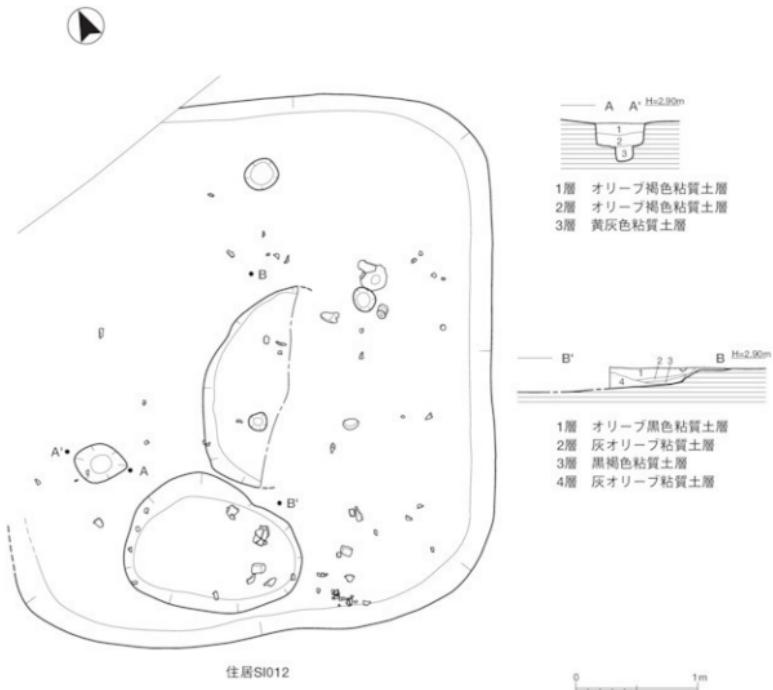


Fig.48 10区 住居 SI012遺構実測図

出土遺物 (Fig. 54~76 PL. 43~49)

竪穴式住居跡 SI012出土遺物 (121) 住居内床面より出土している胴部から底部にかけての部位である。底部は平底を意識しつつも丸みを帯びる。内・外器面ともに刷毛目によるナデ・削りによる調整が施される。竪穴式住居跡 SI013出土遺物 (122~141) 122口縁から胴部にかけての部位である。胴部はやや丸みを帯びるが下方に行くに従い急速に狭まる。123中型の台付甕の口縁から胴部片である。口縁部は薄く外反し、端部は四角く整形される。調整は内外器面とも縦・斜めに刷毛目が施される。124小型の台付甕。口縁端部の内・外器面は指ナデによる調整が施され、内器面は条痕が縦方向に幾筋も入る。胴部はやや丸みを帯びるがやや歪である。底部は厚く、作り付けられた脚台は短いが、シャープで直線的に伸びる。外器面で脚台部と胴部との境界は指ナデによる調整が施される。125台付甕。小型であるが、端正な器形を呈する。外器面に刷毛目が薄く残る。126口縁から胴部にかけての部位である。底部はおそらく平底と思われる。胴部は中位に屈曲部を有する。内外器面とも刷毛目による調整が薄く残る。127口縁がやや外に広がるが、垂直に立ち

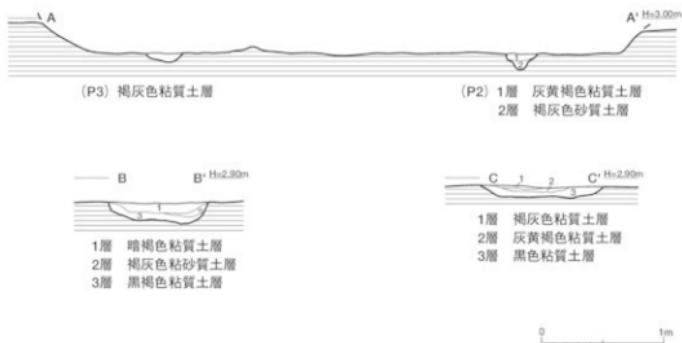
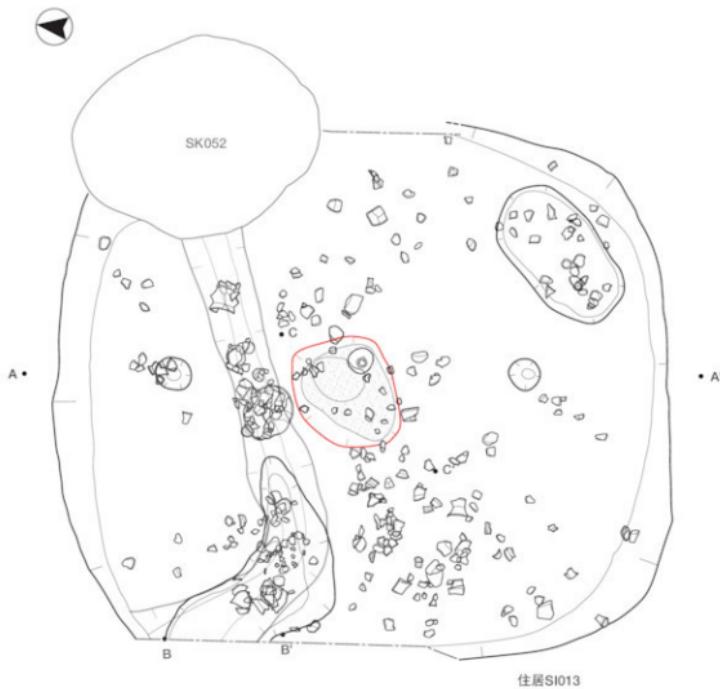
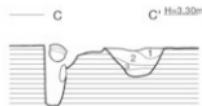
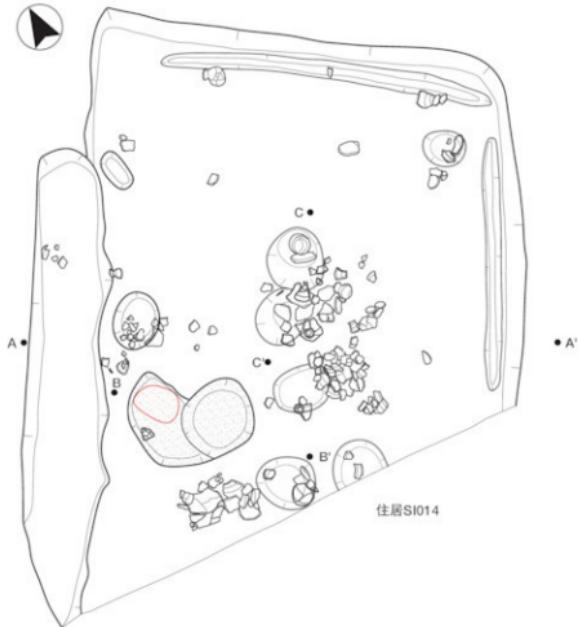
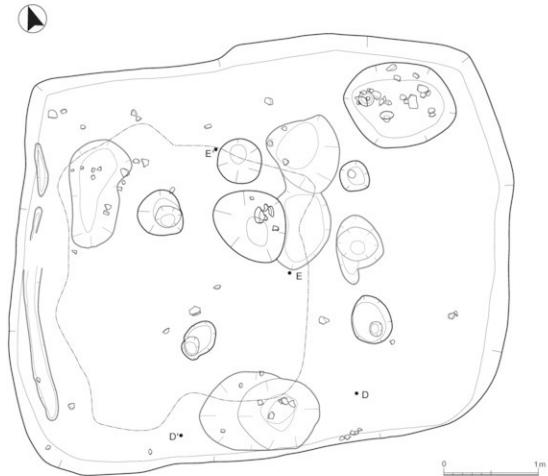
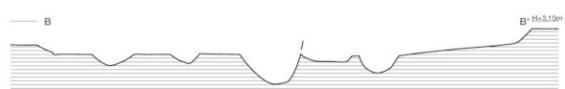
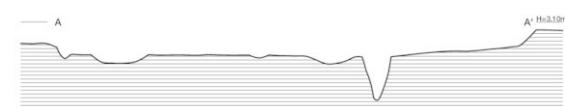


Fig.49 10区 住居 SI013遺構実測図



0 1m

Fig.50 10区 住居 SI014遺構実測図



0 1m

Fig.51 10区 住居 SI015造構実測図

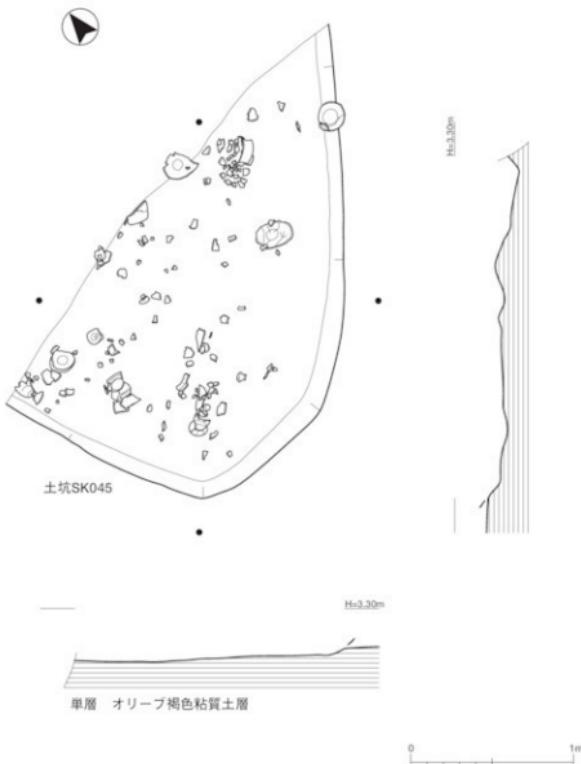
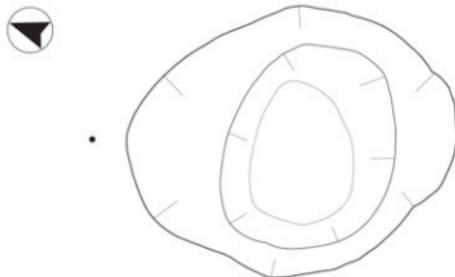


Fig.52 10区 土坑 SK045遺構実測図

上がる壺である。胴部は肩部に最大径を有し、やや丸みを帯びる。128口縁から胴部にかけての部位である。口縁は胴部から急に外反し端部は薄く尖る。胴部は球体をなし、内外器面とともに刷毛目が僅かに残る。129袋状口縁壺の口縁部である。緩やかに下に伸びる頸部は口縁下で強く外反し「く」の字に内傾する。端部は丸みを帯びる。130壺もしくは甕の底部である。直線的に外に広がる胴部は大型化する様子を窺わせる。底部は平底である。131口縁から底部まで残るほぼ完形の壺で、128同様に球体をなす器形である。底部は丸底でやや厚い。128も同様の底部であると思われる。132小型丸底壺。底部はやや尖り気味で胴部は丸みを帯びる。器形はやや不整形である。口縁は残らない。133外器面に重弧文を有する壺形土器頸部片である。口縁端部には3条からなる沈線が巡らされ、中位に2箇所に薄く重弧文が見られる。さらにその下には2条からなる沈線が巡らされる。口縁端部は直立したまま整形され四角をなしている。134胴部から底部にかけての部位である。底部近くに2条からなる沈線が巡らされる。下方でやや内側に対して器壁が厚くなり始め平底をなしていると思われる。おそらく、ジョッキ型土器の底部近くの破片であろう。135短い頸部から上方に



土坑SK052

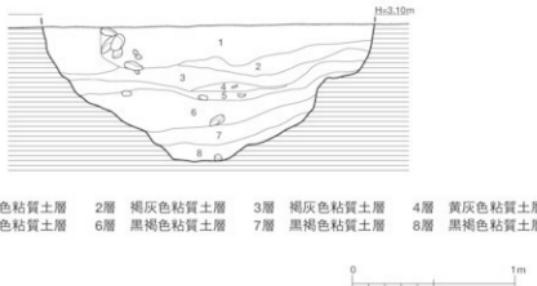
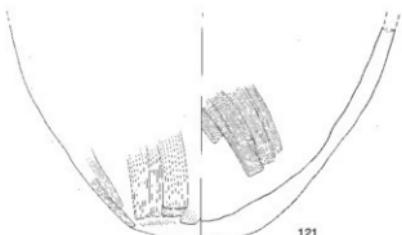


Fig.53 10区 土坑 SK052構造実測図

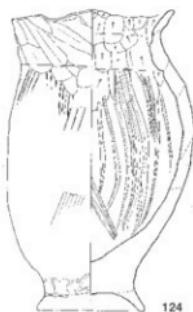
かけて強く外反する口縁が特徴である壺形土器。口縁端部近くで更に広く平坦になり端部へ至る。胴部外器面には頸部下に沈線が巡らされ、1箇所に重弧文が逆位に残る。136～139までは、外器面頸部下と屈曲部に沈線を有し、その間に重弧文を描く長頸壺頸部片である。沈線内には縦に小刻みな沈線が施される。140口縁部が直立し、端部で外反している高杯の杯部である。器壁はやや厚く、胎土は精製された粘土が使われている。他に見られる土器と違い、やや灰白色である。脚部はほぼ垂直に下方に伸びる。141脚部に2段からなる円形の透かしが施される高杯脚である。杯部及び脚端部は欠損して残らない。器壁は外器面に刷毛目の一一部が残り、内器面にはヘラ削りによる粗い痕跡が残る。

溝SD027出土遺物（142）142はほぼ完形を呈する中型の壺である。胴部は球体をなす。口縁は「く」字状に外反しながらやや内湾する。内外器面ともに刷毛目による調整が施される。

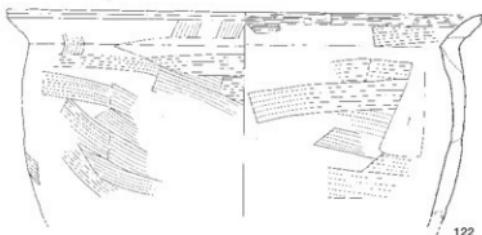
竪穴式住居跡 SI014出土遺物（143～154）143胴部が大きく膨らみ、最大径を下部に有する壺である。口縁は直立しながら、やや外に広がる。144～148小型丸底壺である。口縁は直線的に外へ伸びるタイプ（144・146・148）、口縁が広がりながら内湾するタイプ（145・147）がある。また、145・146は胴部から口縁が狭まらず開く形態である。147は唯一、底部が平底を呈する。149～154は高杯の各部位である。149は杯部で、残りは脚部である。杯部は底部に、やや厚めを呈し、口縁は直線的に外へ伸び、端部で緩やかに外反する。150・151は底部から中央へ寄り、一度「く」字状に屈曲し、立ち上がるタイプで152・153・154は緩やかに杯部へ伸びるタイプとに分けられる。いずれも内器面は縦方向の粗いヘラ削痕が見られる。



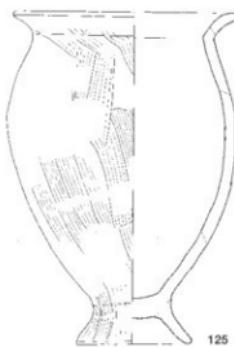
121



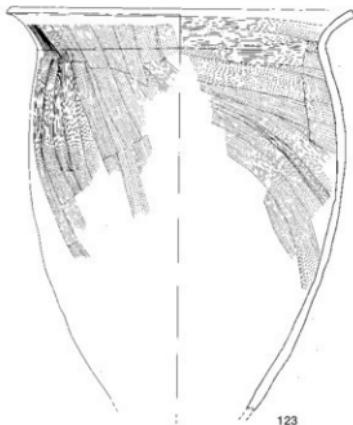
124



122



125



123



126

0 10cm

Fig.54 10区 住居 SI012、SI013出土遺物実測図—1—

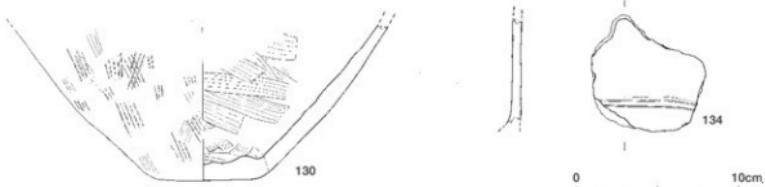
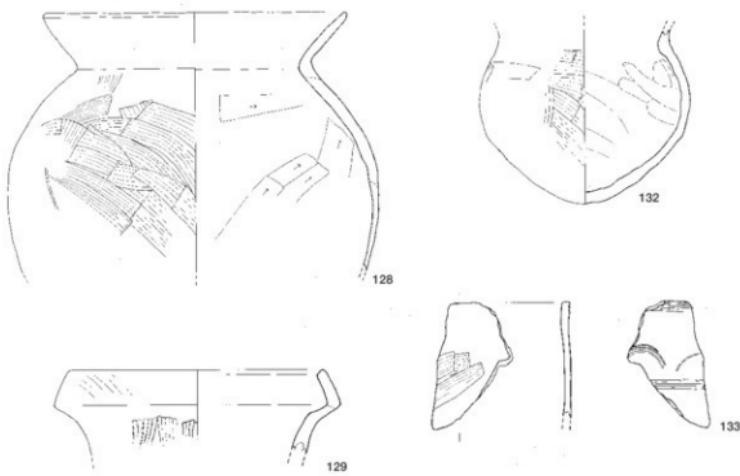
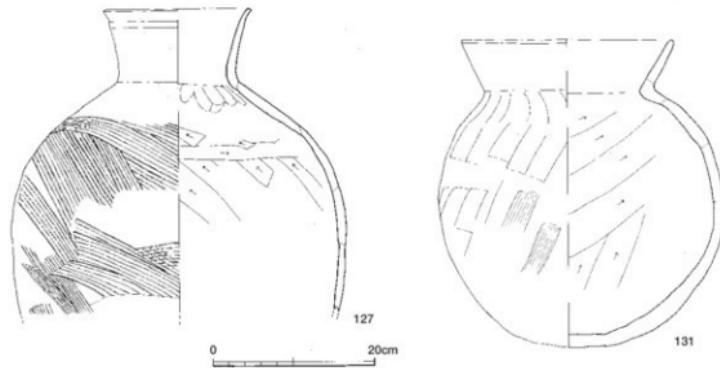


Fig.55 10区 住居 SI013出土遺物実測図－2－

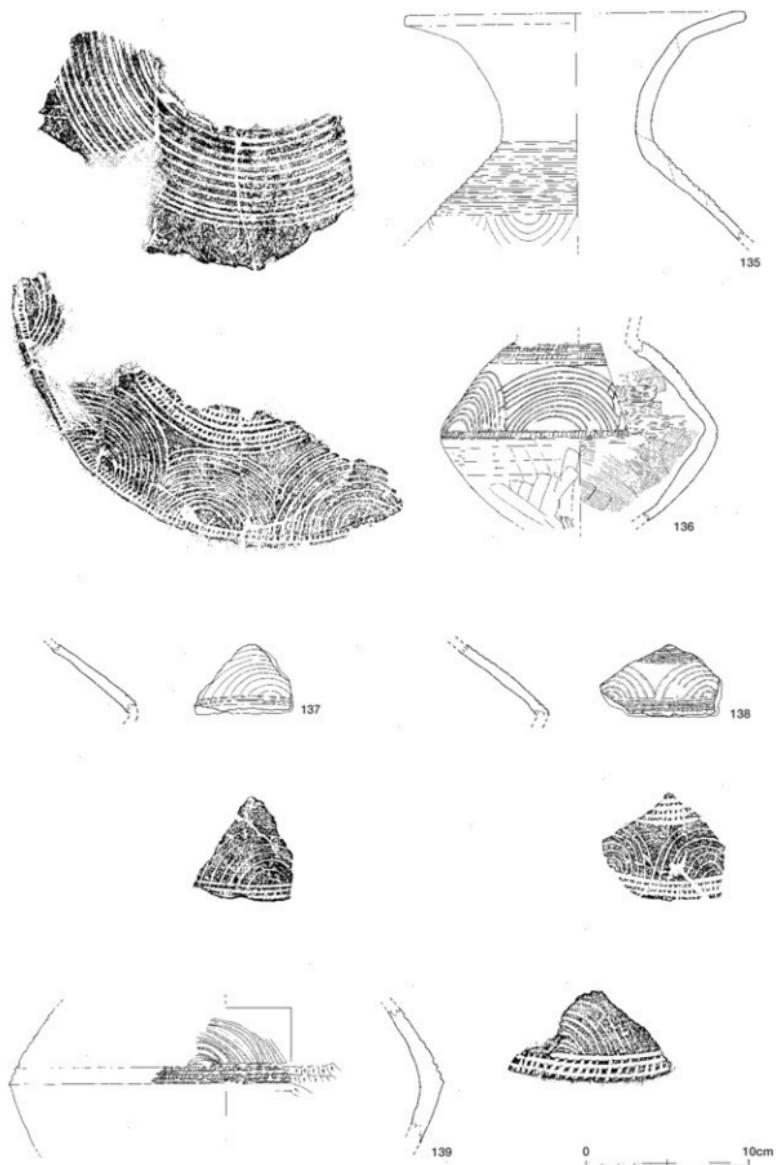


Fig.56 10区 住居 SI013出土遺物実測図－3－

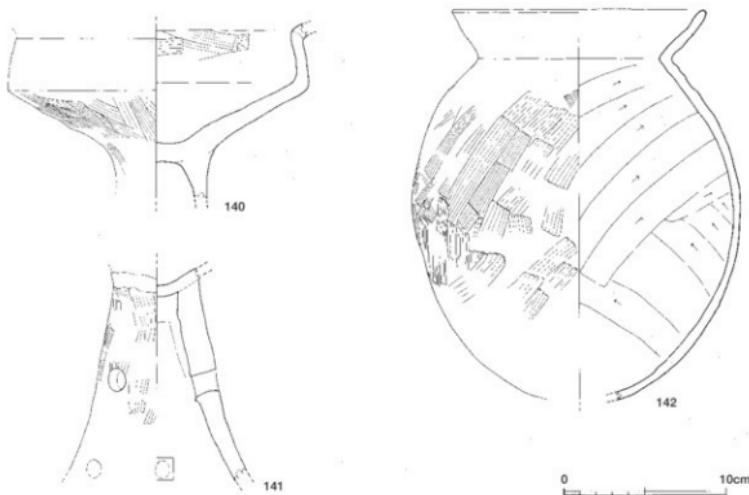


Fig.57 10区 住居 SI013-4-1、溝 SD027出土遺物実測図

#### 竪穴式住居跡 SI015出土遺物（155～257）

本住居跡からは多くの遺物が出土しているため、取り上げた遺物の層位ごとに資料の提示をしている。155～184までは埋土中上層にて、185～218は埋土の中位から取り上げたもの、より床面に近い下層から出土したものが219～257として取り上げている。

155口縁から胴部にかけて緩やかに伸びる器形を有する壺である。底部は欠損しているため分からぬ。胴部と口縁部接合面付近で器壁が最も肥厚する。156～158は台付壺の脚部である。いずれも台は緩やかに下方に向かい外反し広がる。159～167は中型から、やや大型にかけての壺である。159は胴部が球体をなし、頸部で大きく屈曲し、口縁に至る。口縁は頸部屈曲部から緩やかに外反しつつ端部にかけて直立する。端部は内器面付近に強い横ナデが施され、やや尖り気味となる。160は胴部最大径部を中位に持ち、体部が球体をなしている。内器面は横位にやや幅の広いヘラ削りが施されているのが観察される。161は口縁から胴部肩までの部位で壺形土器である。直線的に外反する口縁は端部で四角に整形される。内外器面ともに刷毛目が残る。胴部と口縁部とが接合される屈曲部下で粘土接痕跡が筋状に残る。162も同じく直線的に伸びる口縁を持つ、壺形土器胴部である。口縁は端部に向かい、やや内湾している。端部は内器面で横ナデによる調整が施されているため、やや尖り気味である。内器面は横位にヘラ削り痕が明瞭に残る。163口縁がやや内湾し胴部上位に張りを持ち、平底を呈する壺である。外器面には刷毛目による調整が頸部まで全面に施される。164は胴部が球体をなす大型の壺である。胴部最大径は、ほぼ中位にあり、丸底を呈している。内器面には横位に粘土輪積み痕が明瞭に残る。外器面には刷毛目による調整が薄く残る。頸部から口縁にかけては屈曲し、外に反りながら緩やかに外反する。端部は、やや肥厚し、丸く整形される。165は胴部の最大径を

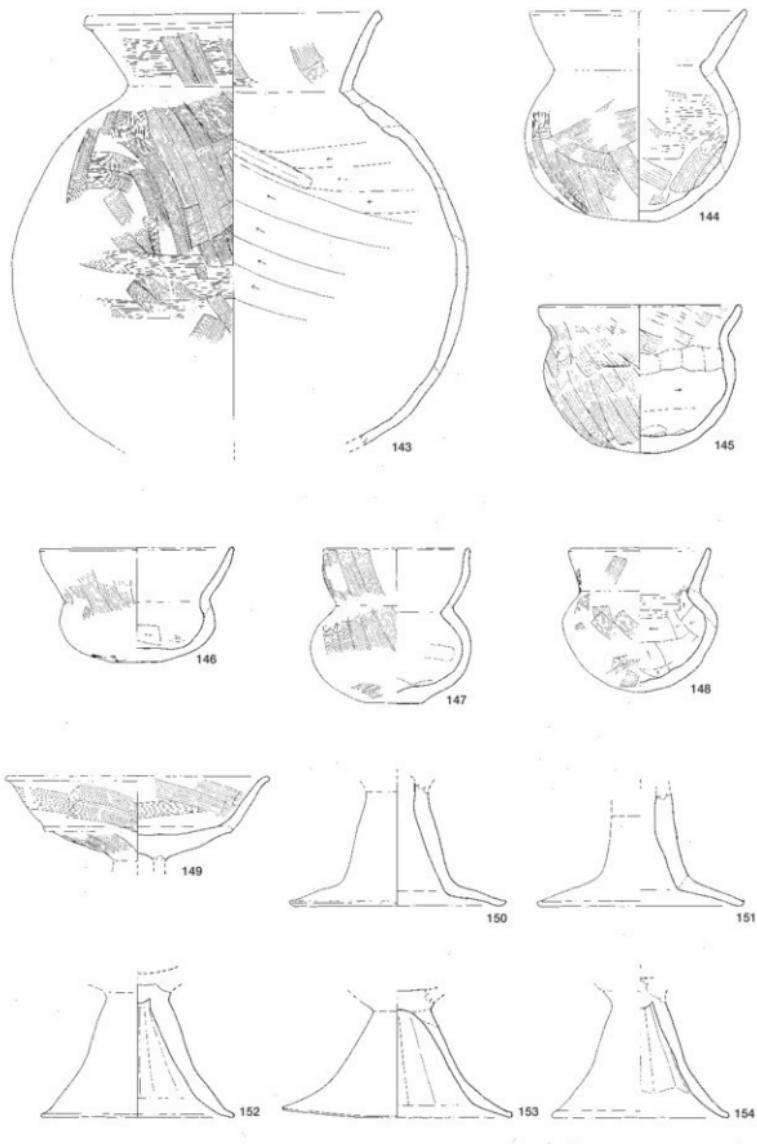
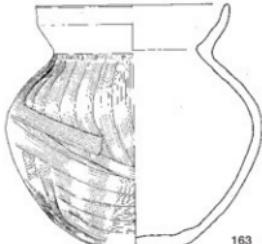
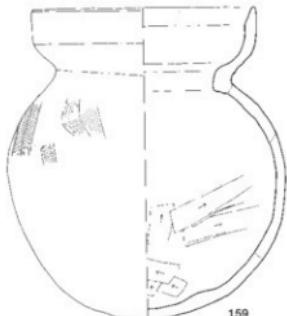
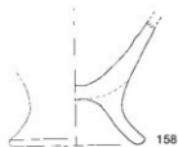
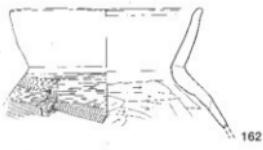
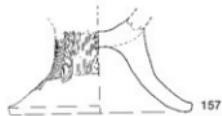
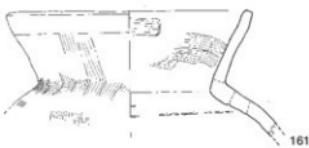
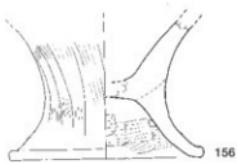
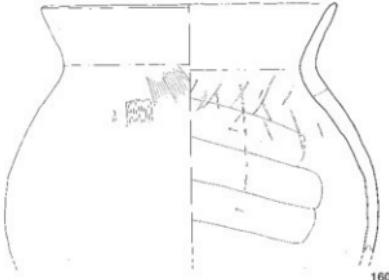
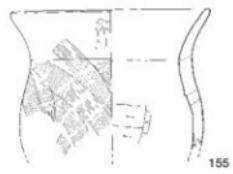
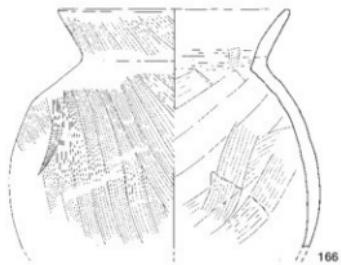
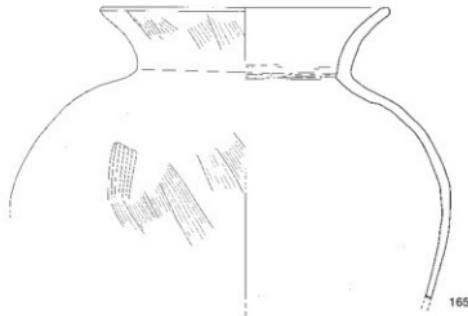
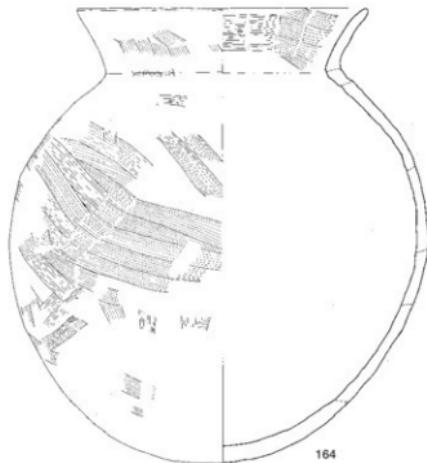


Fig.58 10区 住居 SI014出土遺物実測図

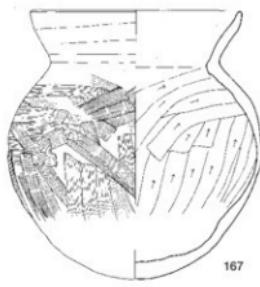


0 10cm

Fig.59 10区 住居 SI015出土遺物実測図—1—



166



167

0 10cm

Fig.60 10区 住居 SI015出土遺物実測図—2—

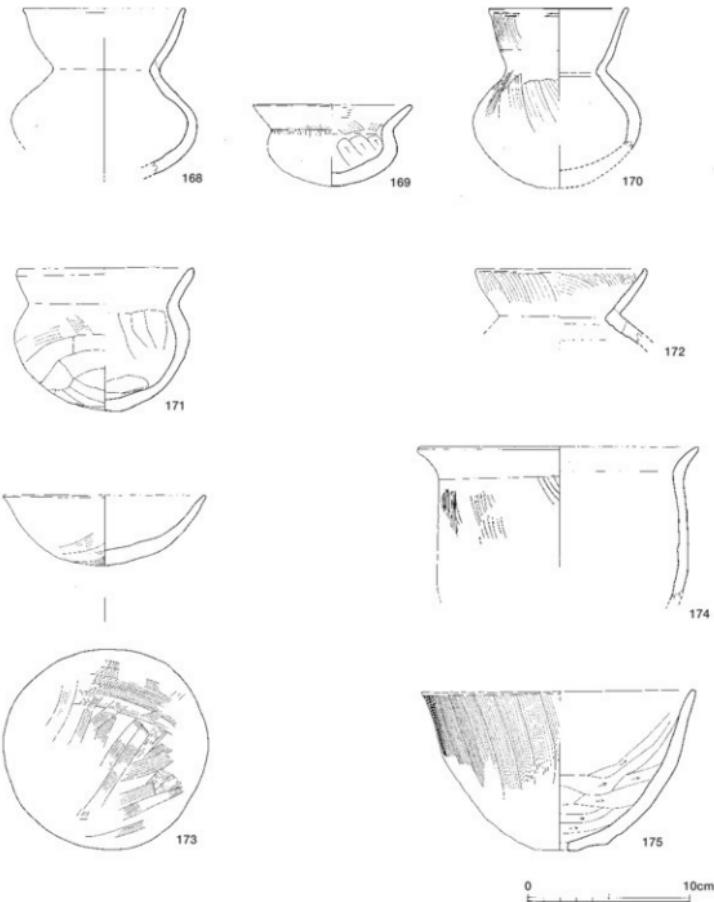


Fig.61 10区 住居 SI015出土遺物実測図—3—

肩部に有している大型の壺である。頸部から口縁にかけては大きく屈曲し、口縁は強く外反する。端部は丸く整形されている。166は壺形土器で、丸味を帯びる器形を呈している。内外器面ともに刷毛目による調整が施される。167はやや小ぶりな口縁が、外反しながら直口する壺である。器壁は粘土の厚さに均一性がなく、やや粗い整形がなされている。口縁は頸部から緩やかに外反しながら、端部付近で直立する。168～172は小型丸底壺である。およそ3タイプに分けることができる。①体高が口縁部高の約2倍であり、口縁は緩やかに外反するタイプ（168・170）②口縁立ち上がりと体高が1：1.5以内に収まるタイプ（169・171）胸

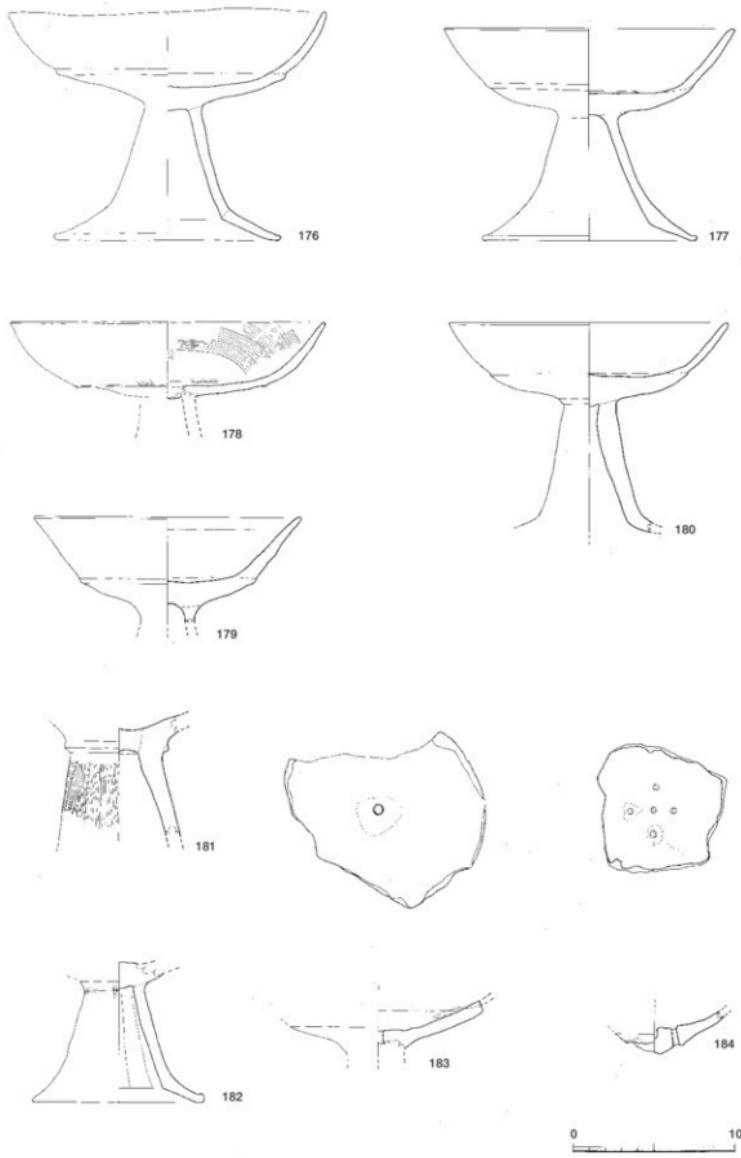
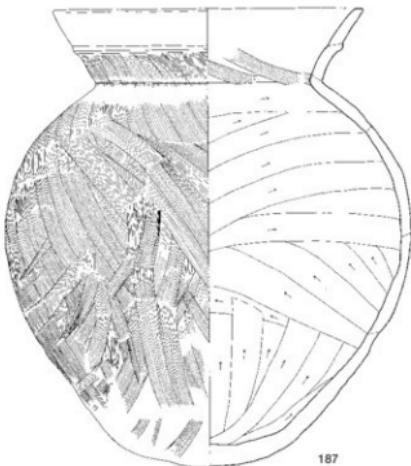
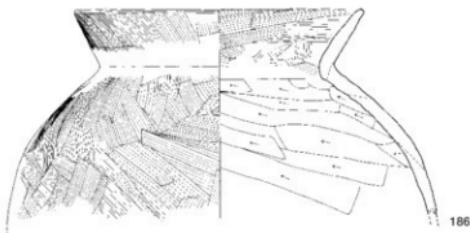
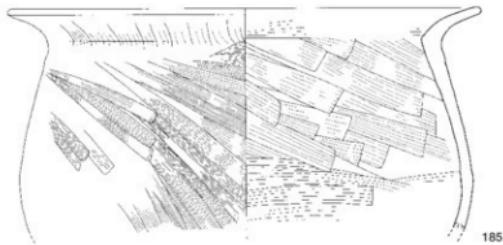


Fig.62 10区 住居 SI015出土遺物実測図－4－

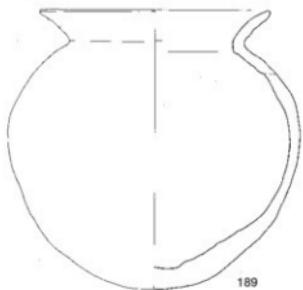


0 10cm

Fig.63 10区 住居 SI015出土遺物実測図—5—



188



189



190

0 10cm

Fig.64 10区 住居 SI015出土遺物実測図—6—

部は中位上位部で、やや丸みを帯びず、直線的に伸び頸部に至る。屈曲部は緩やかで口縁は直線的に外反しつ立ち上がる。③体高が扁平で頸部にかけて丸みを帯びず、そのまま屈曲し口縁に至る。端部にかけて強く外反し直線的に伸びる。173は丸底を呈する杯である。器形はやや厚みを帯びる底部から口縁にかけて、

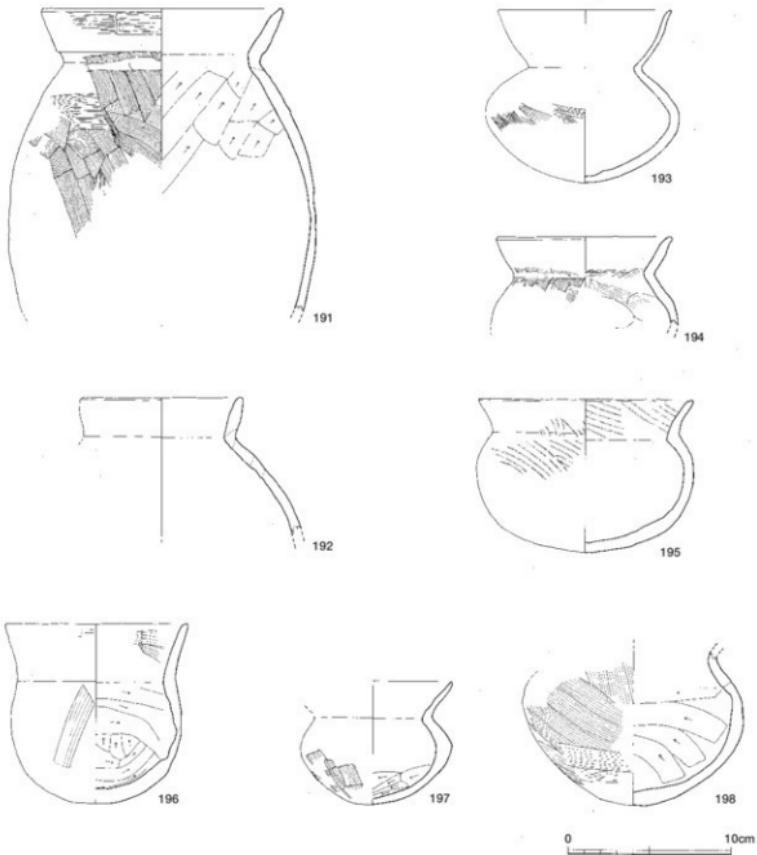


Fig.65 10区 住居 SI015出土遺物実測図—7—

やや薄く整形される。174は口縁から胴部にかけての變形土器部位である。緩やかに屈曲する口縁は、短く外反している。胴部は直線的に下方へ伸び、おそらく台が付随するものと思われる。175は焼成前に底部を円形に穿孔されている鉢である。やや全体に厚めの器壁を呈し、底部は丸底を帯びる。176～184は高杯である。うち176・177は完形品である。176・177とも脚部に強い屈曲部を有する。杯部は底部付近で厚く緩やかに外に向かい、外反しながら立ち上がる。178は杯部のみの部位である。器壁は薄く、緩やかに外反しながら立ち上がる。179も杯部のみの部位である。底部から立ち上がる口縁は強い屈曲部を有し、端部に向かい直線的に伸びる。器壁は全体的に厚い。180は脚底部が欠損している高杯である。杯部は、やや厚くほぼ水平である。口縁は緩やかに外反し薄く仕上げる。181はやや大型で、脚は筒状に整形される。脚部と杯部の

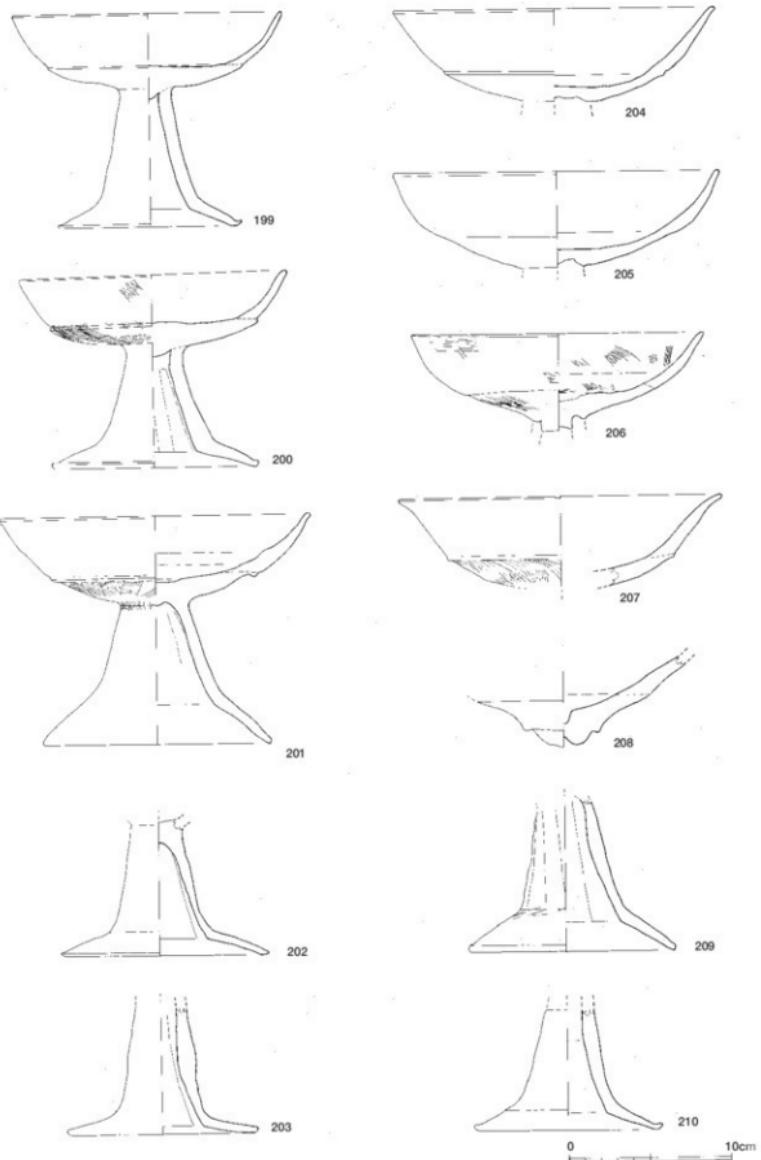
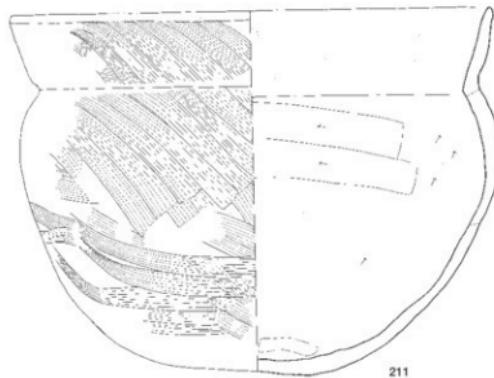


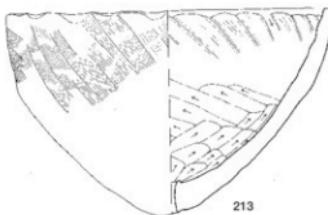
Fig.66 10区 住居 SI015出土遺物実測図—8—



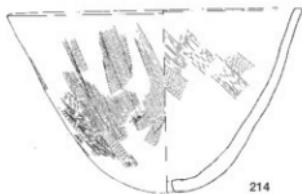
211



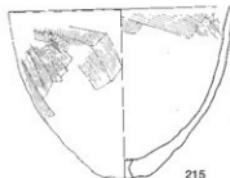
212



213



214



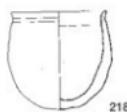
215



216



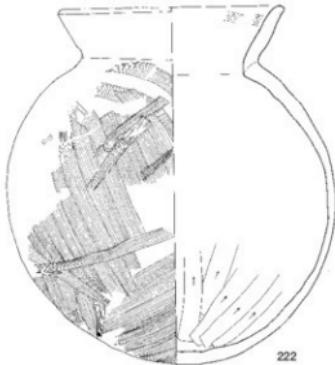
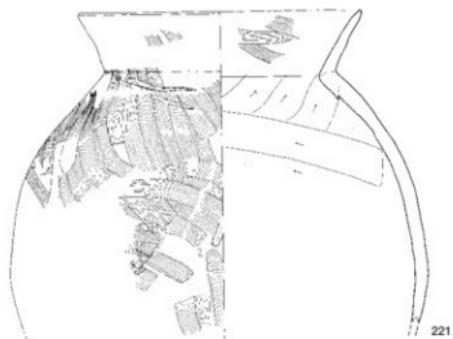
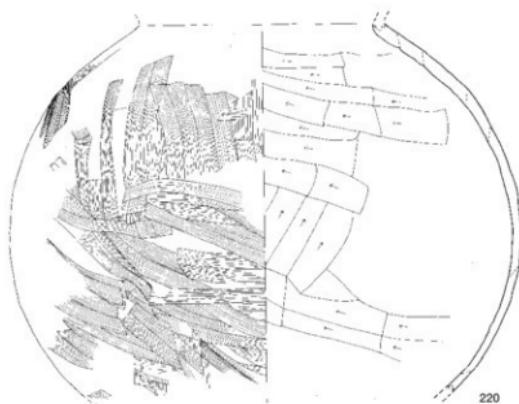
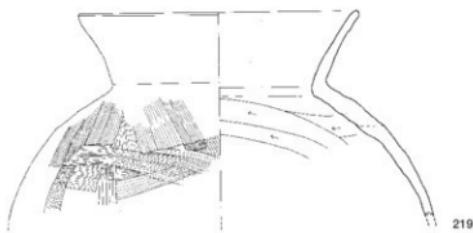
217



218

0 10cm

Fig.67 10区 住居 SI015出土遺物実測図—9—



0 10cm

Fig.68 10区 住居 SI015出土遺物実測図-10-

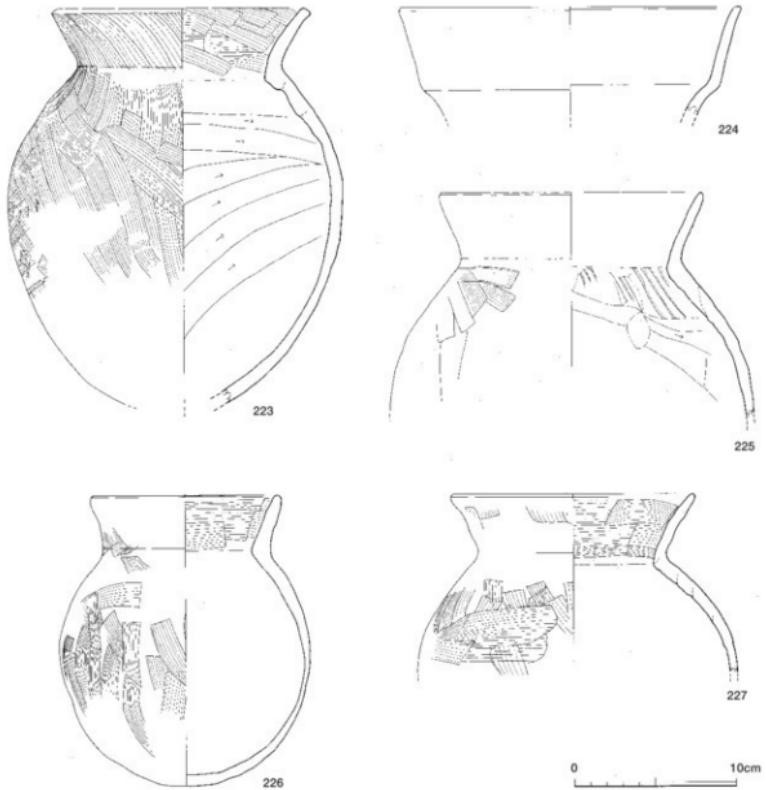


Fig.69 10区 住居 SI015出土遺物実測図—11—

境には一条の突帯が巡る。杯部は欠損して残っていないが、やや深みを帯びるようである。182は176から180と同様の高杯である。杯部は欠損している。183は杯部中央に円形に穿孔されている。穿孔は焼成後に行われている。184も同じく円形に穿孔された杯部である。上面からは5箇所に穿孔されているが、中央1箇所のみは貫通していない。焼成後穿孔である。

185は口縁から胴部にかけての壺形土器である。胴部の最大径は中位にある。頸部から口縁にかけて最も厚くなり、端部に向かい、緩やかに薄く外反する。内外器面ともに中位までは横位に、それから上部にかけては斜め上方への搔き揚げ刷毛目による調整が施される。186は口縁から胴部にかけての壺形土器である。口縁が外へ直線的に伸びながら開き、胴部は中位に最大径を有する。187は壺の完形資料である。頸部から緩やかに外反する頸部には、ほぼ中位に粘土の継ぎ目を利用した凸状のラインを有している。胴部は上位に最大径を有し丸底を呈する底部へ至る。188は球体をなす胴部と、直立する口縁を有する壺である。口縁は、

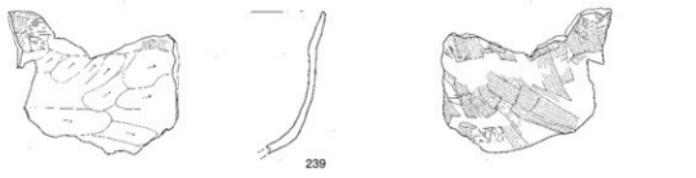
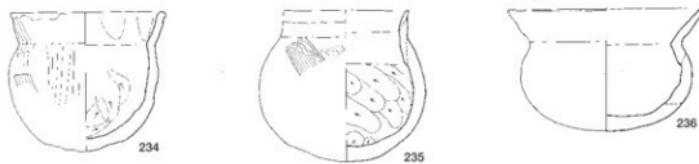
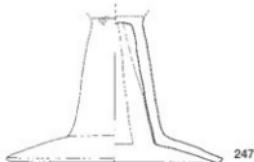
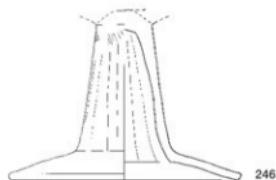
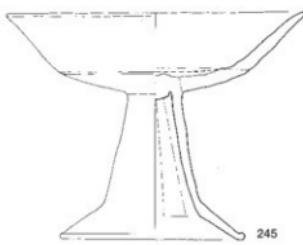
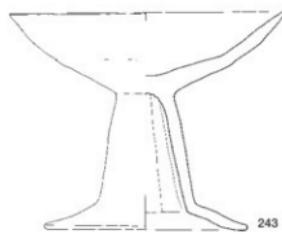
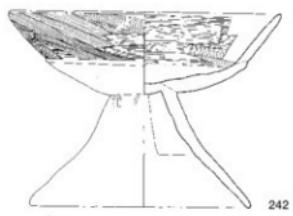
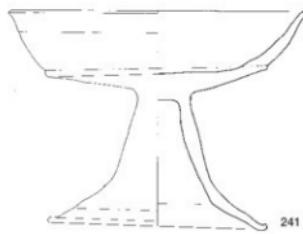
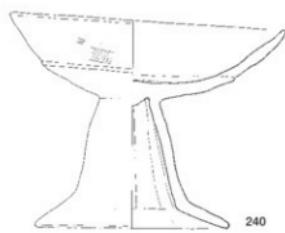


Fig.70 10区 住居 SI015出土遺物実測図—12—



0 10cm

Fig.71 10区 住居 SI015出土遺物実測図—13—

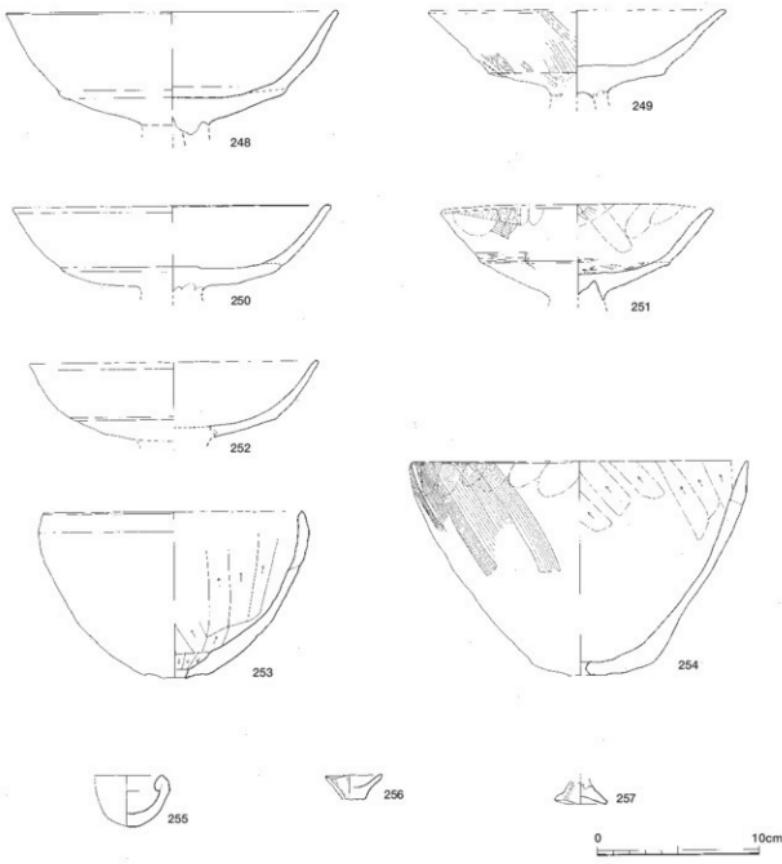


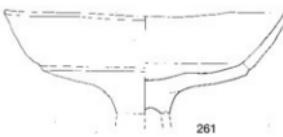
Fig.72 10区 住居 SI015出土遺物実測図—14—

やや端部に向かい内傾する。189は胴部が球体をなし、短く外反する口縁を有する。190は胴部中位に最大径を有し、口縁は「く」字状に外に広がる壺形土器である。外器面には刷毛目が僅かに残る。191は口縁から胴部にかけて残る壺形土器である。胴部は長胴で頸部にかけてやや肥厚している。192は口縁から胴部片にいたる部位で壺形の土器である。直立する口縁は短く、やや肥厚している。胴部内器面には粘土紐輪積み痕が明瞭に残る。輪積み間隔は約1.2cmである。

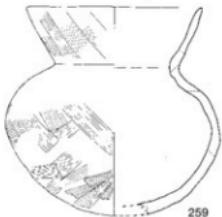
193～198は小型の丸底壺である。193は完形品である。胴部中位で広く外に張り出す胴部は「く」字に強く屈曲し頸部に至る。口縁は狭まつた頸部から緩やかに外反し、わずかに膨らみを持ち端部に至る。端部は



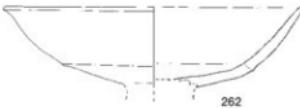
258



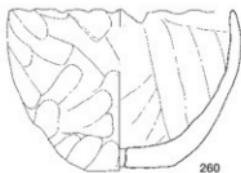
261



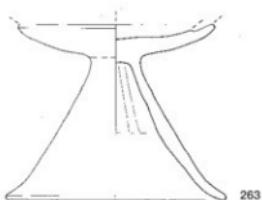
259



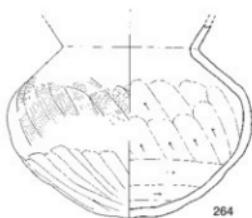
262



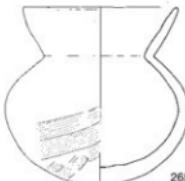
260



263



264



265

0 10cm

Fig.73 10区 土坑 SK045、溝 SD028出土遺物実測図

上辺を指ナデによる押さえが見られ、先端はやや尖る。194は口縁から胴部にかけての部位である。口縁はやや厚めで短く、直線的に外反し、端部に至る。外器面には頸部と胴部の接合点下に刷毛目がわずかに残り、接合が丁寧に行われていた事が窺える。内器面には外器面同様に接合部付近に刷毛によるナデが粗く見られる。同じく内器面胴部には指ナデによる整形痕が窺える。195はやや扁平な器形を呈する。短く緩やかに外反する口縁部を有し、幅が広い胴部を呈している。外器面には、やや単位の大きな刷毛目が施され、内器面

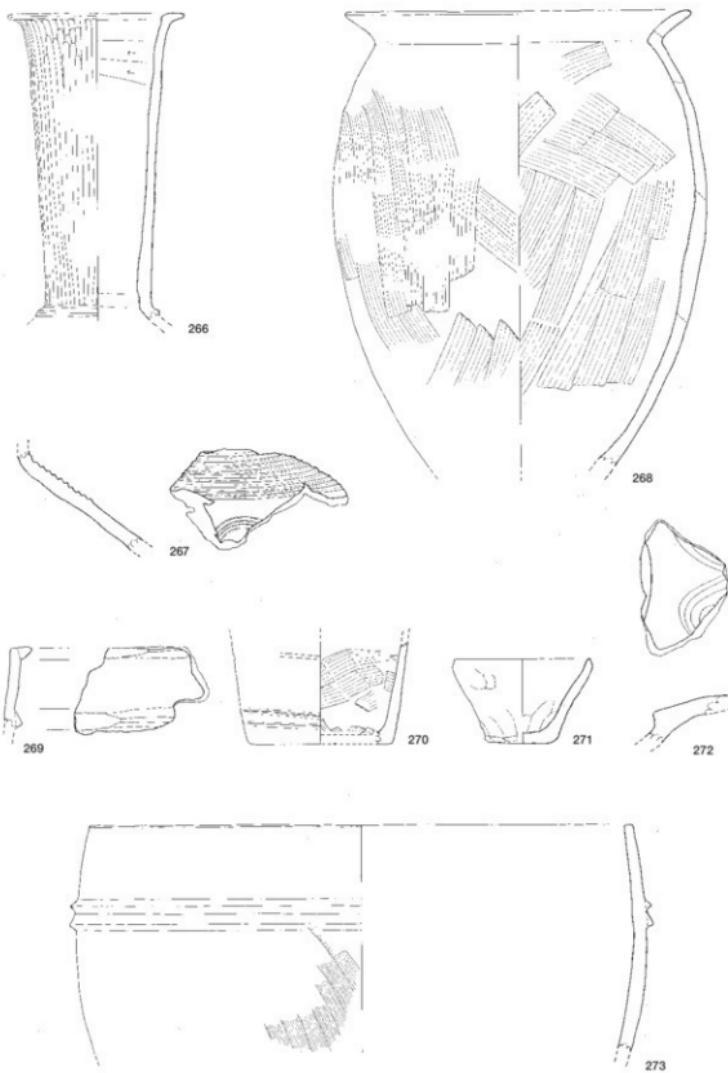


Fig.74 10区 出土遺物実測図

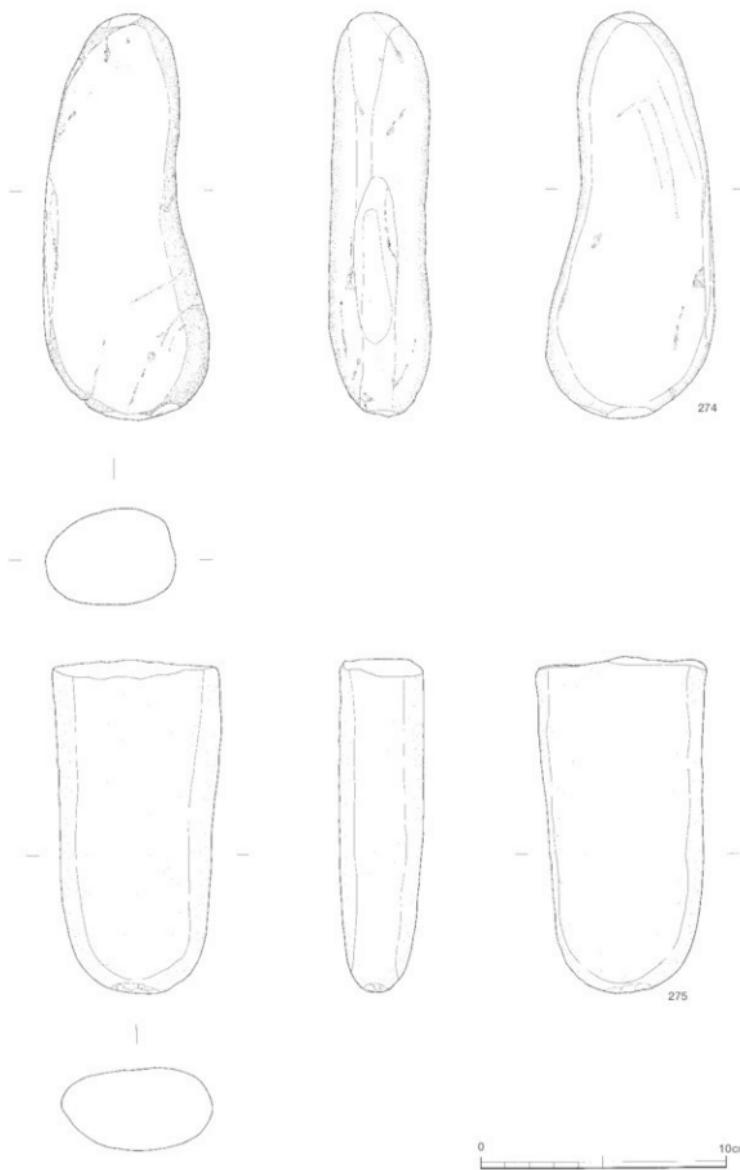


Fig.75 10区 住居 SI015出土遺物実測図



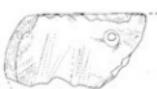
0 10cm



0 5cm



278



279

0 10cm

Fig.76 10区 住居 SI015出土遺物実測図

には頸部から口縁端部にかけて刷毛目が残る。胴部から頸部にかけては粘土接合線がわずかだが外器面、内器面の表面観察から窺える。196はほぼ球体をなす胴部から立ち上がる線は、頸部でやや肥厚し内傾するが、直線的に口縁端部に至る。内器面は粗い削りが下段において下から上へ削り上げてあり、胴部最大径部で横位に削る。197は口縁の一部を欠くがほぼ完形である。胴部は中位に最大径を有する。外器面には底部近くにわずかに刷毛目が残り、内器面底部に削りが残る。198は口縁部のみを欠く。胴部内外器面はいずれも横位に刷毛目及び削りが走り、粗い調整が残る。

199から210は高杯である。199から201の高杯は杯部が浅く外に直線的に伸びる。口縁端部は丸く整形され、やや外に向かい摘まれる。杯部底面と受け部との境には貼付けによる整形が行われる。脚部は途中で外に強く屈曲し、強く外反する。端部は口縁端部と同じく、摘まれ短く外反する。脚部内器面には整形後の縱方向における削りが残る。202は高杯脚部のみである。杯部との接合部は厚く、199らの高杯とはやや趣きが異なる。脚部壁は薄く内器面において粗い削りが施される。203も同じく高杯脚部である。脚部壁は厚く内器面に粗い削りが施され強く外反する脚底部はほぼ直角に整形される。端部は丸い。204から208は高杯杯部である。そのうち204から206は先に上げた199から201までの高杯の杯部と同じ形態を呈している。207の杯部は、口縁端部に向かって緩く外反し端部は丸く整形される。208も高杯杯部の底部である。外器面に凸状に粘土の盛り上がりが見られ、杯と脚部とが整形後にヘラにより削り整形された痕跡が残る。209、210は高杯脚部である。形態は199から201に上げた高杯と同じ形態を有しているため、おそらく、204から206の杯部との接合が想定される。

211及び213から215は、鉢である。211は唯一、口縁を有する鉢である。胴部は丸く底部は棱を持たない平底を呈している。外器面には横位に刷毛目が施される。外反しながら直線的に立ち上がる口縁部は中位でやや肥厚し、端部では丸みを帯びる。胴部内器面には、横位にヘラ削りが丁寧に施される。213から215、217は底部に穿孔されている鉢である。穿孔部は焼成前に穿たれ、内、外器面に粘土の盛り上がりが見られる。外器面は下から上に引き上げられた刷毛目が走り、内器面には底部付近で下から上へのヘラ削り、口縁部付近で斜め上方に刷毛目が施されている。口縁端部は、やや丸みを帯びる。外器面に煤が付着しているため、瓶としての利用が想定される遺物である。

212は壺の頸部である。口縁端部に特徴があり、四角に整形される。216はコップ型土器である。整形は手づくねであり、指痕が内、外器面共に明瞭に残る。口縁部がやや短く外反する。218は壺型の土器である。216同様に手づくねによる整形であるが、表面は丁寧にナデ消されている。口縁部は短く外反し、端部は丸い。底部は丸底である。

219から227は壺型土器である。なかでも、219から223までは、いずれも胴部は球形を呈し、最大径が中位に来ている。底部は丸い。口縁は直線的に強く外反する。223及び225から227は胴部がやや長胴になる壺型土器である。底部は丸底を成している。224は二重口縁壺の口縁部である。頸部から胴部にかけて残っていないため形態は分からぬが、緩い段を有し外反する口縁部である。

228から238は、小型の丸底壺である。228から232は胴部の中位に最大径を有し、頸部から口縁端部にかけて緩やかに内湾しつつ立ち上がる形態を有する土器である。234、235は胴部最大径部から頸部付近でくびれずに口縁端部にかけて垂直に立ち上がる形態を有するものである。234はわずかに頸部屈曲が見られるが外器面ではほぼ垂直にたちあがるため、先に上げたグループとは分けている。236から238は低い体高を呈する胴部が直線的に強く外反する口縁に特徴のある土器である。頸部のくびれはわずかに見られるが、237、238は、ほとんど垂直に立ち上がっている。239は破片のみの出土で全体は見通せないが、低く幅の広い胴部を有し、頸部でくびれの無い、バケツ型を呈する土器である。底部近くが平底になること、口縁部が頸部でくびれず、垂直に立ち上がることなどから、211に上げた鉢型土器の一部であることが窺えよう。

240から252は高杯である。242の遺物のみ脚部がくびれずに開いた状態から杯部に至る形態を有する。他の違いは、杯部の口縁形態が端部に行くに従い、丸みを帯びるものと直線的になるものとがある。ほかは、先に上げた高杯と同じ形態である。253及び254も先に上げた底部が穿孔された鉢型土器である。255、256、257ともミニチュア土器でいずれも手づくねである。255は楕型、256は杯型、257は器台を模したものと思われる。

258から263は土坑 SK045から出土した土器である。検出したSK045は近世の溝 SD028によって切られてしまり、遺構の半分以上は失われている。よって、ここに図示した遺物が本遺構の性格をすべて現しているものではない。出土遺物は竪穴式住居跡 SK015出土遺物と同様の形態を有する。器種構成も小型丸底壺、高杯、楕型土器（手づくね）と類似している。

264、265は溝 SD028より出土した遺物である。本遺構は、ここでは遺物を図示していないが、近世の遺物が多量に出土しており、遺構の時期は近世として認識している。よって本資料は、参考資料として取り扱う。出土している遺物はいずれも、小型丸底壺で先に挙げた竪穴式住居跡 SI015及び土坑 SK045からの出土遺物と大差はないと思われる。

266から273は10区調査時に出土した遺物である。出土地点は不明である。266は重弧文土器頸部である。外器面はヘラ状工具によるナデが幾筋も施され、磨きがかけられているような仕上げとなっている。口縁端部は直角に外反し端部は尖っている。頸部は胴部との境に一条の突帯が見られる。267はおそらく頸部下にあたる胴部の一部と思われる。直接接合点がないため、同一器形と確認できないが、焼成具合や頸部からの土器の表情等から判断した。頸部下には横位にヘラによる沈線が巡り、その下に3条からなる重弧文の一部が残される。268は台付甌の胴部である。胴部最大径が中位よりやや上部に位置し、台部は残っていないが、台部に向かって急速に窄まるようである。269は突帯文を有する深鉢型土器の口縁である。突帯は口縁端部と胴部に各1条残る。縄文晩期の突帯文土器であろう。270は外器面底部近くに2条の沈線を巡らし内器面に横位にヘラ削り痕が残る。直角に立ち上がる器壁は、やや外に開きながら直線的に伸びる。また、底部は一部しか残っていないが、水平な底面となるようである。焼成や調整技法から、弥生時代後期の所産と思われ、おそらくジョッキ型土器の一部であると思われる。271は楕型土器で手づくねである。272は重弧文が施された高杯型土器の口縁端部である。全体に焼成が甘いせいか器面が荒れている。口縁端部は欠損しており、全体形は不明であるが、上面に浅い4条の沈線が1箇所と2条残る。273鉢型土器の胴部である。胴部中位に突帯が2条巡る。

274から279は竪穴式住居跡 SI015より出土したものである。274は叩き石で幅の広い面に敲打痕が残る。275も同じく敲き石である。片側が欠損している。276は砥石である。四面体をなし、うち2面に深い削痕が残る。また、一面には浅い削痕が残る。使用面は合計3面である。277は垂飾品である。紐を通す孔は両面から穿たれる。278及び279は石庖丁である。2点とも半分以上が欠損し全体形は不明である。しかし、278の資料は刃部の使用痕跡が激しく長期間使用していたものと思われる。279の資料は欠損及び打撃による剥離が大きく見られる資料である。刃部は欠損している。

Tab. 4 西片百田遺跡10区出土土器観察表－1－

掲載番号	遺構種別	出土地点	器種	残存部位	残存高	最大胴径	口径	底径	備考	Fig.	PL
121	竪穴式住居	SI012	壺	胴部・底部	13.2	—	—	3.6			
122	夕	SI013	甕	口縁・胴部	12.9	(27.2)	(29.2)	—		54	44
123	夕	夕	甕	口縁・胴部	24.6	(20.0)	21.5	—			
124	夕	夕	甕	完形	18.4	11.6	10.0	6.6			
125	夕	夕	甕	完形	20.4	14.1	—	—			
126	夕	夕	甕	口縁・胴部	11.3	19.9	17.0	—		44	
127	夕	夕	壺	口縁・胴部	37.1	(42.2)	18.2	—			
128	夕	夕	小型丸底甕	口縁・胴部	16.0	(22.8)	18.6	—			
129	夕	夕	二重口縁甕	口縁	5.1	—	15.4	—			
130	夕	夕	壺	胴部・底部	9.4	—	—	6.1		55	44
131	夕	夕	小型丸底甕	完形	18.8	—	13.0	—			
132	夕	夕	小型丸底甕	頸部・底部	10.6	10.3	—	—			
133	夕	夕	長頸甕	胴部	7.1	—	—	—			
134	夕	夕	ヨコキ型土器	胴部・底部	—	—	—	—			
135	夕	夕	長頸甕	口縁・頸部	14.0	—	21.0	—		43	
136	夕	夕	長頸甕	胴部	10.9	(17.0)	—	—			
137	夕	夕	長頸甕	肩部	4.2	—	—	—		56	
138	夕	夕	長頸甕	肩部	4.4	—	—	—			
139	夕	夕	長頸甕	肩部	—	(28.6)	—	—			
140	夕	夕	高杯	杯部	10.7	18.5	—	—		44	
141	夕	夕	高杯	脚部	8.0	—	—	—		57	
142	溝状造構	SD027	壺	ほぼ完形	24.0	20.2	15.6	—		44	
143	竪穴式住居	SI014	甕	ほぼ完形	26.6	28.0	18.4	—			
144	夕	夕	小型丸底甕	完形	12.8	(13.3)	(13.4)	—		45	
145	夕	夕	小型丸底甕	完形	9.1	11.8	12.5	—			
146	夕	夕	小型丸底甕	完形	7.0	(9.6)	(12)	—			
147	夕	夕	小型丸底甕	完形	9.5	9.9	(9.0)	—			
148	夕	夕	小型丸底甕	完形	8.8	9.6	8.8	—		58	
149	夕	夕	高杯	杯部	5.2	—	(16.2)	—			
150	夕	夕	高杯	脚部	7.5	—	—	13.4		45	
151	夕	夕	高杯	脚部	6.9	—	—	12.8			
152	夕	夕	高杯	脚部	7.6	—	—	12.0			
153	夕	夕	高杯	脚部	7.7	—	—	14.1			
154	夕	夕	高杯	脚部	8.5	—	—	11.0			
155	夕	SI015	甕	口縁・胴部	8.6	—	(12.3)	—			
156	夕	夕	甕	胴部・脚部	8.3	—	—	12.0			
157	夕	夕	甕	脚台部	5.8	—	—	11.2		46	
158	夕	夕	甕	胴部・脚部	7.6	—	—	8.4			
159	夕	夕	壺	完形	19.1	16.9	13.6	—		59	
160	夕	夕	壺	口縁・胴部	15.4	(23.0)	(18.2)	—			
161	夕	夕	壺	口縁・頸部	7.8	—	15.2	—		46	
162	夕	夕	壺	口縁・頸部	7.4	—	11.9	—			
163	夕	夕	壺	完形	14.8	15.8	12.0	—			
164	夕	夕	壺	完形	27.9	26.8	18.0	—			
165	夕	夕	壺	口縁・胴部	18.0	27.1	(17.8)	—		60	
166	夕	夕	壺	口縁・胴部	14.6	(19.2)	14.3	—			
167	夕	夕	壺	完形	15.4	15.6	13.0	—			
168	夕	夕	小型丸底甕	ほぼ完形	10.2	11.4	10.0	—			
169	夕	夕	小型丸底甕	完形	5.0	(8.0)	9.8	—			
170	夕	夕	小型丸底甕	完形	11.1	10.2	(8.6)	—			
171	夕	夕	小型丸底甕	完形	8.8	10.7	10.8	—			
172	夕	夕	小型丸底甕	口縁	4.6	—	10.6	—		61	
173	夕	夕	杯	完形	4.3	—	12.4	—			
174	夕	夕	鉢	口縁・胴部	9.4	—	17.3	—		46	
175	夕	夕	鉢	完形	9.8	—	16.8	—	底部穿孔		
176	夕	夕	高杯	完形	14.0	—	(19.6)	14.0			
177	夕	夕	高杯	完形	13.5	—	17.9	(13.2)			
178	夕	夕	高杯	杯部	4.7	—	19.4	—			
179	夕	夕	高杯	杯部	6.3	—	(16.5)	—			
180	夕	夕	高杯	ほぼ完形	12.8	—	17.2	—		62	
181	夕	夕	高杯	脚部	7.4	—	—	—			
182	夕	夕	高杯	脚部	8.6	—	—	(10.6)			
183	夕	夕	高杯	杯部	2.9	—	—	—		46	
184	夕	夕	高杯	杯部	—	—	—	—			
185	夕	夕	甕	口縁・胴部	13.8	(27.8)	(28.8)	—			
186	夕	夕	壺	口縁・胴部	13.2	—	17.7	—		63	
187	夕	夕	壺	完形	28.3	25.0	19.0	—			

Tab. 5 西片田遺跡10区出土土器観察表一 2 -

掲載番号	遺構種別	出土地点	器種	残存部位	残存高	最大胴径	口径	底径	備考	Fig.	PL
188	竪穴式住居	SI015	壺	完形	35.3	30.9	16.4	—			
189	ク	ク	壺	完形	17.1	17.9	14.2	—		64	
190	ク	ク	壺	完形	18.0	17.2	12.7	—			
191	ク	ク	壺	口縁・胴部	18.6	(18.8)	(14.8)	—			
192	ク	ク	壺	口縁・胴部	8.5	—	10.0	—			
193	ク	ク	小型丸底壺	完形	10.6	11.9	10.6	—			
194	ク	ク	小型丸底壺	口縁・胴部	5.4	—	(10.8)	—		65	
195	ク	ク	小型丸底壺	完形	9.4	—	(13.2)	—			
196	ク	ク	小型丸底壺	完形	11.0	—	(11.2)	—			
197	ク	ク	小型丸底壺	ほぼ完形	7.6	9.3	—	—			
198	ク	ク	小型丸底壺	胴部・底部	9.4	13.6	—	—			
199	ク	ク	高杯	完形	13.1	—	(16.6)	11.3			
200	ク	ク	高杯	完形	11.8	—	16.6	12.8			
201	ク	ク	高杯	完形	14.0	—	19.0	14.0			
202	ク	ク	高杯	脚部	8.3	—	—	12.8			
203	ク	ク	高杯	脚部	7.8	—	—	—			
204	ク	ク	高杯	杯部	5.7	—	19.8	—		66	
205	ク	ク	高杯	杯部	5.9	—	20.0	—			
206	ク	ク	高杯	杯部	6.0	—	18.0	—			
207	ク	ク	高杯	杯部	5.5	—	20.0	—			
208	ク	ク	高杯	杯部	4.9	—	—	—			
209	ク	ク	高杯	脚部	9.2	—	—	12.8			
210	ク	ク	高杯	脚部	7.4	—	—	—			
211	ク	ク	鉢	完形	22.4	29.3	29.6	—			
212	ク	ク	鉢	口縁	6.3	—	17.7	—			
213	ク	ク	鉢	完形	12.6	—	19.7	—	底部穿孔	46	
214	ク	ク	鉢	完形	11.2	—	18.0	—	ク	67	
215	ク	ク	鉢	ほぼ完形	10.4	—	(13.8)	—	ク		
216	ク	ク	手捏土器	完形	5.3	—	6.7	3.3			
217	ク	ク	鉢	底部	3.4	—	—	(5.0)	底部穿孔		
218	ク	ク	手捏土器	完形	6.0	—	(5.8)	—			
219	ク	ク	壺	口縁・胴部	12.7	—	17.2	—			
220	ク	ク	壺	胴部	22.8	40.4	—	—		68	
221	ク	ク	壺	口縁・胴部	19.3	(26.5)	17.4	—			
222	ク	ク	壺	完形	21.8	(20.3)	14.0	—			
223	ク	ク	壺	ほぼ完形	24.2	(20.7)	16.0	—			
224	ク	ク	二重口縁壺	口縁	6.6	—	(21.2)	—		69	
225	ク	ク	壺	口縁・胴部	13.9	—	(16.3)	—			
226	ク	ク	壺	完形	17.8	15.5	11.8	—			
227	ク	ク	壺	口縁・胴部	10.9	—	15.2	—			
228	ク	ク	小型丸底壺	完形	11.2	11.2	10.0	—			
229	ク	ク	小型丸底壺	完形	11.4	12.3	11.2	—			
230	ク	ク	小型丸底壺	口縁・胴部	8.5	(11.2)	(11.2)	—			
231	ク	ク	小型丸底壺	完形	9.0	10.4	8.4	—			
232	ク	ク	小型丸底壺	胴部・底部	7.6	10.3	—	2.3		70	
233	ク	ク	小型丸底壺	胴部・底部	9.5	(11.2)	—	—			
234	ク	ク	小型丸底壺	完形	8.5	9.2	9.6	—			
235	ク	ク	小型丸底壺	完形	9.2	12.5	7.6	—			
236	ク	ク	小型丸底壺	完形	7.6	(10.3)	(12.1)	—			
237	ク	ク	小型丸底壺	ほぼ完形	8.8	—	(13.5)	—			
238	ク	ク	鉢	完形	8.4	—	14.8	—			
239	ク	ク	小型丸底壺	胴部	8.6	—	—	—			
240	ク	ク	高杯	完形	12.8	—	16.7	11.8			
241	ク	ク	高杯	完形	13.2	—	18.2	13.4			
242	ク	ク	高杯	完形	11.9	—	16.8	13.6			
243	ク	ク	高杯	完形	13.3	—	16.8	12.4			
244	ク	ク	高杯	杯部	5.7	—	18.0	—		71	
245	ク	ク	高杯	完形	13.9	—	18.2	11.2			
246	ク	ク	高杯	脚部	10.4	—	—	(14.2)			
247	ク	ク	高杯	脚部	8.9	—	—	13.3			
248	ク	ク	高杯	杯部	7.3	—	(20.4)	—			
249	ク	ク	高杯	杯部	5.3	—	(18.4)	—			
250	ク	ク	高杯	杯部	5.2	—	17.7	—		72	
251	ク	ク	高杯	杯部	5.9	—	16.8	—			
252	ク	ク	高杯	杯部	5.3	—	17.8	—			
253	ク	ク	鉢	完形	10.2	—	(15.8)	—	底部穿孔	46	
254	ク	ク	鉢	完形	13.2	—	20.8	—			

Tab. 6 西片百田遺跡10区出土土器観察表－3－

掲載番号	遺構種別	出土地点	器種	残存部位	残存高	最大胴径	口径	底径	備考	Fig.	PL
255	竪穴式住居	SI015	手捏土器	完形	3.1	—	—	—		72	
256	タ	タ	手捏土器	完形	1.5	—	3.5	1.4			
257	タ	タ	手捏土器	台部	1.3	—	—	3.3			
258	土坑	SK045	小型丸底壺	完形	10.3	11.5	10.5	—			
259	タ	タ	小型丸底壺	完形	12.7	13.0	(10.8)	—			
260	タ	タ	鉢	完形	10.0	—	14	—			
261	タ	タ	高杯	杯部	6.3	—	17.4	—			
262	タ	タ	高杯	杯部	4.9	—	(18.5)	—		73	45
263	タ	タ	高杯	杯部・脚部	10.8	—	—	(13.6)			
264	溝状遺構	SD028	小型丸底壺	頭部・底部	11.9	15.0	—	—			
265	タ	タ	小型丸底壺	完形	10.9	11.4	9.5	—			
266	グリッド内出土	E-23	長頸壺	口縁・頸部	18.7	—	(10.8)	—			43
267	タ	F-22	長頸壺	肩部	6.2	—	—	—			
268	タ	D-36	甕	ほぼ完形	27.8	22.7	(21.4)	—			
269	タ	F-22	甕	口縁	5.0	—	—	—			
270	タ	F-22	ジョッキ型土器	胴部・底部	6.3	—	—	8.8		74	
271	タ	E-22	手捏土器	完形	5.1	—	8.4	4.5			
272	タ	一括	高杯	口縁	—	—	—	—			
273	タ	F-21	甕	口縁・胴部	13.9	(36.0)	(33.6)	—			

Tab. 7 西片百田遺跡出土遺物観察表

## 石器

掲載番号	遺構種別	出土地点	器種	残存部位	長さ	幅	厚み	重さ(g)	備考	Fig.	PL
59	グリッド内出土	P-6	石磨丁	完形	9.05	3.65	0.50	25.4	孔径0.4cm	25	
60	タ	一括	石磨丁	1/4	4.40	3.60	0.35	7.6	孔径0.25cm		46
120	タ	一括	石鎌	一部欠損	2.15	1.96	0.25	1			
274	竪穴式住居	SI015	磨石	完形	16.40	6.60	4.18	667		75	49
275	タ	タ	石斧	2/4	13.55	6.10	3.30	538			
276	タ	タ	砥石	1/4	11.80	9.42	10.62	1138			
277	タ	タ	装飾品	完形	1.72	1.18	0.61	2	孔径0.28cm	76	
278	グリッド内出土	一括	石磨丁	2/4	5.98	7.88	1.02	51			
279	タ	一括	石磨丁	2/4	3.12	5.91	0.68	15			

## その他

掲載番号	遺構種別	出土地点	器種	残存部位	長さ	幅	厚み	重さ(g)	備考	Fig.	PL
61	竪穴式住居	SI002	装飾品	完形	0.48	0.50	0.28	0.1	ガラス球(青)		
62	グリッド内出土	P-8	装飾品	完形	0.40	0.35	0.30	0.1	タ	25	49
63	タ	O-9	装飾品	完形	0.50	0.50	0.37	0.1	タ		
64	タ	N-10	装飾品	完形	0.55	0.50	0.55	0.2	タ		

## 木製品

掲載番号	遺構種別	出土地点	器種	残存部位	長さ	幅	厚み	備考	Fig.	PL
65	竪穴式住居	SI004	柱材	1/4	23.5	11.9	—	径(13.0)	26	—
66	竪穴式住居	SI001	柱材	1/4	15.2	16.15	—	径15.7~16.1		

## 第3章 まとめ

以上、八代市西片町字百田に所在する西片百田遺跡について、2002年4月から9月末にかけて行った緊急調査について、その成果を記述してきた。

その結果、本地域には弥生時代後期から古墳時代初頭までの集落が広がっていることが判明した。

### 【本遺跡の立地する地形について】

本事業に伴い調査区と設定した以外の範囲についても試掘・確認調査を実施し、遺跡・遺構が確認できた場所のみを調査区として設定した。そのなかで、8区と設定した調査区の北側では、遺構の広がりが見られない範囲があり、その北側で地形の落ち込みを確認した。<sup>1)</sup>

そこからは、遺跡の広がりが見られる基底面となる粘質土が途切れ、地形の落ち込みがあり厚い青灰粘土の堆積が見られた。青灰粘土の範囲はそのまま、北西方向から西側に向かって広がっており、湿地帯であつた様相を帶びている。本遺跡周辺の圃場整備が行われた昭和40年代までは、その周囲は地元の方々によると、かなり深い水深を有する水田があったと言われており、青灰粘土層の広がりは、それを裏付ける結果となっている。

調査を実施した8区の遺構も、その北辺では希薄になり、集落の周辺地となっていたようである。

反対に、本調査区の南側にある10区では、全面に遺構の立地する乾いた粘質土が残り、広い範囲に竪穴式住居跡が点在していた。それぞれの竪穴住居の床面レベルに大きな差がないため、8区から緩やかに高まってきた土地は、その後、比較的平らな面を呈していたことが窺える。

### 【検出した遺構について】

先に挙げたように当該地域は、昭和40年代の圃場整備により、当時の生活面を含む遺物包含層は削平され残っておらず、現在の耕作面である水田床土を剥いだ後は遺構検出面であった。

遺構は、各調査区で検出されており、8区・9区の調査区、10区の北側付近あたりまで弥生時代後期の遺構が、10区の中ほどに古墳時代初頭の遺構が検出されている。

そのなかで、主な検出遺構は、弥生時代後期の土器群を有する遺構、古墳時代初頭の土師器を有する古墳時代初頭の竪穴式住居跡であった。住居跡はいずれも、隅丸方形の長方形ないし正方形である。

また、9区南側においてSD023～026が検出された。基幹となる溝に、直角に交差する浅い溝状の遺構が多数検出され、歛を立てた際に掘られた溝ではないかと思われる。出土遺物は、摩滅した土師器片がわずかに出土しているのみであって、遺構の時期判断は極めて難しいが、出土してくる土師器片以外に、新しい遺物は見られないこと、また本遺構の直下から、弥生時代の竪穴住居跡が検出されたことから、弥生時代以降の時期であると判断される。

本調査区の東側にあたる新幹線本線部7調査区でも同様の遺構が検出されており、おそらくSD023～026の延長上に位置していることから、同一の遺構と想定される。

### 【出土遺物について】

本遺跡で出土する遺物は、主に竪穴式住居跡及び土坑、溝から出土する遺物を中心である。遺跡の地形のところでも触れたが、当地が削平を受けた際に、上部の遺物包含層等が消滅しているため、出土している遺物はその大半が、遺構埋土及び遺構が廃棄された時期に、限りなく近い時期を示す資料である。

弥生時代後期とする遺構の根柢としては、出土する土器の形態が台付甕（Fig.17 SI001出土遺物）や複

合口縁を有する壺など県内に広く分布している土器群の存在である。

また、重弧文土器（免田式土器）がそれら後期の資料と混在する形で出土しており、重弧文土器編年を参考に遺物の時期を考えると、10区から出土している高杯（272）に重弧文を施すなど後期中葉期中心とした資料から、その時に集落が作られたことが想定される。

さらに、長頸でそろばん型の胴部を有し、胴部上面に重弧文を描く土器、いわゆる免田式土器であるが、本遺跡から出土する資料は、胴部規格に比べ頸部が短く、頸部下から胴部上面に施される横位の凹線文であるが、簡略化されたヘラ状工具による粗い沈線と化しており、免田式の本来の器形と比べると、簡略化されている感は拭えない。

しかし、9区では住居跡から出土している遺物の中に一部、中期後半に位置づけられる遺物も出土している。本線部調査箇所において、中期までさかのぼる遺物・遺構が広がっているため、遺構の埋没過程のなかで混入してきたものと思われる。

10区で検出した SI015からは、多量の遺物が出土している。調査時に、遺物を掘下げながら取り上げた際に、遺構の埋没過程で、廃棄された遺物の広がりが確認された。出土遺物は、古墳時代初頭の土師器を中心である。

10区の竪穴式住居跡 SI013より出土している、小型台付甕（124）は全体形が18.4cmと小さく、一見在地系土器の資料と見まがうものであるが、胴部に見られる、内器面に残る縱方向の筋状痕跡、及び緩く短く外反し、粗い整形が明瞭に残る口縁などの特徴から、朝鮮系無文土器に見られる小型甕の可能性も考えられる。朝鮮系無文土器資料には台付の資料の出土は報告されていないようであるが、在地系土器との結びつきから、地方において出現した資料として捉えられるものではなかろうか。また本資料と共にする、時期を確定させる資料として、在地系弥生土器に見られる台付甕や丸底を呈する壺などとの共伴資料に注目したい。

以上のことなどから、本遺跡は弥生時代後期中葉から古墳時代初頭にかけて、人々が定住した集落跡であることが、調査の結果判明した。遺構の密度は、さほど高くは無いが、広い範囲に遺構の広がりがあることが分かってきた。

最後に本地域は、故江上敏勝氏により、古くから八代地域埋蔵文化財の存在が注目されていた地域の一つである。当時、八代平野は、その大部分が海であったと言われていた時代に、江上氏による詳細な分布調査が行われ、八代平野に遺跡の広がりが予見されていた事を、今回の調査で裏付けられ、確認できた意義のある調査であった。

（長谷部）

## 参考文献

### 報告書作成に関する参考文献

- ・報告書作成ガイド 埋蔵文化財写真技術研究会編
- ・埋蔵文化財写真研究 vol.2~16

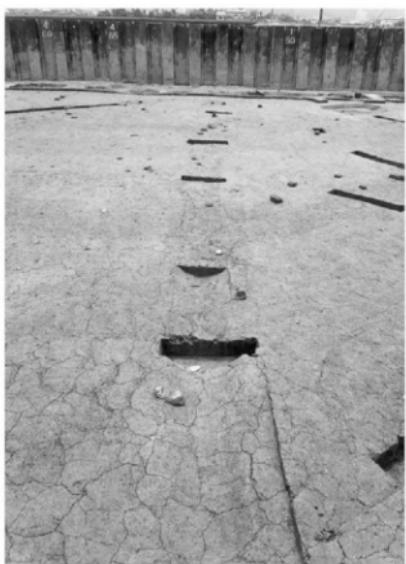
### 出土遺構・遺物に関する参考文献

- ・奈良文化財研究所創立50周年記念学報第68冊『吉備池廃寺発掘調査報告』一百済大寺跡の調査2003 奈良文化財研究所
- ・松山市文化財調査報告書92 愛媛県松山市「葉佐池古墳」松山市教育委員会2003
- ・諸富町文化財調査報告書第2集「村中角遺跡」諸富町教育委員会1985
- ・熊本県文化財調査報告第42集「境古墳群・境遺跡」熊本県教育委員会1980
- ・熊本県文化財調査報告代216集「古麓能寺遺跡・古麓城下遺跡」熊本県教育委員会2003
- ・熊本県文化財調査報告代224集「中片小路遺跡」熊本県教育委員会2005
- ・八代市 洗切遺跡調査団「洗切遺跡調査報告書」1982
- ・八代市文化財調査報告第3集「下堀切遺跡！」八代市教育委員会1988
- ・八代市文化財調査報告第18集「西片町遺跡（園田地区）」八代市教育委員会2002
- ・大分県竹田地区遺跡群発掘調査報告「菅生台地と周辺の遺跡 XV 石井入口遺跡 石井入り口北遺跡」竹田市教育委員会1992
- ・八代市史1 八代市
- ・概説 中世の土器・陶磁器 中世土器研究会編
- ・弥生文化の研究2 生業 雄山閣
- ・弥生文化の研究4 弥生土器II 雄山閣
- ・大田郷町土地寶典 帝国市町村地圖刊行會 昭和15年3月5日
- ・『櫻内第五様式における土器の変革』都出比呂志「考古學論考」小林行雄博士古稀記念論文集 小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会刊 平凡社 昭和57年5月10日
- ・所謂免田式土器の再吟味—免田式土器様式研究の前に—宮崎敬士「久保和士君追悼考古論文集」2001年12月久保和士君追悼考古論文集刊行会

# 写 真 図 版



8区 南側



近世流路



土坑 SK001 梁出状况



土坑 SK001 完掘状況



近世流路 検出状況



土坑 SK06・003 遺物出土状況



弥生時代 土坑・ピット 検出状況



土坑 SK03・005 土層断面



溝 SD009・010 検出状況



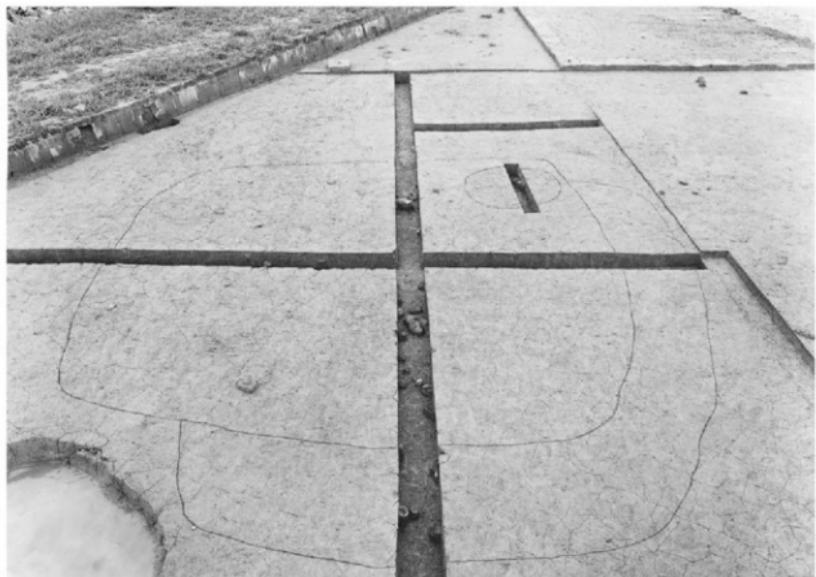
溝 SD009・010・近世流路・土坑 SK007 完掘状況



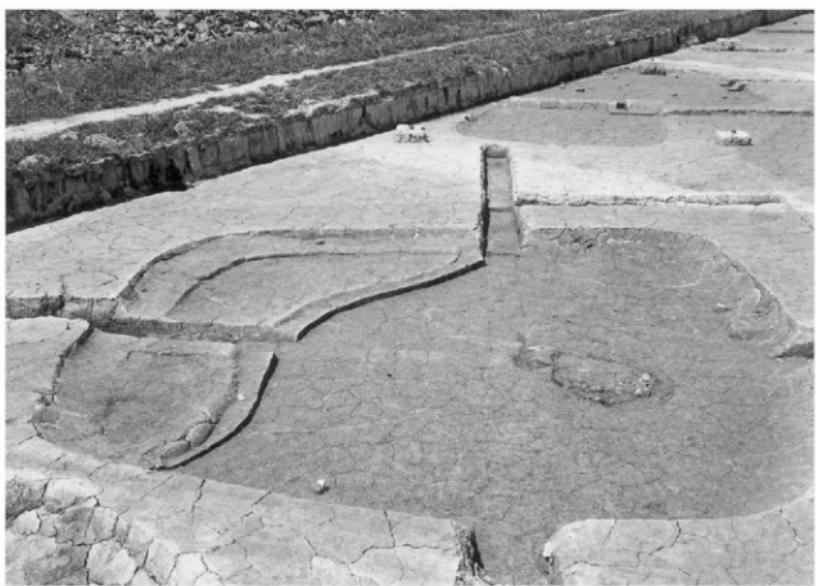
溝 SD011・近世流路 検出状況



近世流路・土坑 SK007・住居 SI001 検出状況



住居 SI001・002 掘出状況



住居 SI001 遺物出土状況



住居 SI001 炉 土層断面



住居 SI001 炉



住居 SI001 遺物出土状況



住居 SI001 P1



住居 SI001 P2 土層断面及び柱材出土状況



住居 SI001 P1・P2・炉 完掘状況



住居 SI001 P2 柱穴完掘及び柱材出土状況



住居 SI007 検出状況



住居 SI007 遺物出土状況



住居 SI007 炉 検出状況



住居 SI007 柱穴検出状況



住居 SI005・006 检出状况



住居 SI004 棟出状況



住居 SI004 遺物出土状況



住居 SI004 完掘状況



住居 SI004 炭化物出土状況



溝 SD016 検出状況



SX001 検出状況



土坑 SK013 遺物出土状況



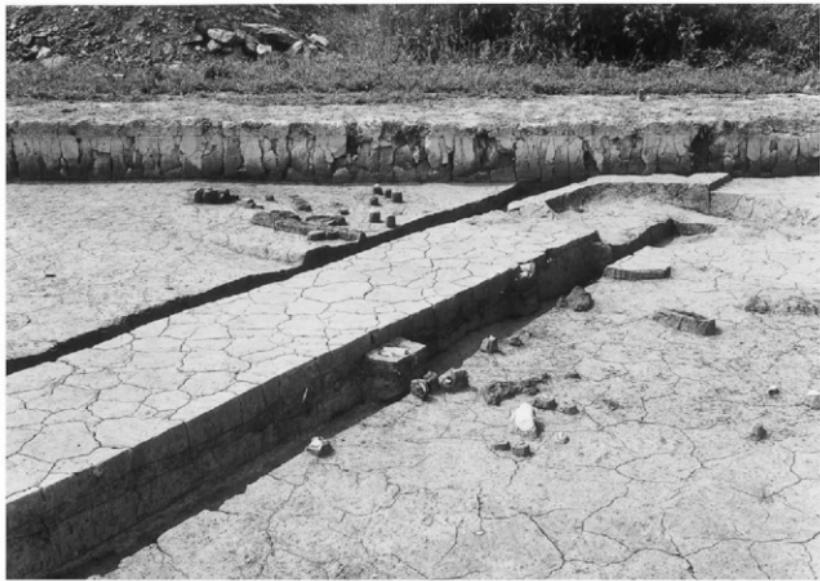
SX001 完掘状況



8区 作業風景



8区 全景 清掃状況



溝 SD016・土坑 SK013 土層断面検出状況



8 区　弥生時代後期窓掘状況



Fig.23 重弧文长颈壶形土器

8区住居 SI003 (41) • 004 (42) 刻目突带文



49

50

8区住居 SI007 出土遗物



8区住居 S1001 弥生後期出土遺物



8区住居 S1002 弥生中期～後期出土遺物



住居 SI008 棱出状況



住居 SI008 炉 掘り方



住居 SI008 完掘状況



住居 SI008 炉 土層断面検出状況



住居 SI009 検出及び遺物出土状況



住居 SI009 炉 土層断面検出状況



住居 SI009 炉 検出状況



住居 SI009 遺物出土状況



住居 SI009 完掘状況



住居 SI010 检出状況



住居 SI010 炉 土層断面



住居 SI010 炉



住居 SI010 炉 土層断面



住居 SI010 P1検出状況



住居 SI011 検出状況



住居 SI011 完掘状況



住居 SI011 棱出状況



住居 SI011 炉付近遺物出土状況



住居 SI011 炉検出状況



住居 SI011 完掘状況



土坑 SK016 检出状况



土坑 SK016 土层断面



土坑 SK016 遗物出土状况



土坑 SK016 完掘状况



溝 SD018・近世流路・土坑 SK018・019 検出状況



土坑 SK018 完掘状況



土坑 SK020 完掘状況



土坑 SK027 完掘状況



土坑 SK042 检出状况



土坑 SK042 土层断面



土坑 SK042 完掘状况



土坑 SK040 檢出状況



土坑 SK032・033 檢出状況



土坑 SK040 土層断面



土坑 SK041 檢出狀況



土坑 SK017・039 檢出狀況



溝 SD020 檢出狀況



溝 SD017 土層斷面檢出狀況



溝 SD023・024 検出状況



溝 SD023・024 完掘状況



溝 SD025 検出状況



溝 SD025 完掘状況



9区 弥生時代後期完掘状況



重弧文長頸壺形土器



9 区住居 SI010 弥生後期出土遺物



9区住居 SI008 弥生後期出土遺物



9区住居 SI011 弥生後期出土遺物



79

9区住居 SI009 重弧文長頸壺形土器



72

74

76

73

78

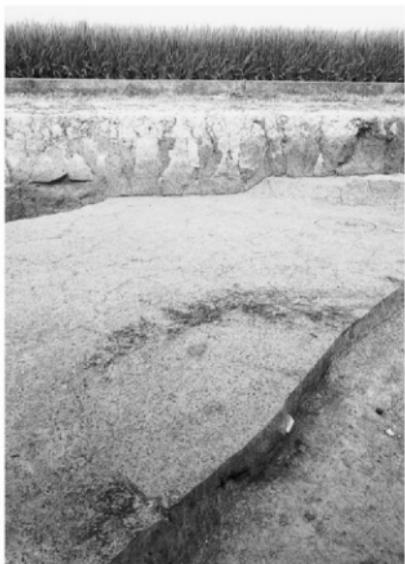
9区住居 SI009 弥生後期出土遺物



住居 SI012 検出状況



住居 SI012 炉検出状況



住居 SI012 炉 検出及び土層断面検出状況



住居 SI012 炉 土層断面



住居 SI012 炉 検出状況



住居 SI012 炉 完掘状況



住居 SI012 遺物出土状況



住居 SI012 完掘状況



土坑 SK052



住居 SI013・溝 SD027 完掘状況



住居 SI013 检出状況



住居 SI013 炉 检出状况



住居 SI013 遗物出土状况



住居 SI013 炉 土层断面



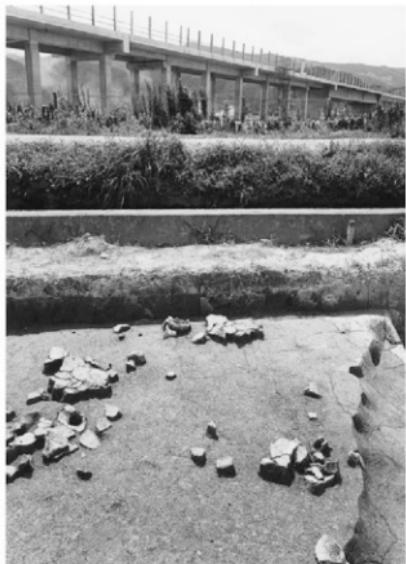
住居 SI014 検出状況



住居 SI014



住居 SI014 炉・周溝 検出状況



住居 SI014 炉 検出状況



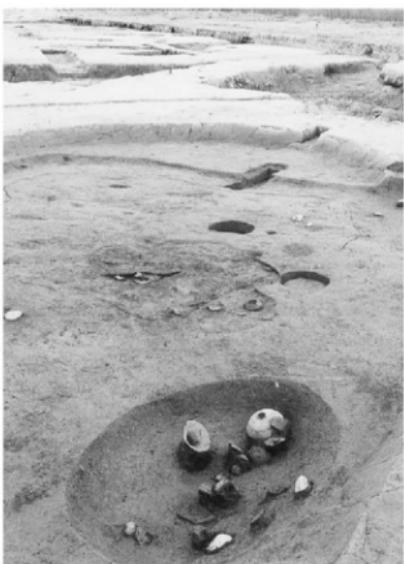
住居 SI014 完掘状況



住居 SI015 遺物出土状況



住居 SI015



住居 SI015 炉・貯藏穴



住居 SI015 完掘状況



住居 SI015 炉 土层断面



住居 SI015 炉 完掘状况



10区 近世～弥生時代後期 遺構完掘状況



266



135

10区 E -23Grid 重弧文長頸壺形土器 頸部

10区住居 SI013 重弧文壺形土器 頸部



136

10区住居 SI013 重弧文長頸壺形土器



127



142

10区住居 SI013 土師器 壺形土器粘土輪積状況

10区溝 SD027 土師器 壺



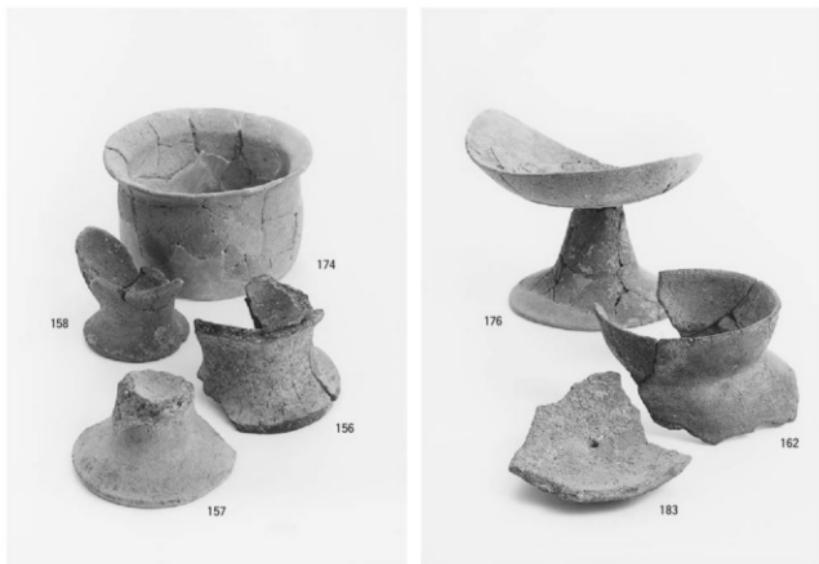
10区住居 SI013 弥生後期出土遺物



10区土坑 SK045 土師器出土遺物



10区住居 SI014 土師器出土遺物



10区住居 SI015 出土遺物

10区住居 SI015 出土遺物



10区住居 SI015 出土遺物



10区 住居 SI015 出土遺物



10区 住居 SI015 出土遺物



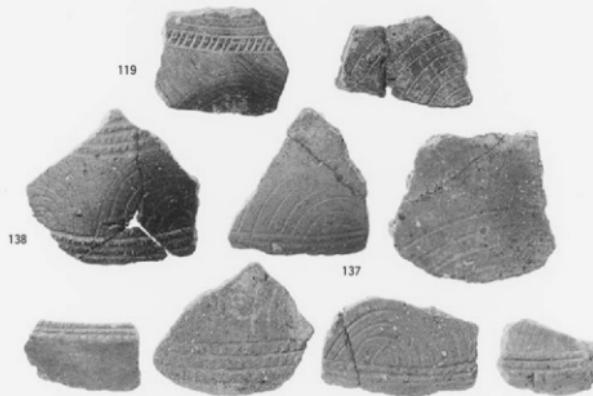
10区 住居 SI015 出土遺物



住居 SI002(61)・Grid 内(8区、62・63・64、10区、277) 出土遺物 8区(59・60)・9区(120)・10区(278・279) Grid 内 出土遺物



10区住居 SI015 出土遺物



重弧文長頸壺形土器

The Nishikata Sonoda Site

西片 園田遺跡

## 例 言

- 1 本書は、平成14年度・平成15年度に実施した熊本県八代市西片町大字小路口に所在する「西片園田遺跡」の埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 調査は、平成14年度、一般県道西片新八代停車場線道路改良事業に伴い実施した。
- 3 調査は、八代地域振興局の依頼を受け、熊本県教育庁文化課が実施し、遺物の整理・保管は熊本県文化財資料室で行った。
- 4 遺跡の発掘調査は、平成14年度・15年度を行い、整理作業は平成16年度に行った。
- 5 国土座標軸による測量基準杭の設定は、西日本測量株式会社に委託した。
- 6 現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げは、野田英治・内田成香・増田直人・本多麻紀が行った。遺物実測は三宅由華・野田愛の指示のもと、井島秀子・宮崎典子・府内博子・金子美代子・渡邊いわ子が行った。遺構製図及び遺物製図は、三宅・野田・内田が行い、一部を（株）九州文化財研究所、（株）写測エンジニアリングに委託した。遺物写真撮影は長谷部善一が行った。
- 7 本文の執筆は、第4章を（株）吉田生物研究所・（株）パレオ・ラボに委託し、それ以外を、高山・増田・内田が行った。
- 8 本書の編集には高山・増田・内田があたり、校正等に際しては、三宅・野田が補助した。
- 9 遺物は、熊本県文化財資料室に保管している。

## 凡 例

- 1 現地での実測図は、以下の縮尺で作成した。  
柱列 20分の1 溝 20分の1 土坑 10分の1 遺物集中部 10分の1、20分の1  
また、本書収録の際には以下の縮尺とした。  
柱列 80分の1 溝 250分の1 土坑 20分の1
- 2 遺構図に示した方位は真北である。
- 3 出土遺物の番号は、図版ごとに通して付した。例えば、第5図の1番の遺物であれば第5図1のように表記した。なお、縮尺は土器が3分の1、鉄器が2分の1である。また木器は不統一のため、各々に明記した。

# 本文目次

## 例言・凡例

第1章 調査の概要.....	1
第1節 調査に至る経緯と調査の経過.....	1
1 調査に至る経緯	
2 調査の組織	
3 調査の過程	
第2節 調査結果の概要.....	7
第2章 西片園田遺跡の調査.....	8
第1節 I・II区の調査.....	8
1 位置と調査区	
2 層序	
3 古代～中世の遺構と遺物	
4 弥生～古墳時代の遺構と遺物	
第2節 III区の調査.....	19
1 位置と調査区	
2 層序	
3 古代の遺構と遺物	
4 弥生～古墳時代の遺構と遺物	
第3節 IV区の調査.....	52
1 位置と調査区	
2 層序	
3 古墳時代の遺構と遺物	
第3章 まとめ.....	59
1 遺跡の立地	
2 弥生～古墳時代初頭の遺構と遺物	
3 古墳時代の遺物	
4 古代～中世の遺構と遺物	
第4章 分析.....	65
1 西片園田遺跡から出土した大型植物化石	
2 放射性炭素年代測定	
3 熊本県西片園田遺跡出土木製品の樹種調査結果	

遺物観察表

写真図版

## 挿図目次

- 第1図 I・II区遺構配置図  
第2図 I区西壁土層断面図  
第3図 第7号流路出土遺物実測図  
第4図 第4号遺物集中部遺物出土状況図と土器  
    実測図  
第5図 第3号土坑遺物出土状況図  
第6図 第12号土坑遺物出土状況図  
第7図 第12号土坑出土木器実測図  
第8図 第13号土坑遺物出土状況図  
第9図 第14号土坑遺物出土状況図  
第10図 I・II区出土土器実測図  
第11図 III区遺構配置図  
第12図 III区西壁土層断面図  
第13図 第15号流路出土土器実測図  
第14図 III区木器出土状況図  
第15図 III区16層出土木器実測図（1）  
第16図 III区16層出土木器実測図（2）  
第17図 III区16層出土木器実測図（3）  
第18図 III区16層出土木器実測図（4）  
第19図 III区16層出土木器実測図（5）  
第20図 III区16層出土木器実測図（6）  
第21図 III区16層出土木器実測図（7）  
第22図 III区16層出土木器実測図（8）  
第23図 III区16層出土木器実測図（9）  
第24図 III区16層出土木器実測図（10）  
第25図 III区16層出土木器実測図（11）  
第26図 III区16層出土木器実測図（12）  
第27図 III区16層出土木器実測図（13）  
第28図 III区16層出土木器実測図（14）  
第29図 III区16層出土木器実測図（15）  
第30図 III区16層出土木器実測図（16）  
第31図 III区16層出土木器実測図（17）  
第32図 III区16層出土木器実測図（18）  
第33図 16層出土土器実測図  
第34図 9、16層出土土器実測図  
第35図 9層出土土器実測図  
第36図 鉄器実測図  
第37図 IV区遺構配置図  
第38図 IV区西壁土層断面図  
第39図 IVb～5層出土遺物実測図（1）  
第40図 IVb～5層出土遺物実測図（2）  
第41図 IVb～5層出土遺物実測図（3）  
第42図 IV層出土鉄器実測図

## 表 目 次

- 土器観察表  
木器観察表  
鉄器観察表

## 写真図版目次

I 区調査開始前遠景（南から）	土器 1 第4図2, 5, 6
第3号土坑遺物出土状況（北から）	土器 2 第13図2, 4
第3号土坑完掘状況（北から）	土器 3 第13図8
第4号遺物集中部遺物出土状況（南から）	土器 4 第41図4, 5
第6号流路完掘状況（東から）	土器 5 第33図2 第34図1
第7号流路遺物出土状況（東から）	土器 6 第33図1
第7号流路木製椀出土状況（東から）	土器 7 第33図2 第34図1
I 区完掘状況（北から）	土器 8 第39図5 第40図4, 5
第9号溝完掘状況（北から）	土器 9 第40図3, 6
第12号土坑遺物出土状況（西から）	土器10 第41図9, 10, 11, 12
第12号土坑完掘状況（南から）	土器11 第34図7 第35図4, 5, 6, 7
第13号土坑完掘状況（東から）	木器 1 第3図4
第14号土坑完掘状況（東から）	木器 2 第20図1, 2 第21図1
II 区完掘状況（東から）	木器 3 第18図1, 3, 4 第19図6 第23図2
第15号流路遺物出土状況（南から）	木器 4 第21図4 第30図4
X-6区木器出土状況（南から）	木器 5 第15図1(表)
鞘出土状況（東から）	木器 6 第15図1(裏)
W-7区桶出土状況（北から）	木器 7 第30図1
横植出土状況（南から）	木器 8 第24図4, 6 第26図1, 3 第29図4
S-6区梯子出土状況（南から）	木器 9 第27図1, 2
W-6区鍔出土状況（西から）	木器10 第32図2
T-5区不明木器出土状況（東から）	
X-7区不明木器出土状況（南から）	
V-6区土器出土状況（東から）	
Y-6区土器出土状況（西から）	
W-5区土器出土状況（南から）	
X-7区東壁土層断面（南から）	
III区南半西壁土層断面（東から）	
III区南半完掘状況（南から）	
IV区調査開始前遠景（北から）	
i, j-5, 6区IV層遺物出土状況（東から）	
第23号遺物集中部遺物出土状況（西から）	
第24号遺物集中部遺物出土状況（東から）	
IV区完掘状況（南から）	
IV区完掘状況（西から）	

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯と調査の経過

### 1. 調査に至る経緯

西片園田遺跡の調査は、一般県道西片新八代停車場線道路改良事業に伴うものである。

西片新八代停車場線道路改良事業は、九州新幹線へのアクセス道路として事業が計画され、熊本県文化課では、遺跡台帳との照合・現地踏査を行った。その結果、本予定地は西片町遺跡など周知の埋蔵文化財包蔵地を含むため、確認調査を行った。

その結果、弥生時代後期を中心とする遺物が発見され、埋蔵文化財発掘調査が必要な旨を八代地域振興局に通知し、協議を重ねた上で調査を行う運びとなった。

この際、西片園田遺跡に関しては直接確認調査を行っていないが、西片町遺跡という周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれるため、平成14年4月24日付け八代工第19号の発掘調査の依頼を受け、平成14年5月から発掘調査に着手した。

### 2. 調査の組織

#### 【平成14年度（2002）発掘調査】

調査主体	熊本県教育委員会	調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	成瀬烈大（文化課長）	調査責任者	成瀬烈大（文化課長）
	島津義昭（教育審議員・課長補佐）		島津義昭（教育審議員・課長補佐）
調査総括	木崎康弘（調査第2係長）	調査総括	西住欣一郎（調査第2係長）
調査事務局	小田信也（教育審議員・課長補佐）	調査事務局	吉田 恵（課長補佐）
	中村幸宏（主幹兼総務係長）		棚杭正義（主幹兼総務係長）
	天野寿久（主任主事）		天野寿久（主任主事）
	杉村輝彦（主事）		杉村輝彦（主事）
調査担当	野田英治（文化財保護主事）	調査担当	野田英治（文化財保護主事）
	内田成香（嘱託）		内田成香（嘱託）
	本多麻紀（嘱託）		増田直人（嘱託）

#### 【平成16年度（2004）報告書作成】

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	島津義昭（文化課長）
	倉岡 博（課長補佐）
調査総括	西住欣一郎（調査第2係長）
調査事務局	吉田 恵（課長補佐）
	棚杭正義（主幹兼総務係長）
	天野寿久（主任主事）
	小谷仁志（主事）
調査担当	高山直也（文化財保護主事）
	増田直人（嘱託）
	内田成香（嘱託）
	三宅由華（嘱託）
	野田 愛（嘱託）

調査指導及び協力者（敬称略）

山口謙治（福岡市埋蔵文化財センター所長）

甲元眞之（熊本大学文学部教授）

山田昌久（東京都立大学教授）

整理協力者

牛島晋治 福田匡朗 多賀晴司 末永浩平

### 3. 調査の過程

本調査は、平成14（2002）年5月20日（月）から平成15（2003）年12月12日（金）まで行った。

#### 【5月】

（20日～23日）

I区内の表土剥ぎを始める。マンガン粒を多く含む明黄褐色土層（IV層）上面でそろえる。

#### 【6月】

10日、資料室より機材搬入

11日、作業開始。調査区南側から掘り下げを行う。

18日、今月は雨が多く水抜きに時間をとられる。先行トレンチを6本あけ基本層序を確認する。

19日～、調査区南西部分で、黒色の骨片が出土した。また、G-8区で土器片が集中して出土した。

#### 【7月】

1日～、6月同様、全体的に雨が多い。粘土坑と思われる第1号土坑の完掘を行う。

17日、第1号土坑の完掘と、写真撮影、実測を行った。

18日、下層の包含層を確認するため、サブトレンチを2ヶ所入れる。その結果、弥生の包含層と思われる層を確認した。

23日、D-9区の土坑を第2号土坑とし、写真撮影と実測を行った。

25日～、重機で調査区をさらに40cmほど掘り下げた。

#### 【8月】

1日～、B-9、10区の粘土から、多数の木片が出土した。表面が炭化し、加工のある柱材などを確認した。

7日～、M-9区から多数の木器が出土した。この部分を第3号土坑とし、出土状況の写真撮影を行う。

#### 【9月】

2日～、第3号土坑の実測及び遺物の取り上げを行う。複雑に土が堆積しており、何度も氾濫を繰り返していた様子が窺える。木片はこれらの氾濫によるものと推測できる。

5日～、J-11区から環と思われる土器片が多量に出土した。ここを第4号遺物集中部とする。

10日、第4号遺物集中部は写真撮影後、平面図の実測及び遺物取り上げを行う。

12日～、第3号土坑については木片がさらに出土した。そのため、2度目の出土状況平面図を作成した。その後完掘し、写真撮影と実測を行う。調査区の東側部分にある大きな流路（灰褐色粘土層）の中から出土する遺物は、古代・中世のものが多く、西側部分から出土する遺物は弥生・古墳時代のものが多い。

#### 【10月】

1日～、H-9区から骨片が多数出土、縄文土器と思われるものや黒曜石も出土した。この部分を第5号遺物集中部とし、写真撮影と実測、遺物取り上げを行い完掘する。また、C-8、9区の流路を第6号流路とし掘り下げを行う。

- 7日、第6号流路の写真撮影と実測を行い完掘する。
- 8日、北側をさらに掘り下げる。C-10区の掘り下げで新たに加工した木器が出土した。
- 9日～、C-11、D-11区付近で多数の木片が確認され第7号流路とした。自然流木に混じり、加工痕のある木器も多數出土した。同じ場所からは滑石製石鍋も出土した。第7号流路を完掘し、写真撮影後実測をする。
- 27日、I区の調査終了。
- 28日～、I区の図面と遺物の整理を行う。

#### 【11月】

- 5日～、引き続きI区の整理作業を行う。
- 18日～、II区の表土剥ぎを行う。
- 20日～、精査の後II区の掘り下げを行う。黄褐色土層に遺物を多く含む。
- 28日～、II区東側を南北にはしる2本の溝を第8号溝、第9号溝とする。それぞれ、写真撮影をし、実測を行う。

#### 【12月】

- 2日～、各区で掘り下げを行う。
- 10日～、I-8杭から西側にかけての部分で、土器片がまとまって出土した。壺の口縁部や胴部などや大きめの土器である。ここを第10号土坑とし掘り下げを行った。
- 11日、第10号土坑の実測、撮影を行う。
- 12日～、重機により掘り下げを行う。
- 18日～、N-8区で、土器片が多数出土する部分を第11号遺物集中部とし、遺物出土状況の実測と撮影を行った。さらにM-8、N-8区を掘り下げ、暗灰色土層の広がりを確認。多数の木片が集中してみられ、それぞれ第12号土坑、第13号土坑とした。また、L-8区付近でも木片が出土し第14号土坑とした。
- 27日、第12号土坑、第13号土坑、第14号土坑の遺物出土状況の写真撮影を行う。

#### 【1月】

- 6日～、第12号土坑、第13号土坑、第14号土坑の遺物出土状況図を作成し、遺物を取り上げる。併せて平面と断面図も作成した。
- 15日、II区の調査終了。

#### 【3月】

- 3日、III区調査開始
- 5日～、III区表土剥ぎ開始。
- 14日～、南側から掘り下げを行う。遺構らしきものは確認できないが、b-5、b-6、c-7区にかけて土器片が集中して出土した。

#### 【4月】

- III区は、東西に隣り合う2区をあわせて、1つの区として掘った。
- 9日～、U-6、7、V-6、7区の掘り下げを行う。U-6、7、V-6、7区付近には大きな流路がありこれを第15号流路とした。
- 15日、第15号流路の遺物出土状況の写真を撮った。N-6、O-6、P-6、Q-6区の掘り下げを行う。
- 16日、第15号流路の平面図を作成し遺物上げを行う。

17日～、第15号流路を完掘し写真撮影を行う。あわせて土層断面図を作成した。U-5、V-5区の掘り下げを行う。

21日～、S-5、6、T-5、6、U-7、8、V-7、8、X-5、6、Y-5、6区の掘り下げを行う。

#### 【5月】

1日～、X-4、5、6、Y-4、5、6、Z-4、5、6、a-4、5、6、b-5、6、7、c-5、6、7区の掘り下げを行う。

9日、b-6区の土器集中部を第16号遺物集中部とし、遺物出土状況の実測と写真撮影を行う。また、Z-6区から、鉄製の鎌が出土した。

12日、a-5、Z-5区付近の土器集中部分を第17号遺物集中部とした。第17号遺物集中部の遺物出土状況を写真撮影を行う。また、鉄鎌の実測を行った。

13日、X-6区にサブトレンチを入れ青灰色砂の下から木片を含んだ黒褐色の粘土がみられた。

14日～、a-4、5、6、b-5、6、c-5、6区を掘り下げる。

19日～、Z-5、6区の掘り下げと並行して西壁に沿ってサブトレンチをいれる。現在の面より70～80cm程下から青灰色粘土がみられた。

26日～、Y-7、Z-7区を掘り下げる。

28日～、Y-5、X-7区を掘り下げる。

#### 【6月】

2日～、III区を重機により掘り下げる。

6日、X-5、6区を掘り下げる。X-7区では、免田式土器の胴部が完形で出土した。遺構らしきものは確認できない。

9日、W-5、6、7、X-5区の掘り下げを行う。前日出土の免田式土器のものと思われる頸部も出土した。

10日～、R-6、7、S-6、7、T-5、6、U-5、6、7、V-5、6、7区の掘り下げを行う。

全体的に雨が多い。毎日の水抜きで大幅に時間をとられた。復旧に手間も暇もかかった1ヶ月であった。

#### 【7月】

1日～、土師器の甕の破片や木器が出土した。木器として、横槌や臼の一部などが出土した。今月も雨が多く、水抜きに時間をとられる。

7日～、U-7の泥炭層を掘り下げる。あわせてS-6、T-7区の遺物出土状況図を作成した。

9日、S-6～V-6黒褐色土層を掘り下げる。

10日、第19号遺物集中部、第20号遺物集中部掘り下げ。あわせて第18号遺物集中部の平面図を作成した。

11日～、第20号遺物集中部掘り下げ。第19号遺物集中部については出土状況図を作成後遺物を取りあげる。第20号遺物集中部の木器出土状況を撮影した。第20号遺物集中部では木製の鞘が出土した。

14日～、第18号遺物集中部、第19号遺物集中部、第20号遺物集中部の遺物上げを行う。第19号遺物集中部から田舟、第20号遺物集中部から平鎌が出土した。

#### 【8月】

1日～、W-5、X-5、X-6、Y-6区を掘り下げる。

7日、W-5、X-5区の木器の集中部を第21号遺物集中部とし、遺物取り上げを行う。

11日～、X-6、Y-6区の掘り下げを行う。

18日～、第21号遺物集中部の掘り下げ。板状の木器3点、盤2点、モミスクイ2点が出土した。

20日～、V-6、W-5、W-6、W-7、X-7区を掘り下げる。黒褐色土層の中に、杭状のものや、

板状のものが含まれている。

29日、W—6、7区間のベルト崩しを行う。

30日～、V—5、6区を掘り下げた。また、X—7区北側の土層断面図、W—7区の遺物出土状況図の作成を行う。併せて写真撮影も行った。

#### 【9月】

1日～、V—5、6、7区を掘り下げた。遺物出土状況図の作成と写真撮影を行う。

3日、III区の全面精査を行う。また、完掘状況の写真撮影を行った。

4日、西壁を重機で削り、図面がかける状況にしてもらう。その間に調査区の後片付け、木器の水換えなどを行う。

5日、西壁を精査し、写真を撮影するとともに土層断面図を作成した。本日でIII区は調査終了。

8日～、III区の図面整理と写真整理を行う。併せて木器の実測と、写真撮影を行っていく。

24日、本日より調査IV区にはいる。そのため、調査区の草刈りを始める。

25日、先行トレーンチ1～6の掘り下げを行う。そして、土層断面図の作成と写真撮影を行う。

27日～、重機によりIV区の表土剥ぎを行う。

#### 【10月】

1日～、調査区全域の清掃を行う。また、機材の搬入を行った。調査区の壁際に水抜きのための側溝を東側と北側に掘った。

3日、表土剥ぎ後の清掃を行う。とともに、調査区南端に試掘トレーンチを入れた。表土下約2mで礫層を検出。さらに南に向かって急激に下がっている。わずかながら西側へも傾斜していた。礫層の上には青灰色～黒褐色土が3層入っており、泥炭層は基本的に無いものと思われる。

6日～、調査以前に、南側にあった側溝に伴う搅乱の除去を行う。先行トレーンチをさらに掘り下げた。

3、4、5トレーンチを青灰色の粘土まで掘り下げた。乳白色に近い粘土の上にある暗灰色粘土から、どのトレーンチでも土器が1点出土している。3、4トレーンチでは、茶褐色の遺物包含層が現在の高さから約20cm下にみられる。3トレーンチではこの層が厚く約40cmある。5トレーンチではみられない。そのかわりに黒褐色の粘土が約20cmみられる。どのトレーンチでも木器を含んだ泥炭層はみられなかった。サブトレーンチでも茶褐色の遺物包含層がみられ、北から南、西から東へとおちている。この包含層のみられない北側の部分では砂がありその下は礫である。

9日～、g—3、4、h—3、4区の掘り下げ。これらは、茶褐色の遺物包含層の上面まで下げた。あわせて、西壁と東壁の土層断面図を作成した。

10日～、i—5、6、j—5、6区の掘り下げを行う。黄褐色粘土層を掘り下げ遺物包含層である茶褐色粘土層の上面を検出した。

15日、k—5、6とi—5、6区を掘り下げる。k—5区の東側にしか包含層はみられず南北方向ではk—6区の北側半分ほどで徐々に薄くなり消えてしまう。この包含層がなくなると同じレベルのところから砂混じりの粘土がみられる。

16日～、j—3、4とi—3、4区を掘り下げる。さらにg—5、6、h—5、6区の南北と東西にサブトレーンチをいた。東西のサブトレーンチから高杯の杯部と思われる部分と甌の胴部が出土した。

21日～、g、h—3、4、5、6、i、j—5、6区に広がる茶褐色粘土層の包含層を掘り下げた。また、南側の深掘をした部分の東西の土層断面の写真と図面を作成した。

23日、g、h—3、4区は茶褐色粘土層を掘り下げた。g—4区から高杯、甌などが出土した。次にi、j—3、4区を掘り下げた。i—4区では包含層がみられるがその他の区ではみられず砂が広がる。

24日～、i, j-3, 4区の緑青灰色砂を掘り下げた。i, j-5, 6区は茶褐色粘土の包含層を掘り下げた。さらにk-5, 6区を掘り下げる。遺構・遺物ともみられなかった。

28日、c-3, 4, d-3, 4, 5区の掘り下げを行う。また、k-3, 4, 5, 6区の精査を行う。

29日、g-3, 4, h-3, 4, h-5, i-5区に広がっていた遺物集中部の北側を第22号遺物集中部、南側を第23号遺物集中部とする。第22号、第23号遺物集中部の遺物出土状況と個別の写真を撮る。その後i-3, 4区側にサブトレンチをいれる。第23号遺物集中部では、今まで出土していた土器より若干低いレベルで土師器が多数出土した。新たに壺2点、高杯1点、小型丸底壺2点が完形に近い形で出土している。しかし今現在では、遺構のプランは確認できない。

30日、i, j-3, 4, h-5区を掘り下げた。また、第22号遺物集中部の遺物出土状況写真、g, h-3, 4, i, j-5, 6区の遺物散布状況の写真を撮った。i, j-3, 4区は黒褐色粘土層を掘り下げている。

31日、i, j-5, 6, i, j-3, 4区を掘り下げ。第23号遺物集中部の遺物出土状況図作成と遺物出土状況の写真撮影を行う。第23号遺物集中部は下から遺物が出土するため再度出土状況を撮りなおした。i, j-3, 4, 5, 6区は若干カーボンの集中部があるが遺構プランはみられない。

#### 【11月】

4日、i, j-5, 6, g, h-5, 6区の掘り下げを行う。第23号遺物集中部の遺物を取り上げた。さらに掘り下げを進めたところ壺の胴部、高杯、小型丸底壺などが数点出土した。このレベルでも遺構プランは確認できず断面で見ると茶褐色の層がおち始めるところであるため流れ込みによるものと思われる。

6日、g-3, 4, h-4, 5, i-5区を掘り下げた。g-4区は5層上面にはいっているが遺物が数点出土している。他の区は茶褐色粘土から出土した。

7日、g-3, 4, h-3, 4, 5, 6, i-5, 6区に広がる層を掘り下げを行う。g-3, 4, h-3, 4区ではIV層の下に広がる5層の黒褐色粘土もあわせて掘り下げ。

8日、i, j-5, 6, g, h-3, 4区の掘り下げ。遺物が集中するのはgとhの境付近でh-3, 4区は遺物が少なくなる。

11日～、g, h-3, 4, i, j-5, 6区の精査を行う。またg, h-3, 4, i, j-5, 6, g, h-5, 6区の遺物上げを行う。あわせてi, j-5, 6区については土器集中部の写真撮影を行った。

13日～、g, h-3, 4区を精査し遺物集中部を第24号遺物集中部とし、出土状況の写真と図面をとる。i, j-3, 4区は精査し遺構確認をする。遺構らしきプランがg, h-3, 4, i, j-3, 4, 5, 6区にみられたがどれも浅く遺構とは考えにくい。

16日、g, h-3, 4区に残っていた遺物をすべて取り上げた。

17日、第25号土坑、ピット等の平面図および断面図を作成した。第25号土坑には大きな炭化物が3ヶ所出土した。

18日～、完掘状況の写真を撮るために清掃を行う。また、i, j-3, 4, 5, 6区にサブトレンチをいれた。

20日、西側の土層断面を描くために壁の清掃を行う。

21日～、東西側壁の土層断面の写真撮影と図面作成を行う。その後、撤収に向けての片付けを行う。

25日～、IV区の図面整理と写真整理、事務所内の整理を行う。

#### 【12月】

1日、撤収に向けて事務所周辺の後片付けを行う。道具類を洗う。

2日～、撤収に向けて調査機材の整理を行う。

4日、調査機材の撤収。

5日、コンテナハウス撤収。

8日～、撤収に向けてのコンテナハウス周辺の清掃。

12日、調査終了

## 第2節 調査結果の概要

西片園田遺跡は、熊本県八代市西片町大字小路口に所在する。本遺跡は、西片町遺跡という周知の埋蔵文化財包蔵地に含まれる。西片町遺跡は、弥生時代後期の遺跡であり、本遺跡においても、弥生時代の木器を中心とした貴重な遺物が出土している。

調査区はⅠ区からⅣ区までである。本遺跡の特徴として、遺構数は少なく遺物の集中している部分が点在していたということがあげられる。

Ⅰ・Ⅱ区では、溝状遺構と流路、土坑が多数みられ弥生時代から中世にかけての遺物が多数出土した。水が、何度も場所を変えながら流れた部分であったと考えられる。また、Ⅲ区についても遺構といえるものはほとんどなく、明らかに加工痕のある木器が大量に出土したことがあげられる。今回出土遺物の中心となるのは、これらの木器である。本遺跡からは多数の木器が出土したが、もっとも数が多かったのは「盤」である。またそれよりも大型の「舟」なども出土している。Ⅳ区については、Ⅰ～Ⅲ区のような水の流れた痕跡はなく木器も出土していない。これはⅣ区が、他の調査区よりも標高が高いためだと考えられる。

このように、西片園田遺跡においては、中心となるものは木器であり、今後の貴重な資料となりうるものである。これから、その詳細について述べていきたい。(高山、内田)

## 第2章 西片園田遺跡の調査

### 第1節 I・II区の調査

#### 1. 位置と調査区

西片園田遺跡は、全調査区を北からI区からIV区に分けて調査を行った。今回の調査区の中で最北端に位置するI・II区のそれぞれの調査面積は、I区1400m<sup>2</sup>、II区200m<sup>2</sup>である。遺構数は少なく、遺物の集中部が数ヶ所見られた。それらの時期は、弥生時代から中世のものであった。検出した遺構は、溝状遺構と流路、土坑である。I・II区はIV区よりも1段低い位置にあり、溝状遺構や流路の存在から、かなり低湿な状況にあったものと考えられる。

#### 2. 層序

西片園田遺跡のI・II区の基本土層について述べる。

- I層 茶褐色土層（表土）マンガン粒を含む。鉄分も全体にみられる。
- II層 橙茶褐色土層（水田底土）硬くしまり、砂粒を含む。土中に橙色の鉄分が浸透しており、下部には厚く沈着している。
- III層 黄褐色土層 鉄分が多く含む。
- IV層 明黄褐色土層（Hue2.5Y6 / 6）粘性はあるがしまりはあまりない。灰白色の粘土を筋状に含む。土中に黒色の0.5~1.0cm大の黒色マンガン粒を多く含む。（遺物包含層）
- IVa層 明黄褐色土層（Hue2.5Y6 / 6）土質は、III層に似ているが灰白色の粘土を筋状に含み、マンガン粒も砂も含む。
- IVb層 灰黄色土層（Hue2.5Y6 / 2）III、IV層に似ており、灰色の粘土を筋状に含みマンガン粒も含む。
- V層 灰褐色土層 マンガンを含む。
- VI層 青灰色混砂礫（Hue10BG6 / 1）2cm大のものを中心に3~5cm大の円礫を多量に含み、その間に砂を含む。
- VII層 青灰色土層 砂を含む。橙色の鉄分をブロック状に含む。
- VIII層 暗灰色土層
- IX層 青灰色土層 橙色の鉄分をブロック状に含む。

#### 3. 古代～中世の遺構と遺物

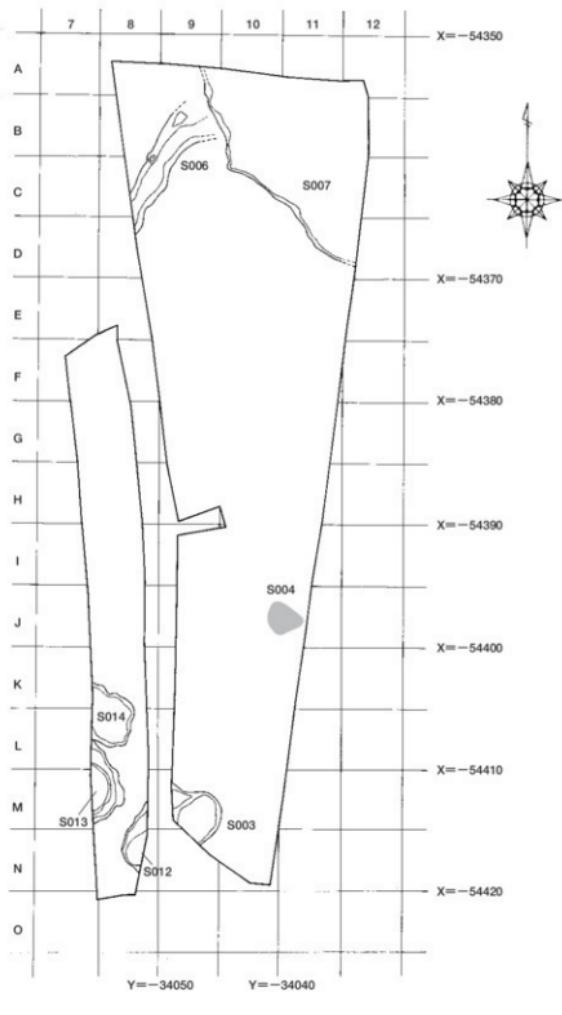
古代から中世の遺構と遺物は、第7号流路、第4号遺物集中部で検出された。

##### 第7号流路

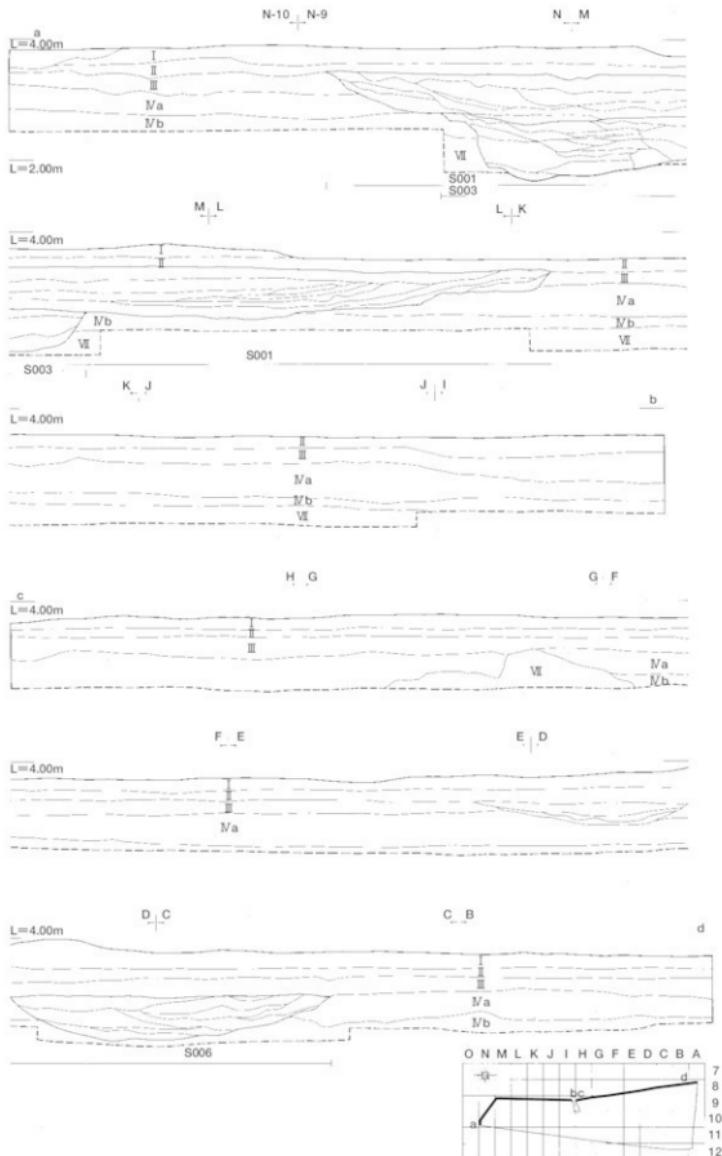
第7号流路は、I区の北端に位置する。深さ15.0cm程と比較的浅い流路で、埋土は黒色の泥炭層である。埋土中には木片や木葉等の植物遺体が多く含まれていた。出土した土器は小片で、全体を復元できるものはほとんどない。（第3図）その中で滑石製の石鍋が1点出土した。（第3図5）この石鍋は、外面はほぼ全面に煤が付着している。また、木器では削り抜きの楕が1点出土した。（第3図4）この楕は、タテ方向に割れており1/2しか残存していないが、非常に丁寧に作られており内外面ともに極めて滑らかに仕上げられている。

##### 第4号遺物集中部（第4図）

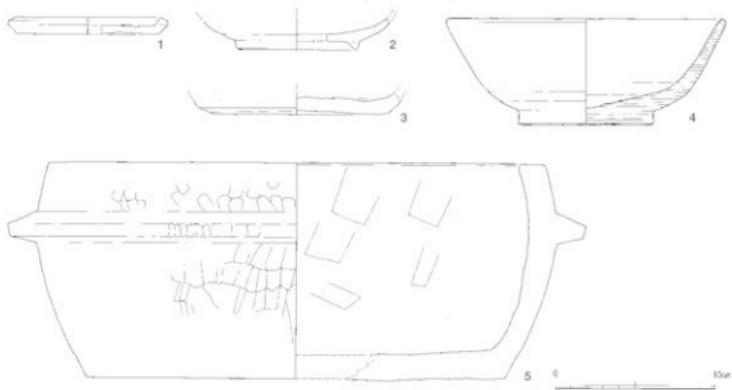
I区の南西で土師器がまとまって6点出土した。これらはほぼ完全に復元されるものであったこともあり、周囲を精査したが遺構を確認することはできなかった。後述の如く、本遺跡はかなり低湿な環境にあること



第1図 I・II区遺構配置図



第2図 I区西壁土層断面図



第3図 第7号流路出土遺物実測図

から、周囲からの流れ込みの可能性が高いと判断される。ヘラケズりが顕著で外面はかなり凹凸がある。口径はどれも12.0cm前後と大きさが描っており、いずれも外面に沈線のような深く細い溝が刻まれている。しかし、直線的に引かれてはおらず間隔も不定である。

#### 4. 弥生～古墳時代の遺構と遺物

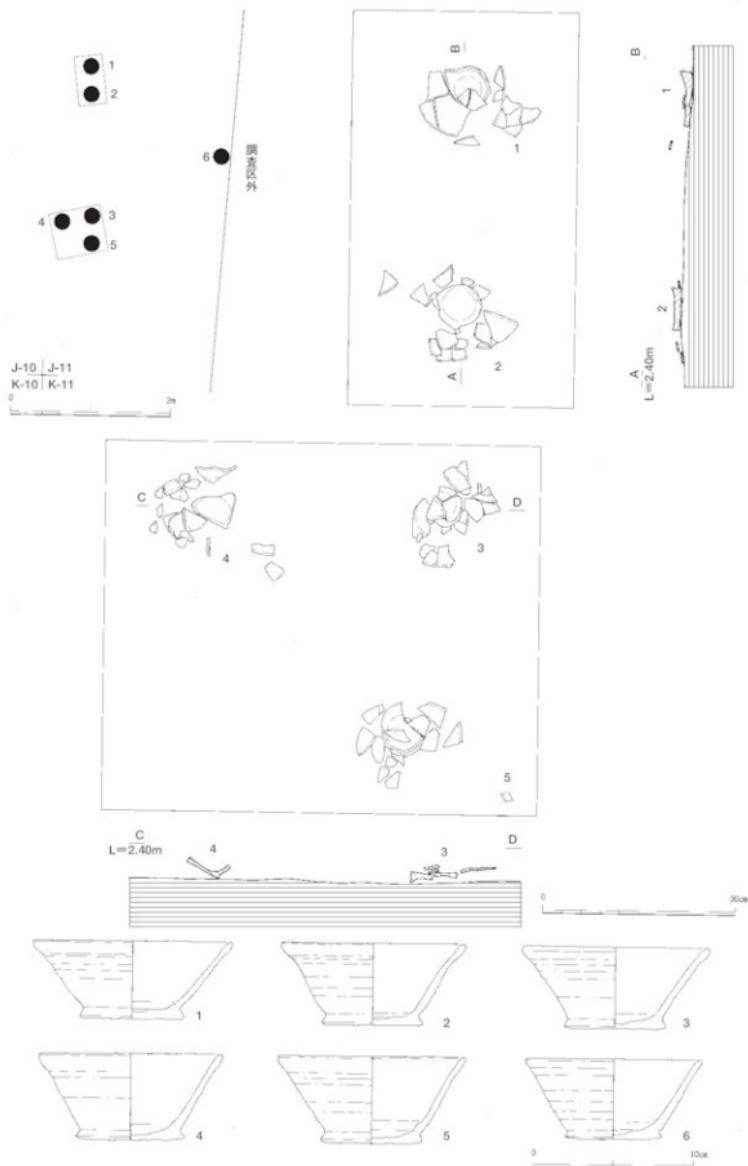
弥生時代から古墳時代の遺構は、第3、12～14号土坑の4基を検出した。

##### 第3号土坑（第5図）

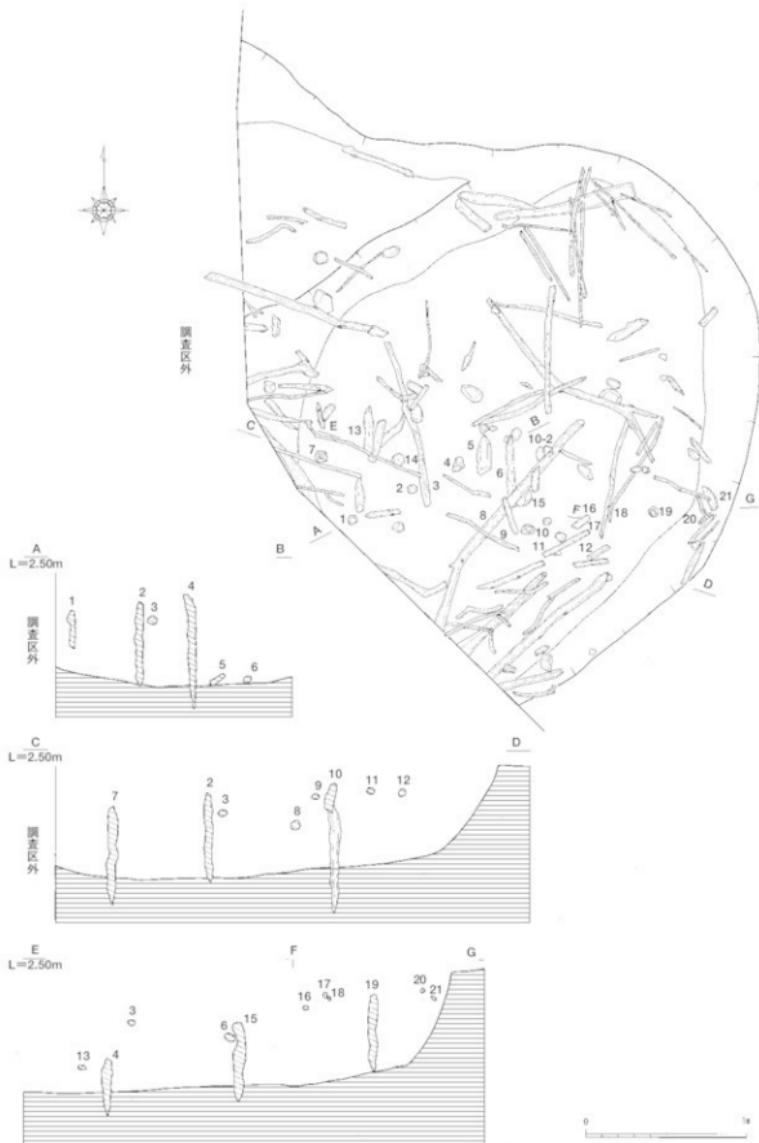
第3号土坑は、I区の南西端に位置する。第3号土坑の南側部分は、調査区外に広がるため、全体の形状は不明であるが現状で東西3.2m、南北4.5m、深さは最大で0.8mあり、北側は一段浅く平坦面をもっている。埋土は粘土と砂の互層であり大量の木片が出土した。それらの木片は、加工痕が見られないものがほとんどだったが、加工痕のある木片の大半は、先端を尖らせて杭として打ち込まれたものと考えられる。中には、突き刺された状態で出土したものもあるが、大半は土坑底面より上に入っていることからこの土坑が埋没していく過程で打ち込まれたものと思われる。また、埋土中からは弥生土器が出土している。いずれも小片となっているが、甕の脚部分などがある。（第10図1～3）

##### 第12号土坑（第6図）

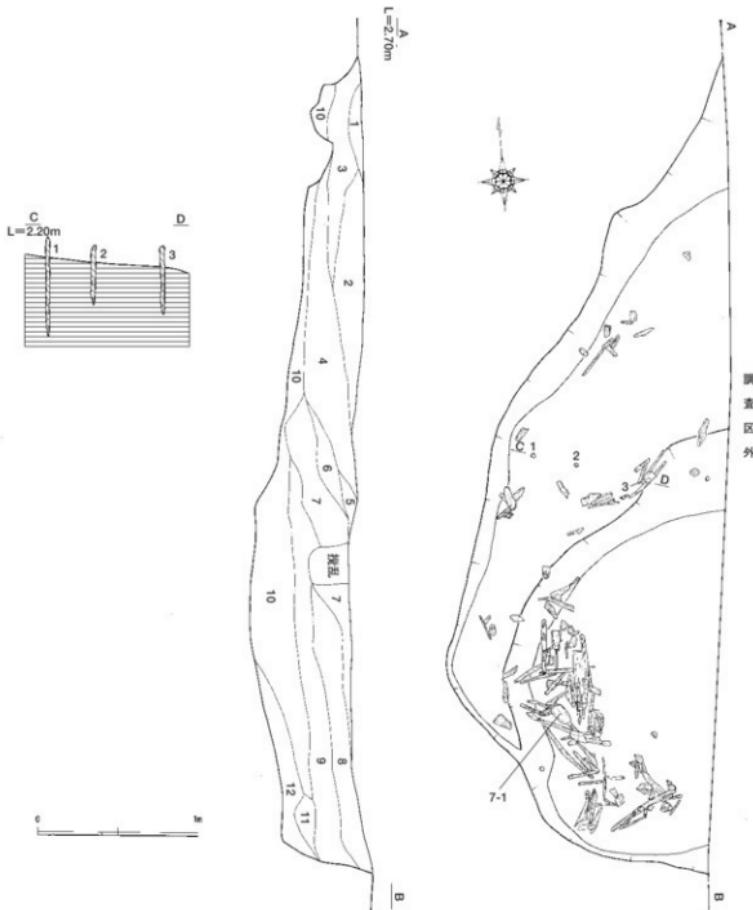
第12号土坑は、II区の南西側に位置する。この土坑は、東側が調査区外へとのびており、全体の形状は不明であるが、東西1.5m、南北5.5m、深さは最大で0.6mである。また北側は一段浅く掘り残されている。埋土は、粘土と砂が互層に堆積している。第12号土坑からも木片が多く出土したが、出土した木片の多くは加工痕のないものであった。ただし、本数は少ないが先端を尖らせて杭として使用されたと思われるものがあった。遺物は、弥生土器の小片がわずかに出土した（第10図5）他横櫛（第7図）が1点出土した。遺存状態はあまりよいとはいせず、全体的に木目にそって縦方向にひび割れが進行しているほか、表面も荒れた部分が大半で、加工痕ははっきりしない。身の中央部分が平坦になっているが、ここには枝の痕跡があり、枝を切断する際に平坦になったものと思われる。形状としては完成しているが、全体的に使用痕も少ないとから、それほど使い込んでいたとは思われない。



第4図 第4号遺物集中部遺物出土状況図と土器実測図



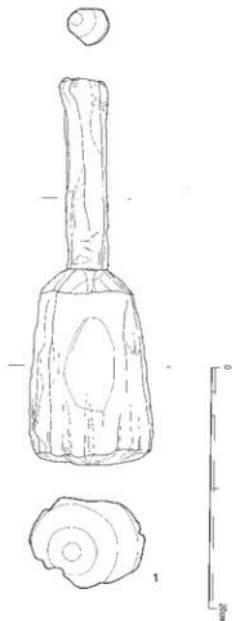
第5図 第3号土坑遺物出土状況図



- 1 青灰色砂 粘土の混じりなし。  
 2 黒色土 青灰色の粘土をブロックで含む。  
 3 暗褐色土 木片を多く含む。  
 4 青灰色砂 粗い砂と細かい砂を含む。  
 5 茶褐色砂 粗い砂。  
 6 灰色砂 細かい砂。  
 7 青灰色砂 粗い砂と細かい砂を含む。  
 8 茶褐色砂 部分的に青灰色の砂が混じる。  
 9 灰色砂 小礫が混じる。  
 10 暗黒色砂 4よりも粗い砂を含み、木片を含む。  
 11 青灰色土 上部に粗分を含む。

第6図 第12号土坑遺物出土状況図

第12号土坑は第3号土坑と掘り込み面が同じIV b層であること、深さや形状で一致する部分があることから、同一の土坑である可能性を考えられる。ただし、埋土は異なっており、現状では可能性を指摘するにとどめたい。



第7図 第12号土坑出土木器実測図

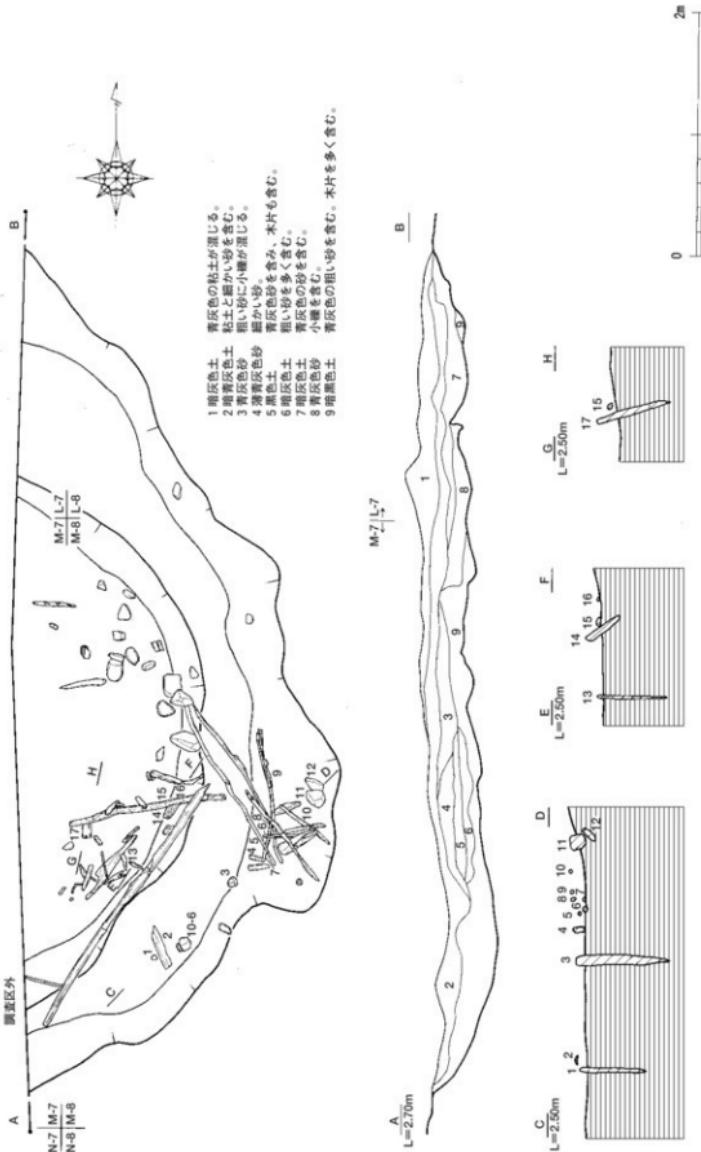
#### 第13号土坑（第8図）

第13号土坑は、II区の南西側に位置している。西側は調査区外へのびているが、東西2.0m、南北5.2m、深さ0.4mであり、およそ半円形となっている。ごく浅い土坑であるが2段に掘り込まれている。埋土からは、第12号土坑と同様に木片が多く出土し、その中には杭状に加工され、土坑底面に深く刺さった状態で出土したものもある。また、埋土中に人頭大の河原石も含まれており、第12、14号土坑とは異なっている。遺物の出土量は少なく、弥生土器の破片が数点出土したのみである。（第10図4、6）

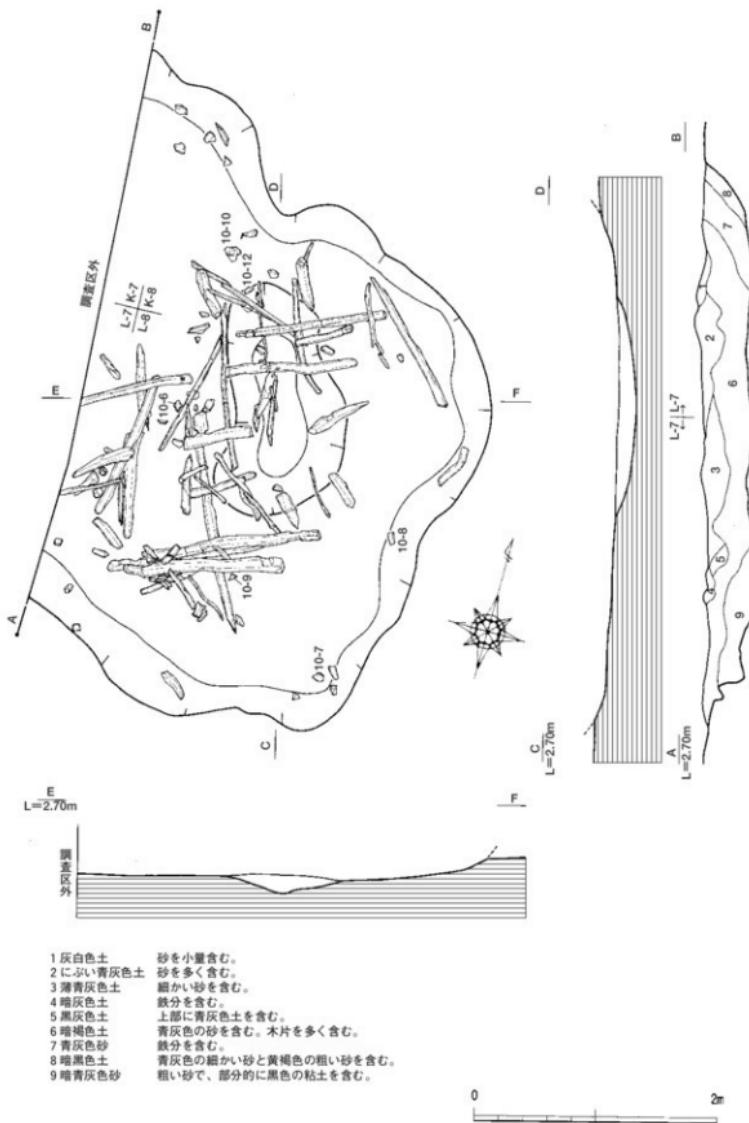
#### 第14号土坑（第9図）

第14号土坑はII区の南西側に位置している。第13号土坑同様、西側は調査区外へのびているが、現状で東西2.7m、南北4.2m、深さは最大で0.3mである。埋土は他の遺構に比べ砂が少なく、粘土を中心としている。出土した木片は、太く形状もしっかりとしたものが多くみられた。これらの中には柄穴のあけられたものもあることから建築部材ではないかと考えられる。土器は、弥生土器や土師器の小片が出土した。（第10図7～12）

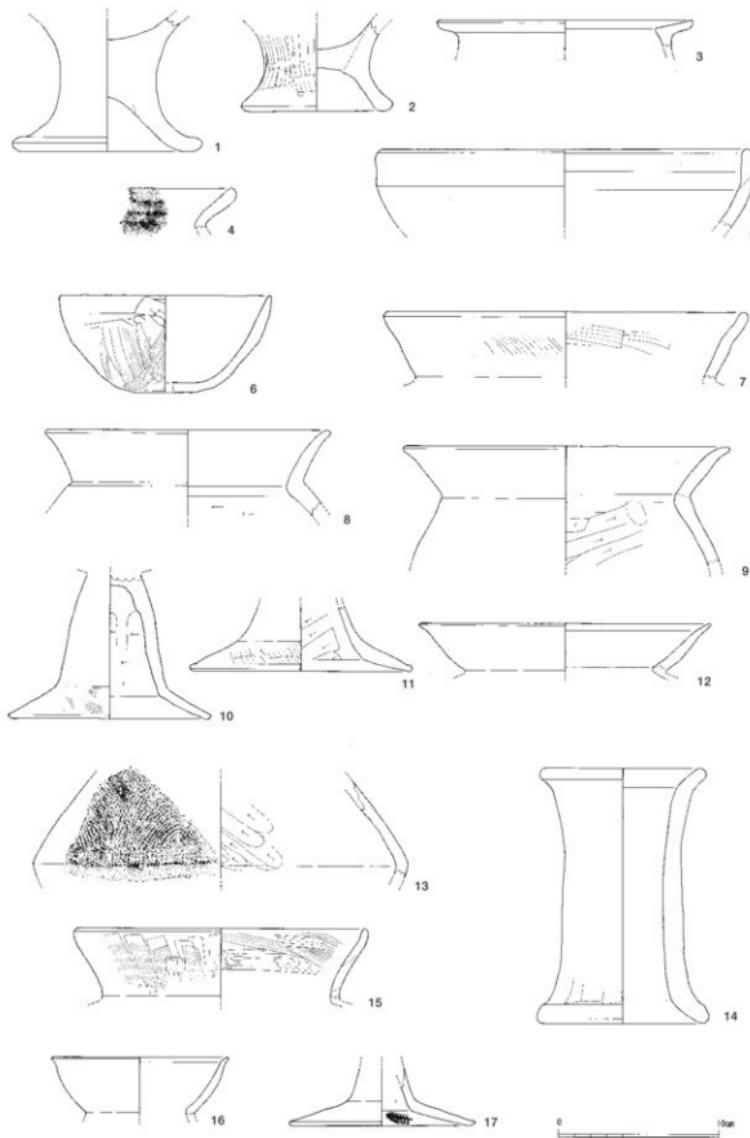
I・II区は遺構の密度は低く、検出した遺構も自然流路や土坑である。遺物は、弥生土器、土師器等のほかに木器、加工のある木片などが出土している。出土遺物の時期は、弥生時代（中～後期）、古墳時代前期、古代、中世である。ただし、出土した土器は一部を除いて完型となるものではなく、摩滅した小片が大半で、周辺からの流れ込みである可能性が高い。I・II区ともに現状でも遺構底面からは地下水の湧水があり、遺構、遺物のあり方から考えても当時はかなり低湿な環境で、場合によっては冠水するような状況であったと考えられる。



第8図 第13号土坑遺物出土状況図



第9図 第14号土坑遺物出土状況図



第10図 I・II区出土土器実測図

## 第2節 III区の調査

### 1. 位置と調査区

III区はI・II区の南側に位置し、調査面積は1600m<sup>2</sup>である。I・II区とは異なり、遺構は第15号流路以外は検出できなかったが、遺物は木器が多量に出土した。現状の地形にはほとんど現れていないが、III区は南側のIV区付近をピークとする微高地の北側斜面にあたると考えられる部分であり、遺物はこの微高地の落ち際であるIII区南半を中心として広範囲に出土した。調査中、標高2 m以下になると多量の湧水がみられ、このことが木器の保存に大きく関与したものと思われる。

### 2. 層序

III区の土層堆積状況は、標高3 m前後であるIV層まではI・II区と共通する。しかしながら、それ以下特に厚く粘土が堆積する9層以下については、砂と粘土が細かく互層に堆積している。

#### III区土層

I層からIV層まではI・II区の基本土層と同じである。

III'層 明黄褐色土 (Hue2.5Y7 / 6) III層に似ているが、白色の粘土を多く含む。褐色の鉄分が集中する。

IVc層 褐灰色土層 (Hue7.5YR5 / 1) 粘性は強いがしまりは弱い。やや砂粒が多く橙色の鉄分が点状に浸透する。古墳時代遺物包含層。

4層 黄色砂層 (Hue2.5Y 7 / 8) しまりが強く、非常に細かい砂粒でわずかに青灰色の粘土を含む。

5層 暗緑灰色砂層 (Hue5G4 / 1) 20mm程度の砂からなる。間に薄い粘土層を数枚含み、鉄分が浸透している。

6層 灰オリーブ粘土層 (Hue7.5Y6 / 2) きめ細かい粘土で粘性は強く、硬くしまる。上面には橙色の鉄分が縦方向に浸透している。

7層 暗灰色砂層 (HueN3 / ) 粘性はなく、しまりはない。きめ細かい砂の層。

8層 青灰色混砂礫層 (Hue10BG6 / 1) 2.0cm大を中心にして3~5 cm大の円礫を多量に含み、その間に砂を含む。

9層 青灰色粘土層 (Hue5BG6 / 1) 粘性は強く、硬くしまる。きめ細かい粘土で上面には橙色の鉄分が縦方向に浸透している。

10層 明黄褐色砂層 (Hue2.5Y7 / 6) よくしまる。

11層 青灰色砂層 (Hue5BG6 / 1) しまりはあり、やや粒子の粗い砂の層。

12層 青灰色土層 (Hue5BG5 / 1) 粘性強く、しまりもある。若干砂を含み鉄分が縦の帯状に見られる。

13層 青灰色砂層 (Hue5B6 / 1) 砂のみからなる。

14層 褐灰色土層 (Hue7.5YR4 / 1) 粘性は弱いがしまりはあり小枝や木葉を多量に含む。

15層 青灰色砂層 (Hue5B6 / 1) 枝や木葉を多量に含む。

16層 黒褐色土層 (Hue7.5YR3 / 1) 粘性は弱く、しまりはある。多量の木器、木片を含む。弥生時代遺物包含層。

17層 青灰色砂層 (Hue5B6 / 1) 基盤となる円礫層。

18層 暗青灰色砂層 (Hue5B3 / 1) きわめて細かい砂に粘土が混じりこんでおり粘性が比較的強い。

19層 黄褐色土層 (Hue10YR5 / 8) 土質は18層とほぼ同じだが、全体に黄色みの強い土。

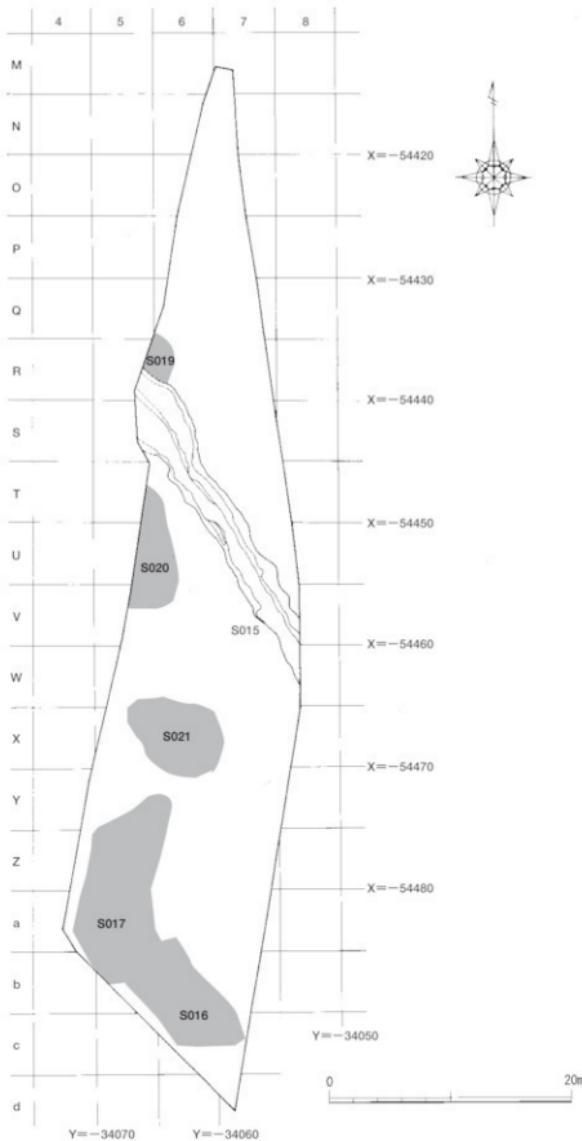
20層 明黄褐色土層 (Hue5B6 / 8) 土質は、III層に似ておりきわめてよくしまる。ただし砂質がかなり強い。

21層 明黄褐色土層 (Hue2.5Y6 / 6) III層の土によく似る。ただし全体に砂が強い。

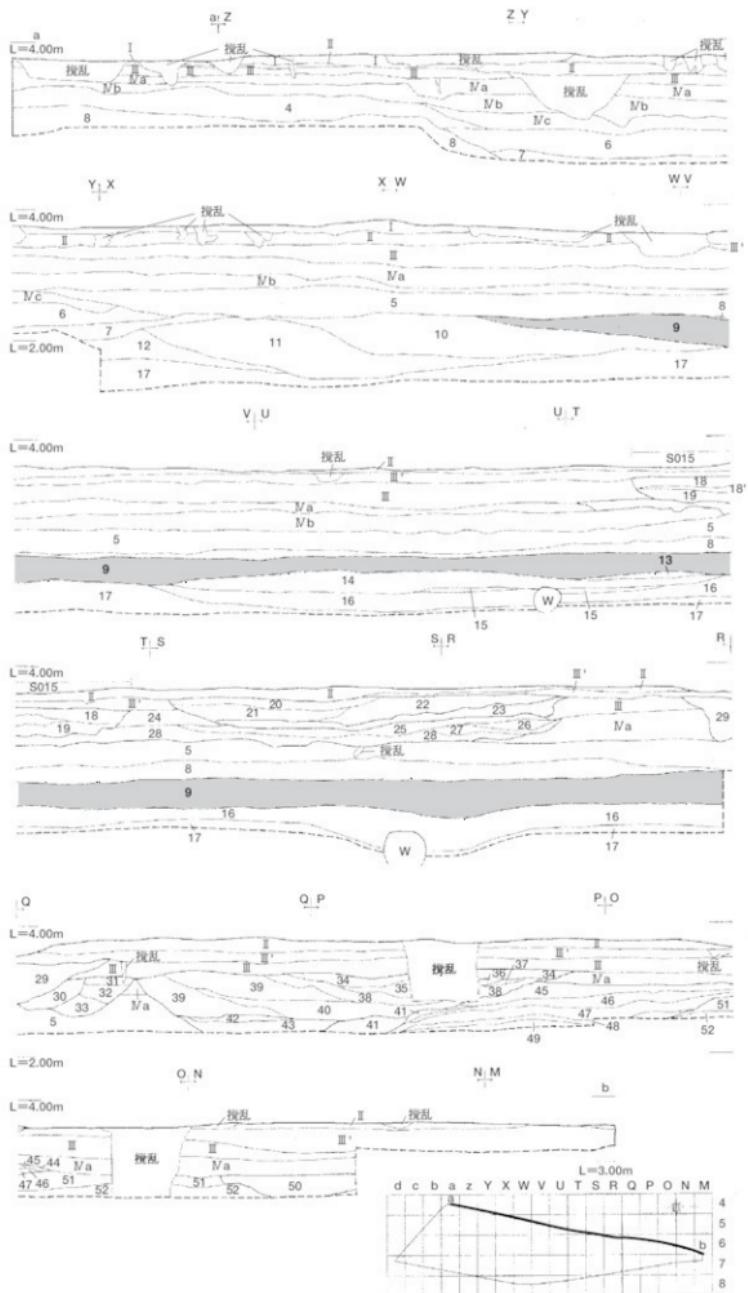
22層 灰白色砂層 (Hue7.5Y7 / 1) きめ細かい砂からなりわずかに粘土を含む。全体に橙色の鉄分が浸透し

ている。

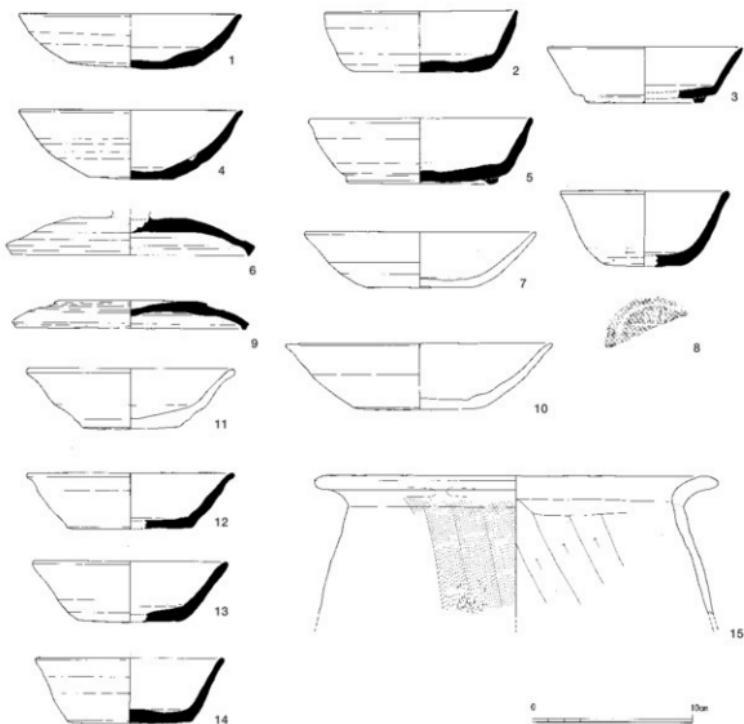
- 23層 明黄褐色礫層 (Hue2.5Y6 / 6) 1.0~3.0cm 大の円礫を多量に含むほか、白色の粘土も含み比較的よくしまる。
- 24層 青灰色砂層 (Hue5B6 / 1) III層の粘土をわずかに含む砂。比較的よくしまり、鉄分が全体に浸透する。
- 25層 暗褐色砂層 (Hue7.5YR6 / 1) きめ細かい砂を中心で上下にやや粗い砂が混じる。下底には鉄分が厚く沈殿している。
- 26層 灰色砂層 (Hue5Y6 / 1) 粘土の中に砂粒を比較的多く含み、1.0cm 大の礫を少量含む。
- 27層 黄灰色砂層 (Hue2.5Y6 / 1) きめ細かい砂に白色の粘土分が多く混じり粘性が強い。褐色の鉄分が集中する。わずかに炭化物を含む。
- 28層 青灰色砂層 (Hue5B0 / 1) きめ細かい砂の層。わずかに粘土分を含むがしまりはほとんどない。
- 29層 明黄褐色土層 (Hue10YR7 / 6) 粘土と青灰色の砂が混じりあってる。粘性は比較的強くしまる。
- 30層 にぶい黄褐色土層 (Hue10YR4 / 3) きめ細かい砂が多く混じり、橙色の鉄分が全体に浸透している。
- 31層 灰黄褐色土層 (Hue2.5Y7 / 2) きめ細かい粘土に砂が多く混じり、よくしまる。マンガン粒が目立つ。
- 32層 にぶい橙色粘土層 (Hue7.5YR6 / 4) マンガンの粒子が多く入る。粘性・しまりとともに強い。
- 33層 灰黄色土層 (Hue2.5Y6 / 2) わずかに粘土分を含むきめ細かい砂の層。鉄分が全体に沈着している。
- 34層 灰黄褐色砂層 (Hue10YR6 / 2) きめ細かい砂でわずかに粘土を含む。鉄分が浸透し部分的に橙色を呈する。
- 35層 灰オリーブ砂層 (Hue7.5Y4 / 2) 2 mm 大の砂粒を中心として、5 mm 大の砂粒も含む。下層を中心に厚く鉄分が入る。
- 36層 黄灰色砂層 (Hue2.5Y4 / 1) やや粗い砂の層。ほとんどしまりはない。
- 37層 黄灰色砂層 (Hue2.5Y4 / 1) 43層よりきめ細かい砂と灰白色の粘土が混じる。ややしまりはある。
- 38層 灰白色砂層 (Hue2.5Y7 / 1) きめ細かい砂に粘土を含み比較的よくしまる。わずかに鉄分が浸透する。
- 39層 青灰色砂層 (Hue5B6 / 1) きめ細かい砂の層。わずかに粘土分を含むがしまりはほとんどない。
- 40層 暗青灰色土層 (Hue5B4 / 1) やや砂粒が混じりしまりは弱い。
- 41層 黒色土層 (HueN2 / ) 粘性は強いがかなり砂を含む。よくしまっている。木片や木葉などを含む。
- 42層 青灰砂層 (Hue5B6 / 1) III層の土をわずかに含む砂。比較的よくしまる。鉄分が全体に浸透する。
- 43層 青灰砂層 (Hue5B6 / 1) 27層に似ているが、硬くしまった砂を含み全体によくしまる。粘性は弱い。
- 44層 欠
- 45層 灰色砂層 (Hue10Y5 / 1) きめ細かい砂からなる。ややしまりはある。炭化物を含む。
- 46層 灰白色砂層 (Hue7.5Y7 / 1) きめ細かい粘土で、全体に鉄分が浸透している。かすかに粗砂が混入する。
- 47層 灰白色砂層 (Hue7.5Y7 / 1) やや粗い粒子の砂で、下層に礫や鉄分が沈着している。
- 48層 オリーブ灰砂層 (Hue2.5GY5 / 1) やや粗い粒子の砂層。
- 49層 暗青灰色砂層 (Hue5B4 / 1) 粒子の粗い砂層で1.0~2.0cm 大の円礫を多く含む層。鉄分が沈着して褐色を呈する部分がある。
- 50層 青灰色土層 (Hue5BG6 / 1) 粘土中に比較的細かい砂粒を多く含む。炭化物や木片を多く含む。
- 51層 青灰色砂層 (Hue5BG5 / 1) 50層の土に5~10cm 大の砂粒を多く含む。下層には鉄分が沈着している。
- 52層 青灰色砂層 (Hue5BG5 / 1) やや粒子の粗い砂からなり、全体に鉄分が浸透する。炭化物を少量含む。



第11図 III区構造配置図



第12図 III区西壁土層断面図



第13図 第15号流路出土土器実測図

### 3. 古代の遺構と遺物

#### 第15号流路

第15号流路はIII区の中央やや北よりで検出され、南東から北西へと調査区を斜めに横断している。幅は最大で6.0m、幅や断面形状は不規則であり、自然流路の可能性が高い。埋土には砂が多く含まれており、出土した遺物には鉄分が多く付着していた。埋土中からは須恵器や土師器が多く出土し、ほかの遺構に比べ完型に近いものが多い。(第13図1~15) 出土したのは須恵器の壺、蓋、土師器の甕等である。このうち底部外面に刻書のある須恵器(第13図8)が出土している。一部を欠損しているため断定はできないが、「興」または「典」の可能性が考えられる。

#### 4. 弥生～古墳時代の遺構と遺物

出土遺物には弥生土器、土師器の他に多量の木器がある。このうち弥生土器、木器については16層より出土した。木器出土層では、湧水が激しくそれに伴って壁面が崩落するため調査区を縮小せざるを得なかった。そのため、調査区はややいびつな形状となっている。木器は調査区全体から出土しているが（第14図）、特に調査区西半では4ヶ所にまとまって出土したため、便宜上第18～21号遺物集中部として取り上げた。また、掲載した木器のほかにいわゆるミカン割りにした断面三角形の木材や矢板状の木材も500点ほどが出土した。土器は、これらの木材と同一層位から出土し、比較的大型の破片が多く磨耗は顕著でなかった。これらは、すべてが混在する形で出土しており、出土位置には特に傾向はみられなかった。ただし、図示していないがS-6区およびV-6区において東西方向に横たわる2本の丸太を検出した。いずれも直径50cmをこえる大型のものであった。（写真92、93ページ）また、古墳時代の遺物は9層でわずかに土師器が出土したほか調査区南半のN層中より出土した。ただし、N層出土の土師器は小片で磨滅したものが多く、今回は図示しなかった。

##### 木器（第15図～32図）

##### 容器（第15図～22図）

第15図1は、ほぼ完型で全長105.6cmと今回出土した木器の中で最大である。一木削り抜きで作られ、底面には4ヶ所に突起が削りだされている。これらは、ほぼ旧状を保っていると考えられるが、そのままで突起下端は底部よりも高い位置となり脚とするよりは繩かけ突起など別の用途を考えるべきかもしれない。遺存状態は良好であるが、加工痕の痕跡はそれほど顕著には見受けられない。2は、全体に丁寧に仕上げられているが、加工痕、使用痕ともに見受けられない。

第16図1も大型の盤で、底部の一部が縱方向に割れているが、底部の長さ自体は断面に現れており、55.0cm前後の長さで隅丸の長方形となる。全体にごく薄い作りで、底部と側面のわずかな部分のみが厚くなる。また、断面形状や厚さが薄いことを考慮するとごく浅い容器であった可能性が高い。2の盤は、片方の小口に把手が2本付く。また、加工時の工具の刃部が垂直にあたった跡が見られる。

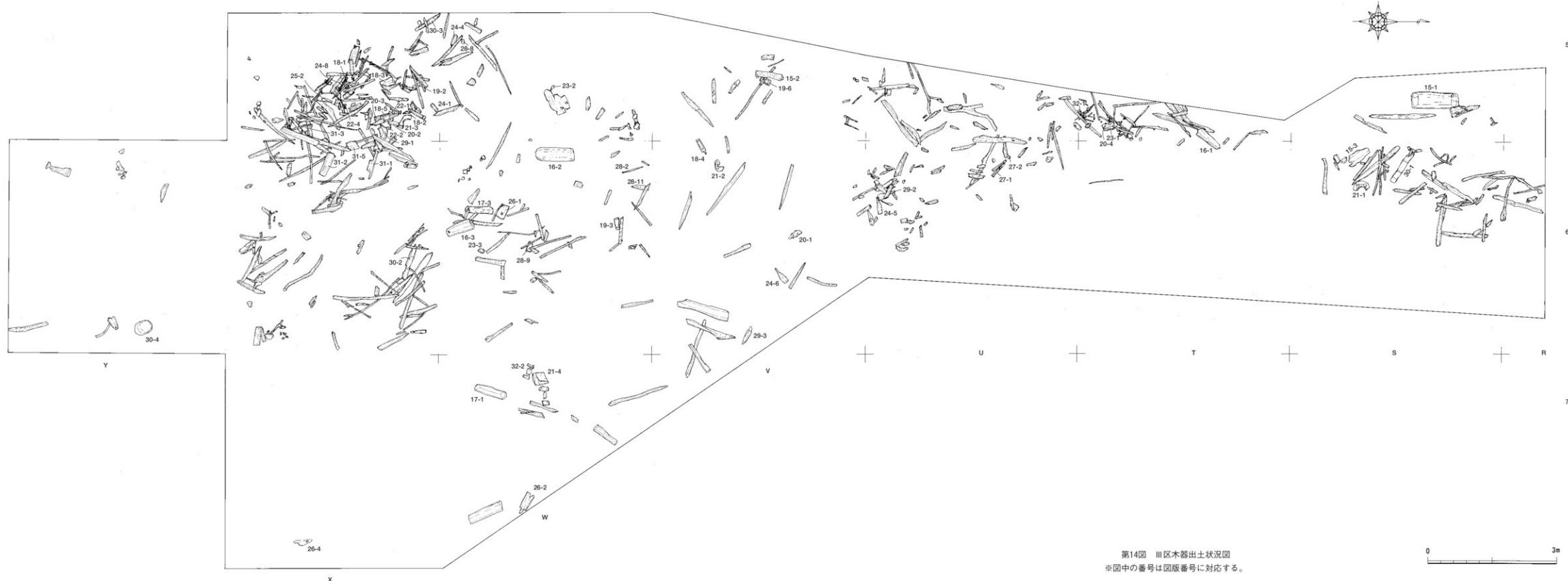
第17図の盤3点は、いずれも遺存状態が悪く加工痕や使用痕は確認できない。また、第17図3は、その厚みから未完成である可能性が高い。

第18図～第19図は、小型の方形盤である。把手の付くもの（第18図）と付かないもの（第19図）がある。

第18図2は、真ん中付近を欠損し、直接接合する部分がないが、木の質感や年輪の状態等から同一個体と考えられる。4は、周縁部がかなり厚く未完成の可能性も考えられる。全体に加工痕ははっきりしないが、把手側小口内側の底面には加工痕が明瞭である。5は、図左側を中心としてかなり炭化しているが、小口付近には細かい切削痕が確認できる。

第19図1は、器内面に刃部先端があたった痕跡が底部付近を中心として残されている。2は、表裏ともに極めて丁寧に仕上げられているが、両小口の部分は切断したままで整形されていない。4は内外ともにかなり加工痕が残されている。外面はかなり細かく加工されているが、内面は外面よりも加工の単位は大きい。内外ともに加工痕の断面形から工具はやりがんなであると考えられる。5は、断面における年輪の中心の位置、残存部の立ち上がりの状態からすると、本来は20cm前後の幅であったと考えられる。6は、平面は方形だが、対角線上でねじれている。外面底部を中心として加工痕が明瞭に見られる。

第20図は、いずれも脚付きの小型の盤である。平面方形もしくは隅丸方形となり、四脚の付くものがほとんどである。1は、一方の長辺に半円形の突起が付く。2は、他よりも深さのあるもので脚も長い。現存する2つの脚は、一方に開く形で内側が削り込まれている。4は、一部が炭化しており廃棄されたものと考え



られる。炭化の程度はかなり激しく、外面から 3 mm 程度炭化している。

第21図 1, 3 は、いずれも 1 / 2 程度しか遺存していないが、円形で四脚が付き中央が半球形の容器となると考えられる。ほぼ同形、同大である。いずれも、現存する脚では短く本体を支えきれないことから、本来は、3.0cm 以上の長さをもっていたと考えられる。第21図 2 も 1, 3 とはほぼ同様の形状となると考えられるが、全体に小型で平面も隅丸の方形に近いものであったと考えられる。また脚も短い。4 は、一本削り抜きの桶である。遺存状態が悪いためか平面横円形で、一部を除くと加工の削痕ははっきりしない。器壁は内側に傾いており、また厚みは基本的には、上にいくにつれて薄くなっているが、部分的にはかなり上まで厚いところもみられる。底部外面も削り抜いて上げ底としてあり、そのうち 4ヶ所を下方へ突出させ脚としている。

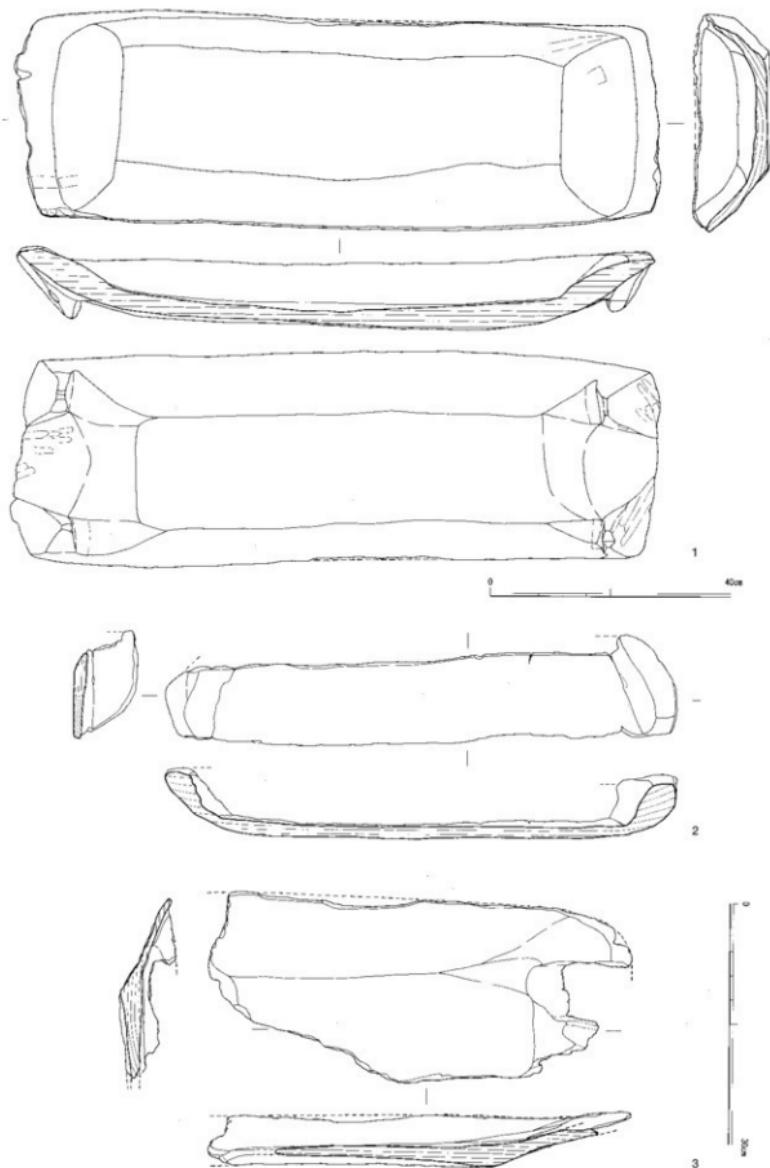
第22図は、脚もしくは把手となる可能性のあるものである。1 は、平面「山」字形で図の上端が欠損部となる。3 本ある突起の内側は、1 cm 程度に浅く削り取られて縁どりをしたようになっている。槽の把手なども想定されるが、木目のあり方からすると脚の可能性が高い。2 は、断面半円形で 1ヶ所に長方形の突起が付く。この突起の部分は、削りだして造られており上部には刀子状の工具で削り込んだと思われる痕跡が残る。3 は断面横円形で、1ヶ所に勾玉形の突起が削りだされている。勾玉状の装飾まで一本から削りだしている。本体との接合部付近も加工の痕跡は全く目立たず、極めて丁寧なつくりである。下面はほぼ垂直に面が作り出されておりこれが下端となるものと思われるが、使用した痕跡は見受けられない。4 は、断面円形の棒状で、下端には平面木葉形の突起を、真ん中ほどにはかなり複雑な形状の突起が付く。いずれも削りだして作られている。長靴の様な形の下端部は、他の部分が極めて丁寧に表面を仕上げてあるのに、この部分だけはかなり粗れた様子になっておりこちらを下にした可能性が高い。

#### 食事器（第23図）

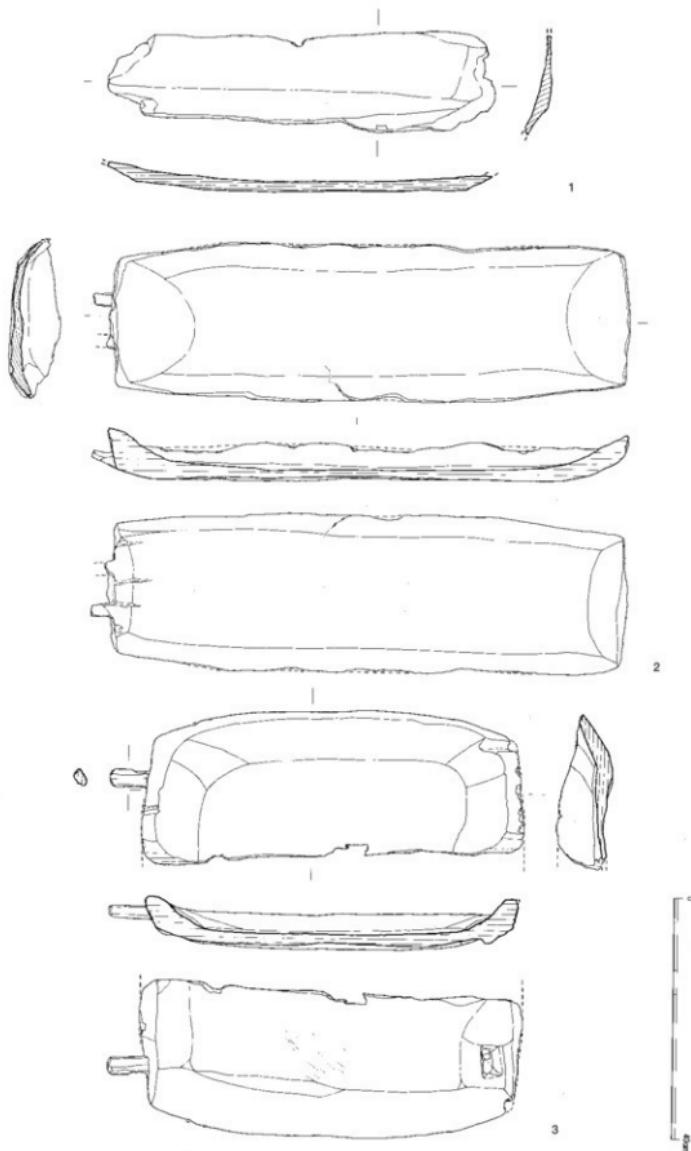
第23図は、いずれも杓子もしくは匙になると考えられるものである。非常に丁寧に整形されているものが多いが、遺存状態はあまりよくない。1 は、横杓子の柄の部分になるものと考えられる。加工痕ははっきりしないが、一部に垂直に刃のあたった痕跡が残る。図の左側上部は板状に突出しているが、この一部を欠いている。この部分は、使用による欠損である可能性も考えられる。2 の柄は、断面円形であるが、部分的に凹む部分があり、これらは使用の結果であると考えられる。3 は、底部が丸みを帯びており、図の上側部分に欠損が見られることからここに柄がつくものと考えられる。ただし、第18図 1 と同じように短い把手のつく小型の盤である可能性も考えられる。内外面ともに丁寧に切削痕が消されており、全く工具痕を見るることはできない。唯一、柄の装着部付近に刃先の痕跡が何ヶ所か見られる。第23図 4 は、内面に加工痕と思われる刃部がくい込んだような痕跡がみられる。本来の形状は不明だが、縦にまっすぐ柄のつくタイプの杓子になる可能性が高い。5 も、欠損部が多く本来の形状は不明であるが、左右に湾曲していることから匙もしくは杓子の可能性が高い。6 は、ややサイズが小さいが横杓子、もしくは匙と考えられる。身の先端および柄の部分は欠損している。遺存状態は悪いが、加工痕ははっきりと観察できる。

#### 農具（第24図～第26図）

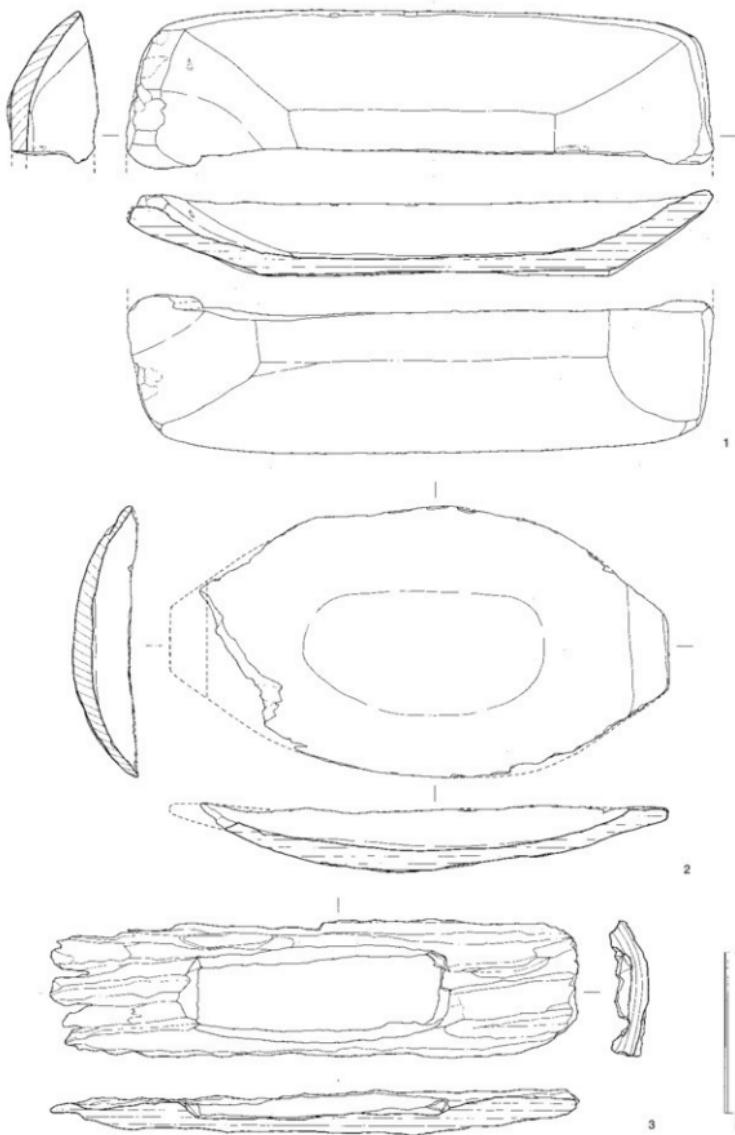
第24図 1～8 は、いずれも横植である。身の中央付近に使用痕の残るものが多い。1 は実測図の正面に、他の面にはない激しく叩きつけた痕跡が多数見受けられることから、この部分が使用面と考えられる。2 は、身と柄の境は明瞭でなく徐々に細くなっていく。身の中央付近は、全周にわたって使い込まれた痕跡があり表面が剥離している。ただし、この部分を除いては使用の痕跡は顕著でない。柄の部分は、身から柄の先端にかけて 6 面程度の面によって構成されている。3 は、身の先端と柄の大部分を欠損している。図中の色の



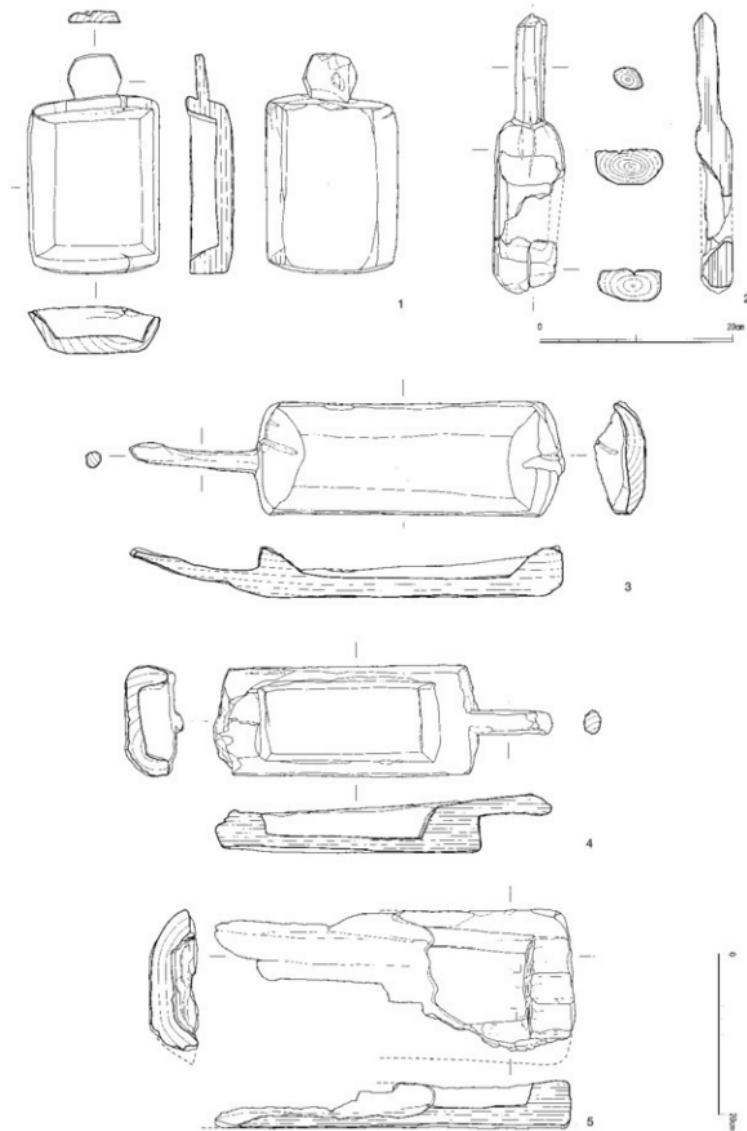
第15図 III区16層出土木器実測図（1）



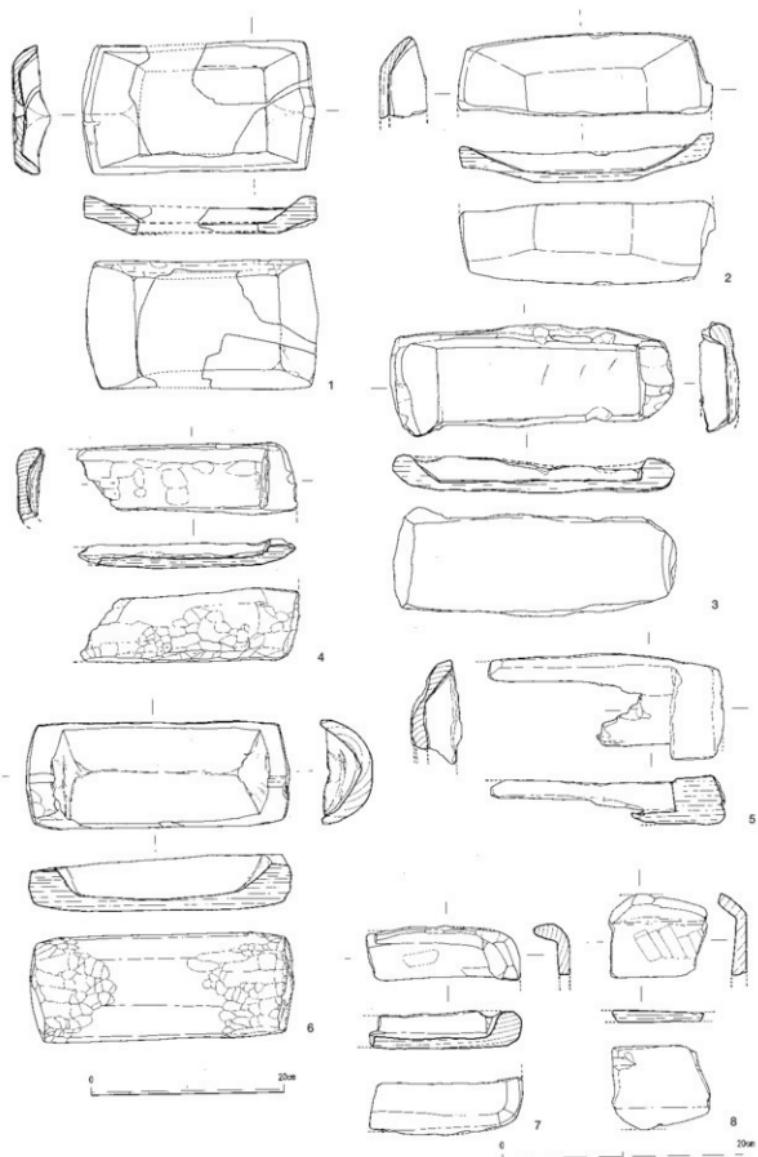
第16図 III区16層出土木器実測図（2）



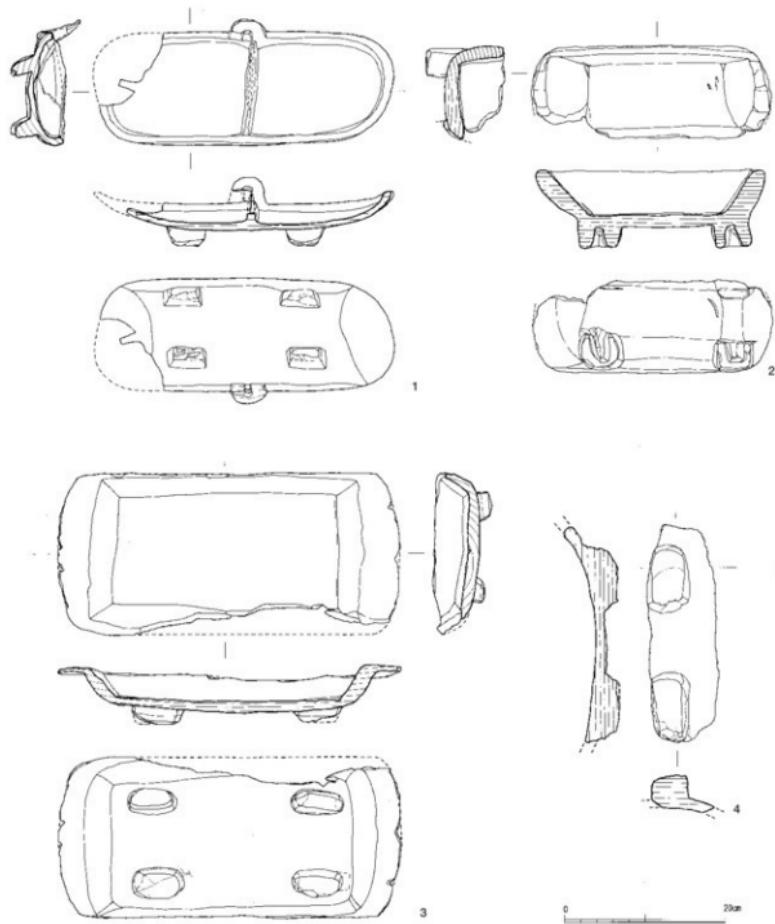
第17図 III区16層出土木器実測図（3）



第18図 III区16層出土木器実測図(4)



第19図 III区16層出土木器実測図（5）

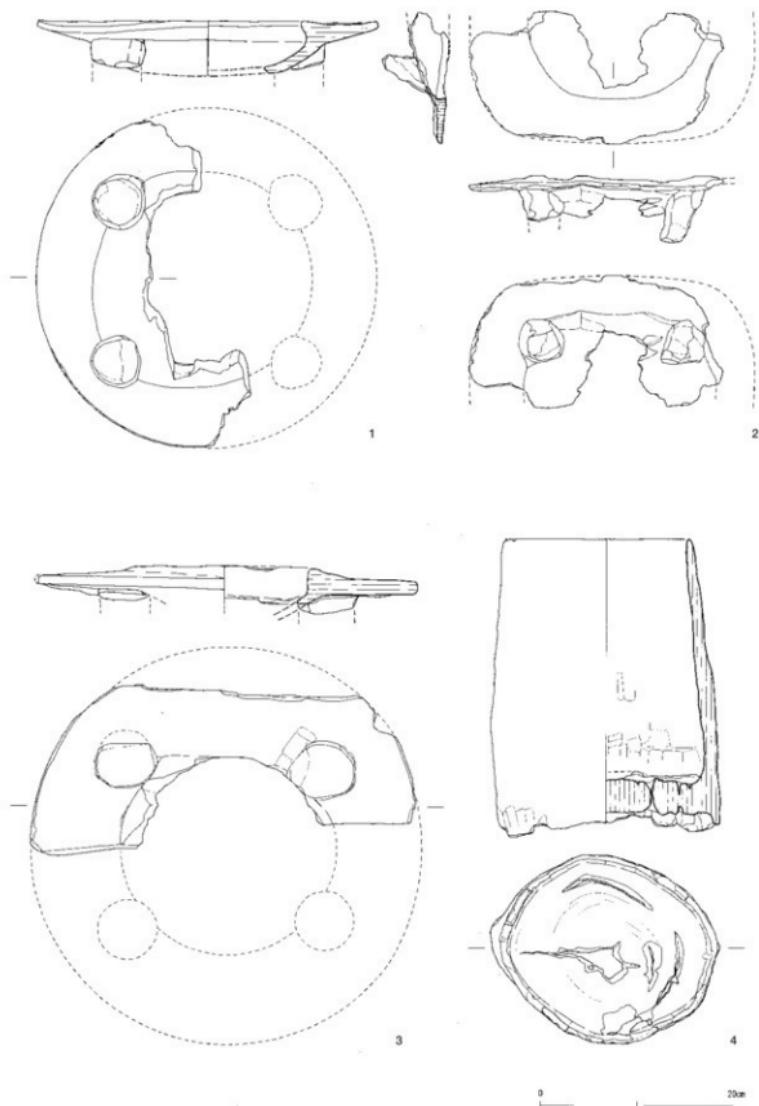


第20図 III区16層出土木器実測図（6）

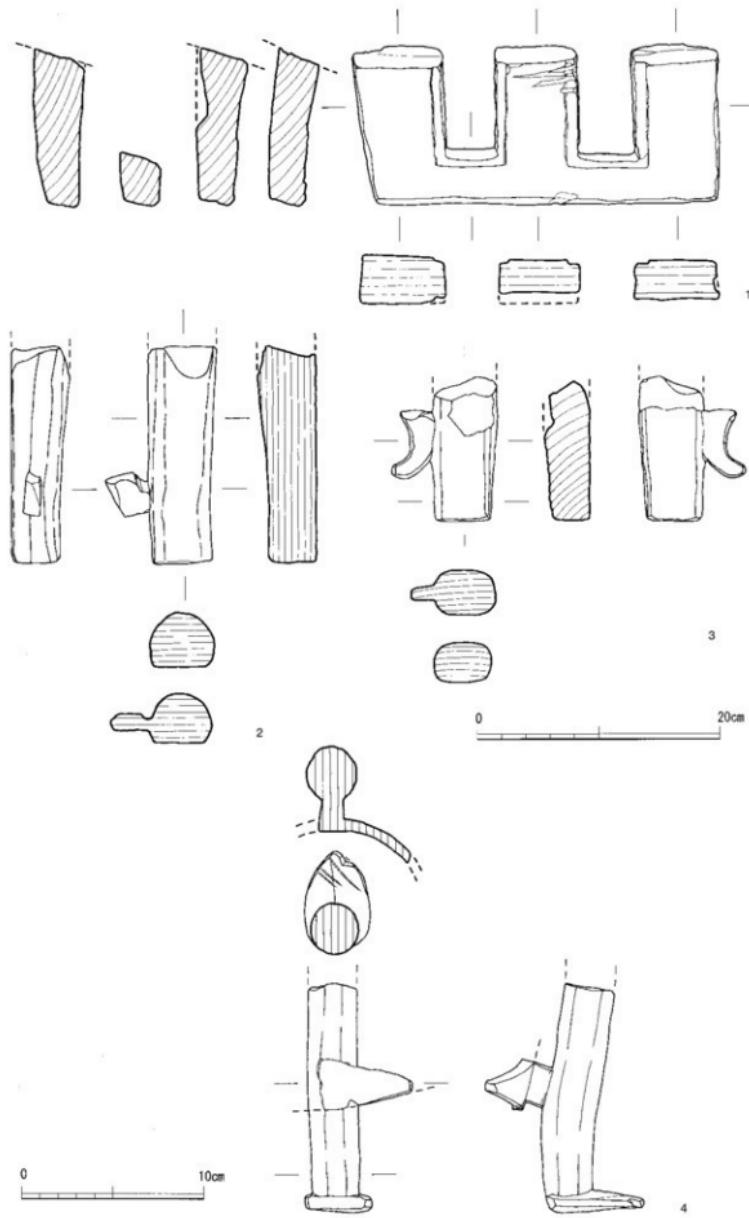
ついた部分は炭化している部分である。4は、身の中央付近2ヶ所が使用のために大きくなっている。ほぼ対向する位置がえぐれしており、そのえぐれた部分を中心にして2~3cmの長さで鋭い切り込みが見られる。切り込みは、斜め上、もしくは横方向から入っている。柄の部分は、身に近い部分から身とは逆方向に削り込んだ痕跡がみられる。5は、身の中央部分が凹んでいるが、4とは異なり全体に緩やかに凹んでいる。6は、上下端に外側から斜めに削り込んで切断した痕跡を残している。身の中央部分は、柔らかく緩やかにくぼんでいる。7は、身には明瞭な使用痕はみられない。ただし、柄にはほかの部分に比して角が落ちたような形となる部分があり、使用の結果であるかもしれない。図の下面是叩きつけたようにつぶれており、横幅ではないかもしれない。第24図8は、使用痕、加工痕ともにはっきりしないが、身の先端から4~5cmの範囲に2~3ヶ所平坦な部分が見られる。使用時のものであるかもしれないが、面全体がフラットで幅も一定であることから、加工時にやや深く削ったものと思われる。

第25図は農具もしくは工具の柄と考えられるものを掲載した。1は先端部分を欠損しているが、現状で長さ64.7cmで断面は図下端が丸く、また先端に行くにつれて横円形となっている。加工は比較的粗く、全体に加工痕が残されている。図の下端付近は使用によるためか、部分的に浅く凹んでいる。2は全長46.5cm、先端は概ね二つに割れているが、ほぼ完形である。先端（図上）付近は断面正方形でいったんやや太くなり、底から斜めに削って先端部を瘤状に削りだしている。この斜めに削った部分では、工具痕が数ヶ所に残されている。また、図下半には爪が当たったかのような、円弧状の浅く鋭い凹みが数ヶ所に見られる。側面図で見ると、先端のくびれた部分は斜めに角度がつけられており、この部分の角度は70°前後となる。3は先端付近のみが残っており、加えてかなりの部分が炭化してしまっている。段をつけた部分には加工痕が目立つものの、横断面図の下面に当たる部分は細かな加工痕は見受けられず、いっきに割りとったものと思われる。4もかなりの部分が炭化している。先端付近のみであり、しかも半分に割れているが、2とほぼ同じ形態になると考えてよいと思われる。

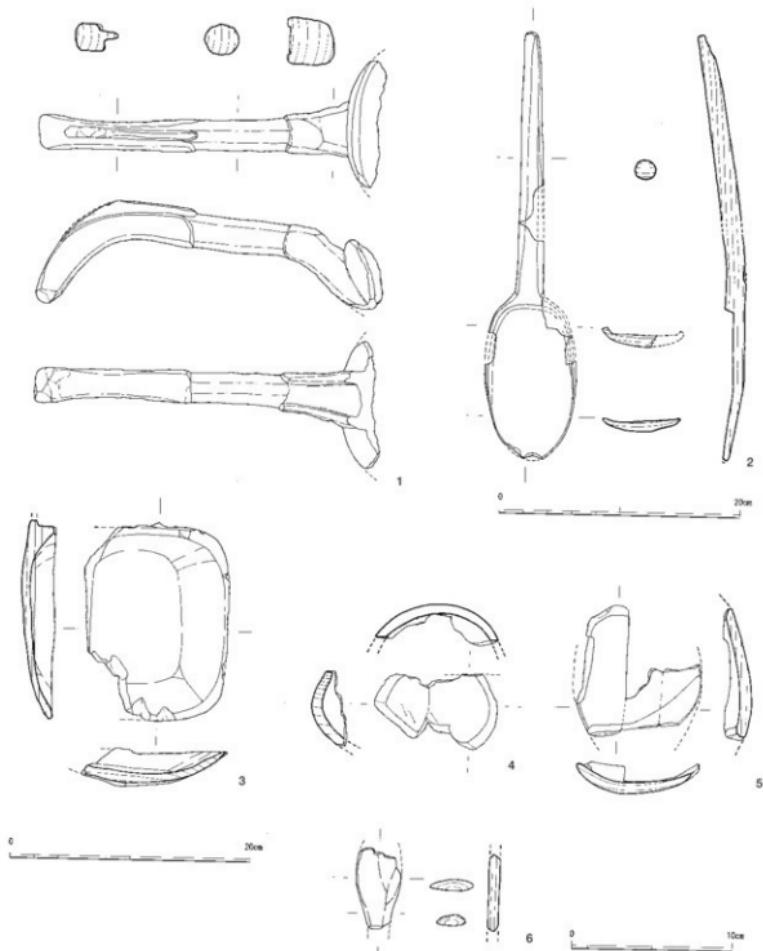
第26図は、鍼およびその未成品と考えられるものを掲載している。1は平鍼である。一部を欠損するものの、長さ33.0cm、幅22.3cmの長方形を呈する。横断面で見ると縁部に向かって緩やかに厚みを減じているが、縦断面で見るとほぼ同じ厚さだが、特に下端に鋭く角度をつけており、こちら側が機能部であると考えられる。また、中央や上よりには、正方形の孔を穿っている。この孔は上下の辺を角度をつけて穿っており、この部分から柄の角度は35°前後となると考えられる。2は、当初組み合わせ式の鍼の可能性を考えてここに掲載したが、樹種鑑定の結果や、横断面が丸みを帯びることなどの点から、やや厚みが足りないが、方形盤などの未成品と考えたほうがよいかもしれない。図の裏側については、粗削したままの状態であるが、表面についてはかなり細かい加工痕が見られる。3は全長61.8cm、幅13.9cmだが、着柄部付近はかなり幅を減じており、細長い印象を受ける平鍼である。着柄部付近が最も厚くつくれられており、身の部分は一気に薄くなり、先端部分は細かく加工して片刃としている。柄孔部分は長方形で、上下の辺は斜めに角度をついている。この部分から着柄角度は45度前後と考えられる。また、柄孔上辺部分で二つに折れている。4は、刃先を欠いているが三叉鍼と考えられる。柄孔部分から下に向けて幅広くなる形態となっており、厚さは柄孔付近が最も厚く、わずかに刃先に向けて薄くなっている。柄孔は他の鍼と同様上下の辺が斜めに削りだされており、この部分から着柄角度は35°前後になると思われる。5~7は鍼の一部分であると考えられるものである。また、5は1のような平鍼の柄孔上辺から身の上辺にかけてと考えられる。6は3、4のような形態の鍼の柄孔上辺部分であると考えられる。7は4のように又鍼の刃の一部であろう。断面は隅丸方形に近い。



第21図 III区16層出土木器実測図（7）



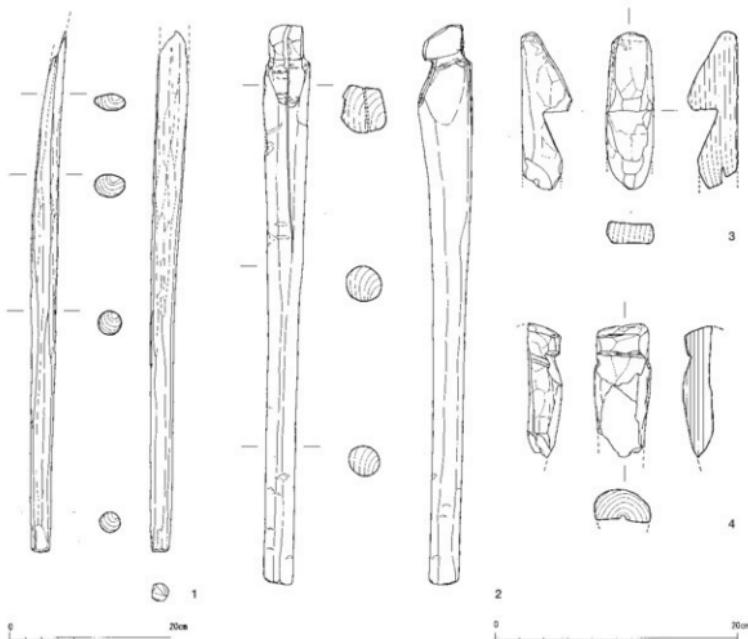
第22図 III区16層出土木器実測図(8)



第23図 III区16層出土木器実測図（9）



第24図 III区16層出土木器実測図 (10)



第25図 III区16層出土木器実測図（11）

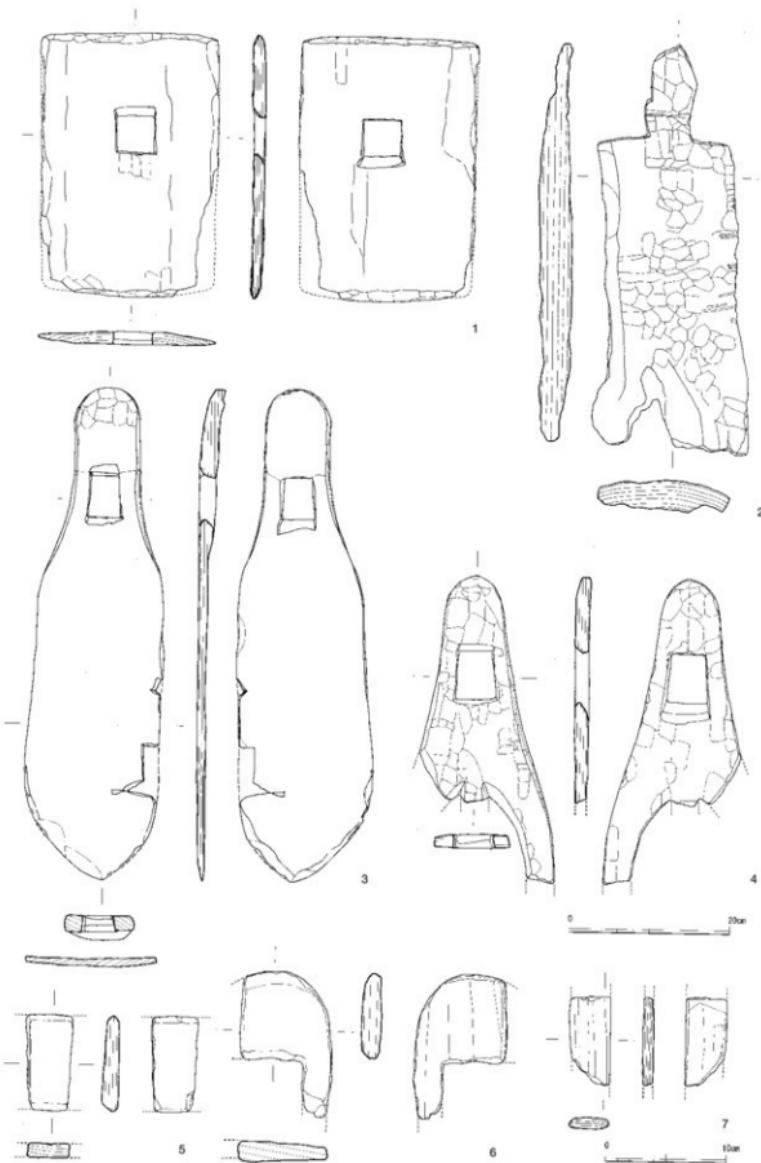
#### 武具（第27図、第28図1）

第27図1、2は鞘である。いずれも長さは40cm前後ではほぼ同形、同大であるが、1は下端部の長さ2cm程度が横に張り出るように削りだされているのに対して、2は下端から5cmほど上の部分に同様に張り出す部分が削りだされている。2点はごく近から出土しており、また細部の形状は異なるものの、ほぼ同大であることから2点セットとなって使用されたものと考えられるが、組み合わせの痕跡などは顯著ではない。いずれも内面に細かな斜め方向の加工痕が目立つほかは、加工の痕跡は顯著ではない。

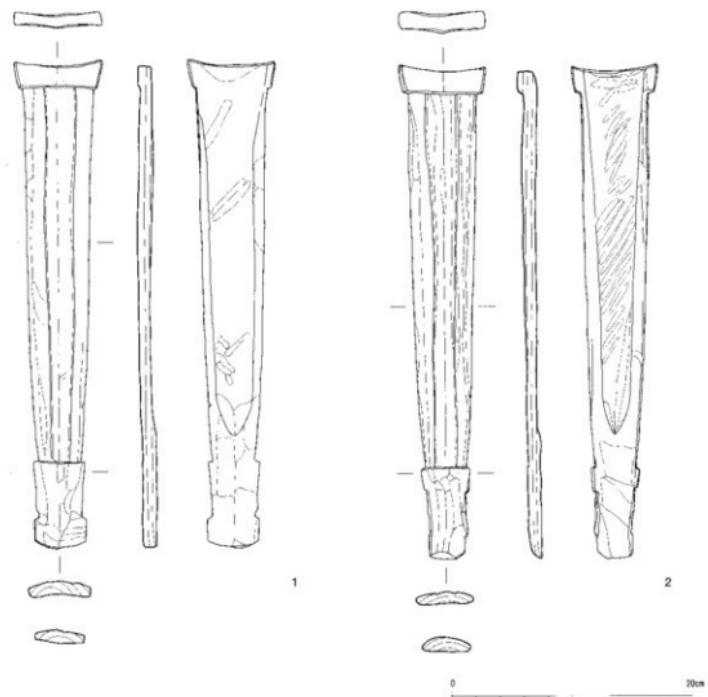
第28図1は一方の端部しか残されていないものの、丸木弓であると考えられる。表皮を剥いで整形した痕跡が、幅5mm前後の面となって明瞭に残っており、断面多角形となる。図は正面からのみであるが、側面から見ると大きく一方に反っており、反りの内面の数ヶ所に火を受けた痕跡が見受けられる。

#### 雜具（第28図2～6）

第28図2は一方を欠損しており全形は不明であるが、上端付近を削り込んでおり、釣柾と考えられる。削り込み部分の調整は、比較的はっきりとしており、細かく加工してあるが、その他の部分は表皮を剥いだ程度であると考えられる。3はやや小型であるが、2と同形品の一部である可能性が高い。4は先端部分を欠いており、断面は直径3.0cmほどの円形で、先端に行くにつれて急激に細くなっている。加工の痕跡は細かいが、あまり丁寧なものではない。用途ははっきりしないが、形態から容器などの栓として使用したこと



第26図 III区16層出土木器実測図(12)



第27図 III区16層出土木器実測図 (13)

が考えられる。5, 6は桜の樹皮である。5は幅3cm程度の皮を三重に巻いており、現状で直径1.5cm程度となっている。6は幅0.8cmの皮を二重に巻いており、ややいびつながら直径4cmほどの円形となっている。

#### その他用途不明品（第28図7～11）

第28図7～11については、欠損部分が多いことから、本来の用途ははっきりしない。7は直径8cmの丸木の表皮を剥ぎ、図下端は2方向から大きく切り取っており、図の上端は中心付近を削り残している。横柵の可能性も考えられるが、横柵としては柄の直径が細い。8は図の下端部分を欠損しており、本来の形態ははっきりしない。直径8cm程度の円柱形であるが、図の上側は滑らかに半球形に近い形態となっている。また、下端は細かく削られて中心付近を削り残していたものと考えられる。図上側の平滑な面から、杵などを再利用した可能性も考えられる。9, 10は板状の製品であるが、いずれも図の縦、横方向に反っており、欠損部も多いことから本来の形状は不明である。11もかなりの部分を欠損しており、本来の形状は不明である。表面のはば全面にわたって、幅2cm前後の鎌と思われる工具によって加工されている。図の横方向では弧状に反っている。内面は、分割時のままであると考えられる。

#### 漁労具（第29図）

第29図には漁労具もしくは、すくい具と考えられるものを4点掲載した。1、2が一部を欠いているものの、いずれもほぼ完形である。形態は平面が幅の広い方形で先端（図下端）が開く、いわば現代の塵取りに近い形状のもの（第28図1、2）と、平面が細長く、先端が細く尖り、あたかも舟のような形状となるもの（第28図3、4）の2種があり、後者の方が深さをもつ。また、いずれも柄が付くが、柄は身から直線に延びるもの（第28図2、3）と、やや斜め上に反りながら付くもの（第28図1、4）との二者がある。

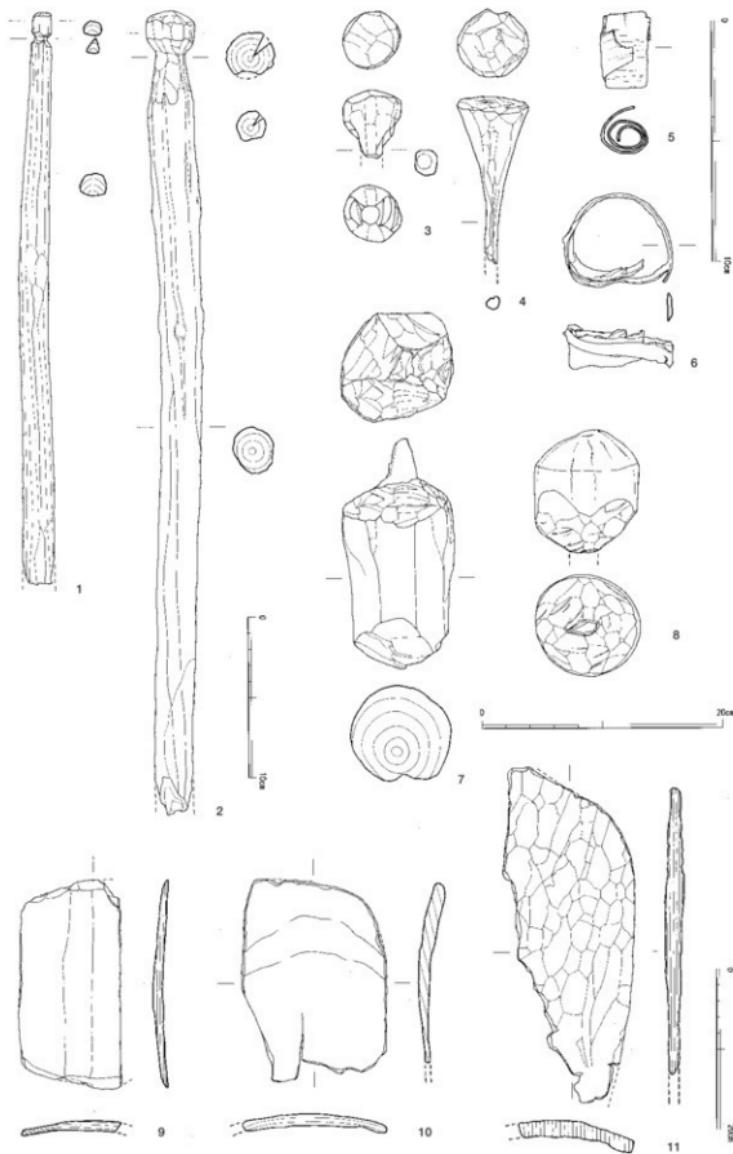
第29図1、2は、使用痕、加工痕とともににはっきりしない。わずかに、2には側壁と底部の境付近で縦方向に刃先の痕跡が見られる。上及び横方向から切り込んだものと考えられる。また、柄の中ほどが緩やかに凹んでいる。3では裏面の先端付近には、比較的ストロークの長い加工痕が見られる。左右の側壁の角度が異なっており、図右側はほぼ垂直となるが、図左側は外側に開いている。第29図4は把手部分を中心として、細かな加工痕が見られる。また、全体的にかなり薄く作られているものの、下面中央は、縦方向に柱状に削り残されており、この部分で強度を保つことを意図したものかもしれない。内面のみが黒色を呈しているが、遺存条件によるものか、何らかの顔料を塗っているものは判然としない。

#### 建築部材など（第30図）

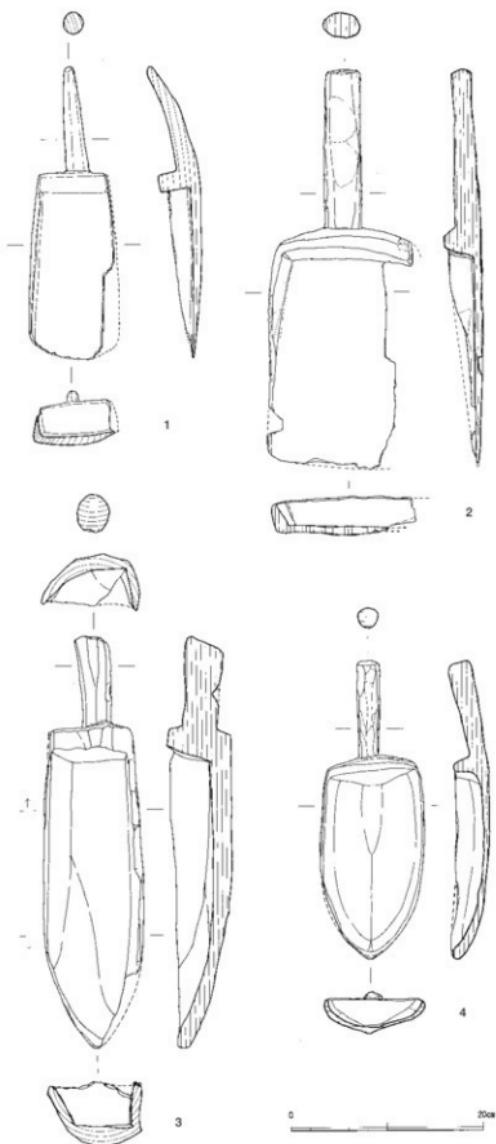
第30図1～3は梯子である。1は、下端を欠いているが一木梯子である。現状で長さ83.8cm、幅14.9cmである。厚さ約3.0cmの裏面は、ほぼ平坦な板状で表面にはほぼ等間隔に幅4.0cmほどの足掛けを削りだしている。また、上端は足掛けの突起とは反対に反らされている。2は、二つに割れておりそれぞれ接合する部分はないものの、形態や木取りの方法から同一個体と考えられ一木梯子の一部と考えられる。図下側の破片は、図の裏面を欠損しておりそのためかなり薄くなっている。3は、丸木の一方を半分程度削り取って平坦部を作り出している。この平坦部となる部分については、単独では8.0cm程度で幅が狭くこれを支柱として横木を組み合わせる組は梯子として使用した可能性も考えられる。裏面は丸木のままの部分もあるが、特に上半については、裏面も割り取り上端部分は裏側へとわずかにがら反らされている。また、下端はかなり大きく削り取って先端を尖らせているが、これが下端となるかどうかははっきりとしない。4は、長径42.0cm、短径36.0cmほどの平面楕円形の製品でほぼ完形である。厚さは最大で5.5cmほどあるが、一方の側は中央が凹み四周が高くなっている、反対側の面は縦方向に幅広く凹み、左右の両端が高くなっている。本体側面及び下面には加工痕がいくらか見受けられるものの、表面はかなり滑らかになっており、おそらく右側の平面図を下面として使用したものと考えられる。表面にはかなり強く圧迫したように凹む部分があり、作業台として使用された可能性が高いと考えられる。

#### 不明木器（第31、32図）

第31、32図には用途不明の木器を掲載した。1は、厚みや木取りの方向から考えると容器の未成品である可能性も考えられる。表面は比較的平滑であるが、部分的に細かな加工痕が見受けられる。また、側面にも大きく削り取った痕跡が残されている。裏面は粗く削り取ったままのようで、加工の痕跡はほとんど確認できない。2は、長さ60.0cm、幅13.0cm、厚さ3.0cmほどの大型の板材である。比較的単位の大きな加工痕が全面に残されている。短辺の一方は、薄く尖らせており堅板の可能性も考えられる。3は、現状で薄い板状の製品であり図の下辺を鋭角に尖らせているが、残存する部分から考えると平面形は方形とはならず、本来の形態は不明である。4は、断面長方形の角柱状の製品であり図上側は斜めに切り取られている。柱などの建築部材を折り取ったものかもしれない。



第28図 III区16層出土木器実測図 (14)

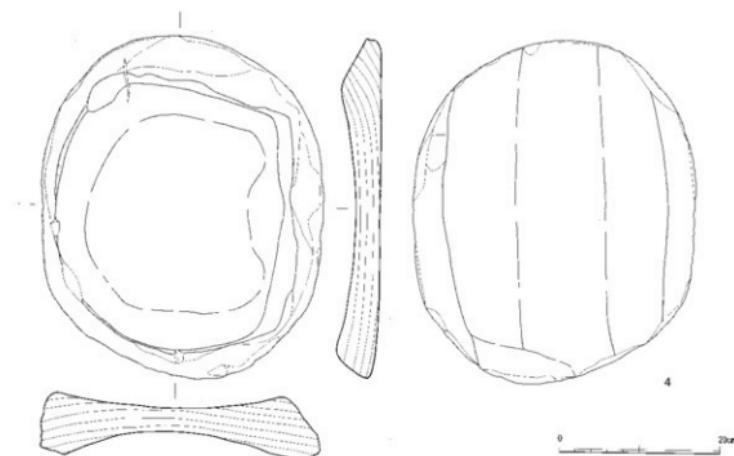
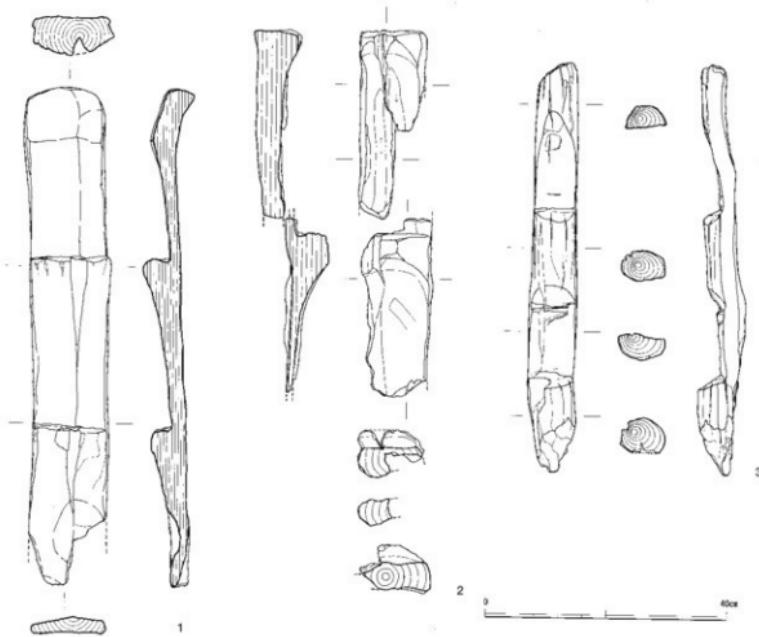


第29図 III区16層出土木器実測図 (15)

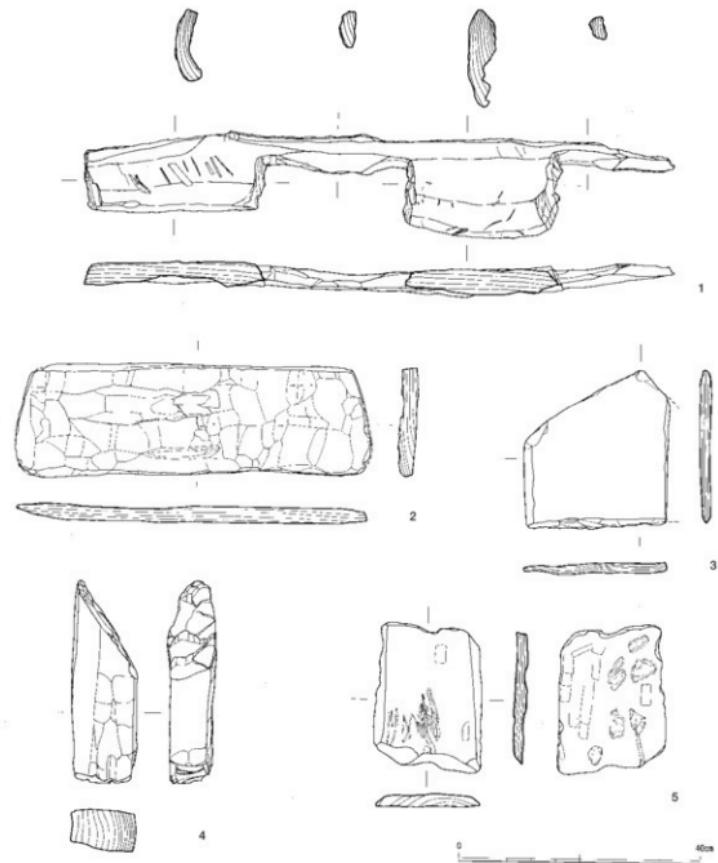
第32図1, 2は、一部を欠損するものの本来の形態は充分復元できるものであるが、その用途は全く不明である。1は、3つに割れて出土したが、一本を削りだしたものと考えられる。加工は細かく丁寧でかなり精巧に仕上げられている。2は、中央の厚い皿状の部分の両側に鋸角に曲がった棒状の部分がついており、全体を側面から見ると「M」字形となっている。一本を削りだして整形したものである。中央の厚い皿状の部分では、側面や底面などに切削痕が目立つものの上面は加工の痕跡がほとんど見られない。

弥生土器（第33図、第34図1～4）

第33図は16層出土の土器である。1は、口縁部～頸部を欠くが算盤玉形で鋸く屈曲する胴部を持ち、底部は平底である。外面は、ほぼ全面がハケメ調整されており、肩部と胴部屈曲部の上にそれぞれ数条の沈線文が施されており重弧文は見られない。2は、長頸壺の口縁部で内外ともにナデ調整されている。3も長頸壺の胴部は、くの字形に屈曲する胴部を持ち、胴部はまるみを持たず直線的に細長いものである。屈曲部には全周に短い刻み目が施され、また胴部上半には6～7本の沈線によって重弧文が7ヶ所描かれしており、その間に1ヶ所のみであるが蓆手文が描かれている。頸部直下には六条の沈線文が巡っている。2、3は直接接合する部分はないが、胎土や調整から見て同一個体の可

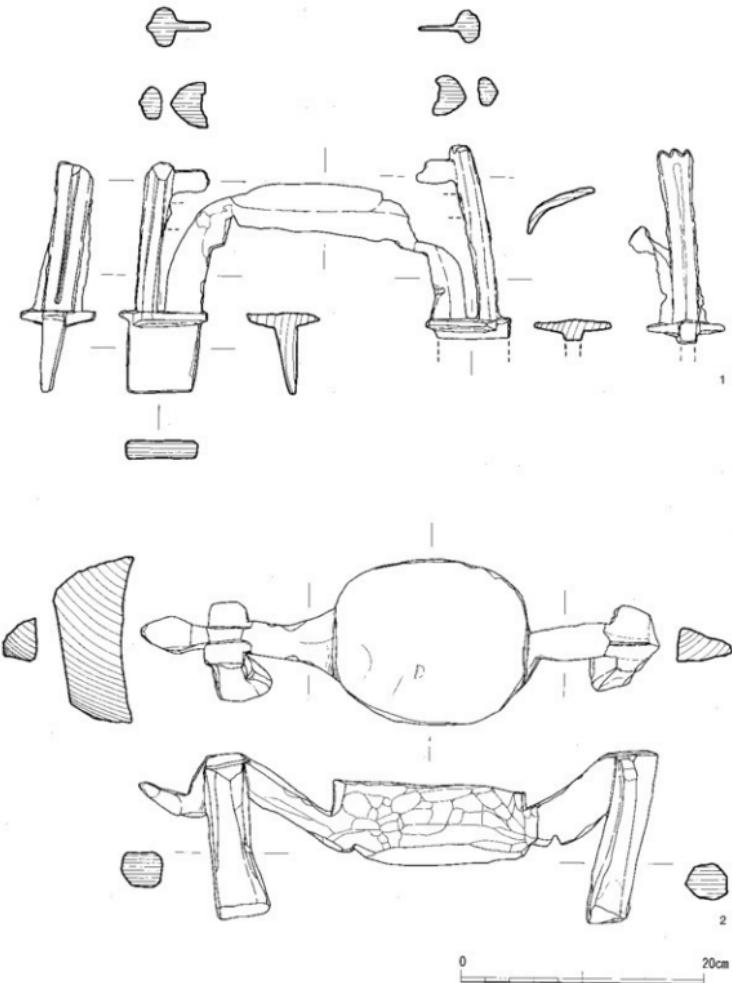


第30図 III区16層出土木器実測図 (16)

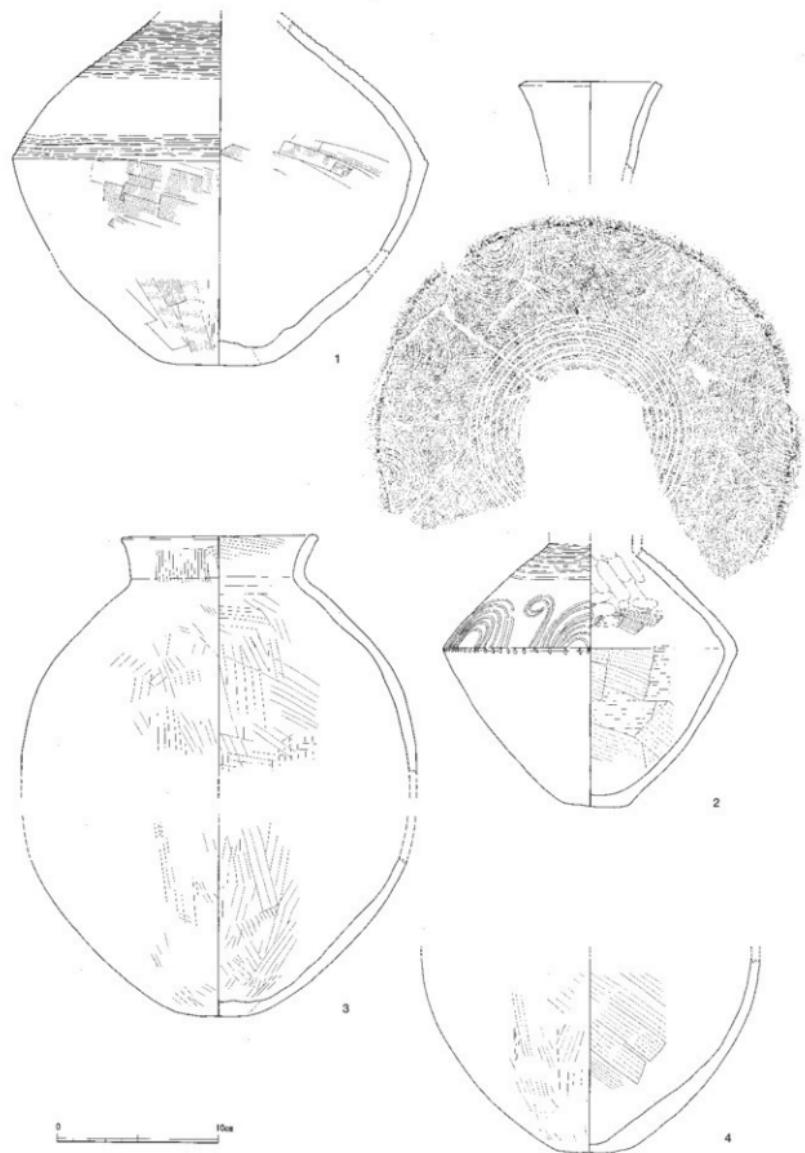


第31図 III区16層出土木器実測図（17）

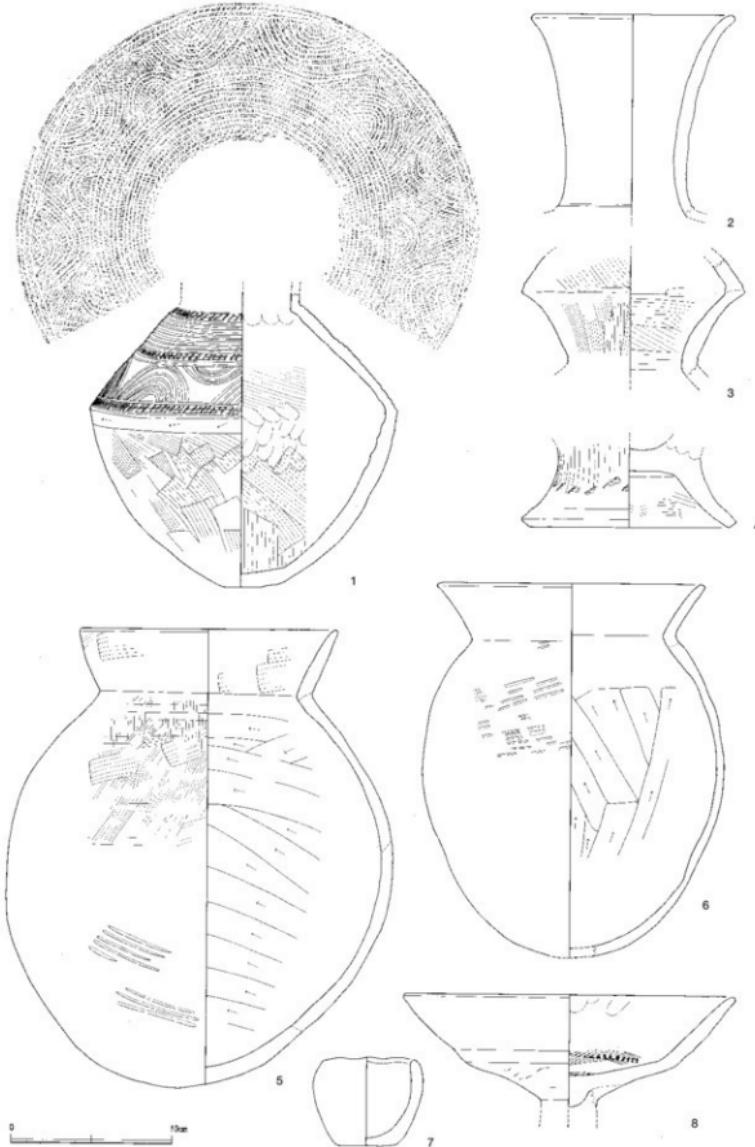
能性がある。3は、大型の壺形土器である。胴部上半と下半とでは接合する部分がなく正確な全形は不明であるが、外側に開きながら立ち上がる短い口縁部に倒卵形の胴部のつくものと思われ底部はわずかに平底となる。第34図1～4は第33図同様16層出土の土器である。1は長頸壺で頸部から上を欠いている。算盤玉形に胴部中ほどで鋭く屈曲するが、胴部上半は直線的ながら屈曲部より下の部位は比較的良く張り丸みを帯びている。底部はわずかに平底である。外面は、ほぼ全面がハケメ調整された後屈曲部より上の部分に重弧文と沈線文が施される。重弧文は、上下2段に上段5ヶ所、下段6ヶ所に施されているが下段の方が直径が大きい。また、屈曲部上には3段に分けて全周する刻み目が施されている。内面はほぼ全面ハケメ調整されているが、屈曲部付近は指頭圧痕が多数見られる。2は長頸壺の口縁部～頸部である。内湾しながら外側に開くもので、内外ともにナテ調整されているほか頸部下端に一条沈線文が巡っている。接合する胴部は確認で



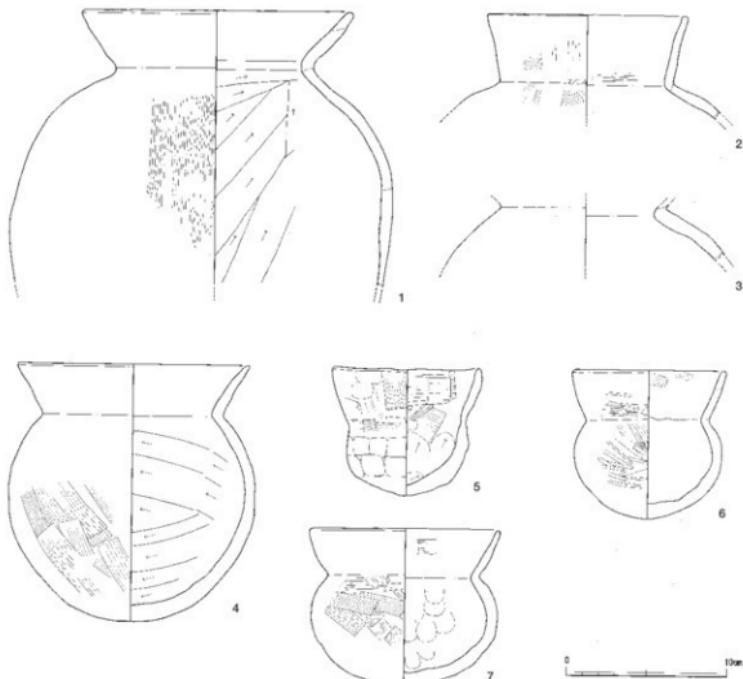
第32図 III区16層出土木器実測図 (18)



第33図 16層出土土器実測図



第34図 9, 16層出土土器実測図

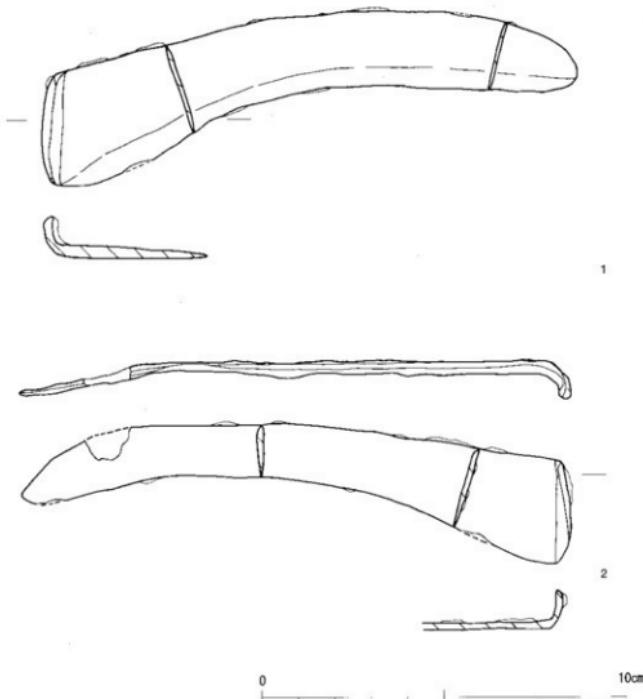


第35図 9層出土土器実測図

きなかった。3は、壺形土器の頸部付近の破片だが口縁部を欠いている。複合口縁で、内外面ともにハケメ調整されている。4は壺形土器の脚部で、短く内湾しながら外に開く。

#### 土師器（第34図5～8、第35図）

第34図は、9層より出土した土師器である。5、6は壺形土器である。5は、わずかに外反する口縁部に球形に近い胸部を持つ。底部は丸底で、口縁端部はまるくおさめている。頸部から口縁部は内外面ともに横方向のハケメ調整、胸部内面は横方向のヘラケズリ調整である。胸部外面は縦方向のハケメ調整であるが、下半には一部にタタキの痕跡が残されている。6は外反する口縁部にやや縱長の胸部を持つ。外面には胸部上半を中心にタタキの痕跡が残されている。7は手づくねの鉢である。8は、高坏の坏部で脚部は欠いている。第35図も9層出土の土器である。1～4は壺形土器で、5～7は小型丸底壺である。いずれも直線的に開く口縁部をもつが、5は胸部の張りが弱く胸部最大径は口縁部のよりも小さい。内外面ともに指頭圧痕が目立ち、器壁の厚さも不揃いであることから雰囲気を受ける。6はほぼ球形の胸部を持ち、外面はヘラミガキされている。7は、5、6と比較して全体の直径が大きく寸詰まりの印象を受ける。内面には指頭圧痕が目立つが、外面は比較的丁寧にハケメ調整されている。



第36図 鉄器実測図

鉄器（第36図1）

以上の他に鉄鎌が出土した。第36図1は、第17号遺物集中部より出土した鉄鎌である。全長2.7cm、最大幅2.7cmで、基部は上から見て右にほぼ90度折り曲げられている。着柄時には、柄に対して刃部は直角もしくはやや鈍角となっているものと考えられる。2mm程度と厚みが薄く刃部も研ぎ減りはほとんど見られない。遺存状態は、非常に良好である。出土層はIV層で古墳時代のものと考えられる。

### 第3節 IV区の調査

#### 1. 位置と調査区

IV区は、西片園田遺跡の最南端の調査区で調査範囲は南北55m、東西24m、平行四辺形の調査区となっている。今回調査区を通して標高は最も高い。現地表面では、ほぼ全面が水平にならされているが、基盤となる円礫層を見ると、d区の北半で最も高くなり（標高3.2m）、g-3～j-6区付近から南へ向かっては、再び緩やかに下降している。このためか、調査区内には他の調査区で見られたような流路などは見られなかった。ただし、土器を中心として遺物は比較的多く出土したもの検出した遺構の数はごく少なかった。次節で見るよう特に調査区北半では、IV区で確認した最下層の円礫層から現地表面までの堆積がごく浅く、遺物も南側への斜面を中心に検出されたことから、遺構が少ないので後世の削平によるものかもしれない。遺物は、古墳時代前期の土師器を中心である。

#### 2. 層序

基本的に水平堆積である。北側は、9層より下にはすぐ円礫層が広がっている。この礫層は、若干波打つながら南側にいくにつれ落ちていく。そして、南側ではその円礫層の下に粘土層や泥炭層が見られた。

##### IV区の土層

I層からIII層までは、I・II区の基本土層と同じである。

III a層 褐灰色土層（Hue10YR6 / 1）しまりあり、粘性あり。マンガン粒と鉄分を多く含む。

III b層 にぶい黄褐色土層（Hue2.5Y6 / 3）しまりあり、粘性あり。マンガン粒がみられ、全体的に黄色っぽくみえる。灰色の粘土が斑に混入している。

III c層 黄褐色土層（Hue2.5Y5 / 3）しまり、粘性ともにあり。粘土と砂が混入する。マンガン粒子がおおく、灰色の粘土が斑に混入している。

IV層 I区に同じ

IV a層 III区に同じ

IV b層 褐灰色土層（Hue10YR4 / 1）しまり強く、粘性あり。マンガン粒子を含むほか、部分的に鉄分が沈着している。

5層 黒褐色土層（Hue10YR2 / 2）しまりあり、粘性強い。鉄分が斑に沈着している。遺物包含層。

6層 緑灰色土層（Hue10G6 / 1）しまり、粘性ともにあり。全体的に白みがかっている。鉄分がやや大きめの粒子として沈着しているほか、炭化物を少量含む。

6 a層 にぶい黄褐色砂層（Hue10YR4 / 3）しまりはあるが、粘性なし。6層と色調はほぼ同じで、若干、粘土が混じる。上部に少量のマンガン粒を含むほか、鉄分が多く沈着している。炭化物は含まない。

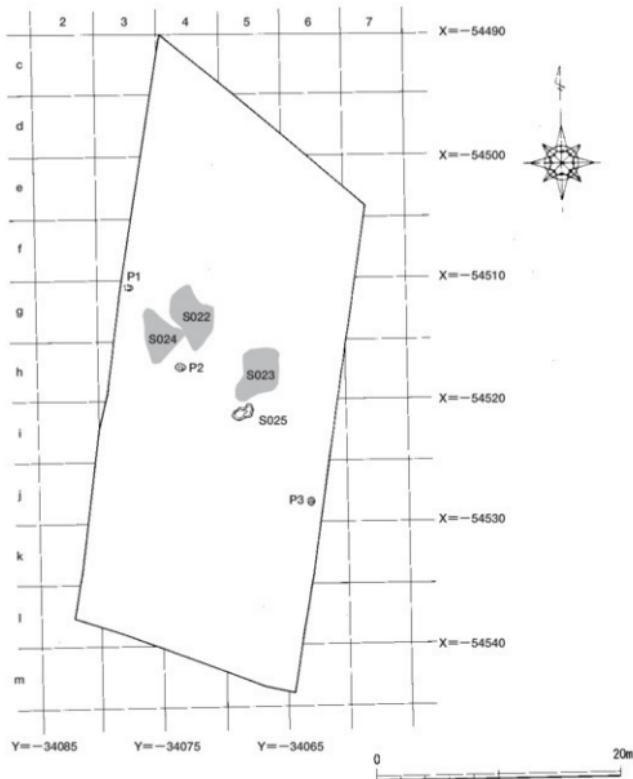
7層 青灰色土層（Hue5BG6 / 1）粘性、しまりともにあり。上部には鉄分が多く沈着しており、そのためやや黄色みがかっている。

8層 青灰色土層（Hue10BG5 / 1）粘性弱いが、しまりあり。細かい砂に粘土が少量混入している。鉄分が少量斑に沈着している。

9層 青灰色砂層（Hue5BG5 / 1）粘性なく、しまりあり。粒子の細かい砂で、北側ではほとんど鉄分もマンガン粒も含まないが、南側では鉄分が少量沈着している。

#### 3. 古墳時代の遺構と遺物

最も標高が高い調査区であることから、遺構の検出を期待したがまとまった遺構は検出できなかった。ただし、g-3区からj-6区にかけて、ほぼ一直線上に並ぶ柱穴を検出した（第37図P.1～3）。これらはそ

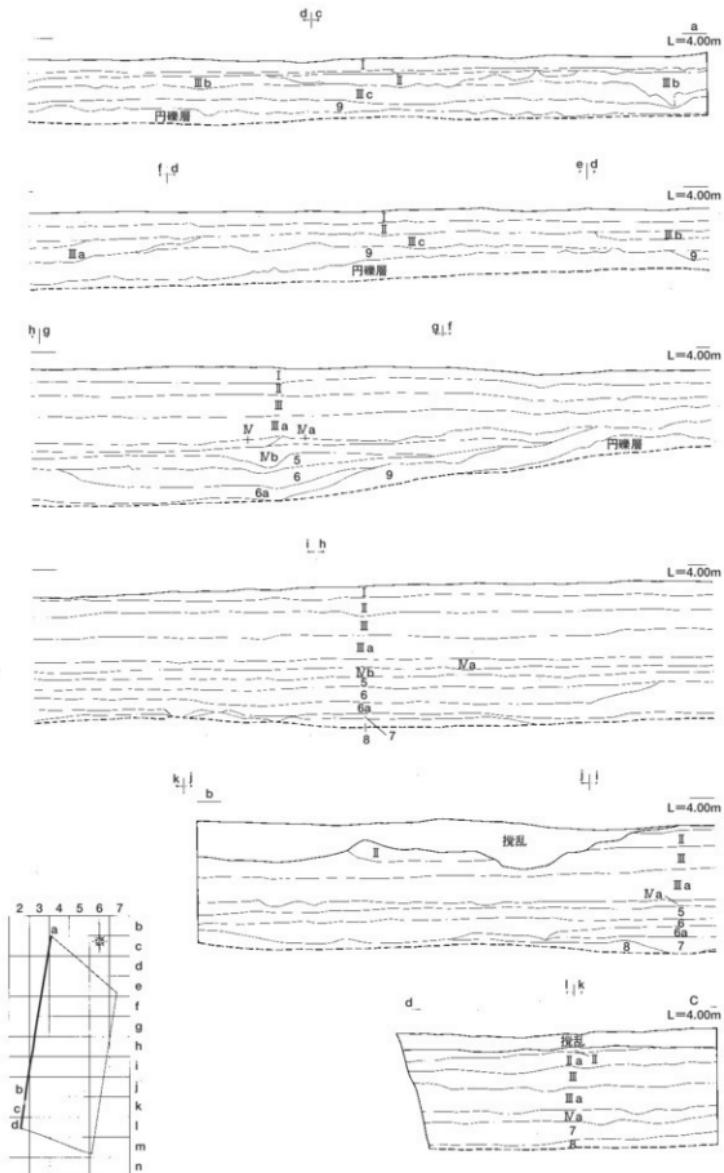


第37図 IV区遺構配置図

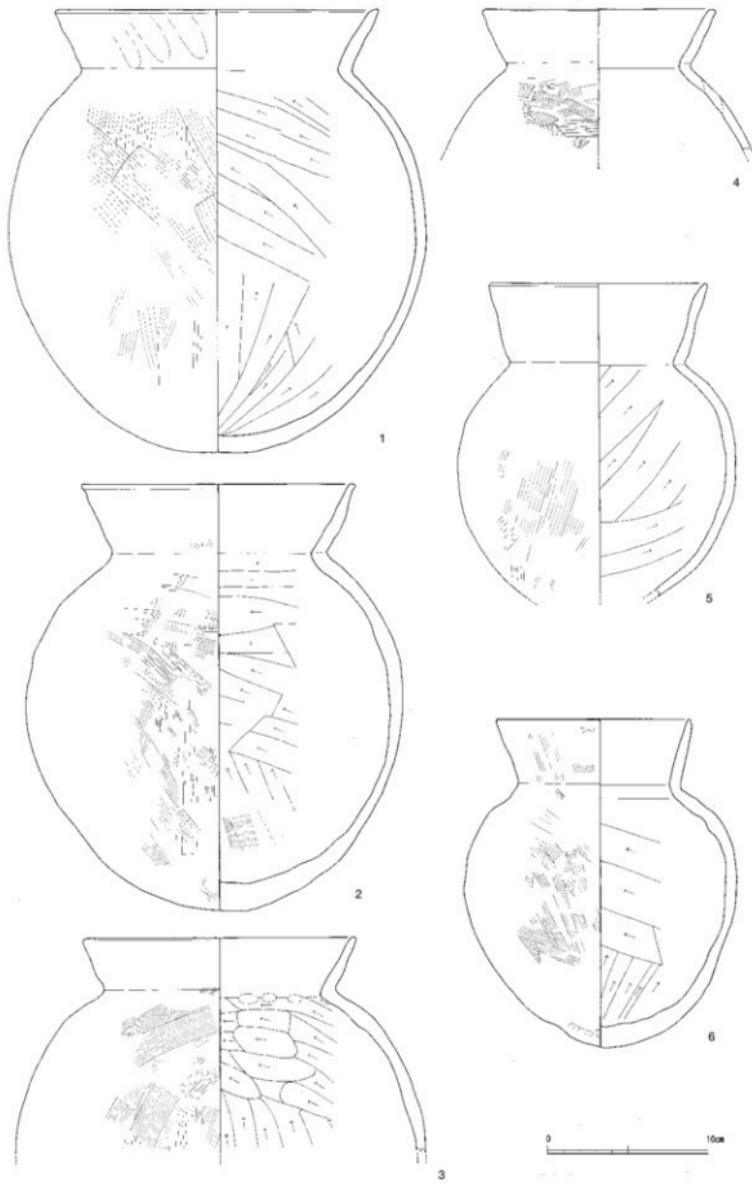
れぞれ8~10mの間隔で設けられていること（P2, P3の間には存在が予想された部分に樹根による擾乱が見られ検出できなかった）、いずれも直径が60cm前後であること、掘り込み面が5層と考えられることから、同時期のものであると考えられる。この柱穴群から南へと旧地形が下降していることから、何らかの施設（柵等）が設けられていた可能性が考えられる。また、第25号土坑については、P2, P3との中间に位置することから、これに対応する遺構の検出を期待したが、平面不整形であり、樹根による擾乱であると考えられる。

#### 出土遺物

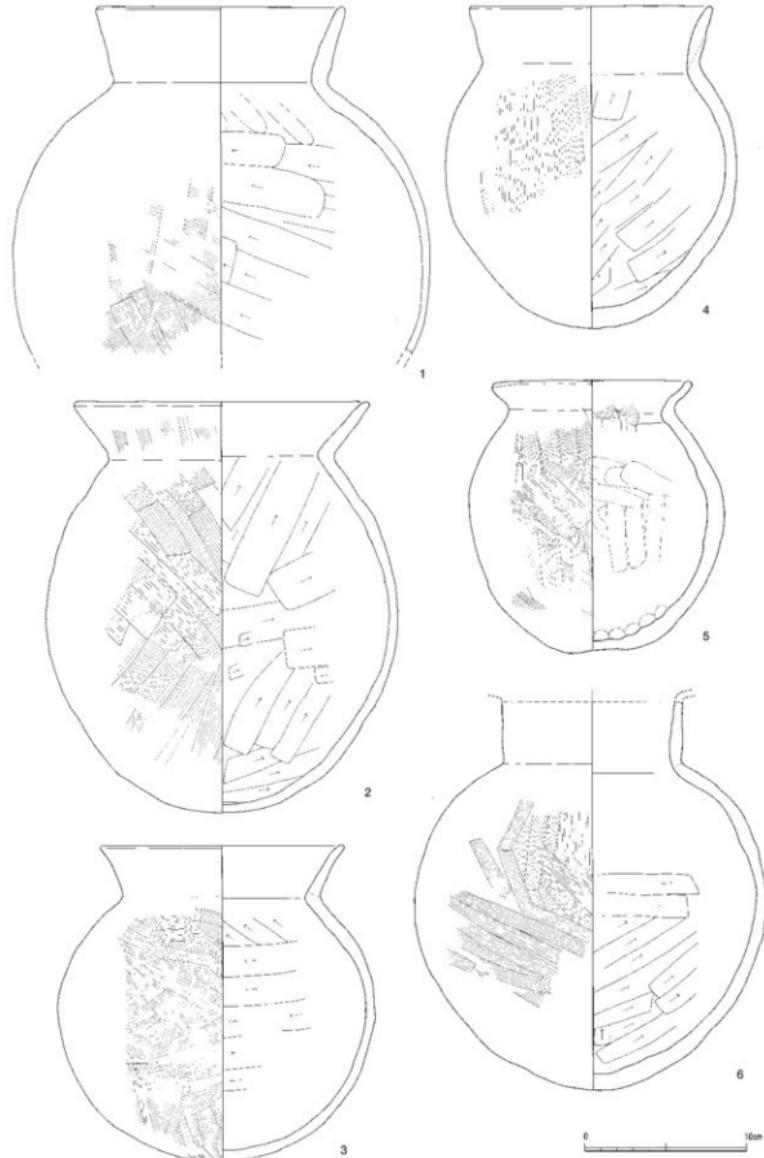
遺物は主に5層から出土した。上記した柱穴群の北側付近で、おおよそ3ヶ所にまとまって出土したほか、その南側でも斜面に落ち込むような形で検出された。出土したのは、土師器甕、高壺、小型丸底壺などのほか鉄器が2点出土した。



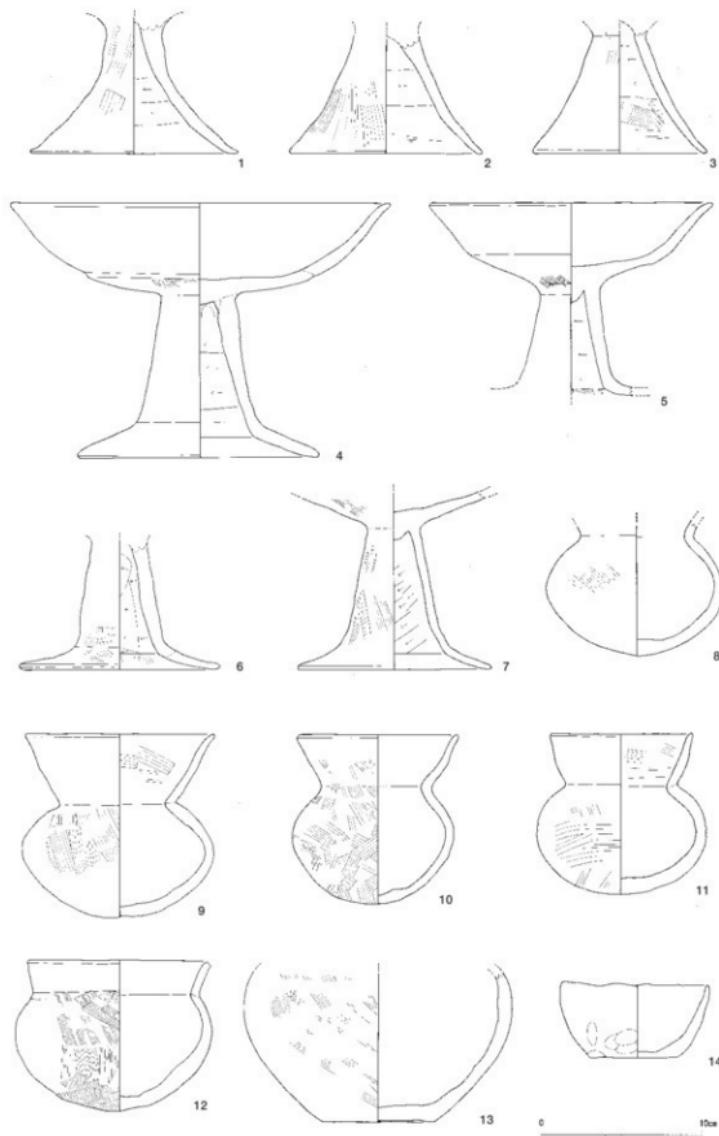
第38図 IV区西壁土層断面図



第39図 IVb～5層出土遺物実測図(1)

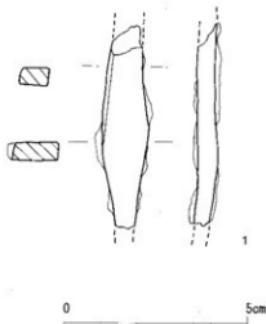


第40図 IVb～5層出土遺物実測図（2）



第41図 IVb～V層出土遺物実測図（3）

土器器（第39図～41図）



第42図 IV層出土鉄器実測図

やや縦長の球形の胴部に垂直に立ち上がる頸部を持つ。口縁部を欠いているが、二重口縁の壺になるものと考えられる。第41図1～7は高环形土器である。脚部のみしか残っていないものが多いが、脚部の形態から内湾しながら開くもの（1～3）と裾部付近で強く外側に屈曲するもの（4～7）とが見られる。いずれも脚部内面は横方向にヘラケズリ調整されており、外面はナデ、もしくはハケメ調整されている。坏部が残るのは後者のみであるが、中ほどで屈曲するもの（5）と屈曲部分に段を有するもの（4）とがある。8～11は小型丸底壺である。細かな違いがあるものの、いずれもやや横長の楕円形の胴部を持ち、頸部からは外反して直線的に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部の径は胴部の最大径よりもわずかに小さい。12は變形土器であるが、口径と比して器高がかなり低い。13、14は鉢形土器である。13は口縁部を欠くが、平底で丸みを持つ器壁が外反しながら立ち上がっている。14は13と異なり、平底ではば直線的に外反しながら立ち上がる器壁を持つ。底部付近には指頭圧痕が目立つ。

鉄器（第36図2 第42図1）

第36図2は、IV区先行トレンチで出土した。全長15.0cm、最大幅2.9cmの鉄鎌である。刃部は、緩やかに湾曲しており極端に研ぎ減りした様子は見られない。基部は、おおよそ直角に折り曲げられており、着柄時には柄に対して直角もしくはやや鈍角となっているものと考えられる。出土層位から古墳時代のものと考えられる。

第42図1は、IV区i～6区から出土した。現状で長さ5.6cm、幅0.5～1.3cm、厚さは0.4cm前後である。断面長方形で、両端は幅が狭くなってしまっており特に下半では急激に幅を減じている。遺存状態は、比較的良好であるが器種は不明である。（内田、増田）

## 第3章 まとめ

今回調査した西片園田遺跡では、弥生、古墳、古代、中世の遺構、遺物が検出されたほか、多量の木器が出土した。それぞれの時代の出土遺物や遺構については、報告の中で述べた通りである。ここでは出土遺物を中心に、各時代についてまとめておきたい。

### 1. 遺跡の立地

今回調査区の周辺の現況は水田であり、一筆毎にわずかに高低差はあるものの、ほぼ水平にならされている。ただし地形の全体的な傾向としては、現在の八代臨港線から北側の新幹線新八代駅に向けて、なだらかに下降していく。この傾向は、今回の調査で検出された基盤となる礫層部分ではさらにはっきりとしており、八代臨港線に隣接するIV区が最も高く、そこから北へ向けてIII区南半部分でおよそ2m急激に下降している。I～III区にかけては、時期をたがえて自然流路がいくつか走っており、比較的新しい時期までかなり低湿な環境であったと考えられる。III区では調査区北半の標高2m前後に厚い粘土層（9層）が形成されており、この層を掘り抜いた段階で湧水したが、この量はかなりのもので、ポンプでも完全に排除することは出来なかった。この粘土層の形成については、後述のごとく、上下で出土する土器の様相から、古墳時代前期前半頃であった可能性が高い。I・II区でも、ほぼ同様な状況であった。平成13年に八代市教育委員会が東側隣接地で行った調査では、プラントオバール分析の結果、弥生時代中期の遺物包含層（V層）および古墳時代後期の遺構に切られた包含層（IV層）の時期にはヨシ属が優勢であることから、古墳時代後期以前にはこの周辺が湿地的な環境であったことが指摘されている<sup>1)</sup>。今回の調査結果をみても、遺跡周辺はかなり長い期間湿地的な環境であったものと考えられる。

また、III区南半はIV区に向かって上昇し、III、IV区の境界付近で最も高くなり、IV区の中では緩やかに南西へ下降していく。III、IV区の境界付近で最も標高が高くなるが、この最も高くなる部分は、IV区の中においては、南東から北西方向へ伸びていく。III区での粘土層の形成（古墳時代前期）以後はその高低差は小さくなるものの、依然としてはっきり周辺より高い微高地として残ったものと考えられる。平成6年に隣接地（現熊本県総合庁舎）で熊本県教育委員会が行った調査<sup>2)</sup>でも、A区～B区にかけて南東～北西へと微高地が続く状況が検出されており、今回のIV区付近の微高地とつながる可能性が高い。また、IV区の南西側すでに南へと下傾する傾斜が見られることから、この微高地はごく幅狭いものであったものと考えられる。今回調査したIII～IV区にかけての古墳時代の土器の出土状況が、ここから流れ落ちるような状況であったことと、平成6年度調査地A区から出土した土器がほぼ同時のものであることから考えれば、古墳時代にはこの狭い微高地上に小規模ながら集落が営まれたものと考えられる。

西片園田遺跡西側、現在の八代臨港線付近には古墳時代中期～後期にかけて大型の古墳が相次いで築かれていることから、比較的安定した微高地であった可能性が高く、上記した今回調査地内の微高地がごく狭いものであることを考えれば、各時代の集落の中心は現在の八代臨港線付近にあった可能性が高いと考えられる。

### 2. 弥生～古墳時代初頭の遺構と遺物

#### a. 出土した土器について

今回の調査で弥生時代の土器が比較的まとまって出土したのはIII区であり、特に木器の出土した層から木器とともに出土した土器には、長頸壺、壺、甕などがある。壺形土器（第35図4）は口縁部が短く、胴部最大径がほぼ中位付近にくるものと考えられる。別に「く」の字状に屈曲する複合口縁をもつ壺も出土してい

る。長頸壺には2種類が見られる。一つは底部が平底で算盤玉状に屈曲する胸部を持ち、屈曲部上部と肩部に数条ずつの沈線文を施すものである（第33図1）。今一つは、かろうじて平底の底部でやや器高が高く張りの弱い算盤玉形の胸部を持ち、沈線文と重弧文とを合わせて施すもの（第34図1、第33図2）である。また、出土した菱形土器脚部（第34図4）は内湾しながら短く「ハ」の字状に開くものである。これらの特徴は、近隣には適当な例がないが、球磨郡錦町夏女遺跡57号住居跡出土の土器<sup>6</sup>に最も近く、弥生時代後期中葉～後葉に位置づけられるものと考えられる。

なお、第34図5、6は倒卵形気味の大部に直線的に伸びる口縁部を持ち、口縁端部は丸く納めている。また、外面にタタキ目が見られこれをハケメによって消していることから、野田拓治氏の編年<sup>7</sup>による古墳期に対応するものと考えられる。また、高环は（第34図8）環部の上下の境に段を有し、そこから直線的に口縁端部まで伸びている。これについては沈目1期に対応するものと考えられよう。手づくね土器（第34図7）もこの時期から増加することが指摘されており、これに伴う可能性が高いと考えられる。これら第34図5～8の土器については、出土当初は木器出土層に同一と捉えていたものの、その後の検討で出土レベルは木器より高い位置で、粘土層（9層）下部にあたり、木器とはっきり共伴するものとは言えない。むしろこれらについては粘土層の形成開始期、もしくは木器の時期の下限を示すものと捉えるべきであろう。

従って今回出土の木器については、弥生時代後期後半～古墳時代初頭に比定されるものと考えられる。

#### b. 出土の木製品について

今回の調査では、大量の木器が出土した。I・II区でもわずかに出土は見られたもののその大半は杭や木片であり、製品はほとんどなく、大量に出土したのはIII区16層からである。その総数は500点を超え、大半が枝を落とした丸木、建築材かと思われる板材や先端を尖らせた矢板、楔分割によるいわゆるミカン割りの木材、用途のはっきりしない木片などであるが、こうしたものを除いて何らかの形で器種を認定しうるものには、およそ90点あり、今回はこのうちの88点を図示した。16層は、上層の古墳時代前期後半の遺物包含層との間に厚い青灰色土層を挟んでおり、既に検討した木器とともに出土した土器から、明らかに古墳時代前期以前に形成された層である。また、出土した木器は同一層から出土した土器から考えると、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭に位置づけられる。なお、今回実施した出土木器の年代測定の結果はやや幅をもつが、おおよそ大過ない年代であると考えられる。

木器の出土状態（第14図）をみると、III区全体に木器が散乱しているが、その中でも調査区の西側に木器が多い。木器包含層の下には基盤となる円礫層があるが、これは北および西方向へと緩やかに下降しており、木器の出土状態はこれを反映したものと考えられる。また、木器の器種毎の出土位置について、特に傾向はみられない。木器を包含する砂層中に大量の木の葉が含まれることや、現代においても木器の出土レベルでは湧水がかなり激しいこと、粘土層より上の古墳時代以降の層中にも、小さな流路のあった痕跡が多く残されており（第15号流路など）、この場所が当時は旧河道であった可能性も考えられる。したがって、出土した木器は洪水などの要因によって、自然流路の中に二次的に堆積したものである可能性が最も高い。

しかしながら、二本の大型の丸太が残されていたことや、いわゆるミカン割りにした木材が多く見られること、製品の中には使用した痕跡の見受けられないものもあることなどから、この場所が水さらしもふくめた木器の加工場所という可能性も考えられる。この点については、今後さらに類例の増加を待って検討する必要があろう。大型の丸太材の周囲から木器が出土する状況は、隣接する平成6年度の西片町遺跡A区の調査でも検出されている<sup>8</sup>。いずれにしても、大型の丸太材やミカン割りにした木材の存在から、この近傍で木器の生産が行われていた可能性が高いと考えられる。近隣で木器が出土している遺跡としては、八代市下堀切遺跡が挙げられる<sup>9</sup>。こちらは弥生時代後期前葉と本遺跡にやや先行する時期のものであり、平成6年

度調査の西片町遺跡出土土器に近い時期である。

次に出土した木器についてまとめておきたい。今回出土した木器を木器集成図録<sup>44</sup>に従って大きく分類すると、横樋、鉢、泥除け等の農具、盤、槽、桶等の容器類、匙などの食具、アカ取りもしくはモミスクイとされる漁労具、鞘、弓といった武器、梯子、柱などの建材などがあり、その他に用途不明品が数点ある。それぞれの形態、加工などの特徴はすでに報告の中で述べた通りであり、ここでは全体的な傾向や特徴についてまとめておきたい。

まず、出土した木器を上記した分類に従って分類すると、容器類が全体の4割近くを占め、次いで農具が約3割となる。これらでおおよそ全体の7割を占めることとなり、その他に武器、漁労具、工具などは3割程度を占めるに過ぎない。建築部材については約1割を占めてはいるが、その他に多量に出土しているミカン割りの原材などにまぎれている可能性もあることから、正確な数値とは言えないかもしれない。

## 1. 容器

容器については、平面形態から方形もしくは横円形（26点）、円形（4点）のものとに分けられる。方形の容器は大きさ、把手や脚の有無でさらにいくつかに分けることが出来る。

一般に方形容器については大型で深さのあるものを槽、小型のものを盤と呼び分けているが、その具体的な基準ははっきりと示されていない。今回出土品については、深さの面では顕著な差はみられないが、長さについてみると60cmを超えるもの（第15図～第17図）とそれ以下のもの（第18図～第20図）とに分けられる可能性がある。このうち第17図3については未成品の可能性があることから除くとしても、その他第16図2（バラ科サクラ属）以外の大型品はすべてセンダンを用いてつくられている。これらには脚、もしくは棒状の特徴的な把手のつくものがある。また脚や把手についてみると、60cmを超える大型品を除くと、30cmを超えるものについてはほぼすべてに把手、もしくは脚がつき、それ以下のものにはつかないものが多いことが指摘できる。持ちやすさや安定性を考慮したものとも用途を反映したものと考えられる。

一方で円形の容器については脚がつくものが基本である。第21図の3点は、いずれもほぼ同じ形態を目指したものと思われる。いずれも半分に割れているが、もとは4ヶ所に脚がついていたものと考えられる。先端を欠損したものも多いが、本来この脚は、中央の半球状の容器部分が安定する程度の高さであったものと考えられる。第21図2のみが脚部の長さがそれを満たしており、第21図1、3は2のような短い脚のつく形態であった可能性が高く、直径が近いことや、使用している樹種が同じ（ムクロジ）であることから、第22図3はこれらの脚である可能性も考えられる。桶については一木を割り抜いて、底までが一体のものとしてつくられている。この時期の桶は側板を一木の割り抜きで作成し、その下部に突帯を削り出して底板を別にはめこむものであり、今回のように一木を割り抜いてつくったものは例がないようである。また、第22図1は図上側の欠損部分が斜めに描っており、第17図2のような盤が上にのる脚付きの盤、もしくは案となるものと考えられる。

## 2. 農具

農具には、鉢およびその柄と考えられるもののほか、泥除けの可能性のあるもの横樋がある。鉢には直柄の横鉢、平鉢、三又鉢があるが、いずれも方形の柄穴を持つ。その他の破片も鉢になると考えられるものであり、いずれもアカガシを用いている。第25図の柄はこれらに伴う可能性が高い。また第26図2は未成品ながら、その形状から組み合わせ平鉢になる可能性を考えたが、これについては使用されている樹種がクワ科クワ属であること、組み合わせ部が薄くなることなどから、その他の器種（やや厚みが足りないが把手付き盤等が考えられる）になるものかもしれない<sup>45</sup>。

次に横樋は8点が出土している。今回出土の木器は使用痕のはっきりしないものが多い中で、横樋については使用痕が明瞭である。形状と使用痕をもとにこれらを区分すると以下の4種類に分類できる。

1類（第24図1）把手と身の部分の境が鋭角となり、はっきりとしているもの。幅3.0cm程度の比較的小さな打ち込み痕がみられる。

2類（第24図5、6）把手と身の境が1類のように鋭角とならず斜めに移行し、この部分には加工痕が明瞭に残るものが多い。身の中央付近は滑らかに凹む形であることが異なる。

2'類（第24図2～4）形状は2類とよく似る。2類が身の中央付近が緩やかに凹む形であるのに対して、身の中央付近が激しく打撃したようにささくれ立って、めくれたような痕跡が目立つ。

3類（第24図7、8）1～2'類と比較して、全体に細身で細長い印象を受ける。使用痕はあまりはっきりせず、部分的に平坦になる程度である。

これらについて渡辺誠の分類<sup>1)</sup>と対比すると、1類がBタイプ、2、3類がEタイプに対応するものと考えられる。渡辺の民俗例からの集成ではいずれも本来豆打ちが主な用途であり、その他特にBタイプについては工具に転用される例のあることが述べられている。このことから考へるならば、ゆるやかに湾曲する使用痕を持つ2類が本来の用途を示すものと考えられる。その一方で激しく打ち付けたような痕跡を持つ1、2'類については工具への転用を示すものと考えられる。ただし、木柵の出現以前には横樋を工具として用いることは普遍的であったとする指摘もあり、同じ形態で多様な用途に対応していたものとも考えられる。

### 3. その他

その他の木器については、出土数も少なく特徴的なものについて記述する。武器については鞘と弓がある。鞘は形状の異なる2点が出土した。出土の位置がごく近いことから、これらが1つのセットであると考えられる。特に下端部の形状が異なっており、第27図1のほうは下端が、2の方は下端からやや上が張り出す形になっており、組み合わせて互い違いとなる突出部の間を縛ることで固定することを狙ったものと考えられる。表裏にそれぞれ突出部を造り出すよりは合理的で、省力化を図ったものかもしれない。鞘口付近などでも顯著な使用痕は見受けられず、未使用品の可能性も考えられる<sup>2)</sup>。九州地方では鞘の出土例はごく少なく<sup>3)</sup>、近畿地方の例では表裏で形状の異なる例は見受けられないようである。<sup>4)</sup>

梯子のうち、第30図3は単独で使用するには幅も狭く、組み合わせ式の梯子になる可能性が考えられる。その他はいずれも一木梯子であるが、第30図1は、最上段裏側を弧状に割り込んでいる。一木の梯子については、下端を弧状に割り込む形で、横木に架け渡して沈下を防いだと推定されているものがあり、上下の逆はあるが同じ効果を狙ったものと考えられる。

以上述べてきたほかに、用途不明品が数点ある。特に第32図に示した2例はこれまでに全く類例のないものである。第32図1は下端部が先端に向けて厚さを減じており、他の部材に何らかの形でこの部分を差し込んで使用したのではないかと考えられる。第32図2については加工痕が全体に目立つものが真ん中の皿状の部分について、極めて丁寧に上面が仕上げられていることから、この部分を上にして使用されたものと考えられる。単独でも辛うじて自立するが、かなり不安定であり、これについても第32図1同様何らかの形で他の部材を組み合わせて使用した可能性も考えられる。

### 4. 樹種の選択について

今回図示したものを中心として樹種分析を行った。細部については第4章に詳しいが、ここでは大まかな利用の状況を述べておきたい。特に多く利用されているのはセンダン、クワ、アカガシであり、これだけで全体の約4割を占めている。以下、イヌガヤ、キハダ、チシャノキ、ハイノキ、クスノキがこれに次ぐ。こ

のうち特に選択の傾向が強くうかがわれるのはアカガシで、同定された11点のうち8点が鋤類を中心とした農具に用いられている。また、センダンとクワについては、25点中14点が容器に用いられている。特にセンダンが大型の容器に用いられている点は先に述べた通りであり、小型容器にはセンダンはほとんど用いられず、クワやヤブニッケイなどを用いている。また、第16図2の大型方形盤はサクラを用いており、今回出土遺物の中では特殊といえる。

その他の器種では複雑な形状のものが多いためか、キハダ、クスノキなど比較的木質の柔らかい木を用いているようである。

なお、今回は特に形態のはっきりしたものを中心として樹種鑑定を行い、その他の特にミカン割りにした部材の樹種鑑定は行っていない。こうした部材はかなりの数存在することから、近傍で木器の生産が行われていたものと考えられるが、具体的にどの器種を製作していたのかを明らかと為しれない。近年、北部九州では木器生産、特に鋤鎌についての地域間の分業が論じられている<sup>30</sup>ことから、今後、こうした部材についても樹種の特定を行っていかなくてはならないだろう。

### 3. 古墳時代の遺物

今回の調査では古墳時代の遺構は検出されておらず、遺物は主に包含層から出土している。出土した遺物は土師器を中心である。このうちまとまって検出されたのは、主にⅢ、Ⅳ区からである。出土したのは甕、高坏を中心として、小型丸底壺の数が多い。甕は大小の2者があるが、いずれも胴部がわずかに倒卵形もしくは球形を呈し、ほぼ直線的に伸びる口縁部を持つ。外面はハケメ調整されてタタキ目を残さず、内面はケズリ調整されている。高坏には2種が認められる。脚部全体が内湾しながら開くものと、脚部の裾部が鋭角に開くものである。このうち前者については坏部の形態が明らかではないが、後者については坏部の上下の境にわずかに段を有するものと、段を有さず緩やかに屈曲するものとがある。また壺形土器は球形の胴部に直立する頸部を持つことから、二重口縁になるものと考えられる。小型丸底壺は口縁部と胴部の径がほぼ同じか、もしくは胴部径がやや大きい。

以上述べてきた特徴は、野田拓治の編年<sup>31</sup>における沈目Ⅱ期に該当するものと考えられ、古墳時代前期後半に位置づけられるものと考えられる。

### 4. 古代～中世の遺構と遺物

古代～中世と考えられる遺物についても、いずれも明確な遺構に伴う形で出土したものはなく、包含層からの出土が大半である。遺物はⅠ～Ⅲ区でまばらに出土しており、量もごく少ない。Ⅲ区第15号流路からは、須恵器の蓋、坏、そして土師器の甕が出土している。いずれもおおよそ8世紀代に収まるものと考えられ、完形に近いものが多いことから、近傍にこの時期の集落が存在するものと考えられる。

Ⅰ区の第4号遺物集中部からは坏が4点まとめて出土した。(第4図) 坏は底部に切り離し時の余分な粘土が残り、そこからわずかに内湾しながら斜めに立ち上がる体部を持ち、口径は12cm前後である。類似する形態の土器は八代市川田京坪遺跡<sup>32</sup>等で出土しており、9世紀代に位置づけられるものと考えられる。

その他、第7号流路からは皿、木製椀、滑石製の石鍋(第3図1～5)等が出土している。このうち石鍋は口径と底径がほぼ同じで、口縁直下に断面不等辺台形の鋸が巡っており、12世紀代と考えられる<sup>33</sup>。その他の遺物はごく細片が多く詳細な時期については不明であるが、これを前後する時期と思われる。

これらの時期の遺構、遺物はこれまでに遺跡東側の山麓付近で多数検出されている<sup>34</sup>が、これまでの西片町遺跡全体の調査を通しても数は少ない。前述したように八代市の実施した調査では、プラントオパール分析から湿地、もしくは水田であった可能性が指摘されており<sup>35</sup>、西片園田遺跡周辺では、ごく小規模な

集落が営まれた程度であったと考えられる。(増田)

- i 濱田健資編 2002『西片町遺跡（園田地区）一送電鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ－』八代市文化財調査報告書 第18集 八代市教育委員会
- ii 高谷和生編 1996『西片町遺跡－新熊本県八代総合庁舎建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告一』熊本県文化財調査報告 第153集 熊本県教育委員会
- iii 園村辰実編 1993『夏女遺跡』熊本県文化財調査報告第128集 熊本県教育委員会
- iv 野田拓治 1982『古式土器師の成立と展開－特に中九州地域における編年試案一』「森貞次郎博士古希祈念古文化論集 下巻」森貞次郎博士古希記念論文集刊行会
- v 高谷1996（前掲書）。この中ではその要因について「洪水などの大規模な流れ込みとも推測される」とされている。
- vi 吉永明編 1988『下堀切遺跡Ⅰ－熊本県八代市豊原下町所在の遺跡の調査概要－』八代市文化財調査報告書第3集 八代市教育委員会  
吉永明編 1989『下堀切遺跡Ⅱ－熊本県八代市豊原下町所在の遺跡調査－』八代市文化財調査報告書第4集 八代市教育委員会
- vii 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録（近畿原始編）』
- viii 熊本県下でこれまで検出された鍬のうち樹種鑑定の結果が公開されているものは、その大半がアカガシ亜属とされている。  
下堀切遺跡 吉永明編 1988、1989（前掲書）  
柳町遺跡 高谷和生編 2001『柳町遺跡Ⅰ』熊本県文化財調査報告第200集 熊本県教育委員会
- ix 渡辺誠 1985.3 「ヨコヅチの考古・民具学的研究」「考古学雑誌』第70巻3号
- x 山口謙治氏のご教示による
- xi 長崎県里田原遺跡、大分県下郡遺跡に出土例があるが、いずれも形状はかなり異なる。
- xii 奈良国立文化財研究所 前掲書
- xiii 山口謙治 2000「弥生時代の木製農具－韓国新昌洞遺跡出土農具から－」「韓国古代文化の変遷と交渉」伊世英教授定年記念論叢刊行委員会
- xiv 野田1982（前掲書）
- xv 野田拓治編 1980『川田京坪遺跡』『車塚古墳・川田京坪遺跡・川田小筑遺跡・塙塚古墳』熊本県文化財調査報告第46集 熊本県教育委員会
- xvi 木戸雅寿 1995「13. 石鍋」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- xvii 野田拓治編 1980『興善寺1』熊本県文化財調査報告第45集 熊本県教育委員会  
青木勝士編 2003『古麓能寺遺跡・古麓城下遺跡』熊本県文化財調査報告 第216集 熊本県教育委員会
- xviii 濱田健資編 2002（前掲書）

## 第4章 分析

### 1. 西片園田遺跡から出土した大型植物化石

新山 雅広（パレオ・ラボ）

#### 1.はじめに

西片園田遺跡は、熊本県八代市に所在する。ここでは、遺跡周辺の古植生および栽培・利用状況を明らかにする一端として大型植物化石の検討を行った。

#### 2. 試料と方法

大型植物化石の検討は、抽出済みでタッパーに液浸保存された合計2試料について行った。大型植物化石の同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。

#### 3. 出土した大型植物化石

全試料で同定された分類群は、木本がイヌガヤ種子、オニグルミ核、イチイガシ果実・殻斗、果実、シラカシ果実、アカガシ亜属果実・殻斗、コナラ属果実、ツブラジイ果実、クスノキ科種子、モモ核、センダン核、アカメガシワ種子、ムクロジ種子、ブドウ属種子、エゴノキ種子の14分類群であり、草本がミクリ属核、オオムギ炭化胚乳、エノコログサ属穎、カナムグラ種子、ノブドウ種子、カラスウリ種子、オナモミ果実の7分類群である。これら分類群の各試料からの出土個数を表1に示した。以下に、各試料の大型植物化石を記載する。

I区 S007：木本は、種類・個数が少なく、アカメガシワとブドウ属のみであり、ブドウ属はやや目立った。草本は、ミクリ属が圧倒的に多産し、カナムグラも比較的多産した。他は、稀であるが、オオムギ、エノコログサ属、ノブドウ、カラスウリ、オナモミが得られた。

III区木器包含層：木本のみが得られた。エゴノキ、モモ、イチイガシ、コナラ属の順に多産し、イヌガヤ、オニグルミ、シラカシ、アカガシ亜属、ツブラジイ、クスノキ科、センダン、ムクロジも得られた。

#### 4. 主な大型植物化石の形態記載

##### (1) オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核

側面觀は卵形から卵円形、先端は鋭頭、上面觀は円形。表面には、縦に不規則な彫紋があり、明瞭な1本の縫合線が縦に走る。

##### (2) イチイガシ *Quercus ilicifolia* Blume 果実・殻斗、果実

果実・殻斗としたものは、殻斗付きの果実である。果実上部は、輪状紋があり、真っ直ぐ立ち上がって花柱につながる。イチイガシの柱頭は、本来短くて傘状で外側を向くが、出土果実は保存されていない。

##### (3) シラカシ *Quercus myrsinaefolia* Blume 果実

果実上部に幅の狭い顯著な輪状紋がある。シラカシの輪状紋の部分は、円錐状に突出するが、出土果実は、圧力を受けて潰れているようである。アラカシの可能性も考えられたが、アラカシの輪状紋は、薄くて肩にまで広がるのでシラカシとした。

##### (4) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 果実・殻斗

殻斗付きの果実であり、殻斗に輪層が見られるので、アカガシ亜属と分かるが、いわゆる首から上の部分が欠損しているため、これ以上の同定には至らない。しかし、首の折れ跡から推定するにイチイガシの可能

性が高いと考えられる。

(5) コナラ属 *Quercus* 果実

完形果実はいずれも頂部欠損しており、コナラ亜属かアカガシ亜属かの識別は困難である。しかし、首の折れ跡からは、イチイガシを含む可能性があると推定される。果実上部や尻（穂斗との付着部）以外の果実の断片（果皮片）は、コナラ属以上の同定には至らない。

(6) ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* var. *cuspidata* (Thunb.) Schottky 果実

やや光沢のある黒褐色で卵円形。長さ約 9 mm。

(7) モモ *Prunus persica* Batsch 核

上面觀は両凸レンズ形。側面觀は卵円形で厚みがあるものと卵形で細身のものとがある。下端に臍があり、一方の側面には縫合線が発達する。表面には不規則に流れるような溝と穴がある。完形のうち 1 点は、げっ歯類による食害痕の穴が 1 つある。破片としたものは、1 / 2 片である。長さ 19~29mm 程度。

(8) アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb.) Muell. et Arg. 種子

黒色で完形であれば球形～やや扁平な球形。Y 字型の臍がある。出土種子は破片であり、表面には瘤状ないし棍棒状の隆起が密にある。

(9) ブドウ属 *Vitis* 種子

側面觀は卵形、上面觀は橢円形。背面には匙状の臍があり、腹面には穴が 2 つある。

(10) エゴノキ *Styrax japonica* Sieb. et Zucc. 種子

広卵形で頂部から 3 本の縫溝が走る。表面には細かな網目紋があり、ざらつく。

(11) ミクリ属 *Sparganium* 核

非常に多産したが、微細破片は計数していない。大きくは 2 つのタイプに分けられる。1 つは、黄褐色で長さ 4 ~ 5 mm、幅 2 ~ 3 mm 程度の卵状橢円形。幅の一番太い部分は、ほぼ真ん中にある。8 ~ 9 本の明瞭な稜があり、稜と稜の間は窪む。もう 1 つは、黄褐色で長さ 5 ~ 7 mm、幅 3 ~ 5 mm 程度の三角状卵形ないし狭卵形。幅の最大は下半分にある。上半部に 8 本程度の稜がある。

(12) オオムギ *Hordeum vulgare* Linn. 炭化胚乳

側面觀は長橢円形ないし紡錘形、断面は橢円形。腹面中央部には、上下に走る 1 本の溝がある。背面の下端中央部には、類三角形の胚がある。長さ一幅 (mm) は、5.5~2.8 と 5.6~3.2 で後者は状態が悪い。

(13) カナムグラ *Humulus scandens* (Lour.) Merrill 種子

二面の円形で白く心形の臍がある。二面であるため、半分の 1 / 2 片に割れやすい。破片 38 点のうち、34 点は 1 / 2 片である。

(14) ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv. 種子

灰褐色ないし黒灰色で背面に棍棒状の臍があり、腹面には穴が 2 つある。破片 3 点は、背面側の破片が 2 点と腹面側の破片が 1 点である。

## 5. 考察

III 区木器包含層の組成から予想される遺跡周辺の森林植生は、イチイガシ、シラカシを含むアカガシ亜属とツブラジイから成る照葉樹林であり、針葉樹はイヌガヤ、落葉広葉樹はオニグルミ、エゴノキといった適潤地に生える分類群や暖地の臨海に多いセンダンのほか、ムクロジやクスノキ科が混じっていたと考えられる。栽培植物のモモは、付近で栽培されていたか、利用後に投棄されたと考えられる。

I 区 S0071 は、抽水植物（水生植物）のミクリ属の多産から、堆積の場が水位の低い湿地ないし水滬りであったと予想される。その周辺の林縁や開けた場所に二次林要素のアカメガシワや蔓性のブドウ属が生育し

ており、カナムグラ、ノブドウ、カラスウリといった蔓植物やエノコログサ属、オナモミなどの草本類が繁茂していたと予想される。これら草本類は、擾乱地（畑地や路傍など）に生育する分類群であり、湿地の環境の周辺が人間活動の影響が強い場所であったと考えられる。栽培植物で炭化していたオオムギは、そのような周辺の生活の場から流入したのであろう。

#### 6. おわりに

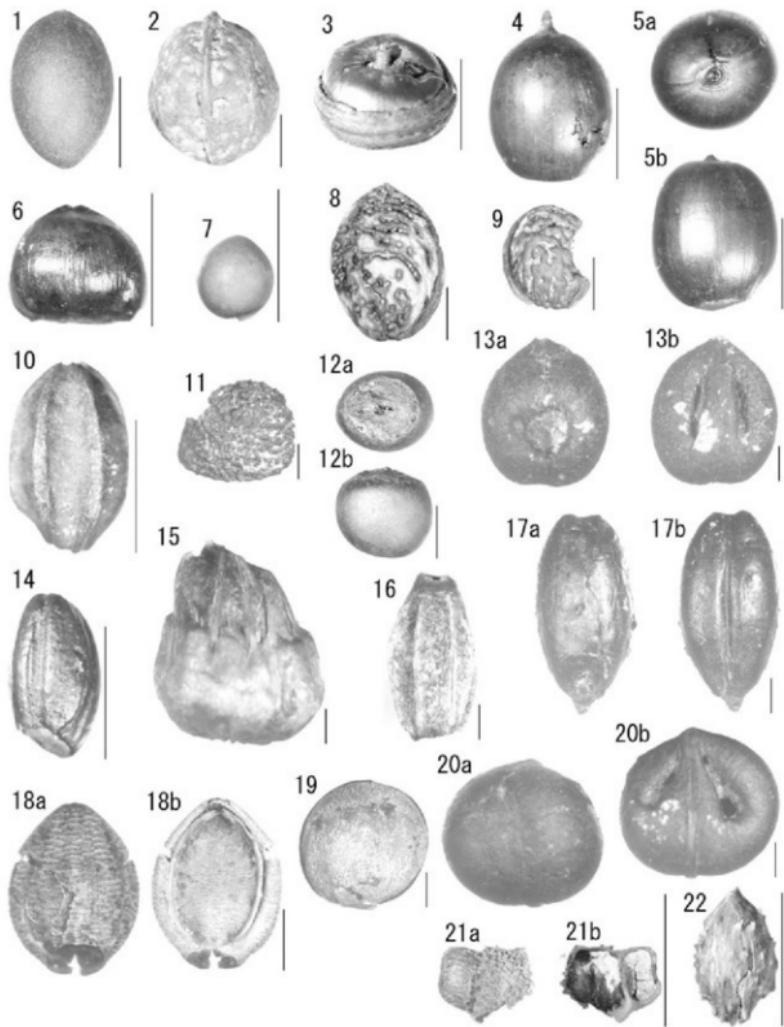
遺跡周辺には、イチイガシ、シラカシを含むアカガシ亜属とツブライジから成る照葉樹林が成立しており、エゴノキなどが混じっていた。I 区 S007付近には、ミクリ属の生育する湿地の環境が見られ、その周辺は、カナムグラなどが生育するような擾乱地であった。遺跡内では、栽培植物のモモ、オオムギが利用されていたと考えられた。

#### 参考文献

岡本素治（1973）どんぐりの話。Nature Study, No.19 : 59—61, 77—78, 91—94. 大阪市立自然史博物館。

表1 大型植物化石出土一覧表  
数字は個数、( )内は半分ないし破片の数を示す

分類群・部位＼試料名	I 区 S007	III区 木器包含層
イヌガヤ	種子	1
オニグルミ	核	3
イチイガシ	果実・殻斗	2
シラカシ	果実	9
コナラ属アカガシ亜属	果実・殻斗	2
コナラ属	果実	1
ツブライジ	果実	7(5)
クスノキ科	種子	2
モモ	核	17(1)
センダン	核	4
アカメガシワ	種子	(1)
ムクロジ	種子	4
ブドウ属	種子	7
エゴノキ	種子	21(1)
ミクリ属	核	1701
オオムギ	炭化胚乳	2
エノコログサ属	穎	1
カナムグラ	種子	5(38)
ノブドウ	種子	2(3)
カラスウリ	種子	(2)
オナモミ	果実	1



図版1 出土した大型植物化石 (スケールは1~10、12、14、21、22が1 cm、11、13、15~20が1 mm)

1. イヌガヤ、種子 2. オニグルミ、核 3. イチイガシ、果実・競斗 4. イチイガシ、果実 5. シラカシ、果実 6. ツブライイ、果実 7. クスノキ科、種子 8、9. モモ、核 10. センダン、核 11. アカメガシワ、種子 12. ムクロジ、種子 13. ブドウ属、種子 14. エゴノキ、種子 15、16. ミクリ属、核 17. オオムギ、炭化胚乳 18. エノコログサ属、穎 19. カナムグラ、種子 20. ノブドウ、種子 21. カラスウリ、種子 22. オナモミ、果実 (1~10、12、14: III区木器包含層 11、13、15~22: I区 S007)

## 2. 放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

西片園田遺跡より検出された木片の加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を実施した。

### 2. 試料と方法

試料は、V-6 区より採取した木片（矢板）1 点、X-5 グリッド S021 遺構より採取した木片（板材）1 点、X-5 区 S021 遺構より採取した木片（柱材）1 点の併せて 3 点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定した<sup>14</sup>C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した<sup>14</sup>C 濃度を用いて<sup>14</sup>C 年代を算出した。

### 3. 結果

表 1 に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した<sup>14</sup>C 年代、<sup>14</sup>C 年代を曆年代に較正した年代を示す。

<sup>14</sup>C 年代値（yrBP）の算出は、<sup>14</sup>C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C 年代誤差（土 1 σ）は、計数値の標準偏差  $\sigma$  に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の<sup>14</sup>C 年代が、その<sup>14</sup>C 年代誤差範囲内に入る確率が 68% であることを意味する。

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

#### 曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された<sup>14</sup>C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C 濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正し、より正確な年代を求めるために、<sup>14</sup>C 年代を曆年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と<sup>14</sup>C 年代の比較、および海成堆積物中の繊維状の堆積構造を用いて<sup>14</sup>C 年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて<sup>14</sup>C 年代を曆年代に較正した年代を算出する。

<sup>14</sup>C 年代を曆年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0 のバージョンアップ版) を使用した。なお、曆年代較正値は<sup>14</sup>C 年代値に対応する較正曲線上の曆年代値であり、1 σ 曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C 年代誤差に相当する曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1 σ 曆年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1 σ 曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

### 4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および曆年代較正を行なった。曆年代較正した 1 σ 曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

#### 引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の<sup>14</sup>C 年代、p. 3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended  $^{14}\text{C}$  Database and Revised CALIB3.0  $^{14}\text{C}$  Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215—230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000—0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041—1083.

表1. 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	$1\sigma$ 暦年代範囲
PLD-2388 (AMS)	木片No.1 (矢板) V-6 NSD III-W080	-27.3	1,895 $\pm$ 30	calAD90 calAD100 calAD125	calAD70—135(95.1%)
PLD-2389 (AMS)	木片No.2 (板材) X-5S-021 NSD III-W081	-27.9	1,865 $\pm$ 30	calAD130	calAD90—100(13.9%) calAD125—180(58.5%) calAD190—215(27.7%)
PLD-2390 (AMS)	木片No.3 (柱材) X-5S-021 NSD III-W082	-27.1	2,020 $\pm$ 30	calBC40 calBC30 calBC20 calBC10 calBC0	calBC45—calAD20(100%)

### 3. 熊本県西片園田遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

#### 1. 試料

試料は熊本県西片園田遺跡から出土した農具30点、紡織具3点、武具2点、食事具4点、容器33点、雑具3点、建築部材7点、部材1点、用途不明品9点の合計92点である。

#### 2. 観察方法

剝刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

#### 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹2種、広葉樹22種、樹皮1種）の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

##### 1) イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura)

(W025, 038, 054, 056, 062, 090, 091)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊形をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）して存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州（岩手以南）、四国、九州に分布する。

##### 2) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

(W019)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスキ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

##### 3) ヤナギ科ハコヤナギ属 (*Populus* sp.)

(W084)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～100 μm）が単独または2～4個放射方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顕著。柾目では道管は単穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、篠状になっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ～450 μm であった。ハコヤナギ属はヤマナラシ、ドロノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

##### 4) ヤナギ科ヤナギ属 (*Salix* sp.)

(W040)

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管（～110 μm）が単独または2～4個放射方向ないし斜線方向に複合して分布する。軸方向柔組織は年輪界で顕著。柾目では道管は単穿孔と交互壁孔を有する。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はやや大きく、篠状に

なっている。板目では放射組織はすべて単列、高さ～450  $\mu\text{m}$  であった。ヤナギ属はバッコヤナギ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

5) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.)

(W022, 023, 034, 035, 036, 037, 049, 075, 078, 082)

放射孔材である。木口では年輪に關係なくまちまちな大きさの道管（～200  $\mu\text{m}$ ）が放射方向に配列する。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の独立帶状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は單穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柾状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。

6) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(W055)

環孔材である。木口では円形ないし横円形で大体単独の大道管（～500  $\mu\text{m}$ ）が年輪にそって幅のかなり広い孔圈部を形成している。孔圈外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は單穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短瘤型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

7) クワ科クワ属 (*Morus* sp.)

(W005, 006, 013, 018, 029, 030, 046, 052, 055, 060, 061, 076)

環孔材である。木口では大道管（～280  $\mu\text{m}$ ）が年輪界にそって1～5列並んで孔圈部を形成している。孔圈外では小道管が2～6個、斜線状ないし接線状、集合状に不規則に複合して散在している。柾目では道管は單穿孔と対列壁孔を有する。小道管には螺旋肥厚もある。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管内には充填物（チロース）が見られる。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～1.1mm からなる。単列放射組織はあまり見られない。クワ属はヤマグワ、ケグワ、マグワなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

8) クスノキ科クスノキ属クスノキ (*Cinnamomum camphora* Presl)

(W033, 058, 065)

散孔材である。木口では中庸の道管（～200  $\mu\text{m}$ ）が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に取り囲んでおり、その中に一見小さな道管と見間違えるほどの油細胞（樟脑油貯藏細胞）がある。柾目では道管は單穿孔と側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔はレンズ状の大型壁孔が階段状に並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～800  $\mu\text{m}$  からなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞に変化したものがよく見られる。クスノキは本州（関東以西）、四国、九州に分布する。

9) クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ (*Cinnamomum japonicum* Sieb.)

(W003, 042, 051, 074)

散孔材である。木口では中庸の道管（～100  $\mu\text{m}$ ）が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に囲んでいる。道管の壁がやや厚い。柾目では道管は単穿孔とまれに階段穿孔、側壁に交互壁孔とかすかな螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は円形、レンズ状、節上の壁孔が並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～750  $\mu\text{m}$  からなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞（樟脳油貯蔵細胞）となるがあまり顯著でない。ヤブニッケイは本州（宮城、富山以西南）、四国、九州、琉球に分布する。

10) クスノキ科タブノキ属 (*Machilus* sp.)

(W031, 063, 067)

散孔材である。木口では中庸で厚壁の道管（～130  $\mu\text{m}$ ）が単独または2ないし数個が放射方向あるいは斜方向に連続して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚く鞘状に囲んでいる。柾目では道管は単穿孔とまれに階段穿孔、側壁に交互壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管と放射組織間壁孔は円形、レンズ状、節状の壁孔が並んでいる。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～600  $\mu\text{m}$  からなる。放射組織の直立細胞や軸方向柔細胞が油細胞（樟脳油貯蔵細胞）となったものが見られる。タブノキ属はタブノキ、ホソバタブがあり、本州（日本海側は青森、太平洋側は岩手中部以南）、四国、九州、琉球に分布する。

11) マンサク科イスノキ属 *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.)

(W093)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～50  $\mu\text{m}$ ）がおおむね単独で、大きさ数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向に並び、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は1～2列のものが多く走っているのが見られる。柾目では道管は階段穿孔と内部に充填物（チロース）がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～1 mm で多数分布している。イスノキは本州（関東以西）、四国、九州、琉球に分布する。

12) バラ科サクラ属 (*Prunus* sp.)

(W026, 069)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～100  $\mu\text{m}$ ）がほぼ一定の大きさで、単独あるいは放射方向ないし斜方向に連なり分布している。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔及び螺旋肥厚を有する。道管内には着色物質が見られる。放射組織は同性ないし異性で中央部の平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなる。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～1 mm からなる。サクラ属はサクラ、ヤマナシなどがあり、本州、四国、九州、琉球に分布する。

13) ミカン科キハダ属キハダ (*Phellodendron amurense* Rupr.)

(W002, 008, 041, 048, 057)

環孔材である。木口では大道管（～300 μm）が多列で孔圈部を形成している。孔圈外では小道管が散在、集団、波状に存在する。柾目では道管は単穿孔を持ち、着色物質、チロースが顕著である。小道管はさらに螺旋肥厚も有する。道管放射組織間壁孔は小型ないし中型である。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～5細胞列、高さ～500 μmからなる。キハダは北海道、本州、四国、九州に分布する。

14) センダン科センダン属センダン (*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel)

(W001, 004, 009, 010, 021, 059, 066, 068, 072, 073, 086, 088)

環孔材である。木口ではきわめて大きい道管（～350 μm）が幅の広い孔圈部を形成している。孔圈外小道管は多数が団塊状に複合して散在している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔及び螺旋肥厚を有する。道管内には充填物（チロース）が見られる。放射組織は直立と平伏細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～400 μmからなる。センダンは四国、九州に分布する。

15) ユズリハ科ユズリハ属 (*Daphniphyllum* sp.)

(W012)

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～50 μm）が単独または2～4個が複合して多数分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏と方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～850 μmからなる。ユズリハ属はユズリハ、ヒメユズリハがあり、本州（中南部）、四国、九州に分布する。

16) モチノキ科モチノキ属 (*Ilex* sp.)

(W087)

散孔材である。木口では小道管（～60 μm）が単独ないし数個が放射状、集団状に複合している。年輪界が放射組織部分で凸になる。柾目では道管は階段壁孔と螺旋肥厚を有する。木繊維も螺旋肥厚を有する。放射組織は直立、平伏細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は小型の壁孔である。板目では放射組織は1～7細胞列、高さ～1.8mmからなる。モチノキ属はアオハダ、イヌツゲ、モチノキ等があり、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。

17) ムクロジ科ムクロジ属ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.)

(W007, 027, 047)

環孔材である。木口ではやや大きい道管（～300 μm）が数列で孔圈部を形成している。孔圈外では小道管が団塊状に集合している。軸方向柔細胞は幅の広い帯状をなして接線方向に連続している（帯状柔組織）。柾目では大道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～400 μmからなる。ムクロジは本州（中南部）、四国、九州、琉球に分布する。

18) ツバキ科ツバキ属 (*Camellia* sp.)

(W028, 050, 064)

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～40 μm）が、単独ないし2～3個接合して均等に分布

する。放射組織は1～3細胞列で黒い筋としてみられる。木繊維の壁はきわめて厚い。柾目では道管は階段穿孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔（とくに直立細胞）は大型のレンズ状の壁孔が階段状に並んでいる。放射柔細胞の直立細胞と軸方向柔細胞にはダルマ状にふくれているものがある。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～1mm以下からなり、平伏細胞の多列部の上下または間に直立細胞の単列部がくる構造をしている。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが全体で見られる。ツバキ属はツバキ、サザンカ、チャがあり、本州、四国、九州に分布する。

19) ツバキ科サカキ属サカキ (*Cleyera japonica* Thunb. pro parte emend. S. et Z.)

(W077)

散孔材である。木口では極めて小さい道管（～50μm）が単独ないし2～4個複合して平等に分布する。柾目では道管は階段穿孔と側壁に對列ないし階段壁孔と螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は對列状ないし階段状壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、高さ～1.5mmからなる。木繊維の壁には有縁壁孔が一列に多数並んでいるのが見られる。サカキは本州（茨城、石川以西南）、四国、九州に分布する。

20) ウコギ科タラノキ属タラノキ (*Aralia elata* Miq.)

(W071)

環孔材である。木口では道管（～250μm）が数個複合して孔圈部を形成している。孔圈外では道管が5個以上複合して集団、波状、あるいは散在に大きさを徐々に減じながら分布している。柾目では道管は單穿孔を有する。放射組織は平伏細胞と、上下縁辺の方形細胞からなり異性であり、道管放射組織間壁孔は中～大の壁孔がある。板目では放射組織は1～5細胞列、高さ～1.1mmからなり、やや大型の細胞（鞘細胞）がいちばん外側の列を不完全に取り囲んでいる。タラノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

21) ハイノキ科ハイノキ属 (*Symplocos myrtacea* Sib. et Zucc.)

(W011, 032, 039, 083)

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管（～60μm）が平等に分布する。虫害によりできた傷害組織（ビスフレック）が見られる。柾目では、道管は階段穿孔と側壁に螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は對列状ないし階段状壁孔がある。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～600μmからなる。単列部と多列部との幅はほぼ同じですっきりとした形をしている。ハイノキ属はハイノキ、クロバイがあり、本州（千葉以西）、四国、九州、琉球に分布する。

22) エゴノキ科エゴノキ属 (*Styrax* sp.)

(W014, 020)

散孔材である。木口では道管（～130μm）が単独、あるいは放射状、小塊状に複合して多数分布している。軸方向柔細胞は接線状である。柾目では道管は階段穿孔を有する。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～900μmからなる。エゴノキ属はエゴノキ、ハクウンボク等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

23) ムラサキ科チシャノキ属 (*Ehretia* sp.)

(W015, 016, 028, 079, 081, 092)

環孔材である。木口ではやや大きい道管（～270  $\mu\text{m}$ ）が数列で孔圈部を形成している。孔圈外は波状、集団状に複合して分布している。軸方向柔細胞は周囲状、接線状である。柾目では道管は單穿孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は多数の小壁孔である。板目では放射組織は1～7細胞列、高さ～1 mm からなる。チシャノキ属はチシャノキ、マルバチシャノキがあり、本州（千葉以西）、四国、九州に分布する。

24) ホルトノキ科ホルトノキ属 (*Elaeocarpus* sp.)

(W017)

放射孔状散孔材である。木口はきわめて小さい道管（～50  $\mu\text{m}$ ）が、単独ないし2～20個放射方向に連なる。柾目では道管は單穿孔と側壁に交互壁孔を有し、間隔の広い螺旋肥厚を持つ。道管内部には充填物（チロース）がある。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔には大型でふるい状の壁孔がある。板目では放射組織は1～2、ときに3細胞列、高さ～1 mm 以上がなる。ホルトノキ属はホルトノキ、コバンモチがあり、本州（千葉以西）、四国、九州に分布する。

25) ヤマザクラ or カバの樹皮

(W045, 089)

木口と柾目ではコルク組織とコルク皮層が交互に並んで密に詰まっている。板目では細胞が放射方向に規則正しく配列している。しかし桜、樟の皮は顕微鏡観察での判別は難しい。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～V」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

表1. 土器観察表

回収 番号	実測 番号	出土地点	種別	基様	部位	径底 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	最大 幅(cm)	調 整		胎 土	色 調		備 考	
											内面	外面		外観	内面		
第001	02	I区8-12	土器部	鋤			直好	35.0	35.0	1.0	1.0	?	圓和ナデ	圓和ナデ	良白 5V7/1	良白 5V7/1	円和復元
第002	018	I区507-16	土器部	鋤			直好	37.0	37.0	2.0			圓和ナデ 直好 ツマリあり ナガザの輪動ナデ	圓和ナデ	良白 5V7/2	良白 5V7/2	円和復元
第003	026	I区0-10	土器部	鋤			直好	37.4	37.4	1.4			圓和ナデ 直好 ハラシナガナデ	圓和ナデ	良白 5V7/4	良白 5V7/4	一部円和復元。胎土 は焼成している。
第005	016	I区507-126	滑石製石鍋	口縁-底部		31.5	36.1	13.3			ノブナリ 脚 脚なし		ノブナリ 脚 工具で削り残さ れ形	圓和	良白 5V5/1	良和復元。調査一 回にかけてスズ付録	
第006	030	I区J-11-5	土器部	鋤	口縁-底部	直好	32.2	36.4	4.9			口縁ナデ 直好 ハラ 凹円ナガナデ	圓和ナデ	1.5-3.0cmの直好 直好、凹縁、赤鉄 化をやさしくも	明褐 7.5V9/2	明褐 7.5V9/2	円和復元
第007	029	I区J-11-4	土器部	鋤	口縁-底部	直好	31.2	36.2	5.1			口縁ナデ 直好 ナガナデ 直好 ハラ 凹円ナガナデ	圓和ナデ	1.5-1.5cmの直好 直好、凹縁、赤鉄 化をやさしくも (手付)	明褐 7.5V9/3	明褐 7.5V9/3	円和復元
第008	025	I区J-11-9	土器部	鋤	口縁-底部	直好	31.3	36.2	5.1			口縁ナデ 直好 ナガナデ 直好 ハラ 凹円ナガナデ	圓和ナデ	1.5-1.5cmの直好 直好、凹縁、赤鉄 化をやさしくも (手付)	明褐 7.5V9/3	明褐 7.5V9/3	円和復元
第009	026	I区J-11-10	土器部	鋤	口縁-底部	直好	31.2	36.6	5.4			口縁ナデ 直好 ハラ 凹円ナガナデ	圓和ナデ	1.5m以上の直好 直好、金鑑面を多く 含む。	明褐 7.5V9/3	明褐 7.5V9/3	円和復元
第010	028	I区J-11-11	土器部	鋤	口縁-底部	直好	31.5	36.3	5.5			口縁ナデ 直好 ナガナデ 直好 ハラ 凹円ナガナデ	圓和ナデ	1.5-2.0cmの直好 直好、凹縁、赤鉄 化をやさしくも (手付)	明褐 7.5V9/2	明褐 7.5V9/2	円和復元
第011	027	I区J-11-1	土器部	鋤	口縁-底部	直好	35.0	36.0	5.0			口縁ナデ 直好 ハラ 凹円ナガナデ	圓和ナデ	1.5-2.0cmの直好 直好、凹縁、赤鉄 化をやさしくも (手付)	明褐 7.5V9/2	明褐 7.5V9/2	円和復元
第012	022	I区503-1	陶生土器	鋤	腹部	直好	30.0	36.0	6.3			直好 ナデ 直好 ナガナデ ナラナデ	ナラナデ	2-3cmの大きな石が 腹間に多く、5.5-7. 0cmの直好、直好 あり、1.5-2.0cm大 きな直縁柱がわかれ てあります。直好、金 鑑面を多く含む。	明褐 7.5V9/3	明褐 7.5V9/3	一部円和復元。胎土 は焼成している。
第013	028	I区503-177	陶生土器	鋤	腹部	直好	4.3	5.7				直好、平底方 ナラナデ	直好、石と、直好 金鑑面を含む。	明褐 7.5V9/4	明褐 7.5V9/4	小のため完全復元 していない。	
第014	022	I区503-1	陶生土器	鋤	口縁部	直好	4.0	5.5				直好ナデ 直好 ナラナデ ナラナデ	直好ナデ	直好、金鑑面を1.0 cm程の板状が多く 含む。	明褐 7.5V9/3	明褐 7.5V9/3	一部円和復元。胎土 は焼成している。
第015	025	I区503-1	陶生土器	鋤	口縁部	直好	4.0	5.5				直好ナデ 直好 ナラナデ ナラナデ	直好ナデ	直好が2箇所、 直好、赤鉄化を 少し含む。	明褐 7.5V9/4	明褐 7.5V9/4	一部円和復元。胎土 は焼成している。
第016	027	I区503-1	陶生土器	鋤	口縁部	直好	33.2	34.0	6.1			直好ナデ 直好 ナラナデ ナラナデ	直好ナデ	直好と赤鉄化が多 い。 石が2箇所多く、 直好、赤鉄化を 少し含む。突然、 直好と赤鉄化 を含む。	明褐 7.5V9/5	明褐 7.5V9/5	円和復元
第017	047	I区504-13	陶生土器	鋤	口縁部	直好	21.6		4.2			直好ナデ 直好 ナラナデ ナラナデ	直好ナデ	直好、直好のを多く 含む。直好のを多く 含む。	明褐 7.5V9/2	明褐 7.5V9/2	円和復元
第018	024	I区504-12	陶生土器	鋤	口縁部-底部	直好	33.2	34.0	6.1			口縁ナデ ナラナデ	口縁ナデ	1.5m以上の直好 直好、直好のを多く 含む。	明褐 7.5V9/5	明褐 7.5V9/5	円和復元
第019	025	I区504-14	陶生土器	鋤	口縁部-底部	直好	29.0		7.2			口縁ナデ 直好ナデ ナラナデ	直好ナデ	1.5m以下直好が 多く、直好のを多く 含む。直好が2箇所 に分布する。	明褐 7.5V9/2	明褐 7.5V9/2	円和復元
第020	026	I区504-7	陶生土器	鋤	腹部	直好	32.2		8.0			直好ナデ 直好 ナラナデ ナラナデ	直好ナデ	直好、直好のを多く 含む。直好のを多く 含む。	明褐 7.5V9/3	明褐 7.5V9/3	一部円和復元。胎土 は焼成あり。
第021	046	I区504-1	陶生土器	鋤	腹部	直好	32.0		4.1			直好ナデ 直好 ナラナデ ナラナデ	直好ナデ	直好、直好のを多く 含む。直好のを多く 含む。	明褐 7.5V9/4	明褐 7.5V9/4	一部円和復元。胎土 は焼成あり。
第022	046	I区504-12	陶生土器	鋤	口縁部	直好	18.0		3.0			直好ナデ 直好 ナラナデ ナラナデ	直好ナデ	直好、直好のを多く 含む。	明褐 7.5V9/4	明褐 7.5V9/4	円和復元
第023	025	I区506-198	陶生土器	鋤	腹部	直好	6.1	23.4				ハラニコロ 直好 ナラナデ ナラナデ	直好ナデ	直好の大きさ よりも大きい。 直好の大きさ よりも大きい。 直好の大きさ よりも大きい。	明褐 7.5V9/5	明褐 7.5V9/5	円和復元。直好あり。
第024	025	I区506-1	陶生土器	鋤	口縁部	直好	30.2	30.6	15.5			直好ナデ 直好 ナラナデ ナラナデ	直好ナデ	5-5.0cmの直好が 多く、直好のを多く 含む。	明褐 7.5V9/4	明褐 7.5V9/4	円和復元。直好あり。

第0015 214	I 区 5006-325	生土層	表	口縁部	良好	(38.0)		4.5	ナメ ナメ複数 2.0m以内のナメ 7.0m/1.3mの複 数個の複数個 あり	ナメ ナメ複数 2.0m以内のナメ 7.0m/0.5mの複 数個の複数個 あり	1.3m以上の長石と 石が混じる。表面 に凹凸の粗さが 目立つ。3mmの大粒の 石を含む。	堆積地 SPD-3	悪地 7.0mE/3	良好復元	
第0016 211	I 区 5006-22	生土層	表	口縁部	良好	(31.0)		3.6	複ナメ	複ナメ	1.3m以下の白い 石と白い石 3mmの白い 石を含む。	堆積 SPD-4	にじり複 7.0mE/4	良好復元	
第0017 210	I 区 5006-167	生土層	表	複部	良好	(35.0)		3.6	複ナメ後方尚 のナメナメ?	ナメ/ハケメ 6.0m/3.0m	1.3m以下の長石と 複数の白い石 3mmの白い 石を含む。	にじり複 7.0mE/3	にじり複 7.0mE/3	良好復元	
第0018 215	II 区 5015-34	堆積層	井	天井部-口縁部	良好	13.8		3.5	天井部、本体 天井部-口縁部 ナメナメ?	ナメ	表面に多く の白い石と複 数の白い石を 含む。	堆積 SPD-5	悪地 7.0mE/5	悪地	
第0019 203	II 区 5015-16	堆積層	井	口縁部-底部	良好	12.2	5.4	3.9	口縁部、周囲大 部、底部、其の 他の部分	周囲ナメ	1.3m未満の 白い石を多く 含む。表面に複 数の白い石を 含む。	底 7.0mE/5	底 7.0mE/5	表面は掌面して いる。	
第0020 122	II 区 R-6	堆積層	表	口縁部-底部	良好	(32.2)	(7.4)	3.5	複ナメ? 周 囲ナメ? ハラ 切り複	複ナメ	2.0m以上の長石を 多く含む。1.2mE 以下は複数の 白い石を含む。	複面 SPB-5	複面 SPB-5	良好復元、外側全 周に底面が掌面 している。	
第0021 204	II 区 5015-7	堆積層	井	口縁部-天井部	良好	13.7	5.3	4.4	口縁部、周囲ナ メ、底部、天井 部、天井部ナ メ	周囲ナメ ナメナメ	1.3m以下の石と 複数の白い石を 多く含む。小石が 多く含む。	堆 SPD-6	堆 7.0mE/6	良好復元	
第0022 273	II 区	堆積層	高台付条件	口縁部-底部	不良	13.8	5.0	4.1	口縁部-側部、周 囲ナメ、底部、天 井部、天井部ナ メ	周囲ナメ	1.3m以下の長石が 多く含む。表面に 複数の白い石を 含む。	底 7.0mE/7	底 7.0mE/7	底面は掌面して いる。	
第0023 276	II 区 5015-216	堆積層	表	口縁部-天井部	良好	14.0		2.4	複ナメ? ハラ 切りナメ	複ナメ	1.3m以下の長石と 複数の白い石を 多く含む。	底 N-0	底 N-0	良好復元	
第0024 288	II 区 5015-30	生土層	井	口縁部-底部	良好	(34.4)	(6.6)	3.5	口縁部、周囲ナ メ、底部、天井 部、天井部ナ メ	周囲ナメ	1.3-4.0mの石を 多く含む。表面 に複数の白い石 が見受けられる。	堆 SPB-6	堆 7.0mE/6	良好復元	
第0025 289	II 区 5015-115	堆積層	井	口縁部-底部	良好	(30.6)	(4.6)	4.4	口縁部、周囲ナ メ、底部、天井 部、天井部ナ メ	周囲ナメ	1.3m以上の長石を 多く含む。表面に 複数の白い石を 含む。	堆 SPB-7	堆 7.0mE/7	良好復元、底面内 に封土。	
第0026 277	II 区 5015-37	堆積層	表	口縁部-天井部	良好	14.3		1.7	天井部のナメ 底部ナメ	周囲ナメ	表面にやや多い。 表面に複数の白い 石を含む。	底 7.0mE/1	底 7.0mE/1	良好復元	
第0027 286	II 区 5015-146	生土層	井	口縁部-底部	良好	(35.6)	(5.2)	4.1	口縁部、周囲ナ メ、底部、天井 部、天井部ナ メ	周囲ナメ	1.3-2mの長石と 白い石、岩と閃 石が見受けられる。	堆 SPB-8	堆 7.0mE/8	良好復元	
第0028 285	II 区 5015-39	生土層	井	口縁部-底部	良好	(33.0)	6.0	3.7	口縁部、周囲ナ メ、底部、天井 部、天井部ナ メ	周囲ナメ	1.3m以上の長石と 白い石を多く含む。 表面に複数の白 い石を含む。	堆 SPB-9	堆 7.0mE/9	一部良好復元	
第0029 282	II 区 5015-13	堆積層	井	口縁部-底部	良好	(33.0)	(7.6)	3.5	口縁部、周 囲ナメ、底 部、天井部ナ メ	周囲ナメ	1.3-2mの長石を 多く含む。2.0m 以下は複数の 白い石を含む。	底 SPB-10	底 SPB-10	良好復元	
第0030 283	II 区 5015-12- 63-9	堆積層	井	口縁部-底部	良好	(32.2)	(6.5)	3.8	口縁部、周 囲ナメ、底 部、天井部ナ メ	周囲ナメ	1.3m以上の長石を 多く含む。1.0m 以下の長石が少 ない。	底 7.0mE/11	底 7.0mE/11	良好復元	
第0031 284	II 区 5015-44	堆積層	井	口縁部-底部	良好	11.8	7.8	4.1	日和ナメ、周 囲ナメ	周囲ナメ	1.3m以上の長石が 多く含む。表面に 複数の白い石が 見受けられる。	底 SPB-12	底 SPB-12	良好復元	
第0032 285	II 区 5015-10	生土層	表	口縁部	良好	(23.8)		6.6	口縁部、周 囲ナメ	周囲ナメ	1.3m以下の白い 石と白い石を 多く含む。表面に 複数の白い石を 含む。	堆 SPD-13	堆 7.0mE/13	良好復元、基面は 掌面している。	
第0033 288	II 区 5020-133- 135-142+144- 145-147+148- 149-T-6	生土層	表	口縁部	良好	5.0	20.2 (25.0)	ナメ	内部の隙間は複 数個のナメで ある。周囲ナメ 2.0m以内のナメ 複数個、ナメ 複数個のナメ 複数個	ナメ	1.1-1.3mの長石 を多く含む。全 石を多く含む。 1.0-1.2mの 長石を多く含 む。	堆 SPB-14	堆 7.0mE/14	一部良好復元。尚且 て鉄分により赤褐色 色を呈しつつも土 塊をもつ。	
第0034 282	II 区 5021-256- 259-270-278	生土層	表	口縁部	良好	(35.0)	4.1	22.2	18.3	口縁部、周 囲ナメ	周囲ナメ	1.3m以下の白い 石を多く含む。表 面に複数の白 い石を含む。	堆 SPB-15	堆 7.0mE/15	口縫部は良好復元。 尚且て黒色であり、 表土式表層。
第0035 212	II 区 W-6-7- 2-4-5-10	生土層	表	口縁部	良好	11.6	(4.2)	40- 50cm	(24.6)	口縁部、周 囲ナメ	周囲ナメ	1.3m以下の白い 石を多く含む。表 面に複数の白 い石を含む。	堆 SPB-16	堆 7.0mE/16	良好復元。内側は 鉄分により赤褐色 色を呈しつつも土 塊をもつ。



RI0103	14	N 区 S022-38/-38' S024-1	土田屋 妻	口縫-網目 良好	(8.5)	13.4	口縫目 椒ナテ 網目 棚ナテ 網目 良好(カサマツ 木) 方向のカサ マツメノリ/1.9 ミリ	石岩が多め、7.0- 8.0mmの大きさで、 表面は緑色で、葉 身は白身で、葉と茎 が生長する。	高橋 2,5985.8	高橋 2,5985.8	高橋復元		
RI0104	18	N 区 S022-38/-38' S024-1	土田屋 妻	口縫-網目 良好	(4.0)	8.8	口縫目 椒ナテ 網目 棚ナテ 網目 良好(カサマツ 木) 方向のカサ マツメノリ/1.9 ミリ	石岩と薄葉が多 い、葉と茎は緑色 で、葉身は白身で、 葉と茎が生長す る。	高橋 2,5985.8	高橋 2,5985.8	高橋復元。外葉に葉 面斑。		
RI0105	157	N 区 S024-8-15	土田屋 妻	口縫-底層 良好	13.4	15.4	口縫目 椒ナテ 網目 ハラハラ 底層、棚ナテ 底層、良好(カ サマツ木) ハラ ハラメノリ/1.9 ミリ	口縫目 椒ナテ 網目 ハラハラ 底層、棚ナテ 底層、良好(カ サマツ木) ハラ ハラメノリ/1.9 ミリ(ナタ)	1.3mmの石岩、金 星を含む。	高橋 2,5985.8	高橋 2,5985.8	高橋	
RI0106	130	N 区 S022-35	土田屋 妻	口縫-底層 良好	11.8	21.1	25.4	口縫目 ナ テ方向のカサ マツメノリ/1.9 ミリ	口縫目 ナ テ方向のカサ マツメノリ/1.9 ミリ(ナタ)	2.0-3.2mmの大 きな石岩 表面に青色斑 点がある。1.5-2. 0mmの大きさで、 表面は緑色で、葉 身は白身で、葉と 茎が生長する。	高橋 2,5985.8	高橋 2,5985.8	高橋からナタ混じ てて葉斑あり。
RI0107	135	N 区 S022-3-7 -4 S023-7 -7'V区	土田屋 妻	口縫-網目 良好	(75.0)	21.6	(25.8)	口縫目 椒ナテ 網目 棚ナテ 底層、棚ナテ 方向のカサ マツメノリ/1.9 ミリ	口縫目 椒ナテ 網目 棚ナテ 底層、棚ナテ 方向のカサ マツメノリ/1.9 ミリ(ナタ)	1.3mmの石岩を含 む。2.0-2.5mmの 大きさで、葉と 茎が生長する。	高橋 2,5985.8	高橋 2,5985.8	高橋復元
RI0108	140	N 区 S022-36	土田屋 妻	口縫-底層 良好	(8.0)	25.4	(21.8)	口縫目 椒ナ テハラハラ 底層、棚ナテ 方向のカサ マツメノリ/1.9 ミリ(ナタ)	口縫目 椒ナテ 網目 棚ナテ 底層、棚ナテ 方向のカサ マツメノリ/1.9 ミリ(ナタ)	1.3-1.5mmの石岩 表面に青色斑 点がある。葉と 茎が生長する。	高橋 2,5985.8	高橋 2,5985.8	高橋復元。葉斑と 底層に近いところに に葉斑あり。
RI0109	139	N 区 S022-749V 妻	土田屋 妻	口縫-底層 良好	(75.0)	19.6	(15.7)	口縫目 椒ナ テ方向のカサ マツメノリ/1.9 ミリ	口縫目 椒ナ テ方向のカサ マツメノリ/1.9 ミリ(ナタ)	1.3mmの石岩、金 星を含む。1.5-2. 0mmの大きさで、 葉と茎が生長す る。	高橋 2,5985.8	高橋 2,5985.8	口縫-底層
RI0110	138	N 区 S022-7- 46- 46'V S021-27- 255- 256- 257- 258- 259- 260- 261- 262- 263- 264- 265- 266- 267- 268- 269- 270- 271- 272- 273- 274- 275- 276- 277- 278- 279- 280- 281- 282- 283- 284- 285- 286- 287- 288- 289- 290- 291- 292- 293- 294- 295- 296- 297- 298- 299- 299'- 300- 300'- 301- 301'- 302- 302'- 303- 303'- 304- 304'- 305- 305'- 306- 306'- 307- 307'- 308- 308'- 309- 309'- 310- 310'- 311- 311'- 312- 312'- 313- 313'- 314- 314'- 315- 315'- 316- 316'- 317- 317'- 318- 318'- 319- 319'- 320- 320'- 321- 321'- 322- 322'- 323- 323'- 324- 324'- 325- 325'- 326- 326'- 327- 327'- 328- 328'- 329- 329'- 330- 330'- 331- 331'- 332- 332'- 333- 333'- 334- 334'- 335- 335'- 336- 336'- 337- 337'- 338- 338'- 339- 339'- 340- 340'- 341- 341'- 342- 342'- 343- 343'- 344- 344'- 345- 345'- 346- 346'- 347- 347'- 348- 348'- 349- 349'- 350- 350'- 351- 351'- 352- 352'- 353- 353'- 354- 354'- 355- 355'- 356- 356'- 357- 357'- 358- 358'- 359- 359'- 360- 360'- 361- 361'- 362- 362'- 363- 363'- 364- 364'- 365- 365'- 366- 366'- 367- 367'- 368- 368'- 369- 369'- 370- 370'- 371- 371'- 372- 372'- 373- 373'- 374- 374'- 375- 375'- 376- 376'- 377- 377'- 378- 378'- 379- 379'- 380- 380'- 381- 381'- 382- 382'- 383- 383'- 384- 384'- 385- 385'- 386- 386'- 387- 387'- 388- 388'- 389- 389'- 390- 390'- 391- 391'- 392- 392'- 393- 393'- 394- 394'- 395- 395'- 396- 396'- 397- 397'- 398- 398'- 399- 399'- 400- 400'- 401- 401'- 402- 402'- 403- 403'- 404- 404'- 405- 405'- 406- 406'- 407- 407'- 408- 408'- 409- 409'- 410- 410'- 411- 411'- 412- 412'- 413- 413'- 414- 414'- 415- 415'- 416- 416'- 417- 417'- 418- 418'- 419- 419'- 420- 420'- 421- 421'- 422- 422'- 423- 423'- 424- 424'- 425- 425'- 426- 426'- 427- 427'- 428- 428'- 429- 429'- 430- 430'- 431- 431'- 432- 432'- 433- 433'- 434- 434'- 435- 435'- 436- 436'- 437- 437'- 438- 438'- 439- 439'- 440- 440'- 441- 441'- 442- 442'- 443- 443'- 444- 444'- 445- 445'- 446- 446'- 447- 447'- 448- 448'- 449- 449'- 450- 450'- 451- 451'- 452- 452'- 453- 453'- 454- 454'- 455- 455'- 456- 456'- 457- 457'- 458- 458'- 459- 459'- 460- 460'- 461- 461'- 462- 462'- 463- 463'- 464- 464'- 465- 465'- 466- 466'- 467- 467'- 468- 468'- 469- 469'- 470- 470'- 471- 471'- 472- 472'- 473- 473'- 474- 474'- 475- 475'- 476- 476'- 477- 477'- 478- 478'- 479- 479'- 480- 480'- 481- 481'- 482- 482'- 483- 483'- 484- 484'- 485- 485'- 486- 486'- 487- 487'- 488- 488'- 489- 489'- 490- 490'- 491- 491'- 492- 492'- 493- 493'- 494- 494'- 495- 495'- 496- 496'- 497- 497'- 498- 498'- 499- 499'- 500- 500'- 501- 501'- 502- 502'- 503- 503'- 504- 504'- 505- 505'- 506- 506'- 507- 507'- 508- 508'- 509- 509'- 510- 510'- 511- 511'- 512- 512'- 513- 513'- 514- 514'- 515- 515'- 516- 516'- 517- 517'- 518- 518'- 519- 519'- 520- 520'- 521- 521'- 522- 522'- 523- 523'- 524- 524'- 525- 525'- 526- 526'- 527- 527'- 528- 528'- 529- 529'- 530- 530'- 531- 531'- 532- 532'- 533- 533'- 534- 534'- 535- 535'- 536- 536'- 537- 537'- 538- 538'- 539- 539'- 540- 540'- 541- 541'- 542- 542'- 543- 543'- 544- 544'- 545- 545'- 546- 546'- 547- 547'- 548- 548'- 549- 549'- 550- 550'- 551- 551'- 552- 552'- 553- 553'- 554- 554'- 555- 555'- 556- 556'- 557- 557'- 558- 558'- 559- 559'- 560- 560'- 561- 561'- 562- 562'- 563- 563'- 564- 564'- 565- 565'- 566- 566'- 567- 567'- 568- 568'- 569- 569'- 570- 570'- 571- 571'- 572- 572'- 573- 573'- 574- 574'- 575- 575'- 576- 576'- 577- 577'- 578- 578'- 579- 579'- 580- 580'- 581- 581'- 582- 582'- 583- 583'- 584- 584'- 585- 585'- 586- 586'- 587- 587'- 588- 588'- 589- 589'- 590- 590'- 591- 591'- 592- 592'- 593- 593'- 594- 594'- 595- 595'- 596- 596'- 597- 597'- 598- 598'- 599- 599'- 600- 600'- 601- 601'- 602- 602'- 603- 603'- 604- 604'- 605- 605'- 606- 606'- 607- 607'- 608- 608'- 609- 609'- 610- 610'- 611- 611'- 612- 612'- 613- 613'- 614- 614'- 615- 615'- 616- 616'- 617- 617'- 618- 618'- 619- 619'- 620- 620'- 621- 621'- 622- 622'- 623- 623'- 624- 624'- 625- 625'- 626- 626'- 627- 627'- 628- 628'- 629- 629'- 630- 630'- 631- 631'- 632- 632'- 633- 633'- 634- 634'- 635- 635'- 636- 636'- 637- 637'- 638- 638'- 639- 639'- 640- 640'- 641- 641'- 642- 642'- 643- 643'- 644- 644'- 645- 645'- 646- 646'- 647- 647'- 648- 648'- 649- 649'- 650- 650'- 651- 651'- 652- 652'- 653- 653'- 654- 654'- 655- 655'- 656- 656'- 657- 657'- 658- 658'- 659- 659'- 660- 660'- 661- 661'- 662- 662'- 663- 663'- 664- 664'- 665- 665'- 666- 666'- 667- 667'- 668- 668'- 669- 669'- 670- 670'- 671- 671'- 672- 672'- 673- 673'- 674- 674'- 675- 675'- 676- 676'- 677- 677'- 678- 678'- 679- 679'- 680- 680'- 681- 681'- 682- 682'- 683- 683'- 684- 684'- 685- 685'- 686- 686'- 687- 687'- 688- 688'- 689- 689'- 690- 690'- 691- 691'- 692- 692'- 693- 693'- 694- 694'- 695- 695'- 696- 696'- 697- 697'- 698- 698'- 699- 699'- 700- 700'- 701- 701'- 702- 702'- 703- 703'- 704- 704'- 705- 705'- 706- 706'- 707- 707'- 708- 708'- 709- 709'- 710- 710'- 711- 711'- 712- 712'- 713- 713'- 714- 714'- 715- 715'- 716- 716'- 717- 717'- 718- 718'- 719- 719'- 720- 720'- 721- 721'- 722- 722'- 723- 723'- 724- 724'- 725- 725'- 726- 726'- 727- 727'- 728- 728'- 729- 729'- 730- 730'- 731- 731'- 732- 732'- 733- 733'- 734- 734'- 735- 735'- 736- 736'- 737- 737'- 738- 738'- 739- 739'- 740- 740'- 741- 741'- 742- 742'- 743- 743'- 744- 744'- 745- 745'- 746- 746'- 747- 747'- 748- 748'- 749- 749'- 750- 750'- 751- 751'- 752- 752'- 753- 753'- 754- 754'- 755- 755'- 756- 756'- 757- 757'- 758- 758'- 759- 759'- 760- 760'- 761- 761'- 762- 762'- 763- 763'- 764- 764'- 765- 765'- 766- 766'- 767- 767'- 768- 768'- 769- 769'- 770- 770'- 771- 771'- 772- 772'- 773- 773'- 774- 774'- 775- 775'- 776- 776'- 777- 777'- 778- 778'- 779- 779'- 780- 780'- 781- 781'- 782- 782'- 783- 783'- 784- 784'- 785- 785'- 786- 786'- 787- 787'- 788- 788'- 789- 789'- 790- 790'- 791- 791'- 792- 792'- 793- 793'- 794- 794'- 795- 795'- 796- 796'- 797- 797'- 798- 798'- 799- 799'- 800- 800'- 801- 801'- 802- 802'- 803- 803'- 804- 804'- 805- 805'- 806- 806'- 807- 807'- 808- 808'- 809- 809'- 810- 810'- 811- 811'- 812- 812'- 813- 813'- 814- 814'- 815- 815'- 816- 816'- 817- 817'- 818- 818'- 819- 819'- 820- 820'- 821- 821'- 822- 822'- 823- 823'- 824- 824'- 825- 825'- 826- 826'- 827- 827'- 828- 828'- 829- 829'- 830- 830'- 831- 831'- 832- 832'- 833- 833'- 834- 834'- 835- 835'- 836- 836'- 837- 837'- 838- 838'- 839- 839'- 840- 840'- 841- 841'- 842- 842'- 843- 843'- 844- 844'- 845- 845'- 846- 846'- 847- 847'- 848- 848'- 849- 849'- 850- 850'- 851- 851'- 852- 852'- 853- 853'- 854- 854'- 855- 855'- 856- 856'- 857- 857'- 858- 858'- 859- 859'- 860- 860'- 861- 861'- 862- 862'- 863- 863'- 864- 864'- 865- 865'- 866- 866'- 867- 867'- 868- 868'- 869- 869'- 870- 870'- 871- 871'- 872- 872'- 873- 873'- 874- 874'- 875- 875'- 876- 876'- 877- 877'- 878- 878'- 879- 879'- 880- 880'- 881- 881'- 882- 882'- 883- 883'- 884- 884'- 885- 885'- 886- 886'- 887- 887'- 888- 888'- 889- 889'- 890- 890'- 891- 891'- 892- 892'- 893- 893'- 894- 894'- 895- 895'- 896- 896'- 897- 897'- 898- 898'- 899- 899'- 900- 900'- 901- 901'- 902- 902'- 903- 903'- 904- 904'- 905- 905'- 906- 906'- 907- 907'- 908- 908'- 909- 909'- 910- 910'- 911- 911'- 912- 912'- 913- 913'- 914- 914'- 915- 915'- 916- 916'- 917- 917'- 918- 918'- 919- 919'- 920- 920'- 921- 921'- 922- 922'- 923- 923'- 924- 924'- 925- 925'- 926- 926'- 927- 927'- 928- 928'- 929- 929'- 930- 930'- 931- 931'- 932- 932'- 933- 933'- 934- 934'- 935- 935'- 936- 936'- 937- 937'- 938- 938'- 939- 939'- 940- 940'- 941- 941'- 942- 942'- 943- 943'- 944- 944'- 945- 945'- 946- 946'- 947- 947'- 948- 948'- 949- 949'- 950- 950'- 951- 951'- 952- 952'- 953- 953'- 954- 954'- 955- 955'- 956- 956'- 957- 957'- 958- 958'- 959- 959'- 960- 960'- 961- 961'- 962- 962'- 963- 963'- 964- 964'- 965- 965'- 966- 966'- 967- 967'- 968- 968'- 969- 969'- 970- 970'- 971- 971'- 972- 972'- 973- 973'- 974- 974'- 975- 975'- 976- 976'- 977- 977'- 978- 978'- 979- 979'- 980- 980'- 981- 981'- 982- 982'- 983- 983'- 984- 984'- 985- 985'- 986- 986											

BB41008	140	N 区 5023-18N/ 5023-74/-1-5	土田郡 小笠丸苗鹿	鍋田-苗鹿	良好			6.1	(11.0)	口縫田：斜め方のハナメ の小花葉。鍋田：ナデシコ	口縫田：斜め方のハナメ の小花葉。鍋田：ナデシコ	1.5~1.8mの大石英 が多々多い。長 角石・角閃石・赤鐵 鉄・金雲母等含む。	にかい塊 1090L-3	にかい塊 7,390L-5	一部凹凸僅な。底辺 に落葉有り。
BB41009	140	N 区 5023-18N/ 5023-73 /-1- 5,400	土田郡 小笠丸苗鹿	口縫-苗鹿	良好	11.5	11.5	11.5		口縫田：斜め方 のハナメのハナメ	口縫田：斜め方 のハナメのハナメ	1.5~2.0mの大石英 が多々多い。長 角石・角閃石等含む。	明治塊 790L-6	明治塊 790L-5	
BB41010	140	N 区 5023-76N 番	土田郡 小笠丸苗鹿	ほば田所	良好	9.8		10.5		口縫田：斜め方のハ ナメのハナメ	口縫田：斜め方 のハナメのハナメ	1.5~1.8mの大石英 が多々多い。長 角石・角閃石等含む。	明治塊 790L-6	明治塊 790L-5	割面で落葉有り。
BB41011	150	N 区 5023-75 N 番	土田郡 小笠丸苗鹿	口縫-苗鹿	良好	(8.6)	10.0	9.3		口縫田：複数ナデ シコ・複数ナデシ コのハナメ	口縫田：複数ナ デシコのハナメ	1.5~2.0mの大石英 が多々多い。長 角石・角閃石等含 む。	明治塊 7,590L-4	にかい塊 2,390L-4	一部凹凸僅な。ハナ メは複数含用されて いる。底辺に落葉有 り。
BB41012	150	N 区 5024-2	土田郡 小笠丸苗鹿	宝形	良好	10.9		9.4	12.2	口縫田：複数ナ デシコ・複数ナ デシコのハナメ	口縫田：複数ナ デシコのハナメ	1.5~2.0mの大石英 が多々多い。長 角石・角閃石等含 む。	明治塊 7,590L-5	明治塊 7,590L-5	2.2m割面中央部 に付着。二つ側底に より落葉有り。
BB41013	150	N 区 5024-24 - 34' g-4-105/- h-4-154	土田郡 諏	鍋-苗鹿	良好	(7.0)		9.3		口縫田：鍋-苗 鹿のハナメ	口縫田：鍋-苗 鹿のハナメ	1.5~1.8mの大石英 が多々多い。長 角石・角閃石等含 む。	鍋塊 7,590L-3	鍋塊 7,590L-3	底板復元。
BB41014	150	N 区 5022-5	土田郡 諏	口縫-苗鹿	良好	8.9	5.4	4.7		口縫田：鍋-苗 鹿のハナメ	口縫田：鍋-苗 鹿のハナメ	1.5~1.8mの大石英 が多々多い。長 角石・角閃石等含 む。	明治塊 590L-5	にかい塊 7,590L-4	

表2. 木器観察表

回数	整理番号	器種	相 味	木取り	最大高 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	高さ (cm)	備考
3~4	W02	板	ムラサキトキチャノキ属	17.0 (口徑)	8.0 (底径)		6.6	持き物?	
7~1	W03	椎	ムラサキトキチャノキ属イヌキ	32.3	10.3	7.9			
15~1	W01	円舟(縫付舟)	センダン科センダン属センダン	109.4	37.0	5.1	13.6		
15~2	W03	方形錠(大型)	センダン科センダン属センダン	63.9	13.4	4.8		矢綱あり	
15~3	W09	方形錠(大型)	センダン科センダン属センダン	52.6	23.7	2.8	7.2		
16~1	W10	方形錠(大型)	センダン科センダン属センダン	64.8	17.3	2.4	4.7		
16~2	W09	椎	ムラサキトキチャノキ属	92.0	25.6	5.6	8.0	一辺に把手あり	
16~3	W06	方形錠	センダン科センダン属センダン	70.0	27.2	5.4			
17~1	W08	方形錠	センダン科センダン属センダン	73.1	19.8	4.3			
17~2	W08	円錠?	(把手付き・大型)	58.4~	33.7	2.9	8.4		
17~3	W07	錠	ムラサキトキチャノキ属	66.1	17.2	3.5		未完成品?	
18~1	W20	方形錠(小型・把手付き)	ムラサキトキチャノキ属	22.8	13.7	4.1	4.9		
18~2	W07	方形錠(小型・把手付き)?	ムラサキトキチャノキ属	29.1~	7.6~	3.6	3.8		
18~3	W01	方形錠(小型・把手付き)	ムラサキトキチャノキ属	54.1	14.5	6.1	6.2		
18~4	W51	方形錠(小型・把手付き)	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	42.2	14.0	6.7	6.5		
18~5	W02	方形錠(小型)	ムラサキトキチャノキ属	44.9	17.8~	5.6	6.1	次を受けている	
19~1	W01	方形錠(小型)	ムラサキトキチャノキ属	24.2	13.7	2.3	4.1		
19~2	W04	方形錠(小型)	ムラサキトキチャノキ属	26.6	8.6	2.5	4.8		
19~3	W04	錠	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	29.3	11.5	3.0	4.1		
19~4	W21	方形錠(小型)	ムラサキトキチャノキ属	23.0	7.6	2.0	3.0		
19~5	W07	方形錠(小型)	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	36.0	11.2~	5.1	5.3	把手は無く、モスクイではない	
19~6	W04	方形錠(小型)	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	27.3	10.9	4.2	5.7	直通内形	
19~7	W09	方形錠(小型)?	ムラサキトキチャノキ属	12.8~	4.7~	2.9	3.1	ごく一部の破片	
19~8	W07	方形錠(小型)?	ムラサキトキチャノキ属	8.2~	6.9~	1.5	2.3	ごく一部の破片	
20~1	W02	方形錠(小型・縫付舟)	クワ科クワ属	36.8	15.6	3.9	9.0		
20~2	W23	方形錠(小型・縫付舟)	ムラサキトキチャノキ属アカシヤ属	29.8	11.7~	9.5	10.1		
20~3	W03	方形錠(小型・縫付舟)	クワ科クワ属	42.7	20.2	3.3	7.7		
20~4	W13	方形錠(小型・縫付舟)	クワ科クワ属	27.2	8.9	4.1	6.8		
21~1	W07	円錠(縫付舟)もしくは 直通舟	ムラサキトキチャノキ属ムラクヨジ	31.6 (直通)	33.0 (直通)	5.1	5.4		
21~2	W06	円錠(縫付舟)もしくは 直通舟	ムラサキトキチャノキ属ムラクヨジ	26.4	13.8	1.5	6.9	未完成品?	
21~3	W27	円錠(縫付舟)もしくは 直通舟	ムラサキトキチャノキ属ムラクヨジ	39.9~	17.8~	3.4~	4.9~		
21~4	W05	錠	ムラサキトキチャノキ属ムラクヨジ	31.0	19.6	4.1	31.0	一本削り?	
22~1	W26	錠 or 楯(のこぎり)	ムラサキトキチャノキ属ムラクヨジ	30.2	13.1	4.2			
22~2	W29	不明木製品(脚部分)	クワ科クワ属	17.9~	9.2	4.8			
22~3	W27	不明木製品(脚部分)	ムラサキトキチャノキ属ムラクヨジ	11.9~	8.8	3.7			
22~4	W06	不明木製品(脚部分)	クワ科クワ属	12.4~	8.6	3.8			
23~1	W06	楕円子	ムラサキトキチャノキ属	28.9~	10.6~	3.9			
23~2	W03	楕	ムラサキトキチャノキ属	25.4~	7.6	1.8			
23~3	W09	楕?	ムラサキトキチャノキ属	16.6	12.5~	2.3	2.9	不確実ながら柄がつくと思われ	9
23~4	W06	楕約子?	ムラサキトキチャノキ属	4.8~	7.6~	0.9	2.5~		
23~5	W07	楕	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	8.3~	7.7~	0.7	2.0~		
23~6	W04	楕	ヤニッケイ科ヤニッケイ属	5.1~	2.9	0.7		先端付合のみ	
24~1	W07	椎	ムラサキトキチャノキ属ムラクヨジ	35.7	8.3	6.6			
24~2	W08	椎	ムラサキトキチャノキ属ムラクヨジ	30.7	7.6	5.0			
24~3	W06	椎	ムラサキトキチャノキ属ムラクヨジ	25.6~	5.9	4.6			
24~4	W25	椎	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	45.2	8.0	7.5			
24~5	W02	椎	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	36.9	9.9	6.4			
24~6	W02	椎	ムラサキトキチャノキ属	37.7	9.2	6.5			
24~7	W04	椎	ムラサキトキチャノキ属	40.0	5.8	5.2			
24~8	W05	椎	ムラサキトキチャノキ属	31.2	5.5 (直通)	5.5 (直通)			
25~1	W01	楕	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	64.7~	3.8	3.0		先端を欠く	
25~2	W28	楕(鉛)	ムラサキトキチャノキ属	46.5~	4.5	3.7			
25~3	W07	楕	ムラサキトキチャノキ属	13.1~	3.9	4.2		なんの柄か不明	
25~4	W01	楕	ムラサキトキチャノキ属	11.1~	4.7	2.6		なんの柄か不明	
25~5	W06	平鏡	ムラサキトキチャノキ属	33.0	22.3	1.7			
26~2	W01	総合せ平鏡(未完成)?	クワ科クワ属	53.6	20.4	4.3			
26~3	W05	平鏡	クワ科クワ属アカシヤ属	61.5	13.9	2.4			
26~4	W04	三叉鏡	クワ科クワ属アカシヤ属	38.2~	17.0~	1.9			
26~5	W08	鏡(基部・柄孔上部)	クワ科クワ属アカシヤ属	8.0	3.9~	1.3		基部・柄孔上部のごく一部	
26~6	W22	鏡	クワ科クワ属アカシヤ属	12.1~	7.6~	1.8		鏡部分	
26~7	W02	多叉鏡	クワ科クワ属アカシヤ属	7.3~	3.4	1.0		刃の一端のみ	
27~1	W02	鏡(底)(1セット)	ムラサキトキチャノキ属	41.0	7.4	1.2			
27~2	W02	鏡(2底)(1セット)	ムラサキトキチャノキ属	41.0	7.2	1.7			
28~1	W02	鏡	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	35.6	2.1	1.5			
28~2	W08	鏡	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	50.0~	3.1	3.0		鏡かけを持つ部分	
28~3	W03	鏡	ムラサキトキチャノキ属	2.9~	2.4 (直通)	2.4 (直通)		鏡かけを持つ部分・先端のみ	
28~4	W06	鏡	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	7.0	3.0 (直通)	3.0 (直通)			
28~5	W09	鏡	ムラサキトキチャノキ属ヤニッケイ	3.2	2.1	0.2		短度	

28-6	W045	紐		4.6	3.9	0.2	板座	
28-7	W030	横縞、もしくは性の一部	イヌカヤ料イヌカヤ属イヌカヤ	19.2	9.4	8.8		
28-8	W024	木綿?	ツバキ科ツバキ属	10.3~	8.7	8.3	糸転用か?	
28-9	W075	泥縄け?	ブナ科コナラ属アカガシ属	26.2	12.9~	1.3	板座	
28-10	W088	泥縄け	セイダン科セイダン属セイダン	25.4~	18.1~	2.0	縞やかに一方向に向かって反った縞模様で、泥縄けをするのがちつとも適当と思われた。	
28-11	W072	泥縄け?	センダン科センダン属センダン	41.9~	16.5~	2.4	縞、もしくは泥縄け。僅かに反っている。	
29-1	W015	モミスカイ	ムラサキ科チャノキ属	30.3	8.9~	4.3	4.4	
29-2	W004	モミスカイ	センダン科センダン属センダン	41.4	15.4~	4.0	4.0	
29-3	W055	モミスカイ	ブナ科ツバキ属	42.8	10.5	6.6	6.7	
29-4	W014	モミスカイ	エゴノキ科エゴノキ属	30.0	10.9	3.6	4.1	
30-1	W033	椎子	クスノキ科クスノキ属ニッケイ	83.8	14.9	6.4		
30-2	W003	椎子	クスノキ科クスノキ属ニッケイ	椎木面引	(縦幅) 32.1~ (横幅) 30.5~	12.0~ 12.5~	7.2~ 6.5	8.7 8.4
30-3	W016	椎子か	ムラサキ科チャノキ属	68.7	8.3	6.1		
30-4	W033	作業台	クスノキ科クスノキ属クスノキ	42.9	35.2	7.6		
31-1	W048	不明木製品(未完成)	ミクン科キハダ属キハダ	98.9	17.6	4.5	大型? 但連結か?	
31-2	W057	板	ミクン科キハダ属キハダ	98.9	19.5	2.8	大型、壁板の可能性が高い	
31-3	W049	壁板?	ブナ科コナラ属アカガシ属	26.7	24.5~	2.0		
31-4	W041	柱材?	ミクン科キハダ属キハダ	33.8~	11.0	8.0	切削痕多数あり	
31-5	W058	板	クスノキ科クスノキ属クスノキ	25.2	18.1	2.1	壁板の可能性が高い	
32-1	W005	不明木製品	ウツクワガ属	32.2	7.2	3.7	20.8	
32-2	W071	不明木製品	ウコギ科タノキ属タノキ	42.6	13.6	5.7	14.3	

表3. 鉄器観察表

図版番号	出土地点	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚さ (cm)	備考
36-1	III区 S017-88	鉄鎌	2.7	2.7	0.2	
36-2	IV区先行トレーンチ	鉄鎌	15.0	2.9	0.2	
42-1	IV区 i - 6 - 662	不明	5.6	1.3	0.4	



I 区 調査開始前遠景（南から）



第3号土坑 遺物出土状況（北から）



第3号土坑 完掘状況（北から）



第4号遺物集中部 遺物出土状況（南から）



第6号流路 完掘状況（東から）



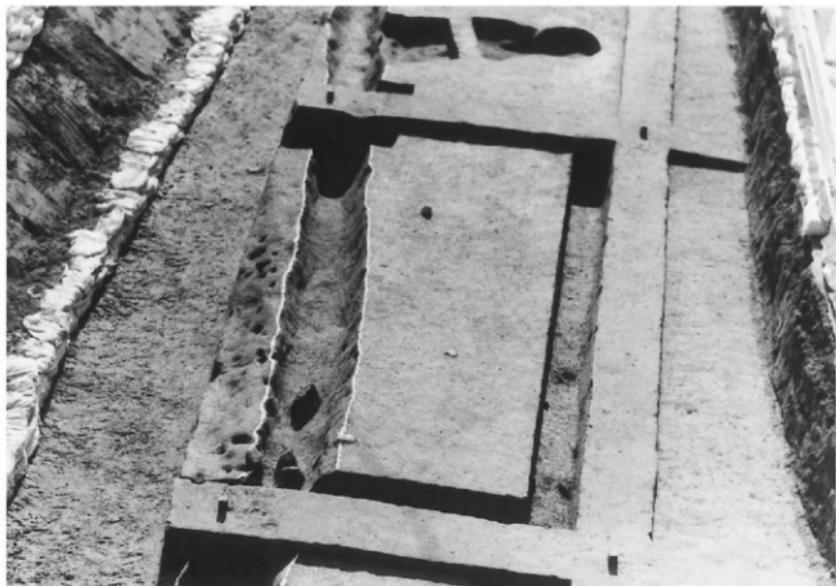
第7号流路 遺物出土状況（東から）



第7号流路 木製桟出土状況（東から）



I区 完掘状況（北から）



第9号溝 完掘状況（北から）



第12号土坑 遺物出土状況（西から）



第12号土坑 完掘状況（南から）



第13号土坑 完掘状況（東から）



第14号土坑 完掘状況（東から）



II区 完掘状況（東から）



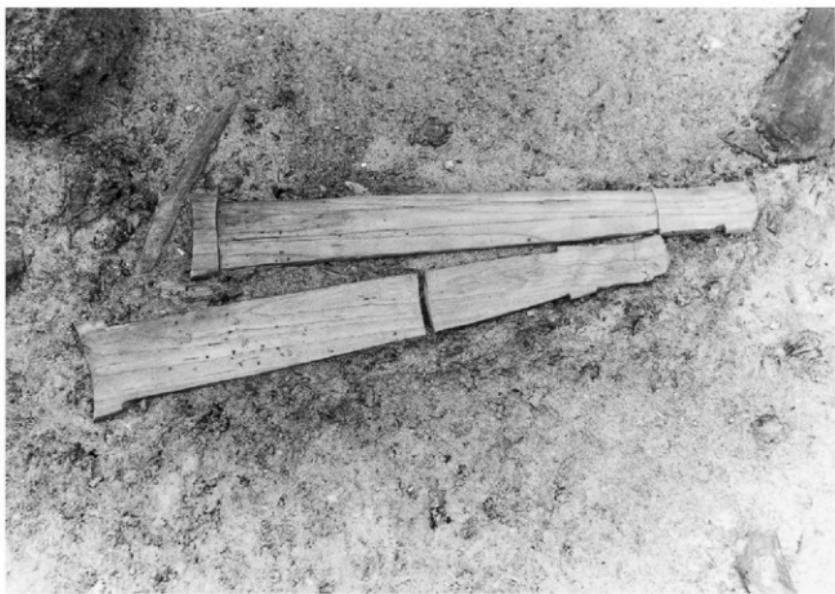
第15号流路 遺物出土状況（南から）



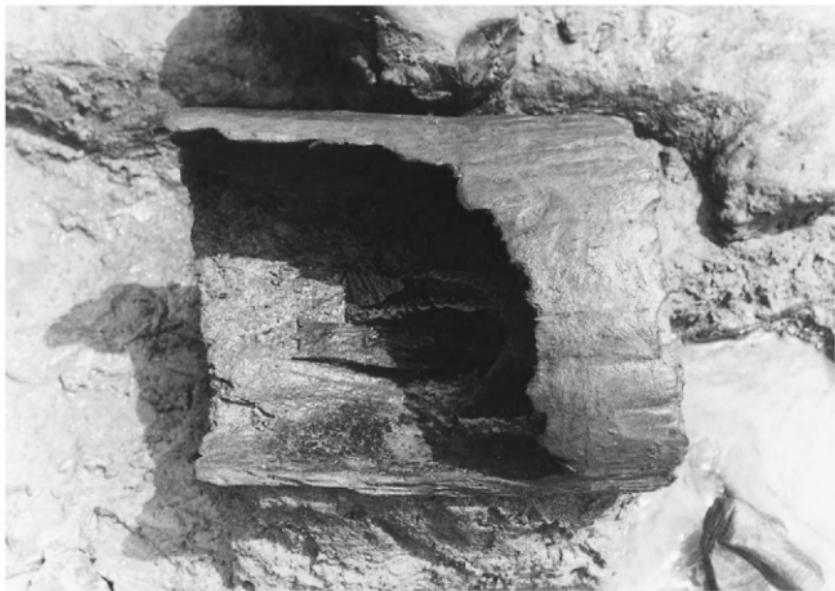
X-6区 木器出土状況（南から）



V-7区 土器出土状況（西から）



舟出土状況（東から）



W—7区 桶出土状況（北から）



横樋出土状況（南から）



S-6区 梯子出土状況（南から）



W-6区 鋤出土状況（西から）



T-5区 不明木器出土状況（東から）



X-7区 不明木器出土状況（南から）



V-6区 土器出土状況（東から）



V-6区 土器出土状況（西から）



W-5区 土器出土状況（南から）



X-7区 東壁土層断面（南から）



III区南半西壁土層断面（東から）



III区南半完掘状況（南から）



IV区 調査開始前遠景（北から）



i, j -5, 6区 IV層遺物出土状況（東から）



第23号遺物集中部 遺物出土状況（西から）



第24号遺物集中部 遺物出土状況（東から）



IV区 完掘状況（南から）



IV区 完掘状況（西から）



土器 1 (第4図2, 5, 6)



土器 2 (第13図2, 4)



土器 3 (第13図8)



土器 4 (第41図4, 5)



土器 5 (第33図 2 第34図 1)



土器 6 (第33図 1)



土器 7 (第33図 2 第34図 1)



土器8（第39図5 第40図4、5）



土器9（第40図3、6）



土器10（第41図9、10、11、12）



土器11（第34図7 第35図4、5、6、7）



木器 1 (第3図4)



木器 2 (第20図1、2 第21図1)



木器 3 (第18図1、3、4 第19図6 第23図2)



木器 4 (第21図4 第30図4)



木器 5 (第15図1 表)



木器 6 (第15図1 裏)



木器 7 (第30図1)



木器 8 (第24図4, 6 第26図1, 3 第29図4)



木器9（第27図1、2）



木器10（第32図2）

### 編集後記

平成17年度にはじまった西片園田遺跡の発掘作業から、はや3年の月日が流れた。今回の発掘作業においては、多数の木製品が出土した。これらは、今後の弥生時代の農耕の研究に多少なりとも貢献できるのではないかと自負している。編集者の力不足で、まだまだ研究の余地があるとは思うが、今後これらの資料を基に、より深い研究がなされることと期待している。

今回の調査においては、発掘作業においても、また整理作業においても、本当に多くの人々にお世話になった。そのすべての方々に心から感謝し終わりの言葉としたい。

#### (発掘作業に携わっていただいた方々)

東 信子 上野 照夫 上村 洋子 片山 久義 国岡 強 佐々木博美 澤田 利雄  
鶴田 良子 陣内 文子 園田 光宏 堂本 安子 中川 七郎 中野 雪子 濱田 富子  
林 京子 福本 桂子 藤山 文子 丸吉 浩子 村戸 尚美 持田美千代 森田久美子  
森田 安之 山田 澄子 陣内新一郎 塚田 和江 渡端 嘉子 鬼塚 麻里 山田 文子  
土屋 忠男

#### (整理作業に携わっていただいた方々)

井島 秀子 宮崎 典子 府内 博子 金子美代子 渡邊いわ子 塚本 博子 原田 美和  
浦田 和恵 木村 雅子 古庄美伊子 高濱 悅子 池辺 雅子 中山 安子 富田 知子  
興呂富美子

(敬称略)

このほかにも多数の方々の支えで、この報告書を発行することができました。本当にありがとうございました。

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	にしかた ひゃくた いせき・にしかた そのだ いせき							
書名	西片百田遺跡・西片園田遺跡							
副書名	西片停車場線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	熊本県文化財調査報告							
シリーズ番号	第234集							
編集者名	長谷部善一・高山直也・増田直人・村中智恵・内田成香							
編集機関	熊本県教育委員会							
所在地	〒862-0950 熊本市水前寺6丁目18番1号							
発行年月日	2006年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西片百田遺跡 西片園田遺跡	熊本県 (43)	八代市 (202)	(百田) 226 (園田) 051	(百田) 32°30' 130°38' 43°59'66 18°92'78 (園田) 32°30' 130°38' 29°89'64 14°85'00	(百田) 02.05.02 ~ 02.10.31 (園田) 02.05.20 ~ 03.12.12	(百田) 3,271 (園田) 4,700	県道工事	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西片百田遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代初頭	住居跡 溝	弥生後期土器				
西片園田遺跡	集落・流路	弥生時代後期	自然流路	弥生後期土器 木器(鋤・鍬・杭)				

熊本県文化財調査第234集  
**西片 百田遺跡・西片 園田遺跡**

---

平成18年3月31日

発行 熊本県教育委員会

〒862-8570 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 シモダ印刷株式会社

〒862-0951 熊本市上水前寺2丁目16番16号

---

17 教委 教文
② 003

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第234集を底本として作成しました。  
閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用  
してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図  
書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用  
方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：西片百田遺跡 西片園田遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015年12月8日